愛知県東海市

平成24年度

畑間・東畑遺跡発掘調査報告

２０１４年

愛知県東海市教育委員会

東畑遺跡７地点より工業地帯を望む

畑間遺跡１・２地点より常蓮寺を望む

東畑遺跡 7 地点出土馬骨

東畑遺跡 7 地点出土犬骨

序

知多半島の付け根に位置する愛知県東海市は、沿岸部に展開する工業地帯に代表される「鉄」と全国有数の生産量を誇る「洋ラン」のまちとして、発展を遂げてきました。

現在では沿岸部の埋め立てによって海岸線が変化し、古代の景観を想起することは難しくなっていますが、古代から中世にかけては「あゆち潟」と呼ばれた広大な遠浅の海が広がっていました。

市では、名古屋鉄道太田川駅周辺を市の中心市街地と位置づけ、平成4年度より土地区画整理事業を進めてきました。これに伴い事業区域内に所在する遺跡の発掘調査を平成11年度より行っています。この発掘調査によって、かつて「あゆち潟」と共に生きた太古の人々の暮らしが少しずつ明らかになってきました。

本報告書では平成22年度に実施した調査成果を報告します。本年度の調査では中世から近世初頭にかけての土地利用の一端を知ることができました。今後、本報告書が地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

愛知県東海市教育委員会
教育長　加藤朝夫

例言

1. 本報告書は平成24年度中心街整備事業に伴う埋蔵文化財調査として行われた愛知県東海市大田町に分布する畑間・東畑遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は平成24年度に東海市教育委員会が調査主体となり、株式会社島田組中部営業所が業務委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は計7地点で行われ、それぞれ1～5地点（畑間遺跡）、6・7地点（東畑遺跡）の2つの遺跡にわけられる。
4. 発掘調査期間は各地点、以下のとおりである。

   【1・2地点】平成24年9月25日～11月22日

   【3地点】平成24年8月20日～9月11日

   【4地点】平成24年7月9日～8月10日

   【5地点】平成24年6月4日～7月3日

   【6地点】平成25年2月20日～3月5日

   【7地点】平成24年11月26日～平成25年3月11日
5. 各地点の発掘調査面積は、以下のとおりである。

【1・2地点】	254.0㎡	【3地点】	97.8㎡	【4地点】	253.2㎡
【5地点】	157.8㎡	【6地点】	55.4㎡	【7地点】	513.7㎡

6. 発掘作業は東海市教育委員会社会教育課宮澤浩司監督のもと筧　和也（株式会社島田組主任調査員）を調査員として、以下の者の協力でおこなわれた。
   楠部博世（調査補助員）、加藤雄二、斉藤勝亮、シオネ・ホロブル、神野攻一、神野満喜夫、平野光男、平野武光、藤井恭彦、牟田神東勝雄、山本　學、山盛愛子
7. 発掘調査における記録のうち、測量は松村直樹（株式会社島田組主任測量技師）がおこなった。
8. 本報告書の本文執筆は、東海市教育委員会社会教育課宮澤浩司の監督のもと、筧　和也がおこなった。内訳は、第1章を宮澤、これ以外を筧が担当した。また、第5章の自然科学分析については辻　康男（パリノ・サーヴェイ）管理のもと、金井慎司が担当した。付論については、鬼頭　剛氏（愛知県埋蔵文化財センター）の玉稿を賜った。なお、編集は筧がおこなった。
9. 本報告書の遺物接合・復元・実測・トレースは伊藤茉緒、岡垣佑香、金恩貞、河野恵子、濱口由美子、山内千恵子がおこなった。
10. 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析の内容は、出土した人骨・獣骨・貝殻の同定とこれらが出土した土壌、含有物の分析及び年代測定である。
11. 本報告書に掲載した遺物写真は筧　和也、丹生泰雪が撮影した。
12. 発掘調査により作成した図面・写真等の記録類、出土遺物はすべて東海市教育委員会で保管している。
13. 本報告書にて作成した図面・写真類はすべて東海市教育委員会で保管している。

凡例

1. 遺跡の略称は、それぞれ、HM（畑間遺跡）、HH（東畑遺跡）、とした。これらは、遺物注記や写真フィルム注記などに使用した。
2. 遺構記号は東海市教育委員会の指示により、愛知県埋蔵文化財センター発行の「埋蔵文化財の調査・研究に関する基本マニュアル」2002に準じた。凡例は以下に記す。

   SK：土坑　SE：井戸　SB：建物　ST：耕作地（水田・畑地）　SD：溝　SX：その他（性格不詳）
3. 遺構番号は、発掘調査時に遺構の種類に関係なく調査区毎に4桁の通し番号で付与（1・2地点：2001、2002、2003…、3地点：3001、3002、3003…、4地点：4001、4002、4003…）して管理した。本報告書では、この番号の冒頭に遺構記号を合わせて提示している。
4. 本調査において測量記録の測地系は、世界測地系第Ⅶ系に準じ、方位は平面直角座標を基準とした。なお、標高はすべてT.P.（東京湾平均海面高度）を基準としている。
5. 発掘調査時における土層の土色および、遺物の色調は『新版標準土色帖』を用いてJIS notationと日本語の対応土色名を示した。
6. 遺物図面（挿図）の各遺物に対する番号は通し番号を付与した。
7. 本報告書掲載の遺物の番号は、図面（挿図）、遺物観察表において共通するが、遺物によって、写真のみとしたものや、図面だけ掲載したものがあるため、本文中には図面番号と写真番号をそれぞれ掲載している。
8. 発掘調査時の遺構の検出について、中世以降の遺構面は遺構とのベース層の区別が難しかった。そのため、すべての地点において地山直上で調査をおこなった。結果、掘削面が判明しえない遺構があるが、調査区壁面の断面観察から確認できるものに関しては、本文中で掘削層を記した。
9. 遺物実測図の縮尺は1/4を基本としているが、遺物の大きさによって異なるものがある。この場合別途スケールを変えて掲載している。
10. 遺物観察表に記載した法量について、（ ）内の数値は復元数値を示す。口径など復元可能なものは、できるだけ復元した数値を掲載している。
11. 文中に引用及び参照した文献等については巻末にまとめて記載した。

目次

第1章　調査の経緯と遺跡の環境

第1節　調査にいたる経緯 …… 1

第2節　遺跡の位置と環境 …… 2

第3節　畑間・東畑・郷中遺跡における既往の調査 …… 4

第4節　発掘調査の調査経過 …… 6

第2章　畑間遺跡の調査

第1節　1・2地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序 …… 8

Ⅱ　検出遺構 …… 11

Ⅲ　出土遺物 …… 20

第2節　3地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序 …… 28

Ⅱ　検出遺構 …… 31

Ⅲ　出土遺物 …… 36

第3節　4地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序 …… 40

Ⅱ　検出遺構 …… 44

Ⅲ　出土遺物 …… 52

第4節　5地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序 …… 58

Ⅱ　検出遺構 …… 61

Ⅲ　出土遺物 …… 67

第5節　6地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序 …… 71

Ⅱ　検出遺構 …… 71

Ⅲ　出土遺物 …… 71

第3章　東畑遺跡の調査

第1節　7地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序 …… 74

Ⅱ　検出遺構 …… 77

Ⅲ　出土遺物 …… 91

第4章　自然科学分析
1.　試料 …… 110
2.　分析方法 …… 110
3.　結果 …… 112
4.　考察 …… 115

第5章　まとめ
第1節　1・2地点
Ⅰ　検出遺構について …… 117
Ⅱ　出土遺物について …… 117
第2節　3地点
Ⅰ　検出遺構について …… 118
第3節　4地点
Ⅰ　検出遺構について …… 119
Ⅱ　出土遺物について …… 119
第4節　5地点
Ⅰ　検出遺構について …… 120
Ⅱ　出土遺物について …… 120
第5節　7地点
Ⅰ　検出遺構について …… 121

遺物観察表
1・2地点 …… 127
3地点 …… 132
4地点 …… 135
5地点 …… 140
7地点 …… 143

付論1
東海市、東畑遺跡周辺の表層地形解析　鬼頭　剛…… 157
付論2
畑間・東畑遺跡出土軒平瓦の意義　筧　和也…… 165

挿図

図1　畑間・東畑遺跡の位置…… 1
図2　調査地位置図（1：3000）…… 2
図3　周辺の遺跡（1：15000）…… 3
図4　既往の調査地（1：3000）…… 5
図5　1・2地点南壁・東壁土層断面図（1：50）…… 9
図6　SD2010平面図・土層断面図（1：200・1：50）…… 11
図7　SD2011平面図・土層断面図（1：200・1：50）…… 12
図8　SD2070平面図・土層断面図（1：200・1：50）…… 13
図9　SD2077・2079平面図・土層断面図（1：100・1：50）…… 14
図10　P2021・2039・2052・2053平面図・断面図（1：50）…… 15
図11　P2005・2066・2067・2082平面図・断面図（1：50）…… 16
図12　SK2069平面図・断面図（1：50）…… 17
図13　SX2045・2084平面図・断面図（1：50）…… 18
図14　1・2地点遺構平面図（1：150）…… 19
図15　SD2011出土土器（1：4）…… 20
図16　SD2070出土遺物（1：4）…… 21
図17　SX2045出土遺物（1：4）…… 24
図18　1・2地点その他の出土遺物①（1：4）…… 26
図19　1・2地点その他の出土遺物②（1：4）…… 27
図20　3地点北壁・東壁土層断面図（1：50）…… 29
図21　SD3058平面図・断面図（1：100）…… 31
図22　SK3029土器出土状況図・断面図（1：20）…… 32
図23　3地点柱穴平面図・断面図（1：100）…… 33
図24　SX3031平面図・断面図(1:50)…… 34
図25　3地点遺構平面図（1：100）…… 35
図26　SX3031出土遺物（1：4）…… 36
図27　3地点出土その他の遺物（1：4・1：2）…… 38
図28　4地点東壁・南壁・サブトレンチ南壁土層断面図（1：50）…… 41
図29　SD4018平面図・断面図（1：100・1：50）…… 45
図30　SD4031平面図・断面図（1：150・1：50）…… 46
図31　4地点土坑群平面図・断面図（1：100）…… 48
図32　SD4034平面図・断面図（1：60）…… 49
図33　SD4035平面図・断面図（1：60）…… 49
図34　4地点遺構平面図（1：125）…… 50

図35　4地点サブトレンチ遺構配置図（1：100）…… 51
図36　SD4018出土土器（1：4）…… 52
図37　SD4031出土土器（1：4）…… 54
図38　4地点出土その他の遺物（1：4・1：2）…… 56
図39　5地点北壁・東壁土層断面図（1：50）…… 59
図40　SD5023・5031平面図・断面図（1：100・1：40）…… 62
図41　SK5034平面図・断面図（1：100・1：50）…… 63
図42　5地点検出土坑平面図・断面図（1：60）…… 64
図43　P5004・5014平面図・断面図（1：40）…… 65
図44　5地点遺構平面図（1：100）…… 66
図45　5地点出土中世の土器（1：4）…… 67
図46　5地点出土弥生・縄文土器（1：4）…… 69
図47　5地点出土その他の遺物（1：4・1：20）…… 70
図48　6地点南壁・西壁土層断面図（1：50）…… 72
図49　6地点遺構平面図（1：100）…… 73
図50　7地点西壁・南壁土層断面図（1：50）…… 75
図51　SZ7178平面図・断面図（1：100・1：50）…… 78
図52　SZ7177平面図・断面図（1：100・1：50）…… 80
図53　SD7135平面図・断面図（1：50）…… 81
図54　SD7136平面図・断面図（1：50）…… 82
図55　SK7163土器出土状況図（1：20）…… 83
図56　SB7143平面図・断面図（1：50）…… 84
図57　SK7141土器出土状況図・断面図（1：50）…… 85
図58　SK7032獣骨出土状況図・断面図（1：10）…… 86
図59　SK7161獣骨出土状況図・断面図（1：20）…… 88
図60　SE7065平面図・断面図（1：40）…… 89
図61　7地点遺構平面図（1：150）…… 90
図62　SD7137出土土器（1：4）…… 91
図63　SD7140出土土器（1：4）…… 93
図64　SD7134・7138・7139（1：4）…… 95
図65　SD7135出土土器（1：4）…… 96
図66　SD7136・SK7163出土土器（1：4）…… 97
図67　SK7141出土土器（1：4）…… 99
図68　SE7065出土土器①（1：5）…… 100
図69　SE7065出土土器②（1：5・1：4）…… 101
図70　7地点出土その他の遺構・包含層出土古式土師器（1：4）…… 103

図71　7地点出土須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器（1：4）…… 104
図72　7地点出土中世の土器①（1：5・1：4）…… 106
図73　7地点出土中世の土器②（1：4）…… 107
図74　7地点出土その他の遺物（1：4）…… 109
図75　ウマ骨格各部の名称…… 111
図76　土壌試料1kg洗い出しによる貝類組式 …… 115
図77　畑間・東畑遺跡出土軒瓦…… 118
図78　4地点出土弥生時代の製塩土器（1：4）…… 119

表関係

表1　SZ7178周溝出土土器内訳表 …… 77
表2　年代測定試料の一覧 …… 110
表3　放射性炭素年代測定結果 …… 112
表4　暦年較正結果 …… 112
表5　検出動物分類群の一覧 …… 113
表6　貝類洗い出し結果 …… 114
表7　骨同定結果 …… 115
表8　SD4018・4031出土土器類の点数および比率 …… 119

写真

写真1～9　畑間遺跡（1・2地点）検出遺構
写真10～13　畑間遺跡（3地点）検出遺構
写真14～19　畑間遺跡（4地点）検出遺構
写真20～25　畑間遺跡（5地点）検出遺構
写真26　畑間遺跡（6地点）検出遺構
写真27～43　東畑遺跡（7地点）検出遺構
写真44～50　畑間遺跡（1・2地点）出土遺物
写真51～53　畑間遺跡（3地点）出土遺物
写真54～58　畑間遺跡（4地点）出土遺物
写真59～61　畑間遺跡（5地点）出土遺物
写真62～79　畑間遺跡（6地点）出土遺物
写真80～81　自然科学

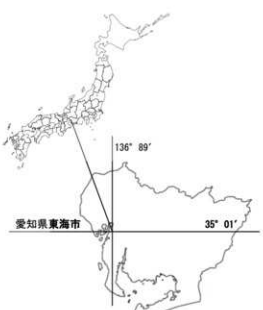
第1章　調査の経緯と遺跡の環境

第1節　調査にいたる経緯

畑間遺跡及び東畑遺跡は愛知県東海市内大田町に位置する（第1図）。平成8年度から10年度にかけて愛知県教育委員会が実施した知多半島遺跡詳細分布調査によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけての遺物散布地、東畑遺跡は弥生時代から中世にかけての遺物散布地とされている。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を中心市街地として位置づけ、平成4年度から土地区画整理事業および鉄道高架事業を実施している。これらの事業に伴い事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するために平成8年度に試掘調査を実施した（注2）。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することが確認された。この試掘調査の結果に基づき土地区画整理事業担当部局である中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成11年度から東海市教育委員会により主に道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成24年度末時点での調査済み面積は17,510㎡である。

平成24年度は原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者の東海市長から平成24年4月2日付け中第12号にて文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知があり、平成24年4月23日付け24教生第190号にて愛知県教育委員会教育長から発掘調査指示があった。これを受けて、畑間遺跡、東畑遺跡範囲内の7地点1,360㎡について、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者の東海市長から発掘調査依頼があり、現地調査業務及び1次整理作業について、平成24年5月1日に株式会社島田組中部営業所と業務委託契約を締結した。



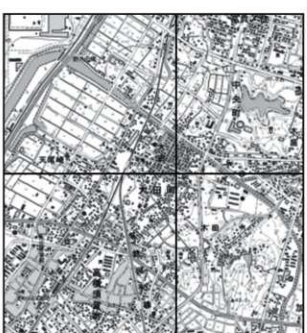


図1　畑間・東畑遺跡の位置

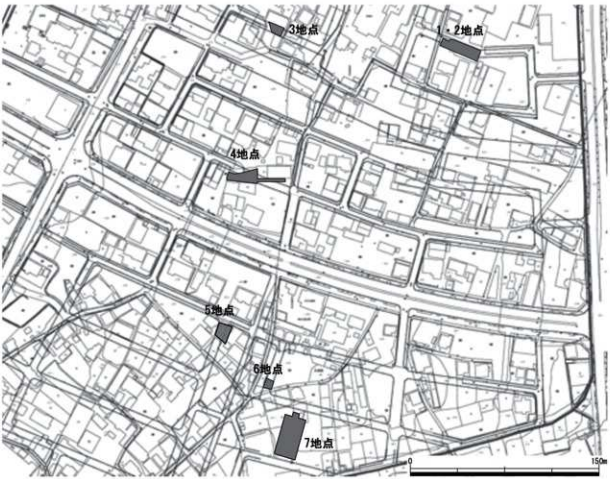


図2　調査地位置図

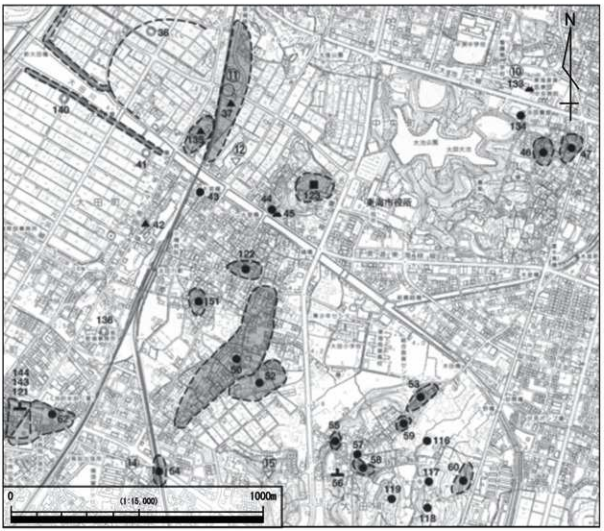
第2節　遺跡の位置と環境

畑間、東畑遺跡は知多半島西岸の伊勢湾に面した海岸平地に展開する砂堆上に立地する遺跡である。

知多半島西岸部には海岸部に向けて開けた海岸平地がいくつか展開するが、畑間、東畑遺跡の立地する東海市大田町周辺から、知多市北部の寺本にかけて南北に延びる海岸平地はその中でも最大のものである。この平地を構成する地層は沖積層であり、縄文海進の時期には水面下にあったとみられる。その証左として、畑間、東畑、郷中遺跡の東側に延びる丘陵上に展開する高ノ御前遺跡がある。高ノ御前遺跡からは市内最古の縄文時代前期の土器が出土している。高ノ御前遺跡の現在の海抜高は12m程である。

その後、畑間、東畑遺跡周辺が陸地化したのは、海水面が後退する縄文時代中期から後期にかけてとみられ、東畑遺跡からは当該期の縄文土器が少なからず出土する。恐らく縄文時代中期から後期には砂堆と呼ばれる砂の高まりが形成され、現在遺跡の範囲として捉えている海岸平地が陸地化していたと考えられる。

砂堆とは、伊勢湾を河口に持つ木曽川や、知多半島の丘陵部から流れる小河川や、波による陸地の浸食等、様々な作用によって供給された砂が、伊勢湾の沿岸流等によって運ばれて海岸に沿って堆積したものと考えられており、その形成時期の違いによって本遺跡周辺では3条の砂堆列がみられる。最も海岸から奥の砂堆列から順に第1、第2、第3砂堆と呼んでおり、畑間、東畑遺跡は第1砂堆に位置する。



36	浜新田堤防	51	龍雲院遺跡	62	烏帽子遺跡	135	上浜田遺跡
37	松崎貝塚	**52**	**東畑遺跡**	116	上前田遺跡	136	御州浜庭園跡
41	後浜新田堤防	53	高ノ御前遺跡	117	西広１号遺跡	140	川南新田堤防
42	下浜田遺跡	54	太田川第3踏切貝塚	118	西広２号遺跡	143	滝川半斎屋敷
43	後田遺跡	55	庄之脇遺跡	119	山畑遺跡	144	横須賀代官所
44	神宮前遺跡	56	木田城跡	121	横須賀御殿跡		
45	王塚古墳	57	木田遺跡	122	郷中遺跡		
46	峰畑貝塚	58	下畑遺跡	123	弥勒寺遺跡		
47	北屋敷遺跡	59	前畑遺跡	133	丸根古墳		
50	**畑間遺跡**	60	北広遺跡	134	大池北貝塚		

図3　周辺の遺跡

この第1砂堆は最も東西幅が広く大規模であるが、南北方向は丘陵部に規制され、1km程にとどまる。この丘陵部には北側の丘陵上に真言宗の古刹である弥勒寺が、南側丘陵上に天台宗の古刹である観福寺が所在しており、両者に挟まれた位置に畑間・東畑遺跡の集落が展開することは示唆的である。この他第1砂堆状には、最も北側の弥勒寺が立地する丘陵山裾に王塚古墳（古墳時代・滅失）、神宮前遺跡（古墳～中世）が所在する。王塚古墳は、昭和初期の道路拡幅の際に石室などが出土したと伝えられ、出土遺物の一部（須恵器短頸壺・坏蓋）が東海市立郷土資料館に所蔵されている他は詳らかではない。同じ

く神宮前遺跡についても遺物散布地として知られてはいるが、発掘調査が実施されておらず、詳細は不明である。なお、王塚古墳、神宮前遺跡の両遺跡のすぐ南を流れる大田川は、江戸時代初期に尾張藩2代藩主徳川光友により、横須賀御殿の建築に際して新たに開削された流路であり、現在では大田川によって断絶されているこれらの遺跡は、近世までは畑間、東畑遺跡とつながっていたことから、現在の景観とは異なる一体の遺跡群としてとらえる必要があろう。

第2砂堆は第3砂堆と比べて幅が狭く小規模である。名鉄太田川駅の辺りから北側の大宮神社辺りまで広がっている。この砂堆上には後田遺跡（古墳～平安）が位置する。後田遺跡周辺は宅地化が進んでいるが、製塩土器が採集されており、後述する上浜田遺跡、下浜田遺跡と密接に関連した遺跡であると考えられる。この砂堆の北端に位置する大宮神社は創建時期が不詳であるが、東海市史によると平安時代に大郷（大田町周辺）が熱田神宮の荘園となるに伴って、荘園鎮守神として熱田から勧請されたと推定されている。

第1砂堆は形成時期が最も新しいが、最も規模が大きく、旧海岸線沿いに知多市北部まで延びている。知多市域ではこの第1砂堆上に弥生時代以降大規模な集落が形成された。本市域では古墳時代中期以降に著名な製塩遺跡として知られる松崎遺跡（古墳～平安）や上浜田遺跡（古墳～平安）、下浜田遺跡（奈良～平安）が存在する。

概観すると、畑間、東畑、郷中遺跡の所在する大田町周辺では、最も奥側の第1砂堆上に中心的な集落が立地し、第2、第3砂堆が積極的に利用されるのは古墳時代以降ということになる。これは第3砂堆上に弥生集落が展開する知多市などとは様相を異にする。その理由としては、大田町周辺では内陸側に奥まった、いわば谷状地形であったことから、第1砂堆が大きく発達し、居住に適していたことが考えられる。

この大田町周辺には上記の遺跡の他、主に弥生時代の集落である烏帽子遺跡（縄文～近世）、尾張藩2代藩主徳川光友の浜御殿である横須賀御殿跡などの遺跡が所在する。また、近世には第3砂堆の先海岸部が新田開発されて埋め立てられた。川北新田、川南新田、浜新田がそれである。中でも浜新田からは圃場整備に伴って新田堤防の坎（いり）が出土している。こうした近世の新田開発や大田川の付け替えに加え、現代の埋立てによって弥生時代以来の景観は失われているが、遺跡の分布や僅かに残る砂堆の痕跡などから、かつての環境を復元することができる。

第3節　畑間・東畑・郷中遺跡における既往の調査

畑間遺跡、東畑遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、これまで発掘調査は実施されていなかった。初めて調査されたのは、前述したとおり平成8年度に実施された中心街整備事業に先立つ試掘調査である。調査では土地区画整理事業が予定されていた区域内に20箇所のトレンチを試掘した。このうち畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡に関係するトレンチは16箇所に上る。この試掘調査によって従前範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが遺跡の範囲を特定することができた。各遺跡の時期については、畑間遺跡については中世から近世の時期、東畑遺跡については弥生時代中期から古墳時代前期の時期と古代から中世の時期であることが推測された。

その後、平成11年度から中心街整備事業に伴う緊急発掘調査により畑間遺跡、東畑遺跡それぞれの発

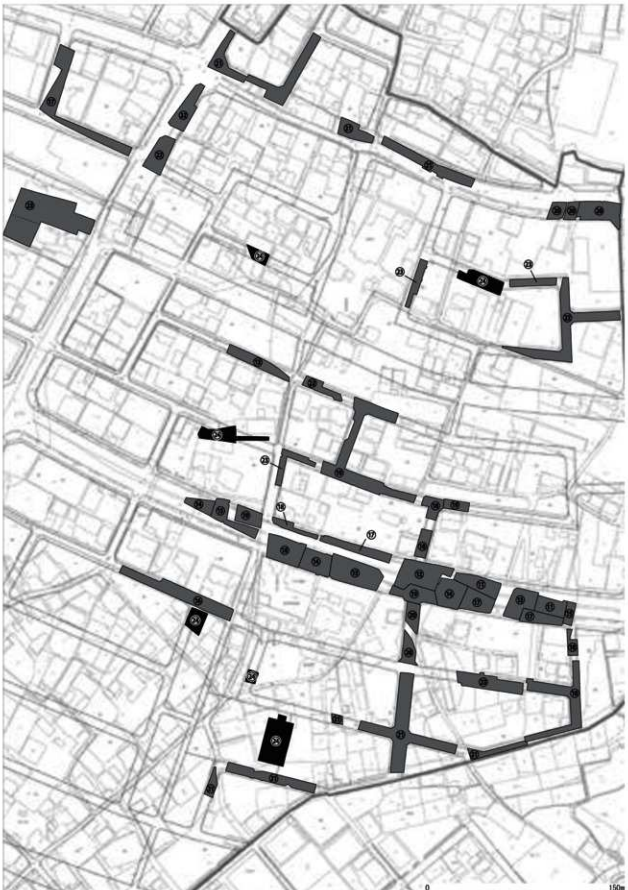


図4　既往の調査地

掘調査が行われ、各遺跡の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第4図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗に応じて調査を実施しており、小規模な調査とならざるを得ない。平成24年度末時点での調査済面積は17,510㎡である。この内平成11年度から平成19年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については概要報告を行い、並行して整理作業を実施し、平成25年度に報告書を刊行した。

第4節　発掘調査の調査経過

平成24年度畑間・東畑・遺跡発掘調査業務委託は、平成24年5月1日に契約を締結。同5月28日から現場事務所設営などの作業を開始した。最初に着工した調査区は5地点（畑間遺跡）であり、6月4日に重機により表土掘削を開始した。5地点は施工計画の段階では、敷設される道路部分を掘削する予定であったが、調査区南側の耕作地を地権者が耕作をおこなっていたため、調査面積を確保するため調査区を西側に拡張した。

表土掘削は、中世遺物包含層の上面までおこない、以下人力で遺物を取り上げ、地山直上まで掘削し、この面で遺構検出をおこなった。遺構掘削および記録作業は、6月26日にほとんど終了し、翌27日に高所作業車での写真撮影をおこない、28日に補足調査をして当調査地の調査は終了。

次に4地点（畑間遺跡）に着手した。ここでは、予定していた廃土置き場で、5地点同様に地権者による耕作がおこなわれており、排土置き場として使用できなかったため、予定していた面積に合わせるように調査位置を変更して排土置き場を確保した。また、当調査地では、過去の周辺調査で検出した大型土坑の西肩を検出する目的があったため、変更した調査区内でこれが見つからなかった場合は、西側部分で試掘調査し、大型土坑の範囲調査をおこなうことになった。

表土掘削は7月9日に開始。11日には機械掘削を終了し、撹乱掘削を経て、包含層掘削をおこなった。調査区南側では地山が見える部分があったため、幾度か遺構検出をおこなったが、遺構の状況が不明瞭であったため、検出作業をくりかえし、検出状況の写真撮影をおこなったのが23日であった。24日から遺構半截などの遺構掘削を開始した。この調査地点は湧水が大量で、遺構面を満たすほどではなかったが、遺構が崩落により形状が不鮮明になることを防ぐため、大型遺構に関しては一段下げをおこなった状態で高所撮影をすることになった。高所撮影は31日におこない、8月1日から大型遺構の掘削、記録作業をおこなった。この作業は6日の午前中に終了し、午後から調査区の埋戻しをおこなった。ただ、この調査区内で先述した大型土坑の西肩が検出できなかったため、南北幅2mのトレンチを調査区の東側に延長して調査をおこなった。結果として大型土坑の西肩は調査地内にはないことが判明し、10日に全景写真を撮影して調査を終了した。

次に3地点に着手した。準備工を経た後8月21日から機械掘削を開始した。3地点では、近世以降の削平がかなりの深さまで及んでいたため、他地点にみられるような包含層の堆積はなかった。そのため、地山直上近くまで機械掘削をおこない。以下人力で掘削をおこなった。3地点は調査面積に比べて遺構の数が多く、しかも、4地点同様に湧水のため遺構が崩落しやすい状態であったため、掘削に時間がかかった。9月10日に高所撮影をおこない11日に埋戻しをして終了した。

1・2地点はフェンス設営時に既存のガスの本管が縦断することが判明したため、ガスの封栓をおこなうため、一時的に作業を中断し、東邦ガスによるガス管撤去を待った。24日にガス管撤去が行われたため、25日から機械掘削を開始した。28日から包含層掘削を開始し、途中台風の被害もあったが、10月12日に遺構検出を終了した。この調査区住宅家屋が隣接することから夜間排水ができなかったことから、調査区の東半部は毎日水没する状況であったため、排水作業にかなりの時間を要した。11月14日に調査区全景の高所撮影をおこない、16日まで補足調査をして終了した。

次に調査をおこなったのは7地点であった。調査区が広いため準備に日数を要したが、11月27日から機械掘削を開始した。29日に機械掘削を終了し、30日から包含層掘削をおこなった。包含層は北東部が一段深く堆積していた。これは耕作地の違いによるものであったが、この耕土除去までを12月16日までおこない、17日に遺構検出写真を撮影した。18日からは遺構半截などの掘削作業を開始した。この調査区では方形周溝墓や竪穴住居をはじめ、動物埋葬土坑など多彩な遺構が検出された。そのため、遺構掘削には時間がかかった。また、年が明けて1月26日に現地説明会をおこなった。冬場の寒い時期の現地説明会であったため、来場者数約70人と少人数であったが、その分遺跡に興味のある方々が来訪して、非常に有意義な説明会であった。

2月14日には調査区全景写真の高所撮影をおこなった。その後重要遺構や基本的土層の補足調査などをおこなった。7地点では特に南側で地震の痕跡とみられる液状化現象が地山とその下層で確認できた。この状況を専門家である愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏に話したところ、調査をおこないたいという意向であったため、断割調査をおこなうこととなった。断割は調査区南東部の液状化が明瞭に目視できる部分に設定して、機械掘削によりおこなった。この作業を20日までに終了した。この調査結果は付論として本報告書に掲載している。

その後は方形周溝墓や竪穴住居などの重要遺構の補足調査と調査区北端で検出した動物埋葬土坑の拡張調査をおこなった。この埋葬土坑は馬が埋葬されており、調査区の北壁よりさらに北側に広がっていたため、拡張して全体の調査ができるようにした。結果として頭部は撹乱を受けていたが、重要な調査成果の一つであった。

また、この拡張作業と並行して6点の準備工を進め、20日から表土掘削を開始した。6地点は全面が削平をうけており撹乱も多かった。そのため、遺構検出、掘削は3月1日までにほとんど終了。4日には調査区の高所撮影を終了し、5日に補足調査をおこなって、その日のうちに埋め戻した。

一方7地点の拡張区は馬の埋葬土坑全体を検出した馬の頭部にあたる部分が撹乱されており頭部と右前脚を欠損していたがその他は良好な状態で出土した。この調査および取り上げ、完掘を3月11日に終了し同日に埋戻しを終えて現地調査を終了。3月26日に成果品納品をして28日に現地からの撤収作業すべてを終了した。

整理業務および報告書作成については、平成25年8月26日委託業務契約を締結。翌日から㈱島田組整理作業棟で整理作業を開始した。途中、9月3日に大府市所在の吉田古窯で出土している瓦との同笵検討、また、10月11日には熱田神宮所用の瓦との同笵検討などもおこなった。平成26年1月19日に東海市に校正を依頼し、2月14日に入稿。3月25日に本書を刊行するに至った。

第2章　畑間遺跡の調査

畑間遺跡は本年度の調査地点のうち、1・2～6地点が該当する。各調査地間には一定の距離があるため、検出遺構の年代、性格ともに様々である。そのため、本報告書では地点ごとに分けて報告をおこなう。

第1節　1・2地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序

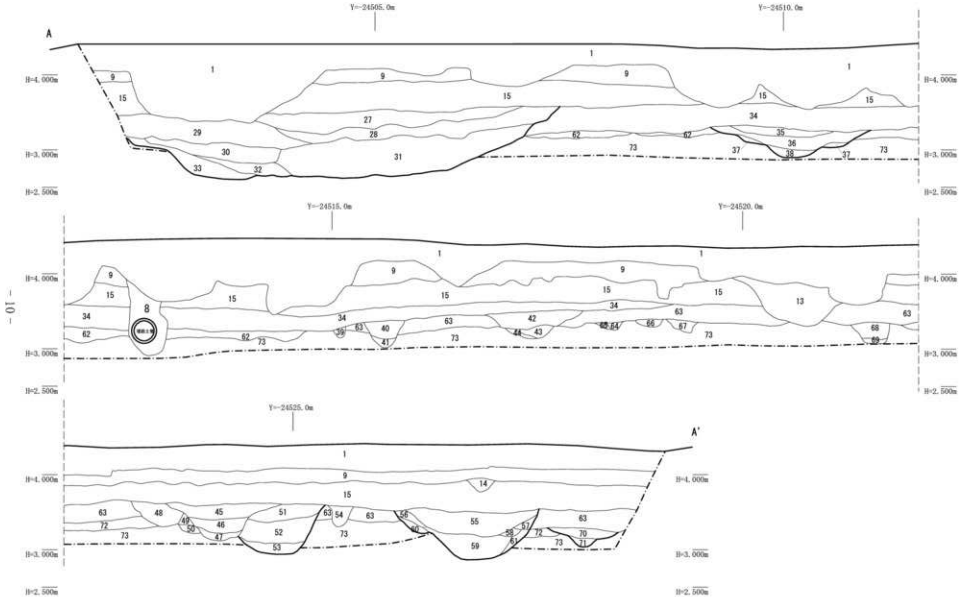
1・2地点は、計画段階では既設の南北道路を挟んで東西に設定されていたが、本来の1地点である調査地の既存家屋の移転ができなかったが、2地点については先行して調査可能な区域があったため、1地点の調査区を変更し、2地点の西側を拡張した。したがって、調査では、1地点と2地点を繋げた調査と解し1・2地点とした。以下、この表記にしたがって調査地点の記述をおこなう。

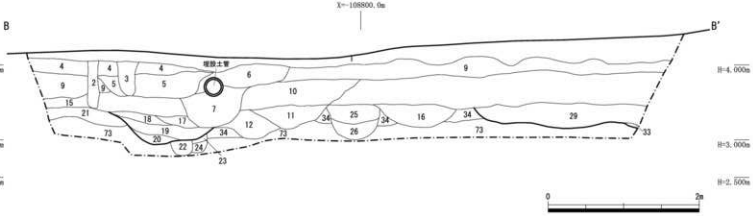
1・2地点は、区画整理により新設される東西道路部分の記録保存調査である。この調査地の東側は平成22・23年度に発掘調査が行われ、中世を主体とした遺構が検出されており、これらの延長部の検出を主な目的として調査をおこなった。1・2地点の基本層序は概ね以下の5層に大別でき、調査地全体で一定する。

1：客土（5Y8/6　黄色シルト）
2：耕土（10YR3/3　暗褐色砂質土）
3：耕土または堆積層（10YR4/4　褐色砂質土）
4：耕土または堆積層で中・近世の遺物包含層（10Y3/2　オリーブ黒色砂質土）
5：地山（5Y8/3　淡黄色砂を基調とするが場所により異なる。）

1は調査前に宅地であったため、宅地化する際の盛土と考えられる。2は宅地化する以前に耕作地であったと考えられる層位であり、酸化還元によるグライ化作用が確認できる。3は耕土の可能性がある層位で、近世以後の遺構より上位にあるため、比較的年代の新しいものと考えられる。4は後述する江戸時代の遺物を含むSX2045に削平されており、この遺構より古い年代の耕作土または堆積層と考えられる。江戸時代初頭頃の常滑焼の赤物鉢が入っていたため、江戸時代前期まで降る可能性はある。こうした年代の遺物が入る層位が5の地山層直上になるのは、当地は江戸時代前期以降に大規模な改変が行われている傍証と考えられる。ただし4の上面から掘削されている小型の溝や4に覆われる小型の溝なども断面観察で確認されており、耕作溝と考えられることから、改変は耕作に伴うと判断することができる。

これらの基本的層序をまとめると、地山上面には、江戸時代前期までの土器類を主体とした遺物を含む耕土が確認でき、それ以前の堆積層は全くみられないことがいえる。こうした状況は17世紀以後当地において大規模な改変作業がおこなわれたものと考えらる。またこの改変は地山直上の層位が耕作土の可能性が高いことから、耕作に伴うものと推定される。加えて耕土は現在の宅地造成の際に持ち込まれた客土の直下までみられることから、17世紀のある時期以後は、耕作地として土地利用がおこなわれた場所であった可能性が高いといえる。


Y=-24505.0m
Y=-24510.0m
A
H=4.000m
H=3.000m
H=2.500m
Y=-24515.0m
Y=-24520.0m
Y=-24525.0m
A'



1. 5Y8/6　黄色シルト（縛りなし）　客土（場所により一定しない）
2. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　トレンチャー掘削痕
3. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土　トレンチャー掘削痕
4. 10YR4/4　褐色土～砂質土
5. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　撹乱
6. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土　土管埋設土
7. 10Y5/1　灰色砂質土　土管埋設土
8. 10Y4/2　オリーブ灰色土～砂質土　土管埋設土
9. 10YR3/3　暗褐色砂質土（酸化し青味が強い。旧耕土か）
10. 5Y4/1　灰色砂質土
11. 5Y5/1　灰色砂質土
12. 5Y5/2　灰オリーブ色砂質土
13. 5Y5/3　灰オリーブ色土　撹乱
14. 2.5Y3/1　黒褐色砂質土　耕作溝
15. 10YR4/4　褐色砂質土
16. 5Y6/2　灰オリーブ色砂質土（貝殻を少量含む）
17. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土　SD2010埋土
18. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土（66層に比べオリーブ色強い。貝殻を少量含む）　SD2010埋土
19. N3/　暗灰色砂質土（上部に黄分多い）　SD2010埋土
20. N3/　暗灰色砂～シルト　SD2010埋土
21. 5Y4/1　灰色砂質土（貝殻を多量含む）　遺構埋土
22. 10Y3/1　オリーブ黒色砂質土　遺構埋土
23. 10Y5/1　灰色砂～砂質土　遺構埋土
24. 10Y4/1　灰色砂～砂質土　遺構埋土
25. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土　遺構埋土
26. 2.5Y5/1　黄灰色砂質土　遺構埋土
27. 7.5Y3/1　オリーブ黒色シルト（粘性あり）　SX2045埋土
28. 5GZ/1　緑黒色粘質土～シルト（貝殻を多量含む）　SX2045埋土
29. 10Y4/1　灰色土～粘質土（砂質あり。貝殻を少量含む）　SX2045埋土
30. N4/　灰色粘質土　SX2045埋土
31. 10Y2/1　黒色シルト（粘性強い）　SX2045埋土
32. 10Y3/1　オリーブ黒色シルト（縛りなし）　SX2045埋土
33. 5Y7/7　灰白色砂質土～砂（地山模れ）　SX2045埋土
34. 10Y3/2　オリーブ黒色砂質土（5Y8/3 淡黄色シルトブロックを少量含む）　包含層
35. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　SD2042埋土
36. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質土　SD2042埋土
37. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質土+5Y8/3　淡黄色砂（地山ブロックを含む）　SD2042埋土
38. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土　SD2042埋土
39. 10Y5/1　灰色砂～砂質土　遺構埋土
40. 10Y5/1　灰色砂～砂質土　遺構埋土
41. 10Y5/1　灰色砂～砂質土　遺構埋土
42. 10Y4/1　灰色砂質土　遺構埋土
43. 2.5Y7/4　浅黄色砂（地山ブロックを含む）　遺構埋土
44. 7.5Y5/1　灰色砂～砂質土　遺構埋土
45. 7.5Y5/2　灰オリーブ色砂質土　遺構埋土
46. 10Y5/1　灰色砂質土　遺構埋土
47. 5Y4/2　灰オリーブ色砂～砂質土（地山ブロックを含む）　遺構埋土
48. 10Y4/1　灰色砂質土　遺構埋土
49. 10Y3/1　オリーブ黒色砂　遺構埋土
50. 2.5Y6/4　にぶい黄色砂　遺構埋土
51. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質土　SK2083埋土
52. 5Y4/1　灰色砂質土（粘性ややあり）　SK2083埋土
53. 5Y5/2　灰オリーブ色砂～砂質土　SK2083埋土
54. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　遺構埋土
55. 10Y4/1　灰色砂質土（遺物を多量含む）　SD2077埋土
56. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土　SD2077埋土
57. 5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　SD2077埋土
58. 7.5Y4/1　灰色砂質土（貝殻を多量含む）　SD2077埋土
59. 10Y5/1　灰色砂質土～砂　SD2077埋土
60. 5Y6/4　オリーブ黄色砂（地山模れ）　SD2077埋土
61. 7.5Y5/1　灰色砂～砂質土　SD2077埋土
62. 5Y7/3　淡黄色砂～細粒砂
63. 7.5Y2/1　黒色砂～砂質土
64. 5Y5/1　灰色砂～砂質土　遺構埋土
65. 2.5Y6/3　にぶい黄色砂　遺構埋土
66. 2.5Y6/2　灰黄色砂　遺構埋土
67. 2.5Y6/2　灰黄色砂　遺構埋土
68. 10Y5/1　灰色砂質土　遺構埋土
69. 7.5Y4/1　灰色砂質土　遺構埋土
70. 10Y4/1　灰色砂質土　SD2079埋土
71. 7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　SD2079埋土
72. 2.5Y7/3　浅黄色砂　地山ゃ
73. 5Y8/3　淡黄色砂　地山（場所により一定しない）

図5　1・2地点南壁・東壁土層断面図

Ⅱ　検出遺構

1・2地点では、主に溝、土坑および柱穴、性格不明遺構などを検出している。これらはすべて地山直上で検出した。この調査区では、主に中世、近世の遺構が主体であり、それ以前の遺構とみなせるものは皆無であった。こうした状況は遺物をみても中世以前のものが少量であった点で共通する。

こうした中でも特に溝は現在の周辺地割と方位が同じであることが明らかになり、現況の地割の起源を探る上でも貴重な調査結果となった。以下、当調査地点で検出した特記すべき遺構を中心に報告する。

SD2010（図6）　調査区北側で検出した幅1.10m、深さ0.55mの溝である。調査区の東・西方に延長する。掘削深度は帯水層まで及んでいたが、埋土の掘削時にかなりの崩落があったため、この溝が掘削された当時は、地山層での帯水はなかった可能性が高い。また、埋土は地山層や、地山層直上にみられる耕作

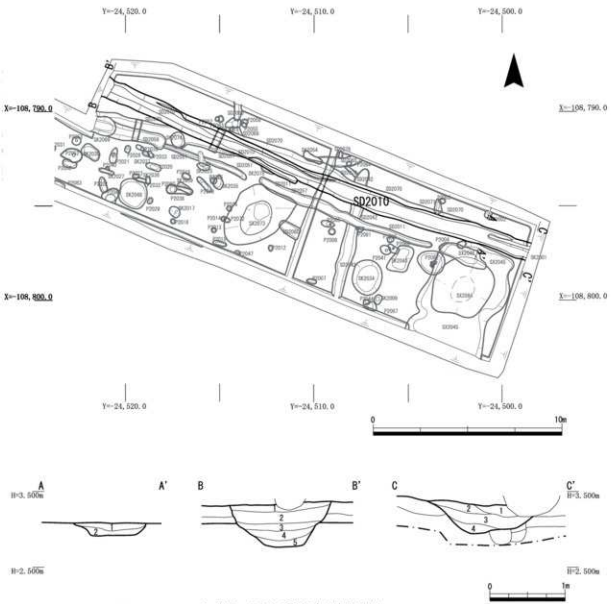


図6　SD2010平面図・土層断面図

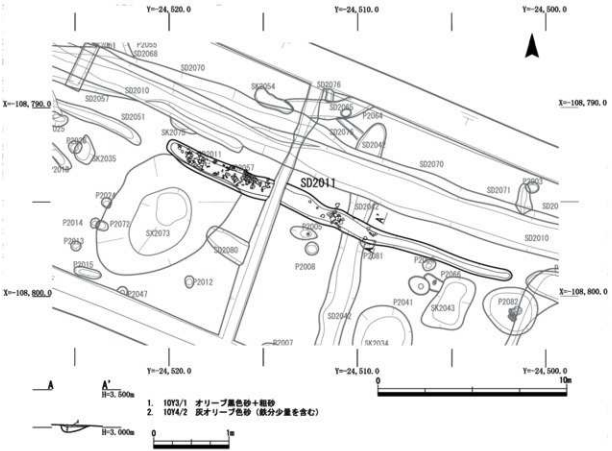


図7　SD2011平面図・土層断面図

土とは異質の土性であり、地山層やその上層がしまりのない砂であるのに対し、溝埋土は粘性のある砂質土であった。したがって、堆積は流水による沈殿であるものとみられ、排水または、水路的な役割の溝であった可能性がある。また、溝の掘削深度は西側が深いことから、北西に流水したものと考えられる。なお、後述するSD2070とほぼ同じ位置で検出しており、SD2070の掘り直しである可能性が考えられる。

出土遺物は破片総数で141点を数える。土器を主体に少量の瓦が出土している。土器は主に常滑焼大甕が出土しているが、比定される年代は様々である。新手のものとして16世紀以後に比定される天目茶碗の小片や常滑焼赤物甕、瓦などが出土しており、少なくともこの時期まで機能した溝である蓋然性が高い。

SD2011（図7・写真2-3～7）　SD2010の南側で平行する幅0.60m、深さ0.10mの東西溝である。溝の東端はSX2045の西側で終焉し、西側は調査区中央付近で途切れるが、その西側にあるSD2051も同一の溝の可能性がある。SD2051は、西側がSD2058に削平されるため延長部の状況は把握できなかった。

SD2011からは比較的まとまった土器類を主体とした遺物が186点（総破片数）出土しており、溝機能時に廃棄されたものと考えられる。15世紀前半～16世紀前葉の内耳鍋や羽釜などが出土しており、この種の薄手の土器の耐久年数を考えると、15世紀前半頃から機能し始めた溝と考えられるが、年代の新しい遺物として、16世紀前半に比定される土師質土器などが出土しており、廃絶は16世紀前葉以後と考えられる。

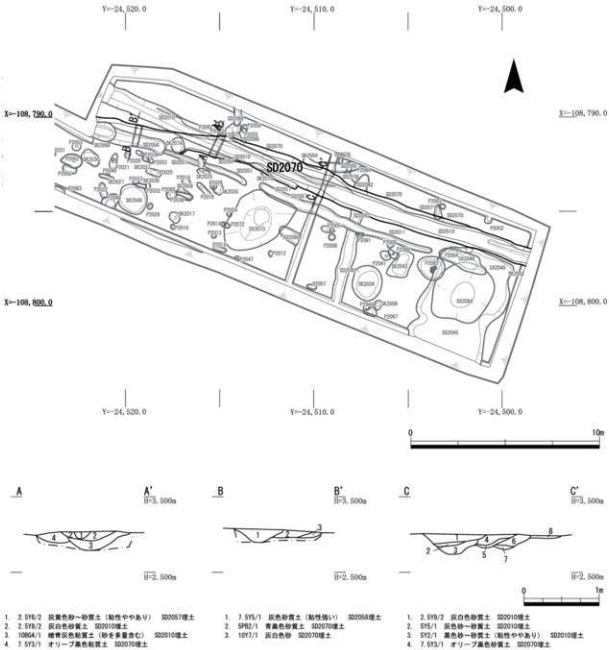


図8　SD2070平面図・土層断面図

SD2042（図14）　調査区中央付近で検出した幅0.80m、深さ0.10mの南北溝である。SD2010やSD2011と重複し削平されることから、それらより古い溝である。また、方位に関してもSD2010やSD2011と若干振れ幅が異なっており、SD2010やSD2011などより古い時期の地割が存在した可能性が指摘できる。

SD2070（図8・写真3-8～11）　SD2010のほぼ直下で検出した幅1.13m、深さ0.25mの東西溝である。調査区東端から中央部までSD2010とほとんど重なる。調査区中央部から中心軸が南に傾き、調査区西端ではSD2058と重複して削平される。

埋土はSD2010同様に流水による沈殿堆積と考えられる粘性のある砂質土であり、排水や水路のような機能が考えられ、ある時期にSD2010へと変遷することを想定する。

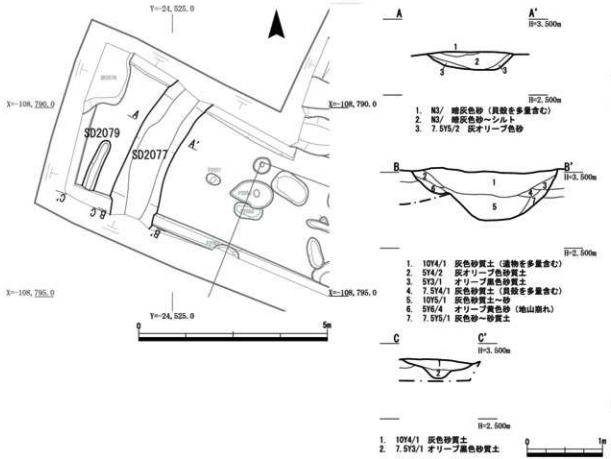


図9　SD2077・2079平面図・土層断面図

出土遺物は、山茶碗などを主体とした土器類や少量の瓦が破片総数で92点出土している。山茶碗以外の土器類で年代比定が可能なものは皆無であり、詳しい遺構の年代比定は困難であるが、山茶碗は12世紀後半～13世紀前半に比定されるものが出土しているため、この時期以後で、SD2010に改変されるまでが遺構が機能した時期といえる。

SD2077（図9・写真4-13・14）　調査区西側で検出した幅1.30m、深さ0.23mの南北溝である。SD2010やSD2070とほぼ直交する方位をとるが、重複部は調査区外となるため新旧関係は不明。埋土がSD2010やSD2070とは異なるため、いずれかと直接の関連性はないものと考えられる。

埋土には貝殻などが廃棄された様相が確認できるため、周辺部に生活の場があったものと考えられる。特にこれまでの周辺調査では、宅地に近接する溝などに貝殻を廃棄している様相を確認しているため、宅地に関連する溝の可能性があり、宅地を区画する溝であることも考えられる。なお、山茶碗や常滑焼などが出土するため中世に比定できるものの、詳細な年代比定が可能な遺物は出土していない。

SD2079（図9）　調査区西端、SD2077の西側で検出した幅1.05m、深さ0.25mの溝である。上下2層からなり、下層の幅は0.34mと狭い。検出したのはこの下層部分のみであり、上層部は地山層の上層から掘削されていた。これもSD2077同様の方位をとり、何らかの区画溝または、耕作に伴う溝であることが想定される。ただし、遺物は全く出土していないため、年代は不明である。

P2005（図11・写真5-15）　調査区中央部で検出した長軸0.72m、短軸0.33m、深さ0.27mの柱穴である。掘立柱建物の柱穴とみられ、柱は建物解体の際に切り取られたものと考えられ、底から直径約0.11mの

柱根が出土した。P2066やP2067も同様に柱根が残っており、同じ建物の柱穴と考えられるが、これ以外に組み合うことが想定できる柱穴は検出していない。

P2021（図10・写真5-16） 調査区西側で検出した長軸0.84m、短軸0.35m、深さ0.20mの柱穴である。底から根石が出土しており、建物の柱穴であった可能性がある。当調査区で検出した柱穴のうち、根石を検出したのはこの柱穴だけである。

P2039（図10・写真5-17） 調査区西側で検出した長軸0.46m、短軸0.21m、深さ0.06mの柱穴である。柱は抜き取られており、抜取痕跡が断面により確認できた。

P2041（図11・写真5-18） 調査区中央部で検出した長軸0.59m、短軸0.45m、深さ0.14mの柱穴である。抜取痕跡を確認しており、直径0.15m前後の柱が想定される。

P2047（図14） 調査区中央部南側で検出した直径約0.27m、深さ0.13mの柱穴である。柱は抜き取られており、抜取痕跡から直径0.14m以下の柱であったことが想定される。

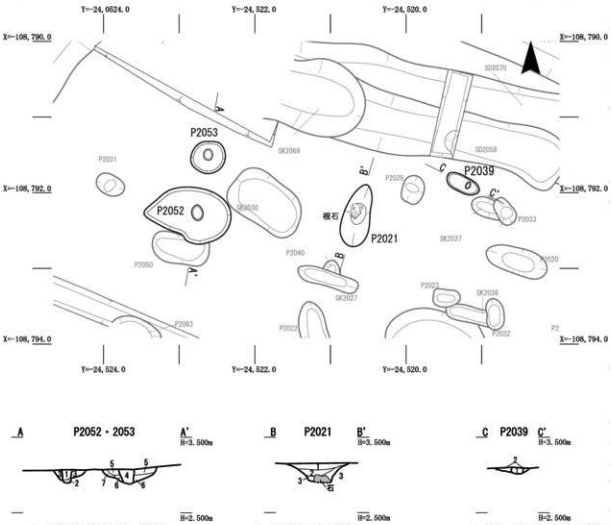


図10 P2021・2039・2052・2053平面図・断面図

P2052（図10・写真5−19） 調査区西側で検出した長軸1.15m、短軸0.73m、深さ0.20mの柱穴である。抜取痕跡から0.18m以下の柱が想定される。

P2053（図10・写真5−20） 調査区西側で検出した直径約0.45m、深さ0.18mの柱穴である。抜取痕跡から0.14m以下の柱が想定される。

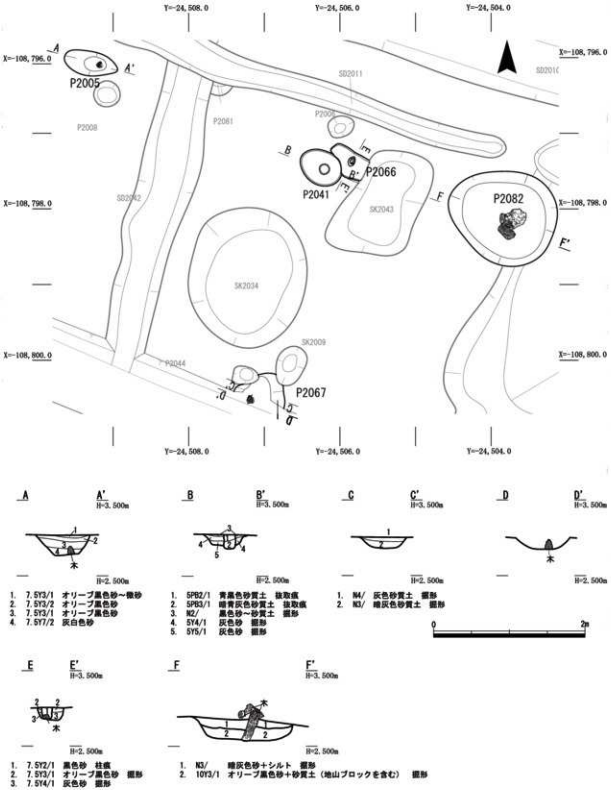


図11 P2005・2066・2067・2082平面図・断面図

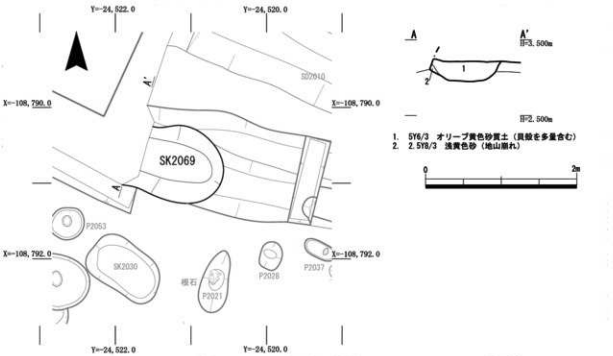


図12　SK2069平面図・断面図

P2066（図11・写真5-21）　調査区東部で検出した長軸0.66m以上、短軸0.35m、深さ0.17mの柱穴である。建物解体時に柱根を切り残したものと考えられ、柱根が残存した状態で出土した。

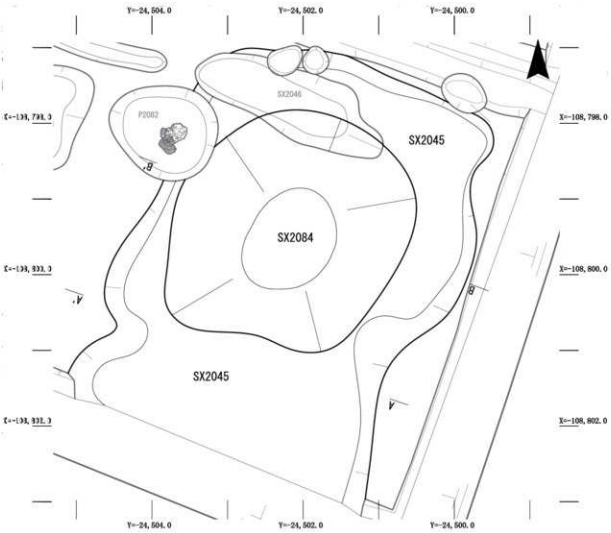
P2067（図11・写真5-22）　調査区中央部東寄り南部で検出した長軸0.68m、短軸0.50m以上、深さ0.15mの柱穴である。P2066同様に柱根が残存した状態で出土した。

P2082（図11・写真6-23・24）　調査区東側で検出した長軸1.46m、短軸1.23m、深さ0.30mの大型柱穴である。直径約0.25mの太い柱根が残存していたが、東側に傾いており、一度抜き取ろうと試みたものと思われる。結果として柱全体は抜き取ることが出来ずに柱根部分を切り取り、柱根が残存したようである。また、掘形内に焼けた木材が入っていた。何らかの建築部材である可能性があるが、被熱により原型を留めていなかったため詳細は不明である。なお、遺物の出土が皆無であったため遺物から年代を想定できないが、後述するSX2045を削平している点で、江戸時代期以後に比定した。

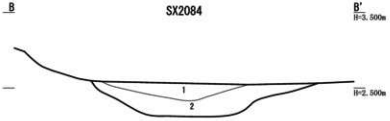
SK2069（図12・写真7-25）　調査区西端で検出した短軸0.58m、長軸1.80m以上、深さ0.24mの土坑である。埋土の9割以上が貝殻であり、貝殻を廃棄したゴミ捨て土坑と考えられる。

SX2045（図13・写真7-26・8-27～31）　調査区東南隅で検出した短軸4.30m、長軸5.50m以上、深さ0.48mの大型の土坑状遺構である。下層から検出したSX2084も一連の遺構である可能性があるが、断面観察の時点で湧水による崩落が著しく、判別がつかなかった。

江戸時代前期までの土器や瓦、獣骨などの遺物が破片総数で676点と大量に出土した。完形のものは全く入っておらず、すべて破片である状況から、廃棄された状況が窺える。埋土は粘性のあるシルト質の土であり、一定量の水を保有した後、沈殿して堆積した状況が窺える。したがって、湿地もしくは、池状の遺構であった可能性も指摘できる。江戸時代前期の鬼瓦などが出土しており、遺構の比定年代は、江戸時代前期以後である。また風炉や花瓶・瓦塔などの仏具の出土もみられた。



1. N3/ 暗灰色砂質土～シルト SX2045埋土
2. N2/ 黒色シルト（粘性強い） SX2045埋土
3. 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト（粘性あり） SX2045埋土
4. 10Y3/1 オリーブ黒色シルト（締りなし） SX2045埋土
5. 5G2/1 緑黒色粘質土～シルト（貝殻を多量含む） SX2045埋土
6. 10Y2/1 黒色シルト（粘性強い） SX2045埋土
7. 10Y3/1 オリーブ黒色砂～砂質土（地山ブロックを含む） SX2045埋土
8. 5Y8/3 淡黄色砂～細砂 地山



1. 10Y3/1 オリーブ黒色シルト（有機物を多量含む）
2. 5Y4/1 灰色砂＋シルト（φ5cm大の長石を多量含む）

図13 SX2045・2084平面図・断面図

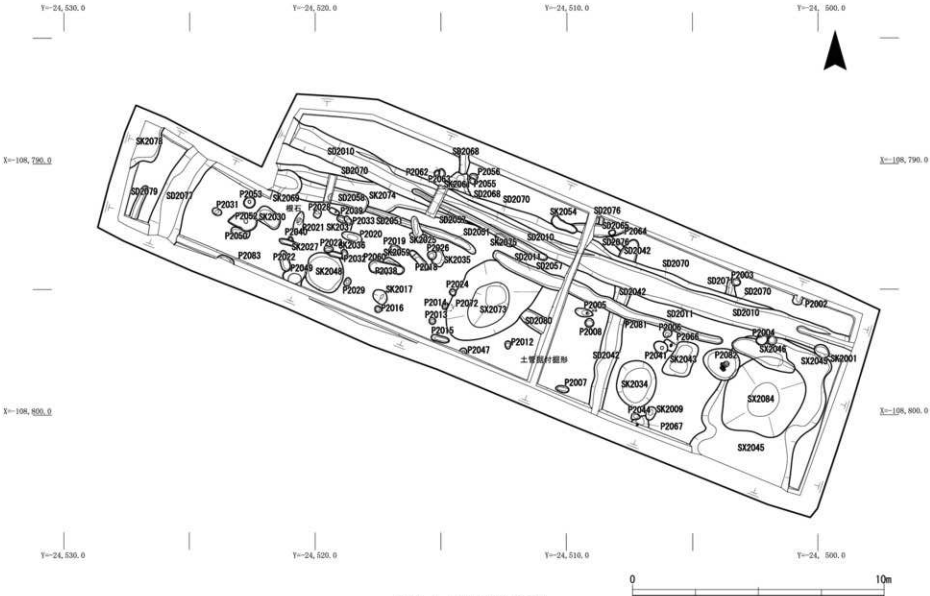


図14　1・2地点遺構平面図

Ⅲ　出土遺物

1・2地点では土器類・瓦類・土製品・獣骨などが破片総数で3380点出土した。その中で、SD2011、SD2070、SX2045は遺物がまとまって出土しており、これらについては遺構別に記述し、それ以外の遺構や包含層などから出土したものは別途報告する。なお、遺物の中で図化可能なものはできるだけ図面掲載をしているが、図化できないものに関して、特に重要なものは写真で掲載するようにした。

i　SD2011出土遺物

破片総数で186点の土器類が出土している。出土した土器類は灰釉陶器・山茶碗・常滑焼・土師質土器・瀬戸美濃陶器類である。この中で、溝の機能した年代を示すものと考えられるものを図15で提示した。これらは、主に中世末葉に比定できるものである。以下器種別で報告する。

土師皿（図15-1～3）　1・2は手捏ねで製作された非ロクロ調整土師皿である。1は復元口径10.0cm、器高1.9cmを測る比較的大型のものである。2は復元口径7.2cm、器高1.6cmを測る。1は口縁に煤が付着しているため、灯明皿として使用されたものである。いずれも年代比定は難しいが、同様の形状のものが17世紀以降はみられないことや共伴する土器類の年代から15世紀後半～16世紀前半頃に比定できる。3は、ロクロ調整土師器皿である。復元口径12.0cm、復元底径器高1.7cmを測る。16世紀前半に比定できる。

緑釉皿（図15-4）　4は瀬戸美濃陶器類で、口縁付近に灰釉を塗布した緑釉皿である。口径10.25cm、器高2.4cmを測る。露胎が良好な焼成の山茶碗のような焼成、色調を呈す特徴がある。大窯第1段階（15世

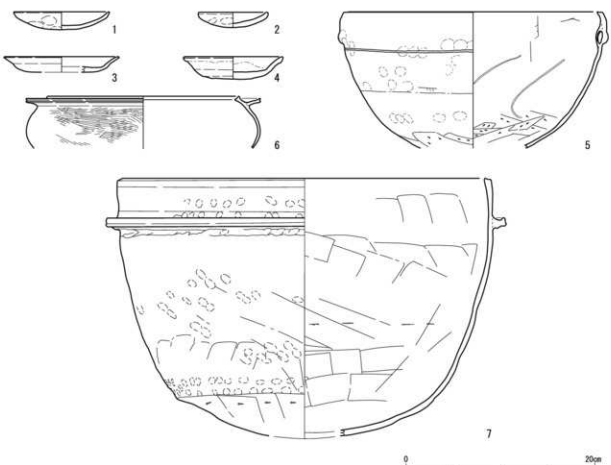


図15　SD2011出土土器

紀後半）に比定できる。

内耳鍋（図15-5・写真47-12～15） 5は土師質の内耳鍋である。鈴木正貴氏の分類上B1類に相当する。復元口径26.2cm、復元器高16.0cmを測る。非常に薄く製作されている特徴を持つ。内面は回転台を利用した非常に丁寧なナデ調整で、底部付近にヘラまたは板状工具で調整された痕跡が残る。外面は耳部下方に一条の沈線が巡る。また、基本的にナデ調整であるが、指頭圧痕が明瞭に残る。この指頭圧痕は、粘土の継ぎ目付近に多くみられる。16世紀前葉に比定できる。

羽釜（図15-6～7・写真47-16～17・写真48-18～19） 6は羽釜である。北村和宏氏の分類上の羽釜A4類に相当する。復元口径20.2cmを測る。口縁は内傾し、体部は扁球状で、鍔部は口縁の直下に接合され、口縁側に傾く。内面は丁寧にナデられ、外面はハケ状工具で不定方向に調整される。15世紀前葉～中葉に比定される。7はいわゆる「戦国型羽付鍋」と呼ばれるものである。鈴木氏の分類上羽付鍋1類に相当する。非常に大型のもので、口径38.3cm、復元器高27.2cmを測る。内面は板状工具で丁寧に調整している。外面の底部付近は横方向の粗いケズリ調整で、その他は板状工具によるナデで仕上げられるが、全体的に指頭圧痕が残る。15世紀後半に比定できる。

ii　SD2070出土遺物

破片総数92点の土器類や瓦類が出土している。これらは、山茶碗を主体に少量の土師質土器や須恵器、弥生土器などがみられる。出土した山茶碗は年代がまとまっている傾向にあり、遺構の年代を把握する上でも重要な遺物であると考えられる。以下、図化可能なものを中心に報告する。

A　土器類

山茶碗（図16-8～18・写真44-1～2・写真45-3） 8～11は山茶碗の皿である。いずれも口径8cm前後、器高2.1～2.2cmである。いずれも尾張型とよばれるもので藤澤良祐氏の分類上5～6型式に比定できるものである。

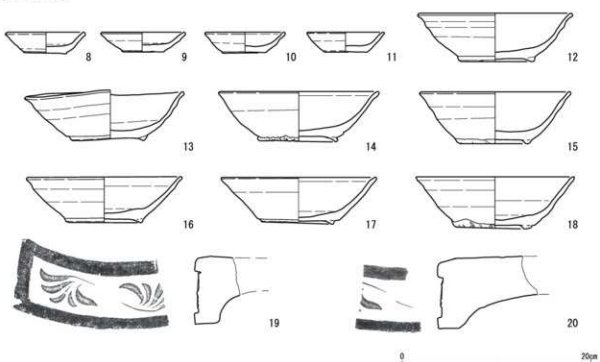


図16　SD2070出土遺物

12～18は山茶碗の碗である。12～15は5型式、16～18は6型式に比定できる。いずれも口径15.5㎝～16.8㎝でまとまる。

なお、山茶碗以外に土師質土器などの出土があったがいずれも小片のため年代比定はできなかった。

B　瓦類

瓦は軒平瓦と丸瓦が出土している。今回出土した瓦は、調査地周辺から少量ながら出土することが知られており、周辺部に瓦葺建物の存在が想定されている。

軒平瓦（図16-19・20・写真49-23）　軒平瓦は2点出土している。いずれも杏葉唐草文軒平瓦で同じ笵で施文したものである。完形のものは今回出土していないが、同笵例をみると杏葉唐草は反転して左右に飾られる。外縁は無文である。19は瓦当全体に自然釉が付着している。顎部は貼付けの曲線顎で軒平瓦用に厚手に製作した平瓦凸面広端側に粘土を接合して顎部を整形している。凹面側は広端部のみ横方向のヘラケズリをおこない、他は未調整で、凸型台で体部を製作する際に付いた布目圧痕が残る。また、外縁の上端部を施文後に面取りする特徴がある。

同笵例は生産地として東海市の社山古窯、論田古窯、大府市の吉田古窯にみられる。供給先としては、当遺跡の南側に位置する観福寺で採集されているほか、熱田神宮でも同笵の可能性がある。

丸瓦（写真49-26）　丸瓦が少量出土している。いずれも玉縁丸瓦と考えられるものであるが、玉縁部は出土していない。凸面に縄叩痕を明瞭に残すが、幅く凸面側をナデているものもある。凹面は端部が残存していないため不明だが、他は未調整である。写真49-26は軒丸瓦の体部で、広端部凹面側を横方向にヘラケズリして接合している。接合粘土は極めて少量である。

これらは、軒平瓦の製作技法から13世紀まで降る可能性は少なく、12世紀に比定できる。

iii　SX2045出土遺物

SX2045からは破片総数で650点の遺物が出土している。以下種類ごとに報告する。

A　土器類

土師皿（図17-21～24）　21～24は、ロクロ調整土師皿である。復元口径12.0㎝～14.0㎝のもので、大型の土師皿が多い。16世紀前半～17世紀に比定できる。

山茶碗（図17-25～27）　25～27は山茶碗である。いずれも5～8型式のものである。掲載したもの以外の山茶碗をみても8型式以降のものは極めて少ない。ただし、これらはSX2045の遺構年代に関わるものではない。

灰釉陶器（図17-28～29・写真48-20）　28・29は灰釉陶器である。28は長頸壺または、耳壺の底部付近である。29は短頸壺である。小片1点の出土であるが、頸部下位に波状文を飾り、波状文の上位に「十」字状の線刻を複数飾っている。本来は蓋が付属するものであろう。

緑釉小皿（図17-30）　30は瀬戸美濃陶器類で、口縁付近に灰釉を塗布した緑釉小皿である。口径10.5㎝、器高2.6㎝を測る。内面は丁寧な回転ナデ調整。外面は粗い回転ナデ。底部には回転糸切痕が明瞭に残る。大窯第1段階（15世紀後半）に比定。

折縁深皿（図17-31・写真45-4）　31は折縁深皿。復元口径23.2㎝を測る。小片のため全容は不明だが、鉢状の体部をもち口縁部を外反させる形状である。口縁は内側に折曲げて仕上げ内面側に段差を作る。内外面ともに丁寧な回転ナデで調整されている。釉薬は志野焼に特徴的な長石釉を内面はほぼ全域に、

外面は口縁部の5cm程度下まで施釉している。年代不明。

卸目付大皿（図17-32・写真45-4） 32は鉄釉を施釉した大皿である。復元口径34.6cmを測る。小片のため器種の判断が難しいが、断面形状からみると卸目がある大皿の可能性があるが、擦目部分は欠損している。口縁部から内外ともに5cm程度下部まで施釉されている。15世紀後葉に比定できる。

なお、これ以外にも瀬戸美濃陶器類は多く出土しているが、大半が小片であり、器種の特定ができないものが多い。

羽釜（図17-33～37・写真48-19） 33～35は土師質内鍔型羽釜である。いずれも鍔部および口縁付近の小片である。復元口径20.6cm～24.4cmと小型のものが多い。鍔は口縁の下1cm程度の位置に接合されており、外側を上向きにつけており、見通し図では口縁が見えない個体もある。内面は丁寧なヨコナデにより調整され、外面は粗いハケまたは板ナデにより調整されている。なお、34・35は鍔の上部に穿孔がみられる。いずれも14世紀中葉頃に比定。36・37はいわゆる「戦国型羽付鍋」と呼ばれるものであり、羽付鍋1類に相当する。非常に大型のもので、復元口径41.5cm前後を測る。内面は板状工具またはハケ状工具で丁寧に調整している。15世紀後半に比定。

内耳鍋（図17-38～39・写真47-14～15） 38は土師質内耳鍋である。鈴木氏の分類上A類に相当する。口径28.0cm、復元器高15.2cmを測る。内面は板状工具でのナデの後、回転台を利用した非常に丁寧なナデ調整をおこなう。底部付近にヘラまたは板状工具で調整された痕跡が残る。外面は軽いナデ調整で仕上げるが、指頭圧痕が残る。耳部下方に一条の沈線が巡る。16世紀前葉に比定できる。

39は「く字型内耳鍋」である。尾張地域ではあまり多くみられないもので、三河や遠江でみらえる型の内耳鍋である。鈴木氏によると西三河と東三河、遠江のそれぞれで型が異なり、仕上げの調整も異なるという。本例は、東三河のA型に相当するものと考えられる。15世紀中葉～後葉に比定できる。

耳付鍋（図17-40・写真47-10） 40は須恵質の耳付鍋である。焼成は常滑焼の赤物に類似する。復元口径15.3cmを測る。頸部下部外面に吊下げ用の耳が接合されており、囲炉裏などで使用する鍋類と推定される。また、頸部下方に鳥足状のヘラガキがみられる。製作年代は不明である。

風炉（図17-41・写真46-6～7） 41は40同様に須恵質で常滑焼赤物に類似した焼成の風炉と考えられる土器である。三脚と考えられる脚をもち、その上に円筒部がみられ、沈線の装飾や竹管文が押捺され、その上部に押捺による雷文が装飾される。これより上部は欠損しており不明であるが、大和で生産されたと考えられる瓦質土器風炉と脚部やその上部の形状、文様装飾などが酷似しており、同じ形状の器種であれば、この上に透かしのある直口壺状の部位が取り付けられるものと考えられる。また、本例以外に同じ形状の風炉の口縁と考えられるものも出土している（写真46-7）。製作年代は不明であるが、大和の瓦質土器風炉と同時期であれば15世紀前葉に比定される。

小壺（図17-42・写真48-21） 42は古瀬戸の小壺である。いわゆる仏具の一つと考えられる。口縁部が欠損しているため、全体形や器高などは不明である。外面はロクロナデ調整により丁寧に仕上げられ、灰釉を全体に施釉する。底部は未調整で回転糸切痕跡が明瞭に残る。13世紀前半に比定できる。

なお、これ以外に仏供の脚部などの仏具も出土している（写真48-22）。

B　土製品

瓦塔（図17-43・写真50-31） 43は須恵質の瓦塔の一部である。塔の屋根に相当する部位の小片で屋根

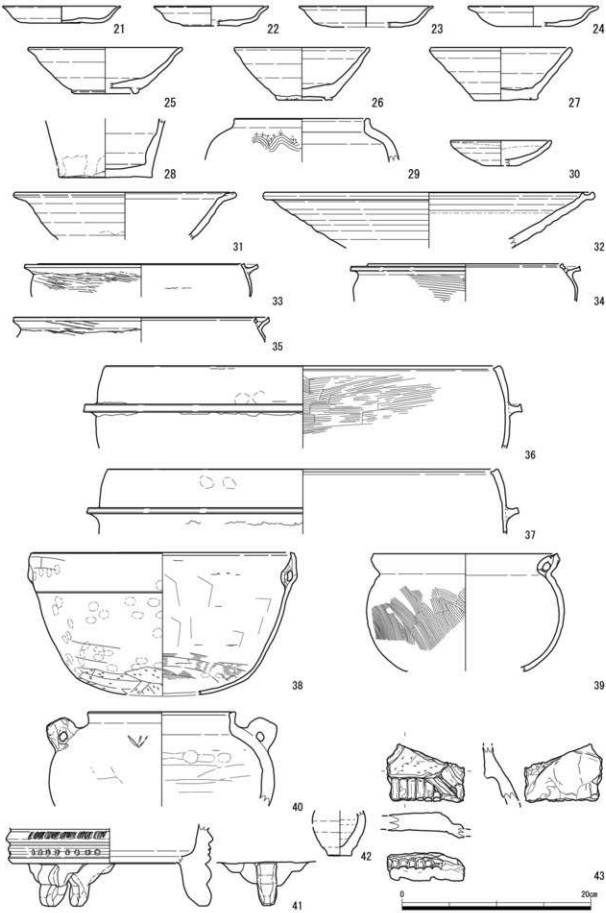


図17　SX2045出土遺物

の瓦部と隅棟が表現されている。瓦部の上には平坦面があり、通常の屋根構造とは異なるが、塔の最上部でないために内側は省略されたものと考えられる。8世紀後葉～9世紀に比定できる。

iv　1・2地点出土その他の遺物

A　土器類

土師皿（図18-44～53）　44～53は土師皿である。このうち44～48は非ロクロ調整土師皿。復元口径7cm前後のものと10cm前後のものがみられる。年代不明。

49～53はロクロ調整土師皿である。いずれも底部に回転糸切痕が残る。復元口径が12cm前後のものと、9cm前後のものがある。9cm前後の小形のものの中には53のように灯明皿として使用された煤痕跡が残るものが多い。16世紀前半～17世紀に比定できる。

山茶碗（図18-54～65・写真44-2）　54～65は山茶碗である。このうち54～58は皿である。いずれも尾張型と呼ばれる皿である。54に関しては高台が接合されたもので、「小碗」とも呼ばれるものである。藤澤編年3型式に比定。それ以外は図にみられるように年代にばらつきがある。

59～63は碗である。59～62は尾張型、63東濃型とよばれるものである。尾張型に比べ東濃型の出土量は極端に少ない。64・65は鉢である。出土量は少ない。

緑釉小皿（図18-66）　66は口縁付近に灰釉を施釉した緑釉皿である。内面は丁寧な回転ナデ調整。外面は粗い回転ナデ。底部には回転糸切痕が明瞭に残る。大窯第1段階（15世紀後半）に比定できる。

折縁深皿（図18-67・写真45-4）　67は灰釉を施釉した折縁深皿である。古瀬戸製品で、残存していないが、底部に三脚が付くものと考えられる。復元口径20.0cm。14世紀後半に比定できる。

丸碗（図18-68・写真45-4）　68は鉄釉を施釉した丸碗の小片である。復元口径10.2cmを測る。内外面ともに回転ナデにより丁寧に調整される。17世紀後半に比定できる。

羽釜（図18-69～70）　69は「戦国型羽付鍋」と呼ばれるもので、羽付鍋1類。非常に大型のもので、復元口径39.2cmを測る。15世紀後半に比定できる。

70は土師質内彎型羽釜で、羽釜A4類に相当する。口縁は内傾し、体部は扁球状で、鍔部は口縁の直下に接合され、口縁側に傾く。内面は丁寧なナデ、外面はハケ状工具で不定方向に調整。15世紀前葉～中葉に比定される。

内耳鍋（図18-71～72・写真47-12～13）　71は土師質内耳鍋A類である。口径29.0cm、復元器高13.5cmを測る。内面は非常に丁寧なナデ調整であり、底部付近にヘラまたは板状工具で調整された痕跡が残る。外面は軽いナデ調整で仕上げるが、指頭圧痕が残る程度の弱い調整である。耳部下方に一条の沈線が巡る。16世紀前葉に比定される。

72は土師質内耳鍋B1類。復元口径28.0cmを測る。耳部下方に一条の沈線をもつ。内面は丁寧なナデ調整。外面は弱いナデ調整で仕上げるが、指圧痕が明瞭に残っている。15世紀後半に比定。

くど（図18-73～74・写真46-8～9）　73・74は常滑焼くどである。いずれも赤物である。くどは通常「U字」型の切り込みがあるが今回出土したくどにはこの部位は欠損している。16世紀後葉に比定。

B　瓦類

瓦類は丸瓦、平瓦、杏葉唐草文軒平瓦、鬼瓦、道具瓦が少量ながら出土している。

丸・平瓦（写真49-28～30）　丸・平瓦が少量出土している。丸瓦の中で2点だが製作技法、焼成、胎土

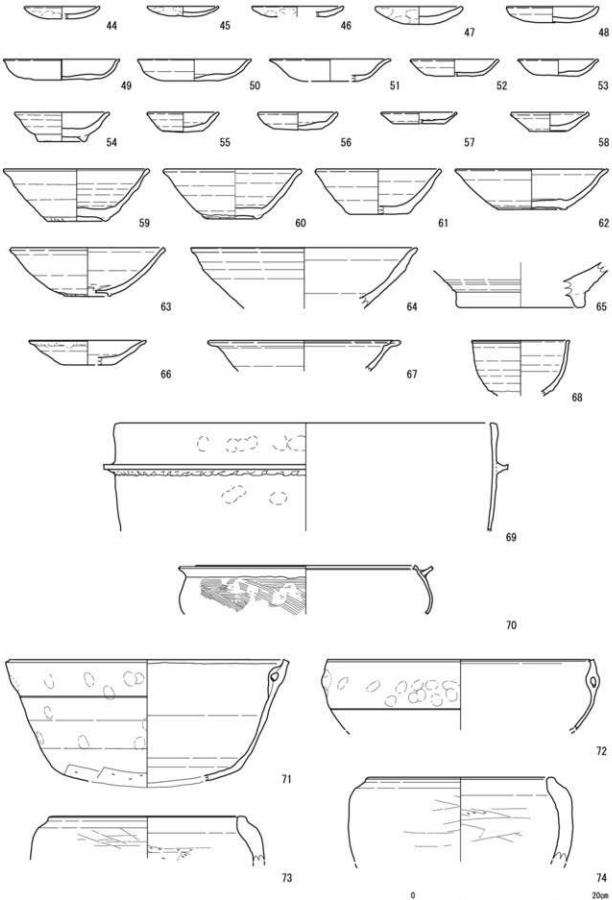


図18　1・2地点その他の出土遺物①

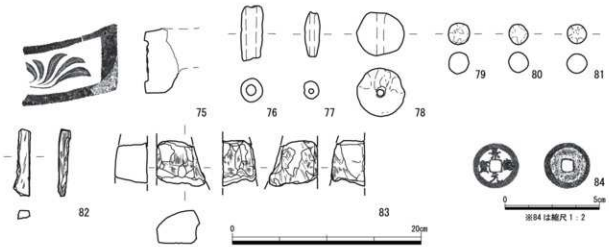


図19　1・2地点その他の出土遺物②

が異なるものがあり、これに組むと考えられる一枚作りの平瓦が1点出土している。これらは中世に比定できるものである。周辺部の調査（2009年度調査）では連珠文軒平瓦が出土しており、この丸瓦・平瓦は連珠文軒平瓦と共に屋根に葺かれたものと考えられる。

杏葉唐草文軒平瓦（図19-75・写真49-24）　SD2070から出土した軒平瓦と同笵の杏葉唐草文軒平瓦である。焼成・胎土から社山古窯で生産されたものと考えられる。

道具瓦（写真49-25）　用途不明の道具瓦が1点出土している。これは平成22年度の畑間遺跡3地点で出土したものと同じもので、厚手の平瓦の狭端側に軒平瓦の曲線顎のように粘土を貼ったものである。22年度の報告書では無文軒平瓦として報告しているが、今回出土した資料を見る限り、狭端側を顎状に加工しており、通常広端側に施文する軒平瓦とは明らかに異なるため道具瓦とした。

鬼瓦（写真49-27）　鬼瓦は2点出土している。1つは鬼面の鼻部分、他方は鬼面の鼻から口部分と外区の竹管文の破片である。いずれも鬼面の表現や細部文様の施文法などから鎌倉時代～室町時代に比定でき、先述した連珠文軒平瓦とともに屋根を飾った鬼瓦である蓋然性が高い。

C　土製品

土錘（図19-76～78・写真50-32～33）　76～78は土錘である。76は円筒形のもので、直径2.3cm、長さ5.9cmの大型のものである。77は平面楕円状のもので中心部の直径1.5cm、長さ4.75cmを測る。78は球形の土錘で、直径3.3cmを測る。いずれも土師質の焼成で、焼成前穿孔しており、網の縄等による擦痕が穿孔部に残る。

陶丸（図19-79～81・写真50-35）　79～81は陶丸である。いずれも直径2.0cm前後で手捏ねにより作られている。須恵質の焼成で山茶碗の焼成に近い。当調査区から4点出土した。

D　その他

砥石（図19-82～83・写真50-36～37）　82・83は砥石である。両者ともに欠損しており、完形ではないものと考えられる。82は包含層、83はSX2045からの出土である。

銅銭（図19-84・写真50-38）　84はいわゆる輸入銭である。1004年初鋳の宋銭、景德元寶である。直径約2.4cmを測る。

第2節　3地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序

3地点は、畑間遺跡の西端部に位置し、隣接する郷中遺跡との境に所在する。現地は、大田町所在の明応2年（1493）から法灯を伝える常蓮寺に近接しており、中世～近世にかけての集落の中心部であったと考えられる。当地も他の調査地点と同様に区画整理事業に伴い道路が建設されるため、その記録保存調査として発掘調査が行われた。

周辺部で過去に行われている調査では、主に中世～近世の遺構が顕著にみられる地区であるため、これらに関連した遺構の発見が見込まれた。

3地点の基本層序は場所により異なっており一定しない。ただし、現地表（盛土）に関しては、調査区全域で概ね共通する。この下層は近・現代の耕土と考えられる土がみられ、調査区の東側と西側で異なる土性の耕土が確認できる。これらの層位以下で、地山より上位層は、撹乱や近世以降の改変や、遺構等が多く場所により一定していないが、撹乱などがみられない部分でまとめると概ね以下の5層となる。

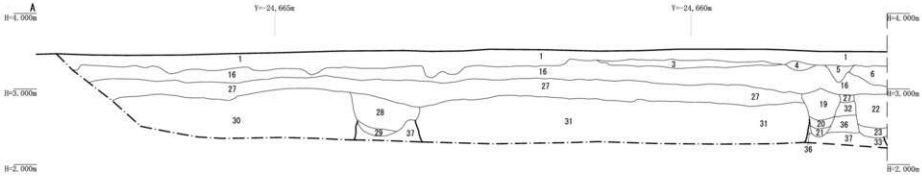
1：表土（10YR4/2　灰黄褐色砂質土）
2：耕土（2.5GY5/1　オリーブ灰色砂～砂質土・2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂質土）
3：耕土または堆積層（2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土・10YR3/2　暗褐色砂～砂質土）近世以後の遺物包含層
4：耕土または堆積層（10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土）江戸時代前期以前の包含層
5：地山（2.5Y6/4　にぶい黄色粗砂）

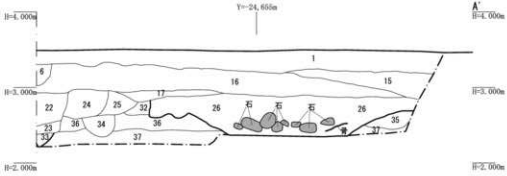
1は宅地化した際の盛土と考えられるもので、いわゆる客土である。2は宅地化する以前に耕作地であったと考えられる土である。遺物はほとんど出土していない。3は耕土の可能性がある層位で、近世以後の遺物を包含する。4は部分的に残存している状況であるが、江戸時代前期の遺物が入るSX3031に削平されることから、当該期までの耕土または堆積層と考えられる。4が地山直上まで及んでいる点で、中世以前の堆積は調査区内では皆無であったことがわかる。こうした状況は、中世以後に大規模な改変があった状況を示しており、その年代は江戸時代前期もしくはその前段階が想定される。

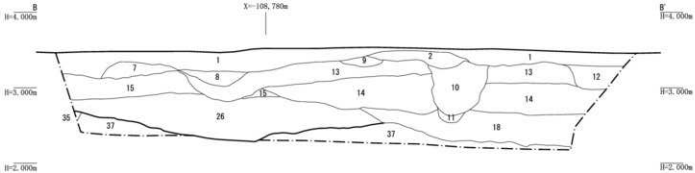
5は砂堆を形成する地山層である。基本的に砂～粗砂の土性で海岸部の様相が色濃く残存している。また、本調査地は狭いが、5層は場所により土色・土性が異なっており一定しない。これは他の調査地でもみられることで、砂堆の地山層の特徴である。なお、本調査の遺構検出は、この地山の上面でおこなっている。

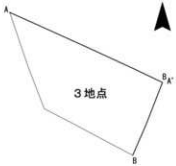
遺構は、ピットや土坑類を主体としており、その他に溝、不明遺構なども出土している。また、柱穴などもみられ、耕地化する以前は宅地であったことが考えられる。

調査区内からは主に中世以後の遺物が多く出土しており、検出した遺構も当該期に比定できるものと考えられる。これらはすべて5層直上で検出しているが、調査区壁面などの断面観察では、4層上面から確認できるものが多いため、検出した遺構群の形成時期は、4層の堆積以後である。


A
Y=-24,665m
Y=-24,660m
H=4.000m
H=3.000m
H=2.000m
1
3
4
5
6
16
27
28
29
30
31
32
33
36
37
19
20
21
22
23


Y=-24,655m
A'
H=4.000m
H=3.000m
H=2.000m
1
6
15
16
17
22
23
24
25
26
32
33
34
35
36
37
石





1. 10YR4/2　灰黄褐色砂質土　表土
2. 5Y8/4　淡黄色シルト　客土
3. 10YR3/3　暗褐色砂質土（貝殻を含む）
4. 10YR7/4　にぶい黄橙色シルト
5. 10YR6/3　にぶい黄橙色シルト
6. 10YR7/3　にぶい黄橙色シルト
7. 10YR5/1　褐灰色砂～砂質土（貝殻を多量含む）
8. 10YR4/2　灰黄褐色砂質土
9. 2.5Y6/3　にぶい黄色シルト～砂質土
10. 10YR3/2　黒褐色砂質土
11. 10YR3/3　暗褐色砂質土
12. 10YR4/1　褐灰色砂質土＋2.5Y5/2　暗灰黄色シルト
13. 10YR4/2　灰黄褐色砂質土＋粗砂
14. 10YR3/3　暗褐色砂～砂質土
15. 2.5GY5/1 オリーブ灰色砂～砂質土（粘性あり。鉄分多い）
16. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂質土
17. 10YR5/1　褐灰色砂質土
18. 10Y4/1　灰色砂質土　南東部包含層
19. 10YR3/2　黒褐色砂質土　遺構埋土
20. 10YR3/1　黒褐色砂質土　遺構埋土
21. 10YR4/1　褐灰色砂　遺構埋土
22. 10YR3/2　黒褐色砂質土　遺構埋土
23. 10YR3/1　黒褐色砂～砂質土　遺構埋土
24. 10YR3/2　黒褐色砂質土　遺構埋土
25. 10YR4/1　褐灰色砂質土　遺構埋土
26. 10Y3/1　オリーブ黒色砂質土（2.5Y5/4黄褐色シルトブロックを含む。粘性強い。）　SX3031埋土
27. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　包含層
28. 10YR4/1　褐灰色砂質土　遺構埋土
29. 2.5Y4/1　黄灰色砂質土　遺構埋土
30. 5Y4/2　灰オリーブ色砂～粗砂＋2.5Y4/2　暗灰黄色微粒砂　SX3030埋土
31. 2.5Y5/4　黄褐色粗砂＋10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土（φ1cm大の10YR7/8黄橙色シルトブロックを含む）　SX3026埋土
32. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土　包含層
33. 10YR3/1　黒褐色砂質土（粘性ややあり）　SD3058埋土
34. 7.5YR4/1　褐灰色砂質土　遺構埋土
35. 10YR4/6　褐色粗砂＋10YR3/3　暗褐色砂質土　遺構埋土ヵ
36. 10YR6/3　にぶい黄橙色砂　地山
37. 2.5Y6/4　にぶい黄色粗砂　地山

図20　3地点北壁・東壁土層断面図

Ⅱ　検出遺構

3地点では、主に溝、土坑、柱穴、性格不明遺構などを検出している。主に中世～近世の遺構が主体であり、それ以前の遺構とみなせるものはない。これは遺物をみても、中世以前のものが少量であった点で共通している。以下主要な遺構を中心に報告する。

SD3058（図21・写真12-36～38）　調査区中央部で検出した幅0.50m、深さ0.24mの南北溝である。溝の性格は不明ながら、下層部で流水痕跡とみられる砂が確認できるため、排水などの機能を有した可能性が考えられる。また、溝の掘削深度は北側の方が深く掘り込まれたおり、北側に向けて流水したものと考えられる。埋土堆積は、4層からなるが、上層の1層に粘性があり、溝の機能停止後に澱んで堆積したものと考えられる。

検出状態としては、周囲のピットや土坑と重複して削平されている状況から、当調査地点の中では古

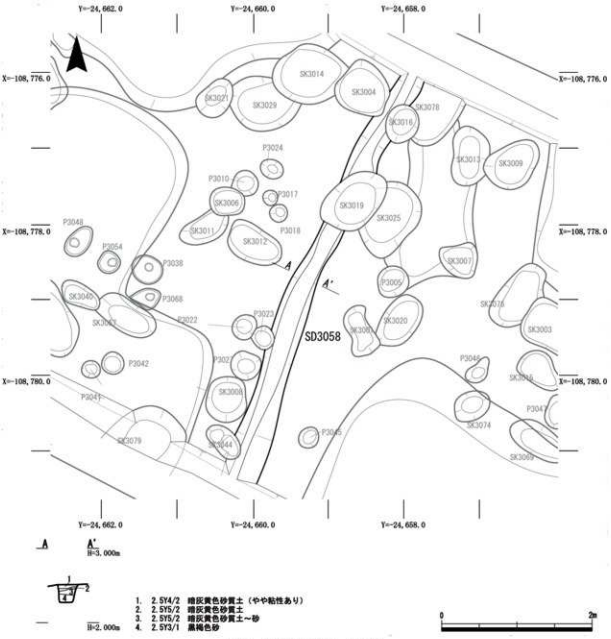


図21　SD3058平面図・断面図

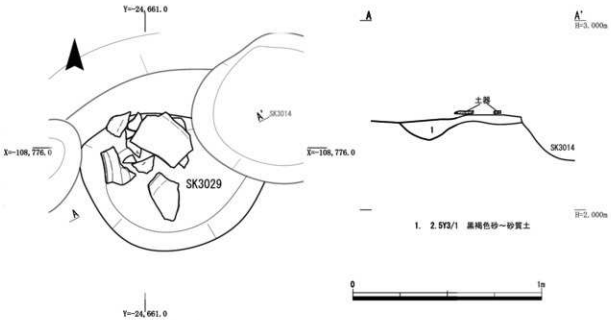


図22　SK3029土器出土状況図・断面図

手の遺構である。

出土した遺物は土器類が破片総数で37点出土している。その中に羽付羽釜B類が出土しており、遺存状況の良い状態で出土しているため、埋没直前に使用された遺物と捉えられる。この羽付羽釜B類の製作は16世紀後半に比定できるものであるから、当該時期が溝の機能した時期と考えられる。

SK3029（図22・写真11-39～40）　調査区中央部北側で検出した長軸0.95m以上、短軸0.73m、深さ0.10mの土坑である。内部に常滑焼赤物甕の破片が散乱していた。甕の底部は出土しておらず、且つ据え付けられた状態で出土していないため、甕を据え付けた掘形ではなく、廃棄するために掘削された廃棄土坑であると考えられる。出土した甕は口縁部の形状から、16世紀末葉のものと考えられ、当該期以後がこの土坑の掘削年代と考えられる。

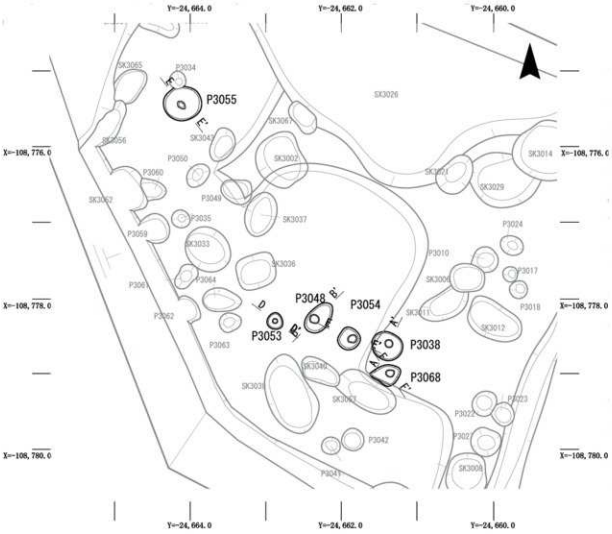
P3038（図23・写真12-42）　調査区南側で検出した長軸0.42m、短軸0.36m、深さ0.16mの柱穴である。柱は抜き取られて残存していない。抜取痕跡から、直径0.10m程度の柱が推定される。山茶碗の小片4点が出土している。

P3048（図23・写真12-43）　調査区南側で検出した長軸0.46m、短軸0.28m、深さ0.08mの柱穴である。P3038と並んで建物の柱である可能性がある。抜取痕跡から0.10m以下の柱が想定される。山茶碗や土師質土器の小片が計4点出土している。

P3053（図23・写真12-44）　調査区南側で検出した長軸0.22m、短軸0.21m、深さ0.08mの柱穴である。抜取痕跡から、直径0.09m程度の柱が推定される。

P3054（図23・写真12-45）　調査区南側で検出した長軸0.29m、短軸0.28m、深さ0.08mの柱穴である。抜取痕跡から、直径0.10m程度の柱が推定される。P3053と並んで建物の柱穴の可能性があるが、尺間が4尺と狭い。

P3055（図23）　調査区北東部で検出した長軸0.49m、短軸0.46m、深さ0.16mの柱穴である。当調査区で検出した他の柱穴より掘り方の規模がやや大きい。抜取痕跡から、直径0.09m程度の柱が推定される。



A　A'　B　B'　C　C'

1. 2.5Y4/1　黄灰色砂～砂質土
(2.5Y7/6　明黄褐色シルトブロックを多量含む)
抜取痕
2. 2.5Y4/1　黄灰色砂～砂質土　掘形
3. 2.5Y3/1　黒褐色砂　掘形

1. 2.5Y4/1　黄灰色砂質土
(2.5Y7/6　明黄褐色シルトブロックを微量含む)
抜取痕
2. 2.5Y3/1　黒褐色砂～砂質土　掘形

1. 2.5Y3/1　黒褐色砂～砂質土
(2.5Y7/6　明黄褐色シルトブロックを含む)
抜取痕
2. 2.5Y4/1　黄灰色砂質土～砂　掘形

D　D'　E　E'　F　F'

1. 2.5Y3/1　黒褐色砂質土　抜取痕
2. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂～砂質土　掘形

1. 2.5Y3/1　黒褐色砂質土
(2.5Y7/6　明黄褐色シルトブロックを微量含む)
抜取痕
2. 2.5Y3/1　黒褐色砂～砂質土　抜取痕
3. 2.5Y3/1　黒褐色砂～砂質土
(地山ブロックを少量含む)　掘形
4. 2.5Y4/1　黄灰色砂　掘形

1. 2.5Y5/1　黄灰色砂～砂質土　抜取痕
2. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂　掘形

図23　3地点柱穴平面図・断面図

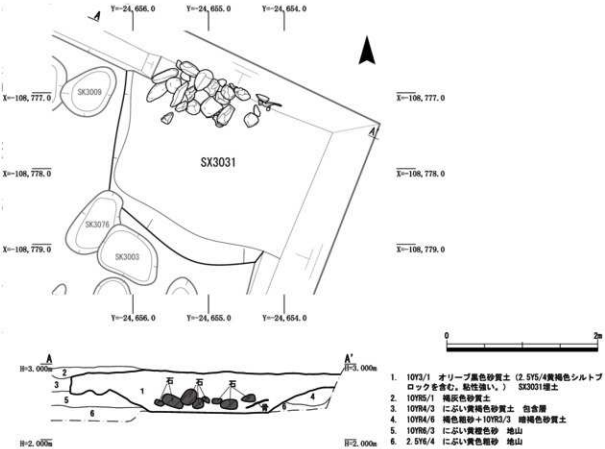


図24 SX3031平面図・断面図

山茶碗の小片が11点出土している。

P3068（図23・写真12-46） 調査区南側で検出した長軸0.42m、短軸0.29m、深さ0.10mの柱穴である。抜取痕跡から、直径0.10m以下の柱が推定される。

以上が3地点で確認した柱穴である。これらは特に、調査区中央部南側で多く検出しており、掘立柱建物が存在した可能性がある。いずれも柱は抜き取られていたが、抜取痕跡から、柱の規模は直径0.10m前後と小さいため、建物規模も小型のものであったことが想定される。ただし、当調査区内では建物としての柱穴の並びが確認できなかったため、ここでは、柱穴が存在したことと、その事実記載にとどめる。

SX3031（図24・写真13-49） 調査区北東隅で検出した長軸2.80m以上、短軸2.27m以上、深さ0.53m以上の土坑状遺構である。図でもみられるように人頭大の礫が棄て込まれており、ゴミや廃材を捨てる目的で掘削された土坑である可能性がある。これ以外に石臼の破片や、煙管の吸口、獣骨、焼けた壁土と考えられる焼土塊などが出土している。埋土は単層であるが、ブロック状であり、人為的に埋められた蓋然性が高い。したがって、ゴミなどを廃棄した後にすぐに埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、江戸時代前期の土器類が確認できる。また、石臼は江戸時代中期頃から一般に普及したものといわれており、遺構の年代は江戸時代中期まで降る可能性がある。

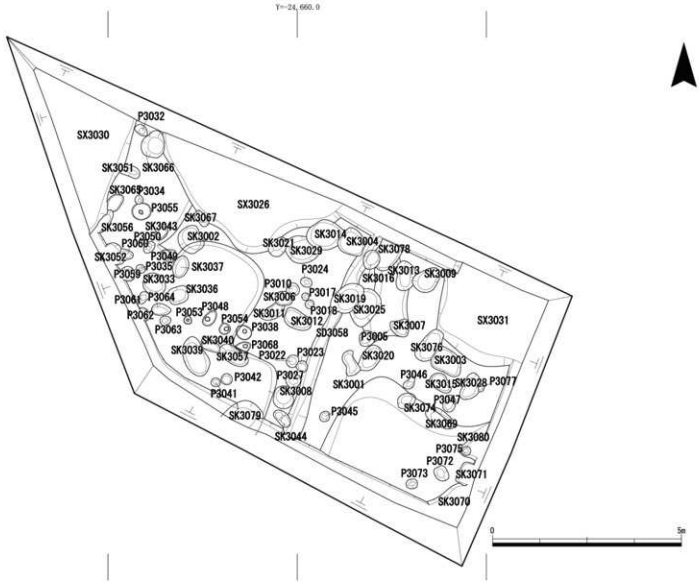


図25　3地点遺構平面図

Ⅲ　出土遺物

3地点では土器類、土製品、石製品、獣骨などが破片総数で762点出土した。この数量は調査面積に対して少ないと言える。また、遺構から出土した遺物も数量が少ない。その中で、SX3031は遺物がまとまって出土しており、これについては遺構別に記述し、それ以外の遺構や包含層などから出土したものは別途報告する。

i　SX3031出土遺物

SX3031は廃棄土坑と考えられる遺構で、その中に若干の土器や石製品、金属製品、焼土塊、礫、獣骨などがみられた。その中で比較的残存率の良い土器類とそれ以外の遺物を以下に掲載した。

A　土器類

土器類は須恵器、山茶碗、土師質土器、常滑焼が出土している。その中で、須恵器、常滑焼は小片であり、年代比定も難しいものであった。比較的残存率の高いものは山茶碗と土師皿である。

山茶碗（図26-85）　85は山茶碗の小皿で尾張型と呼ばれるものである。口径7.9cm、器高1.7cmを測る。高台がなく、底面に糸切痕が残る。底面以外は回転ナデにより仕上げられる。藤澤編年9～10型式に該当し、14世紀後半～15世紀前葉に比定される。

土師皿（図26-86～90・写真51-39～40）　86～90は土師皿である。このうち、86～89は非ロクロ調整、90はロクロ調整土師皿である。86～89はいずれも手捏ねで製作されたものであるが、86、87は底部が平坦である。88、89は底部が丸底状である。

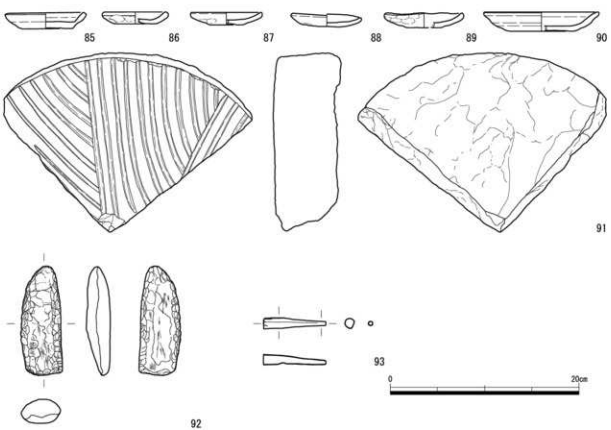


図26　SX3031出土遺物

90は86～89の非ロクロ調整土師皿に比べてやや大型のロクロ調整土師皿である。内外面ともに丁寧にロクロナデにより仕上げられ、底部に糸切痕跡が残る。

B　石製品

挽き臼（図26-91・写真53-53）　91は花崗岩を加工した挽き臼で、下臼である。復元直径約43.0cm、厚さ6.8cmを測る。擦目は10～11本単位で放射状に線刻しており、裏面に窪みがみられないことから、下臼と判断できる。本資料は擦り目が摩耗しており、使用頻度が高かったことをうかがわせる。

打製石斧（図26-92・写真53-50）　92は打製石斧である。長さ11.6cm、幅4.2cm、厚さ2.55cmを測る。両刃石斧と考えられ、測辺部を敲打して刃をつけている。

金属製品

煙管（図26-93・写真53-52）　93は煙管の吸口である。金銅製のもので、緑青が所々に付着している。直径1.0cm、長さ6.6cm、吸い口直径0.4cmを測る。吸口の形状から羅宇は断面円形のものが接続したものと考えられる。

ⅱ　3地点出土その他の遺物

A　土器類

山茶碗（図27-94～108・写真51-41～43）　94～108は山茶碗である。このうち、95～104は山茶碗の小皿。94は小皿に高台をつけた形状のもので、見込みの深さもあることから「小碗」とも呼称される。高台の籾殻圧痕がみられることから4型式に比定できる。95・96は5型式、97～99は6型式、100は7～8型式、101・102は10～11型式に比定できる。103・104に関しては形状から11型式に比定できるが、通常の山皿に比べ口径約6.2cmの小型品であり、いずれも褐色で軟質の焼成で、一見すると小型のロクロ調整土師皿を連想するものである。いずれも包含層より出土した。

105～108は碗である。105・106は高台に籾殻圧痕が残っており、高台径が小さいことから5型式に比定した。107・108は小片のため判断しにくいが、6～7型式に比定できる。

土師皿（図27-109～113・写真51-39～40）　109～113は土師皿である。109は非ロクロ調整土師皿で外面に指圧痕が明瞭に残る。復元口径7.0cm、器高1.4cmを測る。

110～113はロクロ調整土師皿である。本調査区で出土したロクロ調整土師皿は110・111のような口径8cm前後の小型のものと、112・113のような口径12～13cm前後の大型のものに大別できる。111は底部中心に焼成前穿孔があり、皿としてではなく他の用途のために製作されたものであろう（写真52-44）。

羽付釜（図27-114・写真52-45）　外側に耳があり、その下部に鍔を取り付けた羽付釜である。鈴木氏の分類上羽付釜A1類に相当する。口径14.0cm、器高17.0cm前後を測る。内面は丁寧な回転ナデ調整であるが、頸部の所々に粘土紐の継ぎ目が残る。外面の鍔部より下では板状工具で不定方向にナデ調整をおこなっている。鍔部より上では粘土の水分が多い状態で、ハケ状工具で行った不定方向の弱いナデ調整がみられる。外耳は手捏ねで整形して接合される。SD3058より出土した。

折縁深皿（図27-115）　115は灰釉折縁深皿である。復元口径25.3cmを測る。内外面ともに丁寧な回転ナデで仕上げられる。P3022より1点出土した。

菊皿（図27-116・写真52-46）　116は長石釉を施釉した菊皿である。口縁部に花弁を区切る切り欠きを入れ、外面に花弁の境界をヘラガキで表現する。内面側には布圧痕が残り布目が同一方向に通る状況

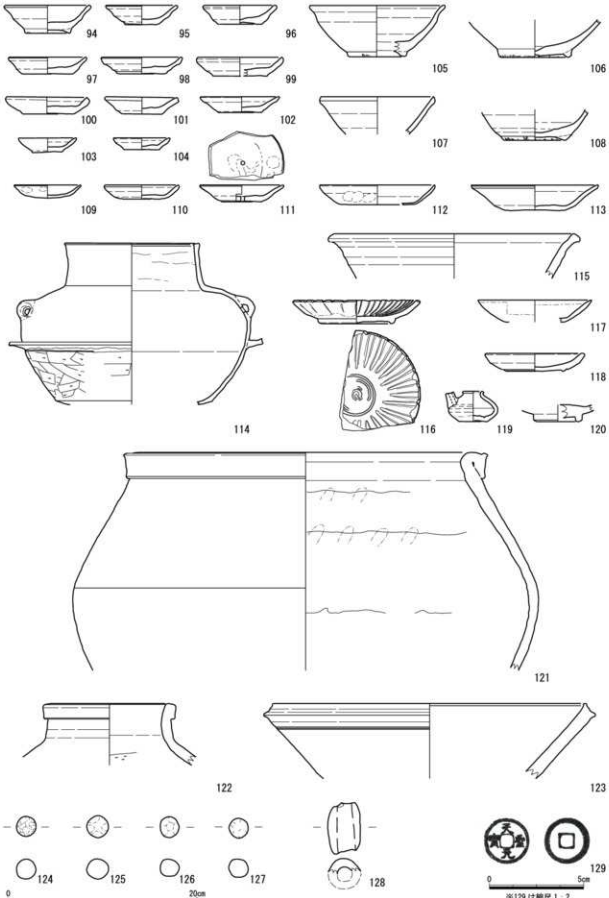


図27　3地点出土その他の遺物

から、内面側のみ型（笵）によって製作されている可能性がある。年代不明。包含層より上位層から出土した。

縁釉小皿（図27-117） 117は灰釉を施釉した縁釉小皿である。内外面ともに回転ナデにより調整される。底部は欠損しているが、部分的に糸切痕跡がみえる。15世紀前葉に比定できる。包含層より出土した。

志野丸皿（図27-118） 118は志野焼に特徴的な長石釉を施釉した志野丸皿である。復元口径10.2cm、器高1.9cmを測る。高台は削出しにより整形される。17世紀中葉に比定できる。包含層より出土した。

水滴（図27-119・写真52-47） 119は灰釉を施釉した小型の水滴である。復元口径1.9cm、底径3.0cm、器高3.2cmを測る。注口は外側から接合され、外側から焼成前に棒状工具で穿孔する。本資料は残存していないが、注口の対の部分に把手が付く型式のものと考えられる。14世紀前半に比定。SK3016より1点出土した。

青磁碗（図27-120） 120は青磁碗の底部付近の破片である。高台は復元直径4.3cmを測る。外面に蓮華の花弁を表現し、底部内面に文様を飾る。内面の文様構成は不明。龍泉窯で生産されたものに類似する。SK3004より出土した。

常滑焼（図27-121～123・写真52-48） 若干数の常滑焼が出土した。いずれも小片であるが、図化できるものを掲載した。121～123である。このうち121は大甕の小片である。復元口径37.8cmを測る。口縁は折り曲げて形成する。15世紀中葉に比定できる。SK3029より出土した。

122は壺である。復元口径12.8cmであり、常滑焼の中では非常に小ぶりの壺である。口縁は外側に折り曲げて形成し、内外面ともに丁寧な回転ナデ調整で仕上げられる。16世紀前葉に比定できる。

123は片口鉢である。注口部分は残存していないが折り曲げて整形した注口がある器種と考えられる。復元口径32.9cmを測る。外面口縁部は丁寧な回転指ナデ、その下方は不定方向のナデにより調整する。口縁付近の指ナデ直下に2本の沈線が巡る。内面は丁寧な回転ナデ調整で仕上げられる。15世紀中葉に比定できる。包含層より出土した。

上記の他に弥生土器、製塩土器の脚部などがわずかであるが出土している。

B　土製品

陶丸（図27-124～127・写真53-49） 124～127は陶丸である。いずれも直径2cm前後の球体で、手捏ねにより製作されたものである。いずれも山茶碗と酷似した色調・焼成のものである。包含層などから4点出土した。

土錘（図27-128） 128は土師質焼成の土錘の小片である。大型のもので復元直径3.5cm、長さ5.0cmを測る。中軸に直径約1.9cmの穴を棒状工具により穿孔している。包含層より1点出土した。

C　金属製品

銅銭（図27-129・写真53-51） 129は銅銭である。「天聖元寶」という1023年初鋳の北宋銭である。直径約2.4cmを測る。

第3節　4地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序

4地点は、計画段階では、既設の東西道路部分に設定されていたが、調査区南側の予定していた排土置き場が耕作地として使用していたため、予定された調査範囲での調査が行えない状況であった。こうした状況から、調査範囲を変更し、予定調査区の西側を拡張した。ただし、この当調査地では、平成18、平成23年度に行われた調査で検出した大型遺構の西端の状況確認も目的としていたため、大型遺構の確認のため、調査区の東側で幅2mのサブトレンチを設定して確認作業を行うこととした。したがって、本稿では紙白の都合もあり、4地点調査とその東側のサブトレンチ調査を分けて報告するが、基本層序に関してはまとめて報告する。

4地点の基本層序は概ね以下のとおりである。

1：表土・客土（2.5Y8/4　淡黄色砂質土・2.5Y5/1　黄灰色砂（土管、ガラスを含む）・10YR5/1褐灰色砂（ビニールを含む））
2：堆積または耕土（10YR5/2　灰黄褐色砂（φ1cmの礫を多量含む）・10YR4/2　灰黄褐色砂）
3：堆積または耕土（7.5YR3/2　黒褐色砂（φ1～2cmの礫を多量含む）・10YR3/2　黒褐色砂（貝片を多量・φ1cmの礫を少量含む））
4：中世～近世初頭の遺物包含層（10YR5/2　灰黄褐色砂・10YR5/4　にぶい黄褐色砂（地山混り））
5：地山（2.5Y6/3　にぶい黄色砂）

1は現地表面であり、外部から整地用に持ち込まれた客土である。場所により異なり一定しない。

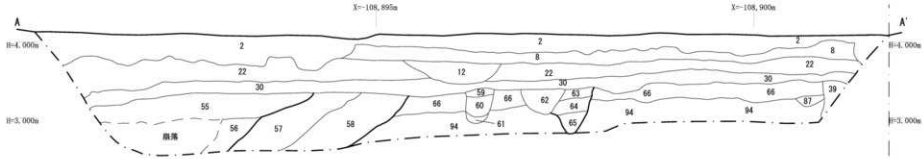
2は堆積または耕土と考えられる層位である。これも場所により異なるが、3層より基本的に明るい色調である。若干の遺物が壁面精査時に出土したが、古手のものが多く、年代は不明である。

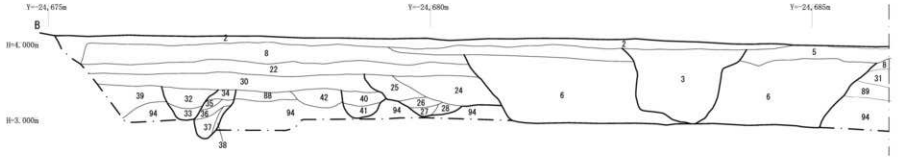
3も堆積または耕土と考えられる層位である。これも場所により異なり一定しないが、概ね調査区に東半部と西半部に大別でき、3層の前者が西半部、後者が東半部でみられる。近世以降の遺物を確認している。

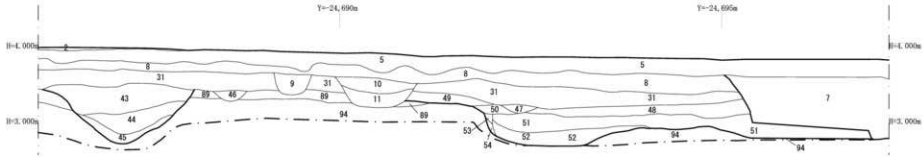
4はその下層の5層と別の土が混在した層位である。場所により土性や色調が若干異なるが、概ね記述した土色が基本となっている。性格は不明だが、地山を削り込んでいる状況から考えて、耕作時に攪乱された層位と考えられるため、耕作によって生じた層位と考えている。なお、近世初頭頃までの遺物が出土しており、当該期以後の耕作に伴う層位と考えられる。

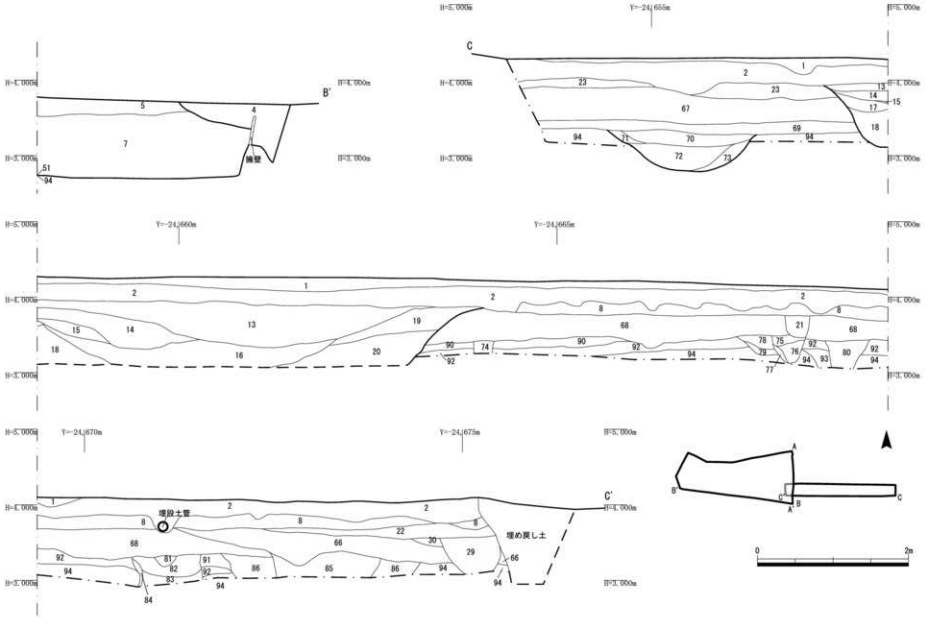
5層は色調が場所により異なるが、概ね調査区全体で一致する。砂堆の堆積層であり、遺物は認められない。本調査区の遺構はこの層位の上面ですべて検出した。

4地点では、主に大型の溝と土坑状遺構とピット類を検出している。これらについては、主に中世以後の土器類が出土しているため、大半が中世以降の遺構であると考えられる。しかしながら、弥生土器や古式土師器なども少量ながらまとまって出土しており、当地が中世頃から大規模な改変が行われた状況が窺える。


X=-108,895m
X=-108,900m
A
A'
H=4.000m
H=3.000m
崩落


Y=-24,675m
Y=-24,680m
Y=-24,685m
B
H=4.000m
H=3.000m


Y=-24,690m
Y=-24,695m
H=4.000m
H=3.000m


B'
C
C'
Y=-24,655m
Y=-24,660m
Y=-24,665m
Y=-24,670m
Y=-24,675m
H=5.000m
H=4.000m
H=3.000m
側壁
埋設土管
埋め戻し土
A
B
C
0
2m

1. 2.5Y8/4 淡黄色砂質土 客土
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂（土管、ガラを含む） 表土
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂（コンクリート、常滑焼片を含む） 撹乱
4. 10YR5/1 褐灰色砂（コンクリート含む） 撹乱1
5. 10YR5/1 褐灰色砂（ビニールを含む） 表土
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂（φ1～2cmの礫を多量含む） 撹乱3
7. 7.5YR4/3 褐色砂 撹乱2
8. 10YR5/2 灰黄褐色砂（φ1cmの礫を多量含む）
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂 遺構埋土
10. 10YR4/2 灰黄褐色砂（φ1cmの礫を多量含む） 遺構埋土
11. 10YR4/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
12. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 遺構埋土
13. 7.5YR4/2 灰褐色砂（φ0.5～2cmの礫を多量含む） SK4033埋土
14. 10YR4/2 灰黄褐色砂 SK4033埋土
15. 10YR4/1 褐灰色砂 SK4033埋土
16. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂（φ0.5～2cmの礫を多量含む） SK4033埋土
17. 10YR3/1 黒褐色砂（10YR5/2灰黄褐色砂ブロックを多量含む） SK4033埋土
18. 10YR3/1 黒褐色砂（地山ブロックを少量含む） SK4033埋土
19. 10YR3/2 黒褐色砂 SK4033埋土
20. 10YR5/2 灰黄褐色砂（φ0.5～2cmの礫を多量含む） SK4033埋土
21. 7.5YR4/1 褐灰色砂 遺構埋土
22. 10YR4/2 灰黄褐色砂
23. 10YR4/2 灰黄褐色砂
24. 10YR4/2 灰黄褐色砂 SK4032埋土
25. 10YR5/2 灰黄褐色砂 SK4032埋土
26. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 SK4032埋土
27. 2.5Y5/3 黄褐色砂 SK4032埋土
28. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂（地山ブロックを多量含む） SK4032埋土
29. 10YR3/3 暗褐色砂（粘土ブロック・地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
30. 10YR4/1 褐灰色砂（φ1cmの礫・地山ブロックを多量含む）
31. 10YR4/1 褐灰色砂（地山ブロックを含む）
32. 7.5YR3/1 黒褐色砂 P4014埋土
33. 10YR3/2 黒褐色砂（地山ブロックを含む） P4014埋土
34. 10YR4/2 灰黄褐色砂 SK4020埋土
35. 10YR3/2 黒褐色砂 SK4020埋土
36. 7.5YR3/2 黒褐色砂 SK4020埋土
37. 10YR3/2 黒褐色砂（地山ブロックを含む） SK4020埋土
38. 10YR3/2 黒褐色砂（地山ブロックを多量含む） SK4020埋土
39. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 遺構埋土
40. 7.5YR3/1 黒褐色砂 P4007埋土
41. 7.5YR3/2 黒褐色砂（地山ブロックを含む） P4007埋土
42. 10YR4/2 灰黄褐色砂 遺構埋土
43. 7.5YR3/3 暗褐色砂（φ1cmの礫を多量含む） SD4018埋土
44. 10YR3/2 黒褐色砂 SD4018埋土
45. 10YR4/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを多量含む） SD4018埋土
46. 10YR4/2 灰黄褐色砂 遺構埋土
47. 10YR4/1 褐灰色砂 SD4031埋土
48. 10YR4/2 灰黄褐色砂 SD4031埋土
49. 10YR4/1 褐灰色砂（地山ブロックを多量含む） SD4031埋土
50. 10YR5/2 灰黄褐色砂 SD4031埋土
51. 10YR3/2 黒褐色砂 SD4031埋土
52. 10YR3/3 暗褐色砂（地山ブロックを多量含む） SD4031埋土
53. 10YR4/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを多量含む） SD4031埋土
54. 10YR5/2 灰黄褐色砂 SD4031埋土
55. 10YR4/1 褐灰色砂（φ0.5～3cmの礫を多量含む） SD4018埋土
56. 7.5YR4/1 褐灰色砂 SD4018埋土
57. 2.5Y4/1 黄灰色砂（φ0.5～1cmの礫を多量含む） SD4031埋土
58. 10YR4/1 褐灰色砂（φ0.5～1cmの礫を多量含む） SD4031埋土
59. 10YR4/1 褐灰色砂 遺構埋土
60. 10YR4/1 褐灰色砂（10YR6/3にぶい黄褐色粘質シルトブロックを多量含む） 遺構埋土
61. 10YR4/1 褐灰色砂（地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
62. 10YR4/1 褐灰色砂（地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
63. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 SK4024埋土
64. 10YR4/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを含む） SK4024埋土
65. 7.5YR4/1 褐灰色砂（地山ブロックを含む） SK4024埋土
66. 10YR3/3 暗褐色砂（粘土ブロックを含む）
67. 10YR3/2 黒褐色砂（貝片を多量・φ1cmの礫を少量含む）
68. 7.5YR3/2 黒褐色砂（φ1～2cmの礫を多量含む）
69. 10YR3/1 黒褐色砂
70. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 SD4035埋土
71. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂 SD4035埋土
72. 10YR5/2 灰黄褐色砂 SD4035埋土
73. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂 SD4035埋土
74. 10YR4/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
75. 7.5YR4/1 褐灰色砂（φ1cmの礫を少量含む） 遺構埋土
76. 10YR3/1 黒褐色砂（地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
77. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂（10YR3/1黒褐色砂ブロックを含む） 遺構埋土
78. 10YR4/2 灰黄褐色砂 遺構埋土
79. 10YR4/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
80. 10YR4/2 灰黄褐色砂 遺構埋土
81. 10YR4/2 灰黄褐色砂 遺構埋土
82. 10YR3/2 黒褐色砂 遺構埋土
83. 10YR3/3 暗褐色砂 遺構埋土
84. 10YR3/2 黒褐色砂（地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
85. 10YR3/2 黒褐色砂（φ0.5～1cmの礫を少量含む） 遺構埋土
86. 10YR4/4 褐色砂 遺構埋土
87. 10YR4/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを多量含む） 遺構埋土
88. 2.5Y6/2 灰黄色砂
89. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
90. 10YR5/2 灰黄褐色砂
91. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
92. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂
93. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂 遺構埋土
94. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂 地山

図28 4地点東・南壁・サブトレンチ南壁土層顔面図

Ⅱ　検出遺構

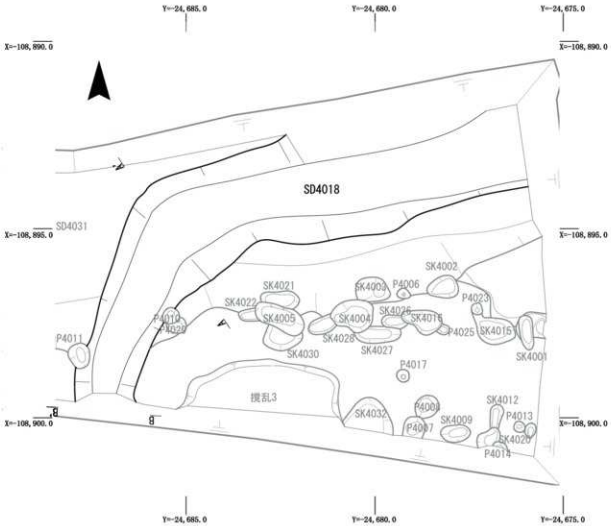
4地点では調査区西端部でコンクリートにより護岸された水路跡を検出しており、この周辺では遺構の検出はできなかったものの、これより東側では、主に中世の溝、土坑、ピットなどを検出した。以下、これらについて主要な遺構の概略を記述する。

SD4018（図29・写真14-52・15-53）　調査区中央部より北側の全域で検出した幅約3.00m、深さ0.80mの大型の溝である。中央部で北東方向に屈曲する。北東側が深いため、南から北東方向へ流水したものと考えられる。埋土は3層からなり、断面観察から掘り直しなどはおこなわれていないものとみられ、自然堆積により埋没したものと考えられる。遺構の性格は捉えにくいが、規模からして中世の環濠または区画溝が想定できる。後述するSD4031も同様の性格や機能が考えられ、SD4031の掘り直しとも考えられる。ただし、屈曲部がSD4031と同一の場所ではないため、溝を含んだ中世の遺構群に大幅な改変があった可能性が指摘できる。

出土遺物は大半が土器類であり、土器類は総破片数で531点出土している。主に弥生土器、土師器および須恵器、中世の山茶碗と羽釜などの土師質土器類である。これらは、弥生土器34.8%、土師器・須恵器28.2%、中世以後の土器類36.2%の割合で出土している。中世の土器類が出土する点で、この溝の機能した年代は中世以後であることは間違いないが、弥生時代～古代の出土量が全体の7割近くを占めている。こうした出土状況は、当地の遺構変遷に関係があるものと思われるが、同様の出土傾向がSD4031でも確認できるため、詳細についてはSD4031で報告する。

SD4031（図30・写真15-54・16-55）　調査区西側全域および調査区中央付近南壁から北に向き、調査区中央部で屈曲し、東に向く状況で検出した大溝である。溝幅は4.90m以上で、調査区北壁付近に溝肩と考えられる立ち上がりが認められることから、推定5.5m前後と考えられる。深さは調査区東壁面で0.80mを測る。SD4018に一部を削平される。断面観察では、少なくとも1回掘り直されたとみることができ、この溝が長期間機能したことが考えられる。

出土した遺物は大半が土器類であり、総破片数で825点出土している。SD4018同様に弥生時代、古墳時代～古代、中世の3時期の遺物に大別でき、それぞれ42.7%、40.4%、16.5%の割合で出土している。ただし、古代の中でも平安時代中期以降、特に灰釉陶器の出土は少ない。この数字をみると、弥生時代～古代に比べ中世の土器類は極端に少ないことがいえる。これは調査でも傾向として認識していたが、SD4018の範囲外からも山茶碗や土師質土器の出土が確認できたため、SD4031も中世に比定した。このような出土傾向は、SD4031が溝として掘削が行われる以前から、湿地など地形的に落ち込んだ部分であった可能性が考えられる。こうした落込み部分が埋まった時期は、遺物が極端に少ない時期と考えられる。先述したように、灰釉陶器が生産された時期、すなわち平安時代中期頃と考えられる。その後、中世になって、この落ち込み部分を踏襲して溝が掘られ、これがSD4031となったものと推定する。ただし、これはあくまで現状での推論であり、調査区周辺の地形的調査が不可欠である。また、中世以前、特に弥生時代前期～中期、古墳時代～古代の土器類がまとまって出土する点は、周辺部に該当時期の遺構が存在した傍証と捉えることができる。ところが、本調査地点ではそうした年代に比定できる遺構はほとんど検出していない。中世期に当該地で大幅な改変があった結果と考えられ、こうした改変が行われたのが、SD4031が機能した時期、あるいはSD4018に付け替えを行った時期と考えられる。



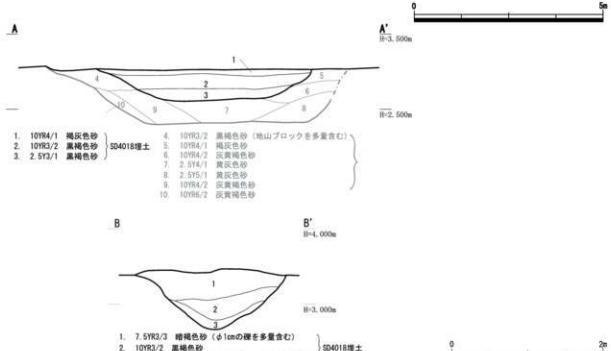
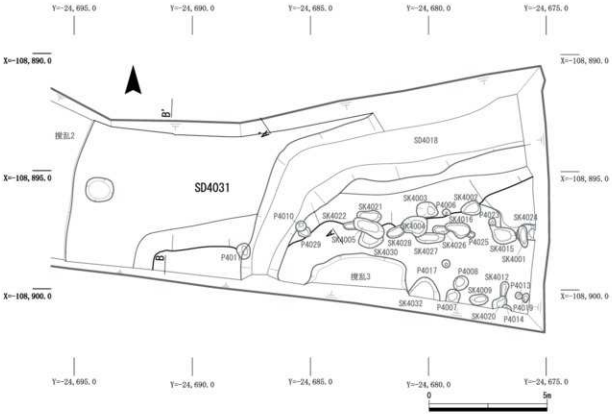
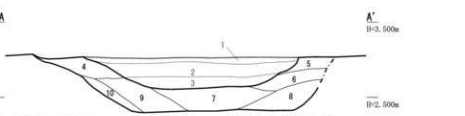


図29　SD4018平面図・断面図



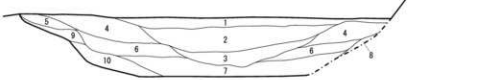


1. 10YR4/1 褐灰色砂
2. 10YR3/2 黒褐色砂
3. 2.5Y3/1 黒褐色砂

SD4018埋土

4. 10YR3/2 黒褐色砂（地山ブロックを多量含む）
5. 10YR4/1 褐灰色砂
6. 10YR4/2 灰黄褐色砂
7. 2.5Y4/1 黄灰色砂
8. 2.5Y5/1 黄灰色砂
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂
10. 10YR6/2 灰黄褐色砂

SD4031埋土



1. 7.5YR4/2 灰褐色砂（φ1cm未満の礫を含む）
2. 7.5YR3/2 黒褐色砂（φ1cmの礫を含む）
3. 7.5YR4/1 褐灰色砂
4. 7.5YR3/1 黒褐色砂（φ1cmの礫を少量含む）
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂
6. 7.5YR3/1 黒褐色砂（4.層に比べ明るい）
7. 10YR4/1 褐灰色砂（φ1cmの礫を含む）
8. 10YR5/2 灰黄褐色砂（10.層と同一層か）
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂（地山ブロックを含む）
10. 10YR5/2 灰黄褐色砂（8.層と同一層か）

SD4031埋土

0 2m

図30　SD4031平面図・断面図

土坑群（図31・写真16-56～64） SD4031の南側で検出された土坑群である。14基を検出したが、これらは東西に直線的に並ぶように見受けられるグループが存在する。具体的には西から、SK4005、4004、4016、4015とSK4021、4003、4002のほか、SK4005のグループに削平されるSK4022、4028、4026のグループである。これらについて、掘立柱建物の柱穴の可能性も考えたが、断面確認では、柱痕跡や抜取痕跡は確認していない。あるいは、柱穴掘形より抜取穴の方が大きく見分けがつかない可能性もあり得る。これらについて、以下、規模・層序等をまとめる。なお、並ぶと考えられる列はA列～C列に区分し、それぞれ西側の土坑から順に掲載する。

A列

SK4005（図31・写真16-56） 長軸1.38m、短軸0.62m、深さ0.25m、平面楕円形の土坑。土器類が10点出土しているが、新しい時期のもので須恵器であり、9世紀以後のものは出土していない。

SK4004（図31・写真16-57） 長軸1.08m、短軸0.90m、深さ0.31m、平面楕円形の土坑。土器類が23点出土しているが、常滑焼や山茶碗などの中世期の土器が出土している。したがって、遺構の比定年代は中世以後とみることができる。

SK4016（図31・写真16-58） 長軸1.07m、短軸0.65m、深さ0.27m、平面楕円形の土坑。土器類が11点出土しており、その中に中世に比定できる土師質土器がみられるため、当該期以後に掘削された土坑と考えられる。

SK4015（図31・写真16-59） 長軸0.94m、短軸0.90m、深さ0.17m、平面楕円形の土坑。土器類17点と陶丸1点が出土。中世期に比定される土師質土器が出土しており、これも中世期に比定される土坑である。

上記4基の土坑は、東西方向に約6尺等間で並んでいる。いずれも並存して何らかの機能を有したことが考えられるが、機能や性格については不明である。

B列

SK4021（図31・写真17-64） 長軸1.02m、短軸0.48m以上、深さ0.21mの土坑。SK4005と重複し、南側を削平される。土器類が13点出土しており、山茶碗や土師質土器が出土していることから、中世に比定できる遺構である。

SK4003（図31・写真17-63） 長軸0.93m、短軸0.68m、深さ0.30mの土坑。SK4004と重複し、南西部を削平される。土器類が11点出土しており、山茶碗や土師質土器が出土していることから、中世に比定できる遺構である。

SK4002（図31・写真17-62） 長軸0.80m、短軸0.63m、深さ0.21mの土坑。土師器が2点出土した。

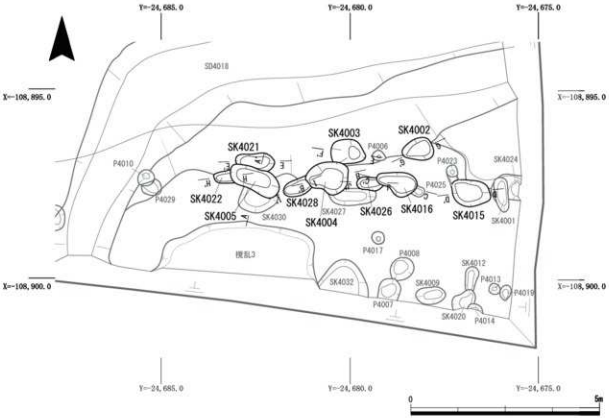
上記3基については、6.5～7尺等間で並んでおり、SD4018の南肩とほぼ平行する。中世の遺物が確認できる点と考えるとSD4018・4031と併存していた可能性がある。

C列

SK4022（図31） 長軸0.63m以上、短軸0.33m、深さ0.22mの土坑。SK4005と重複し東側を削平される。土器が3点出土している。

SK4028（図31） 長軸0.70m以上、短軸0.44m、深さ0.07mの土坑。SK4004と重複し東側を削平される。

SK4026（図31） 長軸0.70m、短軸0.34m、深さ0.18mの土坑。SK4016と重複し東側を削平される。



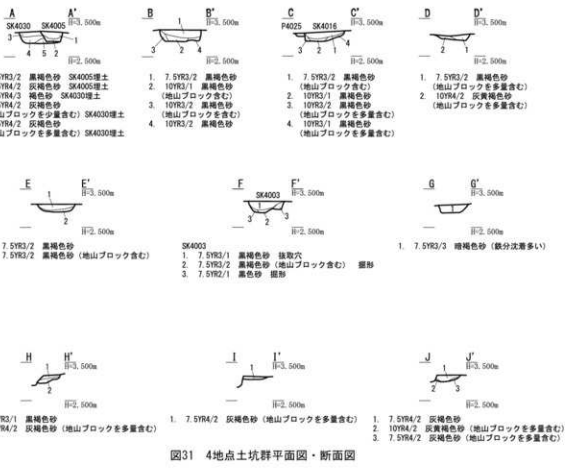


図31 4地点土坑群平面図・断面図

上記3基については、6〜6.5尺等間で並んでおり、すべてA列に東側を削平されている。この状況からA列がこのC列の改変であることが考えられる。

A　サブトレンチ調査

SD4034（図32・写真17-67）　東側の試掘トレンチ中央部東側で検出した幅1.82m、深さ0.59mの溝である。調査区北側で西側に屈曲する。SK4033（近・現代の井戸ヵ）に南側を削平される。検出時に出土している土器類が弥生土器や古式土師器が目立ったため、掘削をおこなった結果、出土した土器類の中に山茶碗や中世に比定される土師質土器があり、中世に比定される溝であると判明した。

断面観察では、掘り直しの痕跡と考えられる堆積が確認でき、少なくとも1回の掘り直しをおこなった様子が見受けられる。状況としては、遺物の出土傾向や、堆積がSD4018に類似しており、関連する溝である可能性がある。

SD4035（図33・写真17-68）　調査区東端で検出した幅1.44m、深さ0.55mの南北溝である。これも、SD4034と同様に検出時に弥生土器の出土がみられたため、掘削した。断面観察では、自然堆積による埋没と考えられ、人為的に埋められた様子はうかがえなかった。

遺物は土器類が11点出土したが、弥生土器と古式土師器のみであった。したがって、出土遺物の観点では、古墳時代前期に掘削された可能性があるが、当調査区では他の溝や遺構でも弥生土器や古式土師器主体の遺物が多く出土する傾向にあったため、年代を限定するには調査範囲が乏しく、積極的に年代比定ができない。

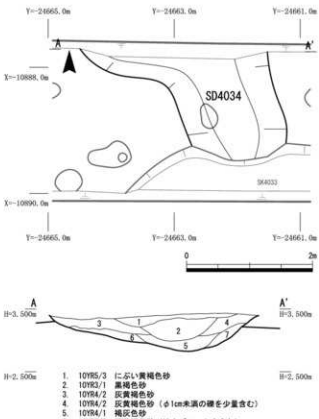


図32　SD4034平面図・断面図

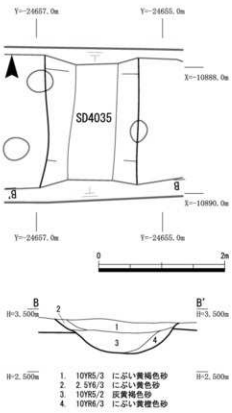


図33　SD4035平面図・断面図

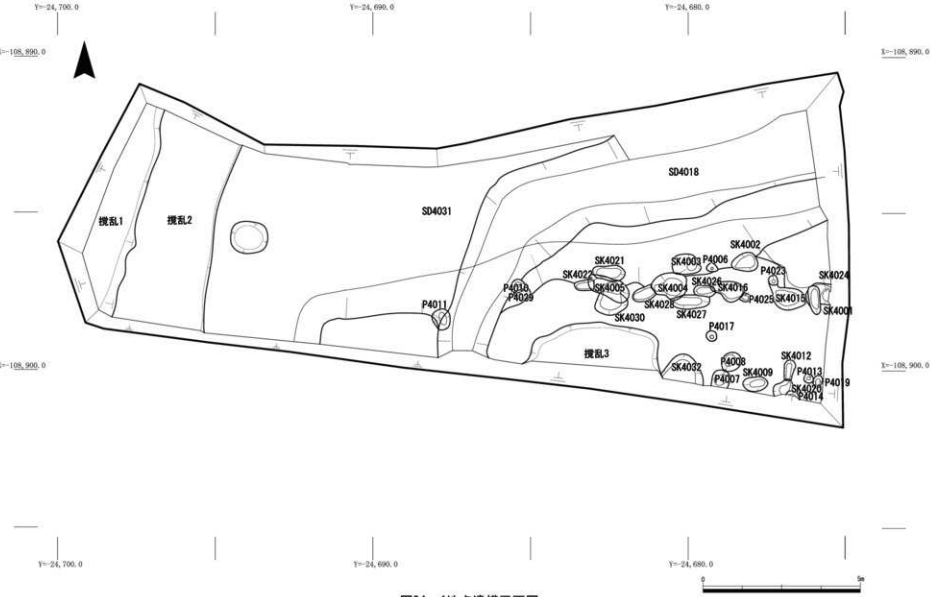


図34　4地点遺構平面図

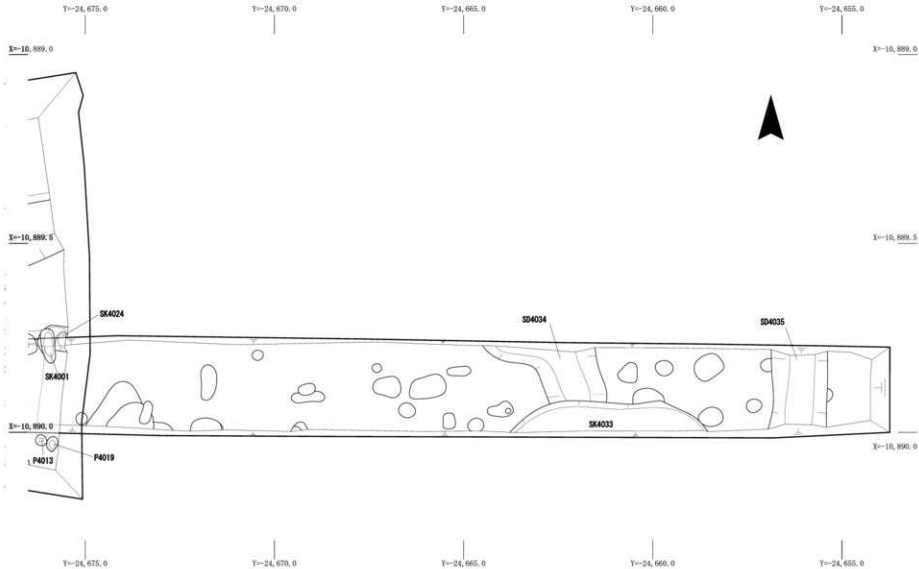


図35　4地点サブトレンチ遺構配置図

Ⅲ　出土遺物

4地点では、破片総数で2748点の遺物が出土している。調査区の大部分がSD4018とSD4031の埋土であったため、遺構から出土した遺物は両溝から出土したものが大半を占める。そこで、SD4018とSD4031については遺構出土の遺物としてまとめて掲載し、それ以外の遺構については包含層などと一括して掲載した。以下出土遺物について記述する。

i　SD4018出土遺物

SD4018はSD4031埋没後に再掘削したと考えられる溝である。遺物は破片総数で538点を数える。先述したように、弥生時代～古代の土器類が7割近く出土しているが、いずれも小片であるため図化できるものは極端に少ない。そのため、中世の遺物を主体に図化できるものを中心に掲載した。

土師皿（図36-130～132）　130～132は土師皿である。130は非ロクロ調整、131・132はロクロ調整土師皿。131・132ともに大型のものであり、復元口径13.0㎝前後を測る。年代比定は難しいが共伴遺物から推察すると15世紀の前半に比定できる。

山茶碗（図36-133～146・写真54-54～55）　133～146は山茶碗である。133・134は小皿。いずれも尾張型で藤澤氏の型式分類で6型式に該当する。

135～146は碗である。このうち、135～144は尾張型、145・146は東濃型とよばれるものである。尾張型のものについては、3型式～9型式のものが出土している。内訳は135が3型式、136が4型式137～

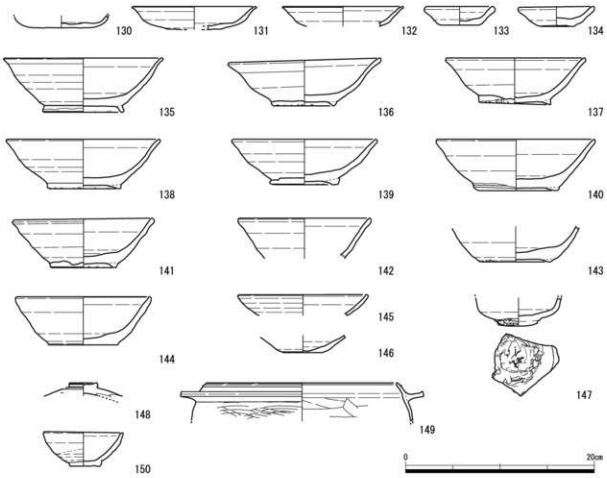


図36　SD4018出土土器類

139が5型式、140が6型式、141・142が7型式、143は底部の大きさから6型式に近いが他との比較から6～8型式、144は9型式に比定できる。東濃型に関しては少量の出土であったが、その中で145は9型式、146は11型式に比定できる。

須恵器（図36-147～148・写真55-60～63） 少量であるが出土している。その中で図化できたものは147・148の2点である。147は坏身である。底部に別個体が釉着しており、それを打ち欠いて使用したと考えられる。底部に釉着した別個体の底部に墨痕が確認できる。文字または記号とみられるが、判読はできない。8世紀中葉に比定でき岩崎25号窯の製品に類する。

148は、坏蓋である。小片であるため、端部の形状が不明なことから時期比定が難しいが、ツマミの形状から9世紀前葉に比定した。

羽釜（図36-149・写真55-57） 149は羽釜である。土師質内彎型羽釜とよばれるもので、北村氏の分類上で羽釜A4類に相当する。口縁は内傾し、体部は扁球状で、鍔部は口縁の直下に接合され、口縁側に若干傾く。内面は工具で丁寧にナデられ、外面はハケ状工具で不定方向に調整される。15世紀前葉～中葉に比定される。

天目茶碗（図36-150・写真55-59） 150は小形の天目茶碗で、小天目とよばれるものである。口径8.3㎝、器高3.6㎝、高台径3.3㎝を測る。内面全体と外面の上半部に鉄釉を施釉し、下部は露胎である。施釉は「漬け掛け」とよばれる器物を直接釉薬に浸す方法でなされており、製作した工人の指に付着した釉薬が高台を含む露胎の一部に付着している。古瀬戸製品であり、14世紀中葉～後葉に比定できる。

ⅱ　SD4031出土土器類

SD4031はSD4018と重複して一部を削平される大溝である。先述のとおり、中世になって、溝として掘削されているが、古くから低湿地状の地形であったと考えられ、出土した遺物は多彩である。この溝からは825点の土器類が出土しており、その中で図化できるものを掲載した。以下種類ごとに報告する。

山茶碗（図37-151～158） 151～158は山茶碗である。このうち、151～153は山皿である。151・152はともに「小碗」と呼ばれるもので、高台を接合する古手の山皿である。両者ともに4型式に比定できる。153は高台がない山皿である。6型式に比定できる。いずれも尾張型と呼ばれるものである。

154～158は碗である。154は4型式、155は5型式、156は6型式、157・158は7型式に比定できる。いずれも尾張型とよばれるもので、SD4018に比べてやや古手の山茶碗が出土することが特徴である。

須恵器（図37-159～164・写真55-60～63） 159～164は須恵器である。これら以外に甕などの小片も出土しているが、図化できるものを掲載した。159は坏身である。底部が欠失しているが高台はつかない型式のものである。篠岡78号窯の製品と近似。7世紀後半に比定できる。160は坏蓋である。宝珠形のツマミが中央に取り付けられる。内外面ともに丁寧な回転ナデで調整される。7世紀後半に比定できる。161は坏身である。底部は中央部がやや窪み、端部に高台が取りつく。内外面ともに丁寧な回転ナデにより調整。篠岡78号窯の製品と近似する。7世紀後半に比定できる。

162は坏蓋である。中央部が欠失しているが、宝珠形のツマミが取りつく型のものである。黒笹14号窯式のもので9世紀後半に比定できる。163は坏身である。底部は高台がなく、糸切痕跡が若干残る。また、底部に「×」型のヘラ記号が確認できる。内外面ともに回転ナデで調整される。9世紀後半に比定できる。164は坏身である。詳細な年代は不明だが、9世紀代に比定されると考えられる。

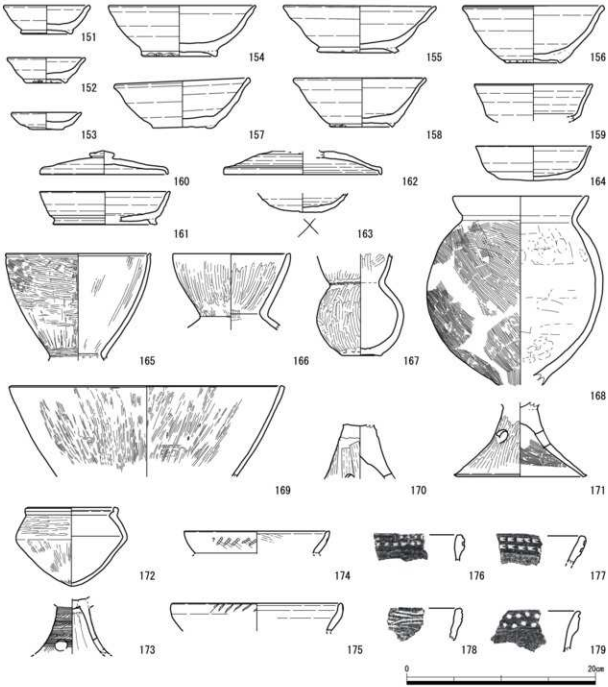


図37　SD4031出土土器

古式土師器（図37-165～170・写真56-64～71・57-72～73）　165・166は壺の口縁である。内外面ともに丁寧なヘラミガキにより調整する。両者ともに廻間Ⅰ式に比定できる。168は小形壺である。外面はほぼ全域をヘラミガキにより調整する。廻間Ⅱ式に比定できる。168はく字型口縁の台付甕である。外面の口縁部はヨコナデ、体部はハケ目調整で仕上げられる。内面は指頭圧痕と指ナデの痕跡が明瞭に残る。廻間Ⅰ式に比定できる。169は高坏である。復元口径28.5cmを測る。内外面ともに丁寧なヘラミガキにより調整する。廻間Ⅰ式に比定できる。170・171は高坏の脚部である。両者ともに3か所の円形透かしを飾る。170は廻間Ⅰ～Ⅱ式、171は廻間Ⅲ式に比定できる。

小型尖底壺型土器（図37-172・写真57-74） 172は器種不明の小型土器である。口径9.5cm、器高8.65cmを測る。口縁は短く、折り曲げて仕上げ、外面全体をヘラミガキで調整。内面は非常に丁寧なナデ調整。土師質の焼成で底部に黒斑がみられる。年代は不明。

弥生土器（図37-173～175・写真57-75～78） 173～175は弥生土器である。173は高坏の脚部である。横位直線文と斜位の刺突文が上下交互に装飾される。174・175は受口系または有段口縁台付甕とよばれる甕の口縁である。口縁部に斜位の刺突文を飾る。これらはいずれも山中式土器であり、弥生時代後期に比定される。

縄文土器（図37-176～179・写真57-79） 176～179は縄文土器である。いずれも小片であるため、全体のわかる資料は出土していない。また、縄文土器と認識できるものは、掲載した4点に限定される。176・177は、口縁部に連続刺突文を飾る。体部は両者ともにスリ消しにより無文である。178は貝殻条痕文を施文したものである。179は口縁部に断面円形の棒状工具で施文した刺突文2条を飾るもので、いずれも胎土が粗くやや軟質な焼成。2012年度の調査でも周辺部から縄文土器が出土しており、2012年度の報告書で掲載されているものと同系の縄文土器である。同報告書ではこれらを縄文時代晩期前半の雷Ⅱ式～桜井・稲荷山式までと位置付けている。

iii　4地点出土その他の遺物

A　土器類

土師皿（図38-180～184） 180～184は土師皿である。このうち、180～183は非ロクロ調整土師皿で、口径7cm前後から10.5cmまでのものがあり、大きさは様々である。184はロクロ調整土師皿で、口縁部を欠失しているため法量は不明である。いずれも15世紀前半～後半に比定できる。

錆釉小皿（図38-185～186） 少量の瀬戸美濃陶器類が出土している。その中で図化可能なものが185・186の2点であった。両者ともに錆釉を施釉した小皿である。両者ともに、大窯第1段階の15世紀後半に比定できる。

常滑焼（図38-187～188・写真55-56） 常滑焼が少量ながら出土している。いずれも小片であり、年代比定可能なものは少ない。187・188はその中でも図化できるものである。187は広口壺の口縁部小片である。復元口径23.2cmを測る。15世紀後半に比定できる。188は片口鉢の小片である。復元口径22.5cmを測る。口縁の端部を指ナデにより窪みを付ける特徴がある。15世紀後半に比定できる。

羽釜（図38-189～191・写真55-57） 4地点で出土した羽釜はいずれも土師質内彎型羽釜である。これらはいずれも口縁は内傾し、体部は扁球状で、鍔部は口縁の直下に接合され、口縁側に傾くという特徴をもつ羽釜A4類に相当する。189～191にみられるように大きさは大小様々である。内面は丁寧にナデられ、外面はハケ状工具で不定方向に調整される。15世紀前葉～中葉に比定される。

灰釉陶器（図38-192） 灰釉陶器が少量ながら出土している。いずれも器種不明のものが多いが、192はその中で椀型であることがわかる資料である。口縁部を欠失しているため法量は不明である。9世紀後半のK90窯式に比定できる。

須恵器（図38-193・写真55-60～63） 少量ながら須恵器が出土している。193は坏蓋であるが、これが唯一図化可能な資料である。ツマミの有無は不明。復元口径は13.6cmを測り大型のものであることから、6世紀に比定できる。

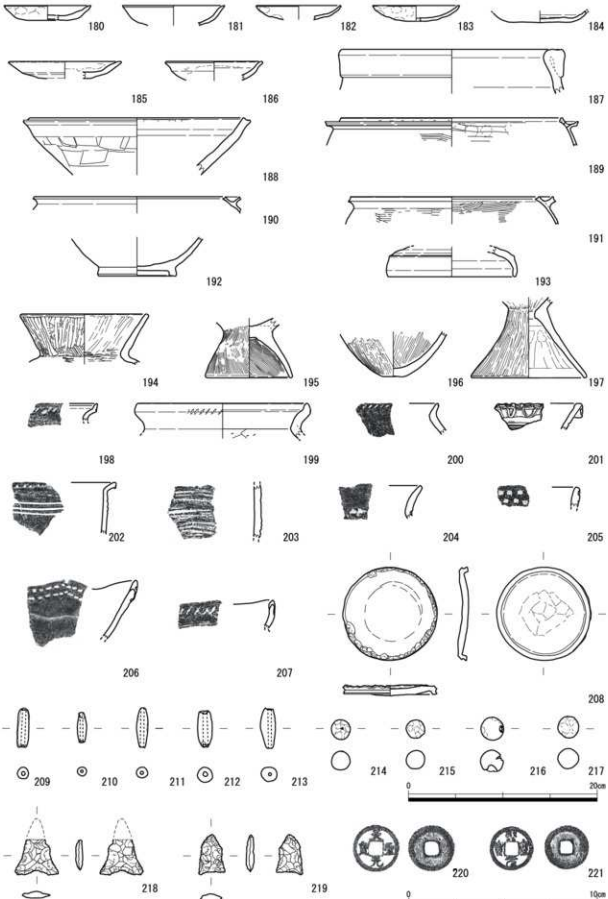


図38　4地点出土その他の遺物

古式土師器（図38-194～197・写真56-64～71・57-72～73） 古式土師器も少量ながら出土している。194～197はその中で図化可能なものを掲載している。194は直口壺の口縁である。口径13.2cmを測る。口縁は直線的ではなく、端部に向かい若干内反する。外面はハケ目調整の後タテ方向のヘラミガキ調整。内面は、タテ方向のヘラミガキにより仕上げられる。廻間Ⅰ式に比定。195は台付甕の脚部である。外面はハケ状工具によるタテ方向のナデ調整。内面は板状工具により中心から外側に放射状にナデ調整で仕上げる。廻間Ⅰ式に比定できる。196は壺の底部付近の小片である。底部は平底で直径2.2cmに復元できる。内外面ともに丁寧なタテ位のヘラミガキ調整で仕上げられる。廻間Ⅰ～Ⅱ式に比定できる。197は、器台の脚部である。外面は丁寧なタテ位のヘラミガキ、内面はタテ方向の指ナデにより調整している。廻間Ⅲ式に比定される。198は受口状口縁の鉢小片である。小片であるため法量は不明である。口縁部に斜位の刺突文を飾る。山中式～廻間式に属する可能性があるが、小片であるため詳細は不明である。

弥生土器（図38-199～202・写真57-75～78） 弥生土器も少量ながら出土している。いずれも小片であることや遺物包含層からの出土が目立つ。199～202はその一部である。199は有段口縁台付甕と考えられる。小片であるため詳細は不明だが、口縁部に斜位の刺突文を飾る。弥生時代後期の山中式土器に比定できる。200はく字型口縁甕の口縁部と考えられる。口縁端部に刺突文を飾る。小片であるため詳細は不明だが、199同様に山中式に比定した。201は条痕文系壺である。口縁部の小片であるが口縁端部に押引文、その直下に押圧突帯を飾る。その下部には条痕文がみられる。小片のため法量は不明。弥生時代前期中葉に比定できる。202は遠賀川系の甕である。口縁端部に刺突文、頸部の下部にヘラ描沈線が3本みられる。弥生時代前期前葉～中葉に比定できる。

縄文土器（図38-203～207・写真57-79） 203～207は縄文土器である。203は条痕文系のものである。204は頸部に刺突文、205は口縁に刺突文を飾る。206・207は波状口縁の縄文土器である。両者ともに刺突文を飾る。いずれも縄文時代晩期に比定できる。

B　土製品

加工円板（図38-208・写真58-81） 208は須恵器を打ち欠いて円板にした加工円板である。須恵器の坏身の底部を利用しており、高台部はそのまま残し、器壁を打ち欠いている。器壁側は円形を整えるために敲打した痕跡が複数個所みられる。

土錘（図38-209～213・写真58-82） 209～213は土錘である。いずれも土師質の焼成。209は円筒状、その他は平面楕円状を呈する。他にやや大型の土錘も出土している。主に包含層から出土した。

陶丸（図38-214～217・写真58-83） 214～217は陶丸である。いずれも須恵質の焼成で、山茶碗の焼成に酷似する。SK4015から2点、包含層より2点出土した。

C　石器

石鏃（図38-218～219・写真58-84～85） 218・219は下呂石製の凹基式の石鏃である。218は先端部が欠失。包含層より2点出土した。

D　金属製品

銅銭（図38-220～221・写真58-86～87） 220は北宋の天聖元年（1023）初鋳の真書体の「天聖元寶」である。221は北宋の熙寧元年（1068）初鋳の「熙寧元寶」である。いずれも北宋銭である。

第4節　5地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序

5地点は、畑間遺跡と東畑遺跡の境界部分に位置し、東側に東畑遺跡が広がる。他の調査地点同様に砂堆上に立地し、北側の東西道路は平成16年度に発掘調査済である。本地点では、遺構こそ確認されていないが、弥生時代前期の土器が多く出土している。また、調査区の北東部では、弥生時代中期以降の方形周溝墓が確認されており、墓域がこの周辺に広がっていたことが判明している。また、調査区の南東地区では、古墳時代前期の竪穴住居などが見つかっており、当該期の集落が広がっていたことが明らかになっている。こうした状況から、弥生時代から古墳時代前期までの集落やその関連遺構などの発見が期待されると同時に、それらの範囲確認という点でも重要な場所の調査であった。しかし、今回の調査で見つかった遺構の大半が中世のものであり、期待された時期の遺構はまとまって検出されていない。また、前述の北側の道路部と同じように、弥生時代前期の遺物が多く出土したが、当該期の遺物は畑間遺跡の南西部から、当調査地周辺部まで広範囲で出土しており、当調査地でも同じような状況であった。

調査区の基本層序は、調査区全域で概ね一定している。基本層序は上から順に以下の5層からなる。

1：表土（5Y4/1　灰色土～砂質土）
2：近世～近代包含層（10YR4/6　褐色砂質土）
3：耕土（7.5YR4/6　褐色土～砂質土）
4：中世以降の遺構ベース土（7.5YR4/3　褐色砂）
5：地山（2.5Y7/6　明黄褐色砂）

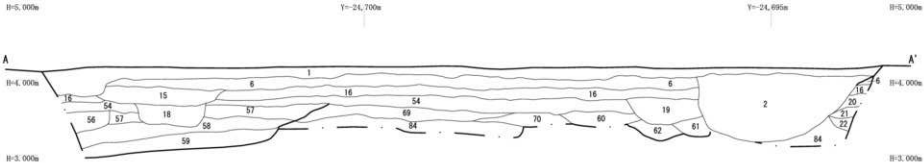
1は現地表面であり、外部から整地用に持ち込まれた客土である。調査区北西部でみられそれ以外にはない。調査前は宅地であったため、宅地の造成用に搬入された整地土と考えられる。

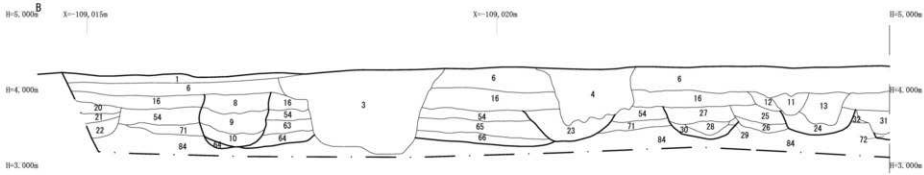
2は堆積または耕土と考えられる層位である。調査区北西部以外はこの層が表層である。場所により若干の違いはあるが概ね全域で一致する。

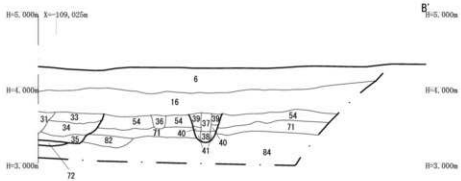
3も堆積または耕土と考えられる層位である。部分的な違いはあるが概ね調査区全域で一致する。中世の遺構を覆っている状況が確認できるため、近世以降の層位と考えられる。

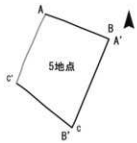
4は中世以後の遺構のベース土である。人力掘削はこの上面から開始し、「包含層」名で遺物の取り上げを行った。場所により色調は異なるが、土性は概ね一致する。この層位の性格は不明であるが、耕作溝がみられないことや、中世の柱穴の地山層である点で、堆積層であった蓋然性が高いが、調査区東側でこの下層が落ち込んでおり、人為的に削られている可能性が高い。なお、山皿など中世に比定される土器の小片が出土しており、中世期に堆積したものと考えられる。

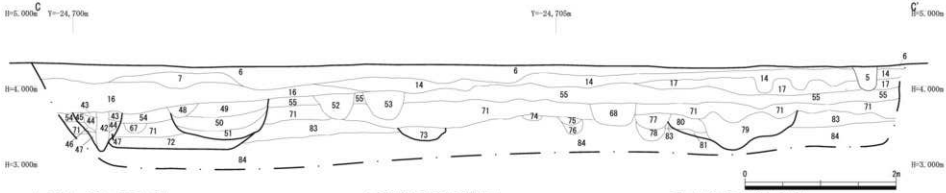
5層は色調が場所により異なるが、概ね調査区全体で一致する。砂堆の堆積層であり、遺物が入らないいわゆる地山である。本調査区の遺構は例外もあるが、基本的にこの層位の上面ですべて検出した。


H=5.000m
Y=-24.700m
Y=-24.695m
H=5.000m
A
A'
H=4.000m
H=4.000m
H=3.000m
H=3.000m


B
H=5.000m
X=-109.015m
X=-109.020m
H=5.000m
H=4.000m
H=4.000m
H=3.000m
H=3.000m


H=5.000m
X=-109.025m
B'
H=5.000m
H=4.000m
H=4.000m
H=3.000m
H=3.000m


A
B
A'
5地点
C'
B'
C



1. 5Y4/1　灰色土～砂質土　表土
2. 10YR2/1　黒色土～砂質土　撹乱
3. 7.5YR3/4 暗褐色砂質土（2.5YR/8黄色シルトブロックを含む）　撹乱
4. 7.5YR3/1 黒褐色砂質土　撹乱
5. 10YR3/2 黒褐色砂質土（土管含む）撹乱
6. 10YR4/6 褐色砂質土　近世～近代包含層
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
8. 10YR2/2 黒褐色砂質土　撹乱
9. 10YR2/2 黒褐色砂　撹乱
10. 10YR3/2 黒褐色砂（地山ブロックを含む）　撹乱
11. 7.5YR3/2 黒褐色砂
12. 7.5YR3/3 暗褐色砂
13. 10YR3/3 暗褐色砂
14. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
15. 2.5Y5/4 黄褐色砂質土
16. 7.5YR4/6 褐色土～砂質土
17. 10YR4/6 褐色砂
18. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土～砂　遺構埋土
19. 7.5YR3/1 黒褐色砂　遺構埋土
20. 10YR4/2 灰黄褐色砂　遺構埋土
21. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂　遺構埋土
22. 10YR7/3 にぶい黄橙色砂～粗砂　遺構埋土
23. 10YR3/2 黒褐色砂（地山ブロックを含む）　SK5001埋土
24. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂　SK5022埋土
25. 10YR3/4 暗褐色砂　遺構埋土
26. 10YR6/3 にぶい黄橙色砂　遺構埋土
27. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂（砂質土混じる）　SK5016埋土
28. 2.5Y3/1 黒褐色砂　SK5016埋土
29. 2.5Y5/3 黄褐色砂～砂質土　SK5016埋土
30. 2.5Y3/2 黒褐色砂　SK5016埋土
31. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　遺構埋土
32. 7.5YR3/2 黒褐色砂　遺構埋土
33. 7.5YR3/2 黒褐色砂　SK5015埋土
34. 7.5YR3/1 黒褐色砂　SK5015埋土
35. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂（地山ブロックを含む）　SK5015埋土
36. 10YR3/3 暗褐色　遺構埋土
37. 10YR2/1 黒色砂　P5014埋土
38. 10YR3/1 黒褐色砂　P5014埋土
39. 5YR3/2 暗赤褐色砂　P5014埋土
40. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂　P5014埋土
41. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　P5014埋土
42. 7.5YR3/1 黒褐色砂　P5004埋土
43. 5YR3/1 黒褐色砂　P5004埋土
44. 5YR3/1 黒褐色砂　43層に比べ黒味薄い　P5004埋土
45. 2.5YR3/2 暗赤褐色砂　P5004埋土
46. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　P5004埋土
47. 2.5Y5/4 黄褐色砂（地山ブロックを含む）　P5004埋土
48. 7.5YR4/3 褐色砂　遺構埋土
49. 10YR3/1 黒褐色砂（縛りあり）　SK5028埋土
50. 10YR2/1 黒色砂（縛りあり）　SK5028埋土
51. 10YR6/4 にぶい黄橙色砂（地山ブロックを含む）　SK5028埋土
52. 10YR5/2 灰黄褐色砂　遺構埋土
53. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂　遺構埋土
54. 7.5YR4/3 褐色砂
55. 10YR4/4 褐色砂
56. 10YR3/2 黒褐色砂　遺構埋土
57. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　SD5031埋土
58. 2.5Y3/1 黒褐色砂　SD5031埋土
59. 2.5Y5/6 黄褐色砂（地山ブロックを含む）　SD5031埋土
60. 7.5YR4/4 褐色砂　遺構埋土
61. 7.5YR3/2 黒褐色砂　遺構埋土
62. 2.5Y5/6 黄褐色砂（地山ブロックを含む）　SD5031埋土
63. 10YR3/3 暗褐色砂　SD5031埋土
64. 10YR7/3 にぶい黄橙色砂（地山崩れ）　SD5031埋土
65. 10YR3/3 暗褐色砂　SD5023埋土
66. 10YR7/3 にぶい黄橙色砂（地山崩れ）　SD5023埋土
67. 10YR5/2 灰黄褐色砂　遺構埋土
68. 7.5YR3/3 暗褐色砂　遺構埋土
69. 5YR4/4 にぶい赤褐色砂
70. 10YR4/6 褐色砂
71. 10YR7/3 にぶい黄橙色砂
72. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂　SD5033埋土
73. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂　SD5029埋土
74. 10YR6/2 灰黄褐色砂　遺構埋土
75. 10YR5/2 灰黄褐色砂　遺構埋土
76. 10YR6/2 灰黄褐色砂　遺構埋土
77. 10YR3/3 暗褐色砂　遺構埋土
78. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂　遺構埋土
79. 10YR4/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを含む）　SD5023埋土
80. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂　SD5023埋土
81. 10YR5/2 灰黄褐色砂（地山ブロックを多量含む）　SD5023埋土
82. 10YR5/2 灰黄褐色砂
83. 10YR7/2 にぶい黄橙色砂
84. 2.5Y7/6 明黄褐色砂　地山

図39　5地点北壁・東壁土層断面図

Ⅱ　検出遺構

5地点では、主に大型の溝と土坑状遺構およびピット類を検出している。これらの大半は地山層である地山（基本層序5層）の上面で検出しているが、調査区東側で包含層が東側に向かって落ち込んでおり、SK5001・5002はこの落ち込みの上面で検出している。なお、包含層とこの東側の落ち込み土に違いはなかったが、遺物取り上げに関しては、調査区全域で「包含層」と「包含層東落ち込み」に分けておこなった。両者から出土する遺物の年代にも大幅な違いがないため、同一の層位として考えてよかろう。

検出遺構に関しては、いずれも中世期に比定できるものであり、それ以前の遺構は削平されているものと考えられる。遺物は中世以後のものと、弥生時代前期のものが主体で出土しているが、弥生時代のものは遺構に伴っていない。

以下、主要な遺構を報告する。

SD5023（図40・写真20-70・22-73～75）　調査区南東部で検出した幅1.63m、深さ0.36mの溝である。調査区東側から南西部に斜行する。傾斜は西側に向けて緩やかに深くなっているため、北東から南西に向けて勾配するが、断面確認では流水痕跡とみられる層位はなく、各層は均一で人為的な埋土でないため、自然堆積により埋没したものと考えられる。また、SD5023の地山層や溝底である地山は、水捌けが良いため、流水した溝である可能性は低い。

遺物は土器類が34点と古銭1点が出土している。この中に山茶碗や伊勢型鍋などの土師質土器が含まれているため、中世に比定できる。伊勢型鍋は14世紀のものが出土しており、当該期が遺構の掘削年代と考えられる。

SD5031（図40・写真21・22-71・72・76）　調査区北側で検出した幅1.15m、深さ0.60mの溝である。調査区北東隅部と北西隅で検出しており、部分的に調査区の北側に抜けるが、一連の溝と推定される。断面確認の結果、流水痕跡はなく、埋土も人為的でないことから、自然堆積による埋没が考えられる。

出土遺物は土器類40点と石槍1点が出土した。遺物は弥生土器が多かったが、山茶碗や土師質土器など中世に比定できるものがみられるため中世期に比定されるものと考えられる。また、調査区壁面でも、中世の遺物を含む包含層上面から掘削されている状況が明らかであり、層位的にも中世以降の溝であることがいえる。

以上SD5023とSD5031の2つの溝を報告したが、両者は溝の規模や出土遺物、掘削面や埋土などの共通点が多くみられ、一連の溝である可能性がある。この場合の推定範囲は図40に破線で示したとおりである。このように考えたのは、当調査区の北側道路部分は既に発掘調査が行われているが、SD5023・5031ともに屈曲部がなければ先行調査で延長部が検出されているはずだが、それが見つかっていないという点と、埋土の状況が酷似しているという点である。また、SD5023とSD5031の東側は、包含層が東側に向かって落ち込む部分とほぼ近接する位置で検出されており、両者はこの点で共通している。このような状況から提示したような溝の平面形状を推定している。

なお、このような溝であった場合、後述するSK5034を取り囲むような溝の配置であり、溝と土坑が併存していた可能性がある。このことに関しては、根拠が乏しいため積極的に言及することはできないが、可能性として示唆しておきたい。

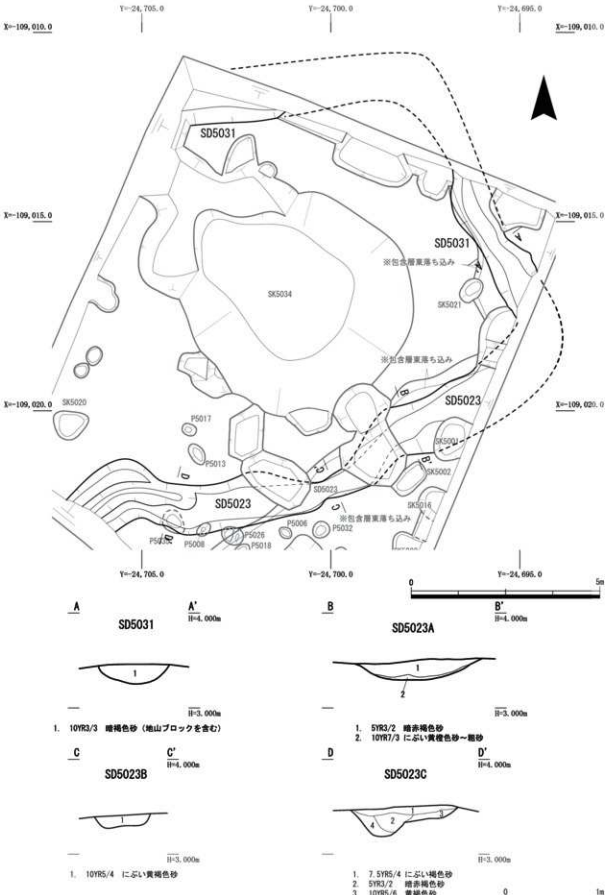
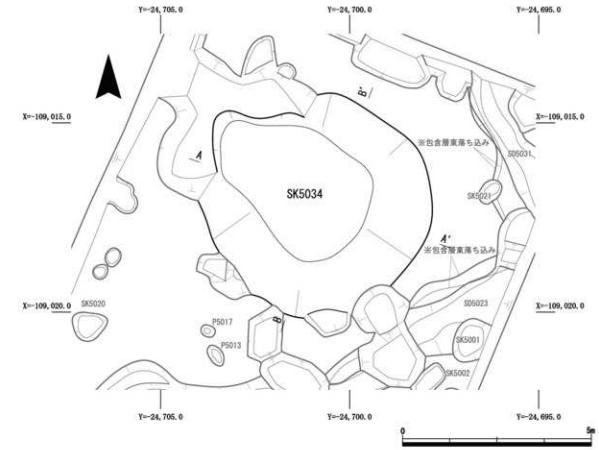
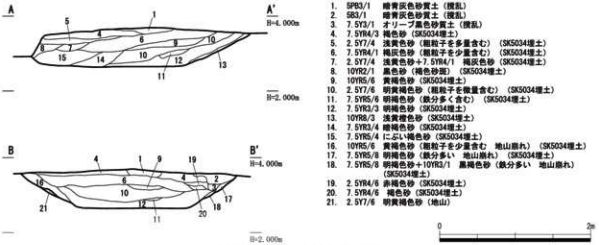


図40 SD5023・5031平面図・断面図

SK5034（図41・写真24-83～87・25-88） 調査区中央部で検出した長軸5.86m、短軸5.76m、深さ1.06mの平面円形の巨大な土坑である。北東部は攪乱により削平されている。掘削は帯水層までおよんでおり、下層部は地山が崩れたような層位がみられた。こうした状況から、当初は井戸の可能性を考えたが、井戸枠は全くみられなかったほか、平面および断面でも抜き取り痕跡も確認していない。したがって、井戸である可能性は極めて低い。

また、底面や壁が砂であるため、粘土などを採掘した採掘坑であることも考えられない。このような状況から、遺構の性格は不明である。





1. 5PB3/1 暗青灰色砂質土（攪乱）
2. 5B3/1 暗青灰色砂質土（攪乱）
3. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質土（攪乱）
4. 7.5YR4/3 褐色砂（SK5034埋土）
5. 2.5Y7/4 浅黄色砂（粗粒子を多量含む）（SK5034埋土）
6. 7.5YR4/1 褐灰色砂（粗粒子を少量含む）（SK5034埋土）
7. 2.5Y7/4 浅黄色砂+7.5YR4/1 褐灰色砂（SK5034埋土）
8. 10YR2/1 黒色砂（褐色砂混）（SK5034埋土）
9. 10YR5/6 黄褐色砂（SK5034埋土）
10. 2.5Y7/6 明黄褐色砂（粗粒子を微量含む）（SK5034埋土）
11. 7.5YR5/6 明褐色砂（鉄分多く含む）（SK5034埋土）
12. 7.5YR3/3 明褐色砂（SK5034埋土）
13. 10YR6/3 浅黄橙色砂（SK5034埋土）
14. 7.5YR3/4 暗褐色砂（SK5034埋土）
15. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂（SK5034埋土）
16. 10YR5/6 黄褐色砂（粗粒子を少量含む 地山崩れ）（SK5034埋土）
17. 7.5YR5/8 明褐色砂（鉄分多い 地山崩れ）（SK5034埋土）
18. 7.5YR5/8 明褐色砂+10YR3/1 黒褐色砂（鉄分多い 地山崩れ）（SK5034埋土）
19. 2.5YR4/6 赤褐色砂（SK5034埋土）
20. 7.5YR4/6 褐色砂（SK5034埋土）
21. 2.5Y7/6 明黄褐色砂（地山）

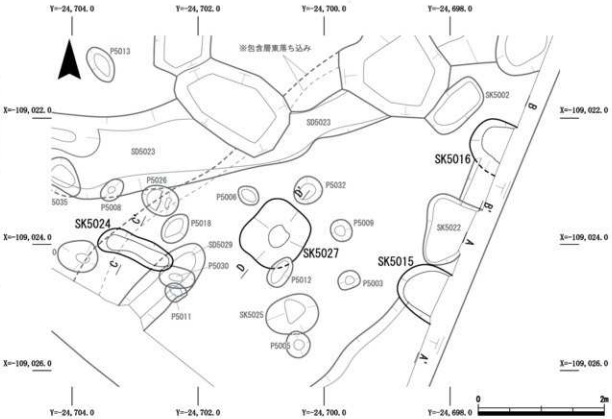
図41 SK5034平面図・断面図

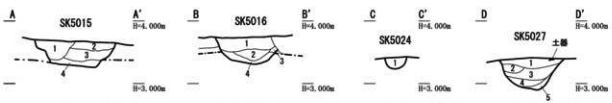
出土遺物は、土器類112点が出土している。弥生時代前期の土器の出土が多いが、常滑焼や山茶碗、土師質土器など中世期に比定できる土器類が一定量出土している。これらの中に、13〜14世紀に比定できるものがあるため、その頃に機能した土坑と考えられる。

SK5015（図42） 調査区南東部で検出した長軸1.05m、短軸0.73m以上、深さ0.32mの土坑である。機能は不明だが、出土した遺物は土器4点と石器が1点である。土器類はすべて、弥生時代前期のものである。

SK5016（図42） SK5015の北側で検出した長軸0.92m、短軸0.58m以上、深さ0.44mの土坑である。遺物は弥生時代前期の土器5点と古墳時代前期に比定される土器が2点出土しており、古手のものだが、掘削面は中世の土器類を含む「包含層」（基本層序4層）からであり、中世または、それ以降の土坑と考えられる。性格は不明である。

SK5024（図42） 調査区南部で検出した長軸1.23m、深さ0.20mの平面楕円形の土坑であ





1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂
2. 7.5YR3/2 黒褐色砂
3. 7.5YR3/1 黒褐色砂
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂（地山ブロックを含む）

1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂（砂質土混じる）
2. 2.5Y3/1 黒褐色砂
3. 2.5Y5/3 黄褐色砂〜砂質土
4. 2.5Y3/2 黒褐色砂

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂
2. 5Y2/2 オリーブ黒色砂
3. 5Y3/1 オリーブ黒色砂
4. 5Y4/3 暗オリーブ色砂
5. 5Y5/4 オリーブ色砂

図42 5地点検出土坑平面図・断面図

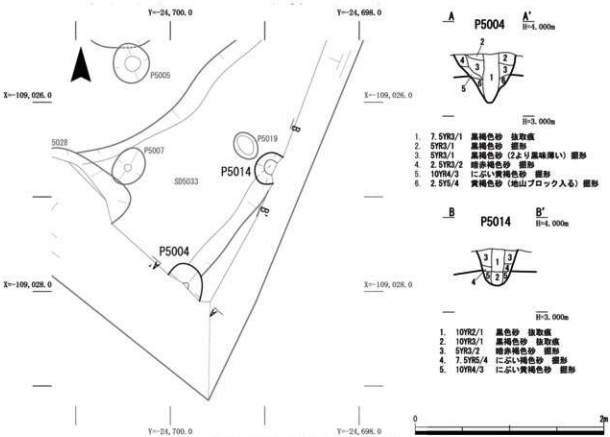


図43 P5004・5014平面図・断面図

る。「包含層東落ち込み」の下で検出した。9世紀代の須恵器小片が1点出土している。検出層と出土遺物から中世以前に遡る可能性がある。

SK5027（図42・写真23-80） 調査区南部で検出した長軸1.04m、短軸0.92m、深さ0.50mの平面隅丸方形の土坑である。土器類が35点出土したが、山茶碗や常滑焼がみられるため中世以後の土坑と考えられる。性格は不明だが、掘削深度は帯水層まで達していないため、井戸や取水目的の遺構ではないと考えられる。

P5004（図43・写真23-81） 調査区南西隅で検出した直径約0.66m、深さ0.51mの柱穴である。地山の1層上（基本層序4層）から掘削されているため、中世またはそれ以後の遺構であると考えられる。遺物は出土していない。

P5014（図43・写真23-82） P5004の北側で検出した直径0.44m、深さ0.38mの柱穴である。これも地山の1層上（基本層序4層）から掘削されているため、中世またはそれ以後の遺構であると考えられる。ただし、遺物は出土していない。

5地点で検出された柱穴は上記の2つだけである。これらは掘削面が共通しており、両者は同一の掘立柱建物の柱穴であった可能性がある。

以上が5地点で検出した主要な遺構である。これ以外にピットなどを多く検出しているが、いずれも年代、性格ともに不明なものが多い。また、南西部で柱穴を検出しており、調査区の南西部側に建物を伴う集落などが広がる可能性が指摘できる。SD5023・5031やSK5034との関連を含めて考える必要があろう。

図44　5地点遺構平面図

Ⅲ　出土遺物

5地点では主要遺構はSD5023・5031、SK5034などのようにすべて中世のものであったが、これらの遺構の遺物包含数は少なかった。そのためここでは、調査区全体でまとめて報告する。また、出土した土器類は中世のものも多いが、縄文土器や弥生土器が多く出土している。これらは主に包含層から出土しており、遺構に伴って出土していないため、これも中世遺物同様にまとめて掲載する。

i　土器類

出土した土器類は中世のものと、弥生時代のものに大別できる。また、少量ながら縄文時代晩期のものも出土している。これらの中で図化可能なものを掲載した。以下、器種毎記述する。

A　中世の土器類

土師皿（図45-222）　少量ながら土師皿が出土している。222はロクロ調整土師皿で、口径11.2㎝を測る。口縁部が外反する特徴がある。16世紀に比定できる。

山茶碗（図45-223～237・写真59-88・60-90）　山茶碗は大量に出土している。出土したものは小皿、

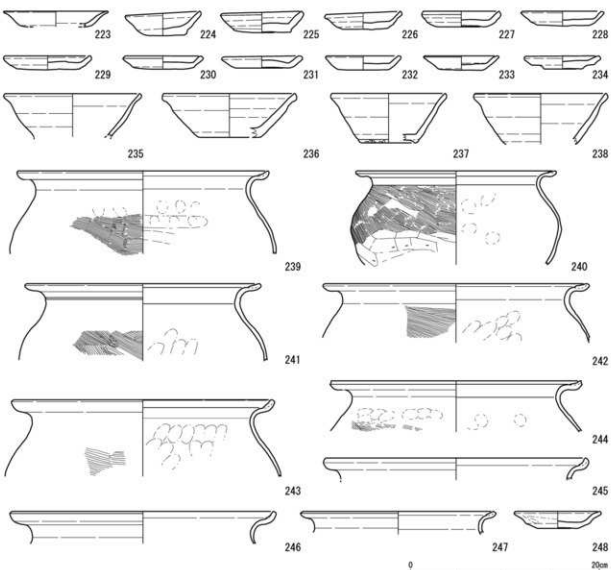


図45　5地点出土中世の土器

碗、鉢が出土したが、鉢については図化できる資料は無かった。223～233は小皿である。これらをみると主に5型式～10型式のものが確認できる。型式判別が可能なものの中では7～9型式のものが最も多い傾向が確認できる。234～237は碗である。これらはいずれも7～9型式のものである。これ以外に5型式に比定できる小片なども出土しているが、小皿同様に7～9型式のものが圧倒的に多い。

土師質土器（図45-238～246・写真59-89） 土師質土器は多く出土している。中でも伊勢型鍋の出土が目立つ。238～246はいずれも伊勢型鍋である。これらは、口縁部を内側に折り返して仕上げる特徴がある。図45に掲載したものは口縁部のものでばかりであるが、体部の小片も多く出土している。出土した伊勢型鍋は北村氏の分類上でA4～A5類に比定できるもので、それ以前のものは確認していない。特徴としては器壁が極めて薄い。体部の確認できるものは頸部より下部外面にハケ目が明瞭に残ることがあげられる。13世紀末～15世紀前葉に比定できる。

折縁小皿（図45-247） 5地点では瀬戸美濃陶器類の出土がほとんどなかった。いずれも包含層からの出土で小片である。その中で247は図化できるものであった。灰釉を施釉した折縁小皿で、釉薬は内面全体と外面の口縁部付近に施釉している。底部には明瞭な糸切痕が残る。古瀬戸製品と考えられるもので、14世紀中葉に比定できる。

B　弥生・縄文時代の土器類

弥生土器（図46-248～268・写真60-92） 弥生土器は破片総数で412点出土している。弥生土器は貝殻山式～朝日式までの弥生時代前期～中期前半のものを主体として出土しており、弥生時代後期の山中式のものが若干数出土するという傾向がみられた。弥生時代前期のものは条痕文系土器を主体に遠賀川系のものが少量出土する傾向がみられる。このうち、前期に比定できるものは248～255である。248は遠賀川系の甕である。口縁部に刻み目を飾り、頸部に3条の沈線が巡る。復元口径22.6cmを測る。包含層から出土した。249～255は条痕文系である。249は条痕文系壺である。口縁外面に連続押圧突帯を飾り、頸部には条痕がみられる。復元口径23.4cmを測る。250は条痕文系鉢の底部小片である。復元底径5.7cmを測る。251は条痕文系深鉢である。器形が砲弾形をなす特徴がある。小片のため詳細は不明である。

252～255は条痕文系鉢である。252～253は口縁端部に貝殻による連続押引文を飾る。255は口縁端部に押引文を飾る。

256～262は弥生時代中期に比定できる。256は壺の肩部付近の小片である。肩部に沈線と波状文を飾る。包含層から出土した。257条痕文系壺である。口縁は端部に向け外反し、口縁端部に貝殻による連続押圧文を飾る。口縁直下には条痕文がみられる。復元口径16.4cmを測る。258は袋状口縁の壺である。口縁部に指押圧を加え口縁部外面に横位条痕文を加える。259・260受口状口縁の壺である。259は口縁屈曲部に連続押圧突帯を、その上部に貝殻による連続押引文を飾る。260は口縁屈曲部に連続押圧文、その上部に1条に波状文、列点文を飾り、口縁端部に押圧文を飾る。261は条痕文系厚口鉢である。小片のため細部の詳細は不明。263～268は小片のため詳細な年代比定ができなかったものである。いずれも条痕文系のものである。266～268は壺や鉢の胴部で、縦位羽状文のものである。

縄文土器（図46-269～272・写真61-93） 7点の縄文土器が出土している。このうち、269～272は図化可能であったものである。269は胴部に波状紋を飾るものである。270は口縁端部外面にキザミをいれて

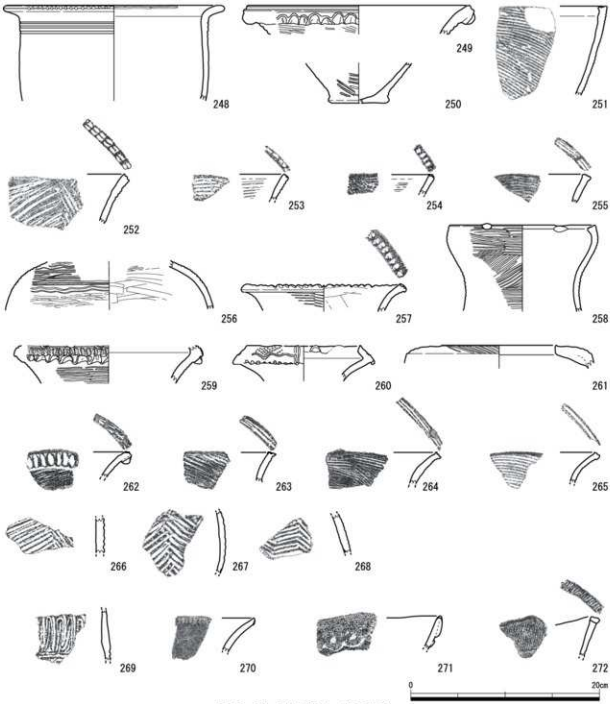


図46　5地点出土弥生・縄文土器

装飾した鉢である。271・272は波状口縁の鉢である。271は口縁部を厚手にするため粘土を貼り足してその下部を波状にし、その間に竹管紋を飾ったものである。272は口縁端部にキザミを入れて装飾したものである。いずれも縄文時代晩期の雷Ⅱ式に比定できる。ただし、調査区やその周辺で縄文時代の生活痕跡が考えられる程の量の縄文土器は出土していない。

C　土製品

土錘（図47-273～275・写真61-94）　273～275は投網などの錘として使用されたと考えられる土錘でいずれも土師質焼成である。273・274は平面楕円状のもので小型の土錘である。273は長軸3.5㎝、直径0.9㎝、穿孔部直径0.3㎝、274は長軸4.1㎝、直径1.05㎝、穿孔部直径0.4㎝を測る。275は円柱形で

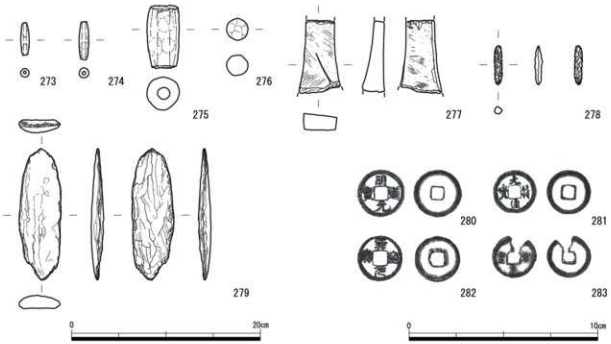


図47　5地点出土その他の遺物

大型の土錘である。長軸6.7cm、直径4.5cm、穿孔部直径1.3cmを測る。いずれも包含層から出土した。

陶丸（図47-276）　276は陶丸である。直径2.27cmの球形で、手捏ねで製作されている。焼成は尾張型の山茶碗の焼成に酷似する。本調査区では1点のみの出土であった。SD5023から出土した。

D　石製品

砥石（図47-277・写真61-95）　277は砥石である。図面に見える上方部と下方部は欠損しているが、それ以外の四面すべてで擦痕が確認できるため、多用途で使用されたものと考えられる。包含層から出土した。

石錐（図47-278・写真61-96）　278は下呂石を加工した打製石錐である。長軸4.1cm、短軸0.8cm、厚さ0.75cmを測る。包含層から出土した。

石槍（図47-279・写真61-97）　279は剥離片岩を加工した打製石槍である。刃部は図面上の上部および左右全域におよぶ。長軸13.9cm、短軸4.35cm、厚さ1.4cmを測る。SD5031から出土した。

E　金属製品

銅銭（図47-280～283・写真61-98～100）　5地点では銅銭が4点出土している。280は1032年初鋳の真書の明道元寶である。直径2.5cmを測る。包含層より出土。281は元符元年（1098）初鋳の真書の元符通寶である。直径2.3cmを測る。包含層より出土。282は熙寧元年（1068）初鋳の篆書の熙寧元寶である。直径2.4cmを測る。SD5023より出土。283は上部の一部を欠失した銅銭である。劣化が著しいため、文字の判読はできないが、左側の文字は真書の「寶」である。直径2.3cmを測る。包含層から出土した。281を除くといずれも北宋銭であり、鋳造された年代は11世紀である。

第5節　6地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序

6地点は、5地点の東側約30mの地点で、東畑遺跡の西境界付近に位置する。かつて、神社が鎮座していたことが伝えられ、東接する道路沿いには祠や山車蔵などが並ぶ。

周辺調査では、北東約30m付近から弥生時代中期の方形周溝墓が検出されており、南東方面では、弥生時代中期～奈良時代前期の竪穴住居などの集落遺構が検出されている。また、集落跡のさらに南部では、大田川の旧河道または、その支流と考えられる流路があったと考えられ、谷地形となっている。こうした状況から、この地域は旧河道沿いに弥生時代から断続的に人々が生活したことが考えられ、関連遺構の発見が期待された。

ところが、6地点では、砂堆の堆積と考えられる砂層（地山）を削り込んで撹乱されている状況が発掘調査の結果判明した。そのため、遺構は少量ながら検出しているものの、特記するべき遺構は皆無であった。したがって、6地点の調査報告は基本層序と事実記載にとどめる。

6地点の基本層序は近世以後に大幅に削平されており、最下の地山層と現地表およびその下層以外は場所により一定しないが概略すると、

1：客土（2.5Y8/6　黄色土+シルト）
2：耕作土ヵ（2.5Y3/1　黒褐色土～砂質土）
3：耕作土ヵ（2.5Y4/4　オリーブ褐色砂質土）
4：地山（2.5Y7/6　明黄褐色砂）

となる。1と2は現代の耕土と考えられるもので、調査前には町内共用の花壇であったので、1はその整地層、2はそれ以前の耕作土と考えられる。

3は、2層以前に持ち込まれた客土と考えられ、大幅に改変がおこなわれたものと考えられる。この層は場所により一定していないがいずれも近世の遺物を包含する。

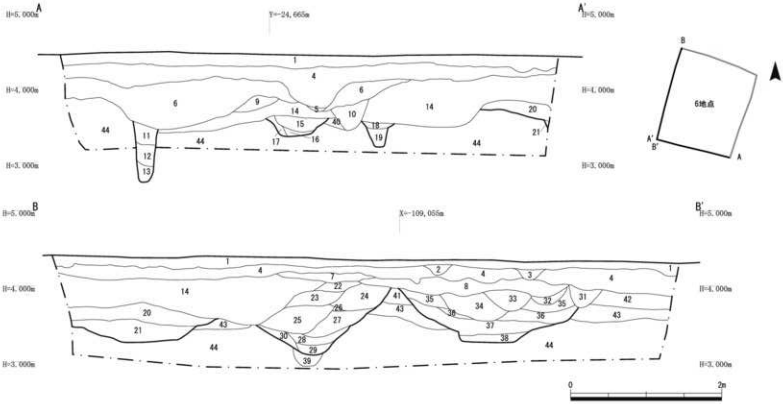
4は地山層であり、砂堆の堆積層である。全く締りがなく崩れやすい。以上が当調査区の基本層序である。

Ⅱ　検出遺構

6地点では、土坑、ピットなど27基を検出している。これらは遺物の出土がないものが多く、年代比定ができないほか、性格も不明なものばかりであり、特記するべきものはなかった。

Ⅲ　出土遺物

プラスチックコンテナ1箱分（破片総数51点）の遺物が出土している。これは、調査面積に対して極端に少ない数字である。調査区全域が撹乱により削平されていたことが要因であろう。遺物の多くは3層からの出土であり、整地の際に入り込んだもので、当地の性格を示すものではないと考えられる。



1. 2.5YR/6 黄色土＋シルト 客土
2. 10YR3/2 黒褐色砂質土 耕作溝
3. 10YR4/1 褐灰色土～砂質土 耕作溝
4. 2.5Y3/1 黒褐色土～砂質土（締まりなし。貝殻を多量含む）
5. 10YR3/2 黒褐色土＋シルト
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（貝殻を多量含む）
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
8. 7.5YR4/6 褐色砂質土
9. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土
10. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土＋粗砂
11. 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂質土 P6008埋土
12. 10Y4/2 オリーブ灰色砂質土 P6008埋土
13. 7.5GY4/1 暗緑灰色砂 P6008埋土
14. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土
15. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土（貝殻細片を多量含む） P6021埋土
16. 10YR6/2 灰黄褐色砂（貝殻細片を少量含む） P6021埋土
17. 10YR6/1 褐灰色砂（地山崩れ） P6021埋土
18. 10YR5/2 灰黄褐色砂 P6025埋土
19. 10YR4/1 褐灰色砂 P6025埋土
20. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂～砂質土 SX6018埋土
21. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂～砂質土 SX6018埋土
22. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 SK6027埋土
23. 10YR5/2 灰黄褐色砂 SK6027埋土
24. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 SK6027埋土
25. 10YR3/1 黒褐色砂～砂質土 SK6027埋土
26. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 SK6027埋土
27. 10YR4/1 褐灰色砂 SK6027埋土
28. 10YR5/1 褐灰色砂 SK6027埋土
29. 10YR5/1 褐灰色砂～粗砂 SK6027埋土
30. 2.5Y7/2 灰黄色砂～粗砂（地山崩れ） SK6027埋土
31. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 遺構埋土
32. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 遺構埋土
33. 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 遺構埋土
34. 7.5YR3/3 暗褐色砂質土 遺構埋土
35. 10YR5/6 黄褐色砂質土 SX6019埋土
36. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 SX6019埋土
37. 10YR5/2 灰黄褐色砂～砂質土 SX6019埋土
38. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂（地山ブロックを含む） SX6019埋土
39. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 遺構埋土
40. 10YR4/2 灰黄褐色砂～砂質土
41. 10YR4/4 褐色砂質土
42. 10YR5/6 黄褐色砂質土 遺物包含層（近世）
43. 10YR6/6 明黄褐色砂質土 遺物包含層（近世）
44. 2.5Y7/6 明黄褐色砂 地山

図48 6地点南壁・西壁土層断面図

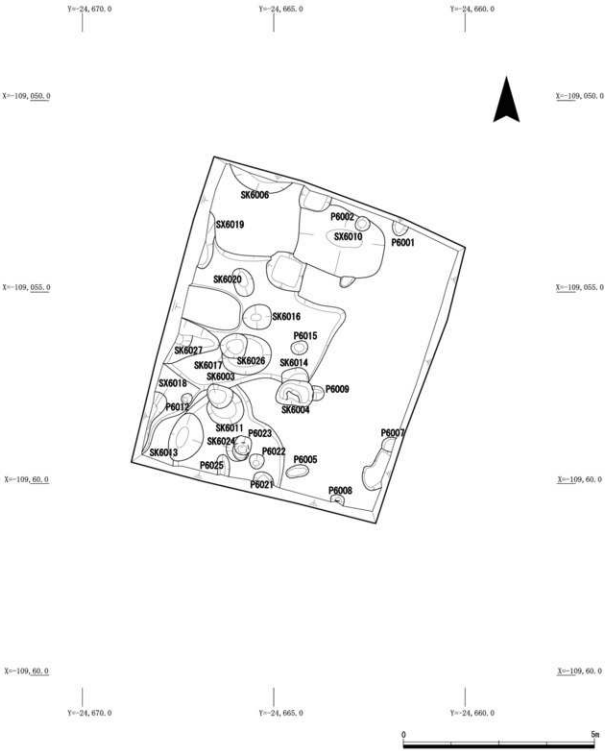


図49　6地点遺構平面図

第3章　東畑遺跡の調査

第1節　7地点の調査

Ⅰ　概要と基本層序

7地点は、東畑遺跡の中心部と考えられる場所である。南接する道路部分は平成21年度の調査で、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居が8棟検出されているため、集落内でも居住区に該当する遺構群の検出が期待された。当地は、北から南に向けて緩やかに傾斜する地形で、南東部には旧太田川やその支流と考えられる旧河道が確認できる。しかし、調査区内では、現地表面は南側が0.10m程度高く、東西では標高差が約0.5mあり、東側が低い。これは、調査の結果、近世期に耕作地の整備がおこなわれ、現地では北東部側が一段低くなっていたため、その影響によるものと考えられる。

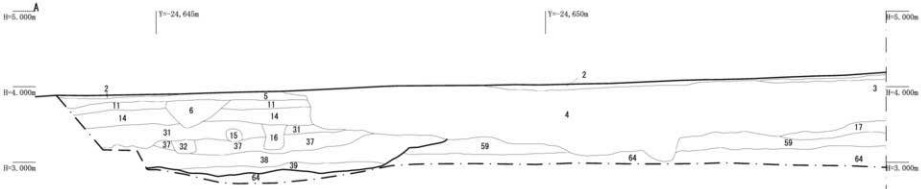
なお、後述するが、特に調査区の南側では、地山層で地震による液状化がみられ大規模な地震の痕跡が確認できるとともに、旧河道に向かって北側から徐々に地盤が緩くなる状況を確認した。

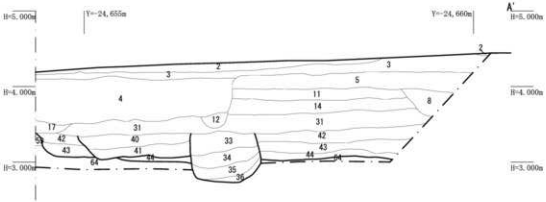
調査区の基本層序は場所により異なるが概ね一定である。調査区南側では液状化により地山層が場所により異なっている。基本層序は上から順に以下のとおりである。

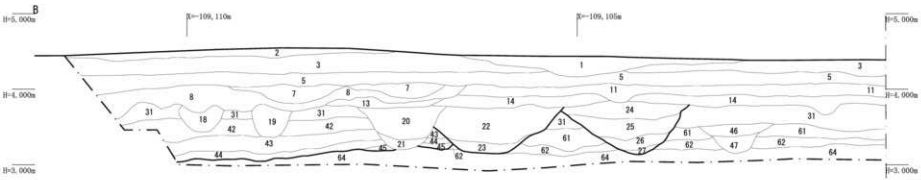
1：客土（7.5YR4/1　褐灰色土～砂質土）
2：耕土（5B5/1　青灰色土～粘質土）
3：床土？（2.5Y6/4　にぶい黄色砂質土）
4：近世以後の耕土または堆積層（7.5YR3/3　褐色砂質土）
5：中世の遺物包含層（10YR3/2　黒褐色砂質土）
6：地山　（10YR5/4　にぶい黄褐色（地震により５層ブロックがはいる）
7：地山（5Y8/6　黄色砂～粗砂）

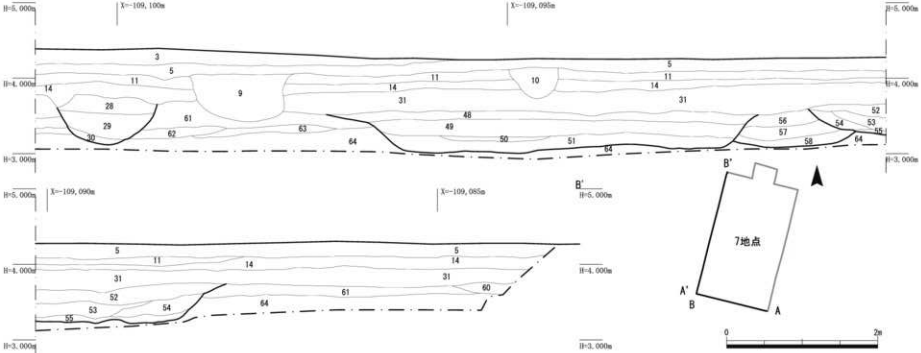
1は表土である。主に北西半部でみられ、南側では削平されて2が表土となる。また、東側では、近年の隣接地の工事の際に敷かれたRCによる整地もみられる。3は近世～近代の耕作にともなう耕土である。調査区北東部では同様の層位が2段に分かれて落ち込んでおり、耕作地の境界部があったものと考えられる。4層も耕土と考えられるが、機械でこの層まで掘削しているため、遺物からの年代比定は難しい。５は中世の遺物を含む包含層である。この層上面から人力掘削をおこない、遺物は「包含層」で取り上げている。6は地山であるが、地震の際の液状化で５層と混在した層位である。遺構は基本的にこの層の上面で検出しているが、場所により遺構検出が難しかったため、この層を除去した部分もある。7は地山である。場所により異なり一定していない。特に、調査区南部は地震の影響で液状化しており、色調・土性が異なる場所もあった。

以上が7地点の基本層序である。ただし、調査区北東部は中世～近世の耕作にともない7層まで削平されており、4層・５層がみられなかった。なお、地震痕跡に関しては、地質学の知見をえるため、断面の剥ぎ取りと専門家による土壌分析用のサンプルを取っている。


A
H=5.000m
Y=-24,645m
Y=-24,650m
H=5.000m
H=4.000m
H=4.000m
H=3.000m
H=3.000m


H=5.000m
Y=-24,655m
Y=-24,660m
A'
H=5.000m
H=4.000m
H=4.000m
H=3.000m
H=3.000m


B
H=5.000m
X=-109,110m
X=-109,105m
H=5.000m
H=4.000m
H=4.000m
H=3.000m
H=3.000m



1. 5GY6/1 オリーブ灰色土（礫を含む） 現代のRC整地土
2. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 客土
3. 7.5YR4/1 褐灰色土～砂質土 客土
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 (5Y8/8 黄色シルトブロックを含む) 撹乱
5. 5B5/1 青灰色土～粘質土（緑りあり） 耕土
6. 10YR3/3 暗褐色土
7. 7.5Y6/2 灰オリーブ色土
8. 5Y6/6 オリーブ色砂質土＋シルト
9. 2.5Y2/1 黒色土＋粘質土 撹乱
10. 7.5YR3/3 暗褐色土 撹乱
11. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土 床土
12. 2.5Y4/2 暗灰黄色土～砂質土 耕作溝
13. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
14. 7.5YR4/3 褐色砂質土 近世以降の堆積土
15. 10YR3/2 黒褐色土～粘質土 粘質
16. 10YR3/2 黒褐色砂質土 遺構埋土（中世以降）
17. 10YR4/4 褐色砂質土
18. 7.5Y4/1 灰色砂質土
19. 7.5Y4/1 灰色砂質土（貝殻を多量含む）
20. 10YR3/3 暗褐色砂質土 遺構埋土
21. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂 遺構埋土
22. 10YR3/3 暗褐色砂質土 SD7081埋土
23. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 SD7081埋土
24. 10YR3/2 黒褐色砂質土～砂 SD7082埋土
25. 10YR3/1 黒褐色砂質土～砂 SD7082埋土
26. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂 SD7082埋土
27. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂 SD7082埋土
28. 10YR2/1 黒色砂質土 SD7097埋土
29. 10YR3/3 暗褐色砂質土 SD7097埋土
30. 10YR5/2 灰黄褐色砂 SD7097埋土
31. 10YR3/2 黒褐色砂質土 中世の遺物包含層
32. 2.5Y7/3 浅黄色砂～砂質土 遺構埋土
33. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂～砂質土 SK7164埋土
34. 10YR3/3 暗褐色砂質土 SK7164埋土 ＊常滑焼壁出土
35. 10YR3/3 暗褐色砂質土＋2.5Y6/4 にぶい黄色砂 SK7164埋土
36. 10YR6/6 明黄褐色砂 SK7164埋土
37. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土 SK7141埋土
38. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 SK7141埋土
39. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質土 SK7141埋土
40. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 SK7168埋土
41. 2.5Y5/4 黄褐色砂質土 SK7168埋土
42. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 SB7143埋土
43. 2.5Y5/3 黄褐色砂～砂質土 SB7143埋土
44. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂 SB7143埋土
45. 10YR3/2 黒褐色砂質土 SB7143埋土
46. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂～砂質土 遺構埋土
47. 2.5Y3/1 黒褐色砂～砂質土 遺構埋土
48. 10YR2/1 黒色砂質土（砂粒子少量・遺物を多量含む） SD7135埋土
49. 10YR1.7/1 黒色砂質土（遺物を多量含む） SD7135埋土
50. 5Y3/2 オリーブ黒色砂 SD7135埋土
51. 5Y6/4 オリーブ黄色砂 SD7135埋土
52. 10YR2/1 黒色砂質土～砂（遺物を多量含む） SD7136埋土
53. 10YR1.7/1 黒色砂～砂質土（遺物を多量含む） SD7136埋土
54. 10YR4/4 褐色砂 SD7136埋土
55. 2.5Y5/3 黄褐色砂 SD7136埋土
56. 2.5Y3/2 黒褐色砂質土（遺物を少量含む） SD7137埋土
57. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土 SD7137埋土
58. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂 SD7137埋土
59. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 地山
60. 10YR4/4 褐色砂 地山
61. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂 地山
62. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂 地山
63. 2.5Y8/3 淡黄色砂 地山
64. 5Y8/6 黄色砂～粗砂 地山

図50 7地点西壁・南壁土層断面図

Ⅱ　検出遺構

7地点では主に溝、土坑、ピット、竪穴住居、方形周溝墓などを検出している。これらは、弥生時代中期～古墳時代前期、古代（8世紀後半～9世紀）、中世、近世以後の4時期に区分でき、断続的に生活が営まれた状況を確認できた。

弥生時代～古墳時代については、調査区の南側で竪穴住居跡が8棟検出されているため、当調査区内にも建物群が広がっているものと考えたが、調査結果は異なり、墓域が広がっている状況が明らかとなった。この墓域は調査地より100m程度北側でまとまって見つかっているが、今回の調査により当地まで広がっている状況が明らかとなった。以下、時期別に遺構の詳細を報告する。

i　弥生時代～古墳時代の遺構

弥生時代～古墳時代の遺構は方形周溝墓4基、土坑1基を検出している。以下、これらについて詳細を報告する。なお、方形周溝墓の規模については、墳丘が残存していなかったため、墳丘規模については不明瞭な点が多い。そのため周溝の外周で規模を報告する。

SZ7178（図51・写真28-96～34-110）　調査区南側で検出した南北幅約9.8m、東西幅約11.7mの方形周溝墓である。墳丘は残存しておらず、埋設坑も確認できなかった。周溝は完周せず、四隅が途切れる四隅陸橋型である。各溝にはそれぞれ遺構番号を付加して調査をおこなった（北：SD7140、南：SD7138、東：SD7134、西：SD7139）。SD7140に関しては、後述するSZ7177の周溝SD7172と重複関係にある。断面観察からみられる重複関係は、SD7172が上位にあり、SD7141の北肩を削平している状況にあるが、両者の埋土は酷似しており平面での重複関係は不明瞭であった。そのため、上層部の遺物の掘り分けは行えていない。

また、SZ7178の各周溝規模は、SD7134：長軸5.34m、幅2.25m、深さ0.73m。SD7138：長軸7.30m、幅1.85m、深さ0.55m。SD7139：長軸5.07m以上、幅1.13m以上、深さ0.42以上。SD7141：長軸7.83m、幅1.70m前後、深さ0.49mを測る。SD7139に関しては、近世以後の耕作により上層部を大幅に削平された状況であった。

SD7134・7138・7140はそれぞれ上・中・下の3層に大別して掘削をおこなった。これは、検出時にSD7138付近から廻間Ⅱ式の古式土師器がまとまって出土したためであるが、この種の四隅切の方形周溝墓は、清須市と名古屋市西区にかけて広がる朝日遺跡の類例を見る限り、数あるる方形周溝墓の中でも古手の様相を示すものであり、出土遺物と遺構の年代に違いがある可能性があったためである。SD7140上層から出土した土器類のうち、ごく少量の混入と考えられる中世の土器類を除くと、弥生土器と古式土師器に大別できる。具体的な数値は以下の表1に示した（ただし、SD7140はSZ7177との重複関係にあるため上層部はSD7172との明確な掘り分けができなかったため参考にならない可能性がある。また、SD7139は上層部が後世の耕作により削平されているため、表からはずしている）。

表1　SZ7178周溝出土土器内訳表

		SD7134		SD7138		SD7140	
		弥生	廻間	弥生	廻間	弥生	廻間
出土点数	上層	65	9	102	123	738	161
	中層	72	6	90	2	100	13
	下層	18	－	16	－	－	－

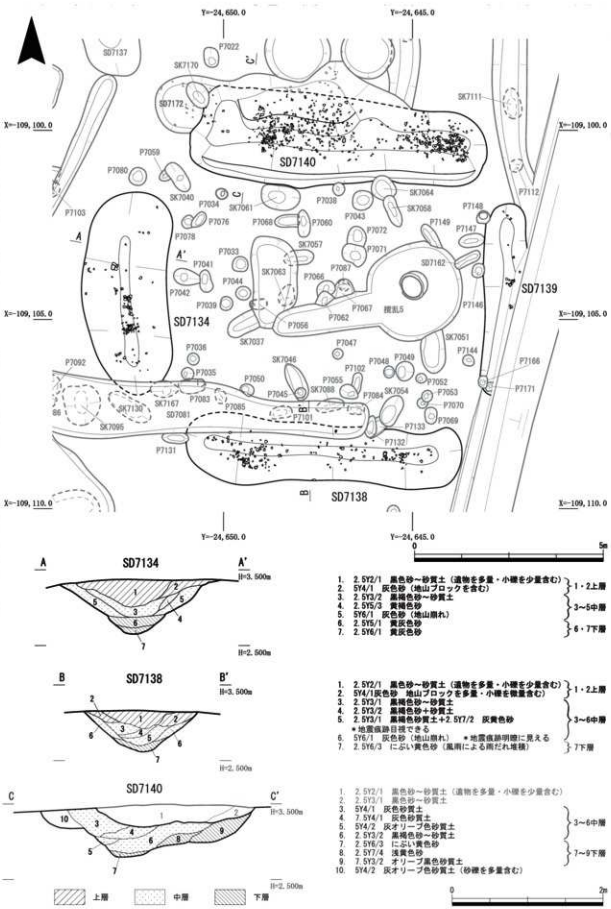


図51 SZ7178平面図・断面図

表1から読み解けるのは、上層から下層に向けて廻間式の一群の数量が減少する傾向にあることである。特に下層に関しては廻間式土器が全く出土していない。この状況は、周溝の埋没時期が関係しているものと考えられ、中層の一部や上層が、近接する集落に住む人々が廻間式土器を使用する時期まで埋まっていなかったことや、その時に周溝の掘り直しがおこなわれたことが考えられる。ならば、SZ7178の築造年代は下層の遺物から判断することができる。下層から出土した土器類は、貝田町式のもので、弥生時代中期に比定される。ただし、この年代を築造年代とするには疑問が残る。

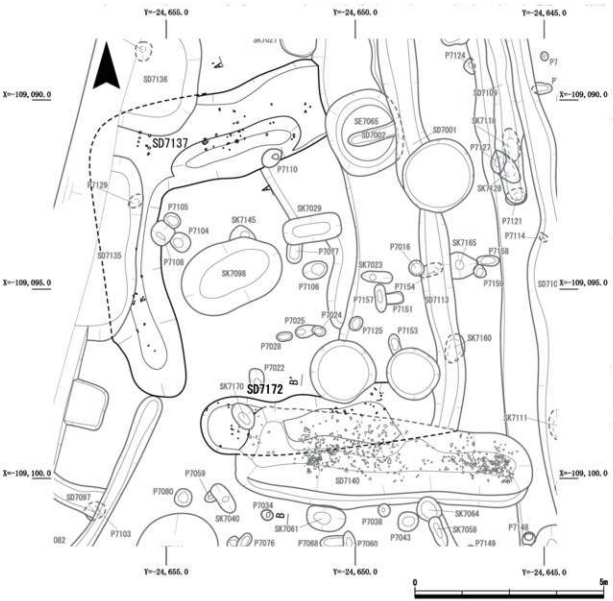
SZ7177（図52・写真35-113） SZ7178の北側に隣接する周溝の外周で一辺約10.5mの方形周溝墓である。南西部に陸橋があり連結していないため、2条の周溝に分けられる。そこで、北側の周溝をSD7137、南側をSD7172とした。SD7137に関しては、西側部をSD7135とSD7136に削平される。また、周溝の東部分が後世の耕作により削平されていた。したがって、周溝の東側部が連結するものなのか不明である。西側部は北西の隅が連結されていたが、南西隅は途切れているため、周溝の型は1か所に陸橋がある型もしくは、対角部分に陸橋がある型のいずれかであると考えられる。

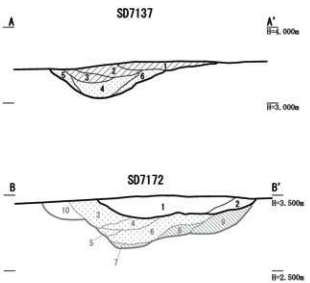
周溝の規模はSD7137が幅2.60m、深さは最深部で0.46m、SD7142は幅1.66m以上、深さ0.23mを測る。SD7137については、北側に一部が深く掘られていたが、それ以外の深さは0.25m程度で非常に浅かった。SD7172はSZ7178の北周溝SD7140と重複している。一般的に併存する方形周溝墓の場合、隣接する周溝を共有するものがあるが、SZ7177の場合はSD7140を削平しており、これに該当しない。ただし、SD7140とSD7172の埋土は酷似しており、埋没年代と考えられる土器類に大きな違いがないため、SD7140が完全に埋没したのちに掘削されたものではない蓋然性が高い。

出土遺物に関してはすべて周溝から出土したものである。SD7172については、SD7140と明確な掘り分けを行えなかったが、明確に範囲が異なる周溝西部からは主に弥生時代後期の土器類が５点、廻間式土器が1点出土している。SD7137については、多量とはいえないが、若干数が出土している。遺物量が少ないのは、他の遺構に削平されていることや溝の掘削深度が浅いことも要因の一つであろうが、他に、周溝の上層部が削平されている可能性もある。遺物は上・下層に分けて取り上げたが、上層では弥生土器が42点、廻間式土器が40点でほとんど同数が出土している。一方下層では弥生土器が5点出土しており、廻間式土器は出土していない。この情報からすると、SD7137は廻間式土器の時代、つまり古墳時代初頭に比定できるものと考えられるが、SZ7178と同じように周溝が長期間埋没していない可能性もあり、年代の特定は難しい。また、供献土器と特定できるような遺物の出土状況ではなかったため、比定年代を限定することそのものを回避せざるを得ない。したがって、SZ7177の築造年代は弥生時代後期～古墳時代初頭のある時期とする。

SD7135（図53・写真36-114～37-115） SZ7177の西側で検出した長軸5.71m、短軸1.67m以上、深さ0.66mの溝状遺構である。検出時はSD7135・SD7136・SD7137が重複しており、検出が難しかったため任意で５cm程度掘り下げて検出をおこなった。遺構の性格は、後述するSD7136から方形周溝墓に伴うと考えられる小形の供献土器と考えられる高杯が出土しており、埋土や土器の出土傾向が類似するため、方形周溝墓の周溝に相当するものと考えられる。埋土は上・中・下層に大別でき、掘削および遺物取り上げもこれに準じておこなった。

遺物は土器類が135点出土しており、その内訳は弥生土器52点と廻間式土器83点が出土している。下





1. 10YR3/1 黒褐色砂質土（小礫を微量含む）
2. 10YR3/2 黒褐色砂質土～砂（小礫を微量含む）
3. 10YR2/3 黒褐色砂質土～砂（小礫を微量含む）
4. 10YR3/3 暗褐色砂～粗砂
5. 10YR3/4 暗褐色砂
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂

1～3上層

4～6下層

上層　下層

1. 2.5Y2/1 黒色砂～砂質土（遺物を多量・小礫を少量含む）
2. 2.5Y3/1 黒色砂～砂質土
3. 5Y4/1 灰色砂質土
4. 7.5Y4/1 灰色砂質土
5. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土
6. 2.5Y3/2 黒褐色砂～砂質土
7. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂
8. 2.5Y7/4 淡黄色砂
9. 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂質土
10. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土（砂礫を多量含む）

0　2m

図52　SZ7177平面図・断面図

層からの遺物の出土は少なかったが、弥生土器3点と廻間式土器5点が出土しており、遺構の年代は廻間式土器を使用する古墳時代初頭と考えられる。なお、詳細は不明だが、後述するSD7136で出土した遺物も同様のものであるため、SD7136と組んで共に方形周溝墓の周溝である可能性がある。

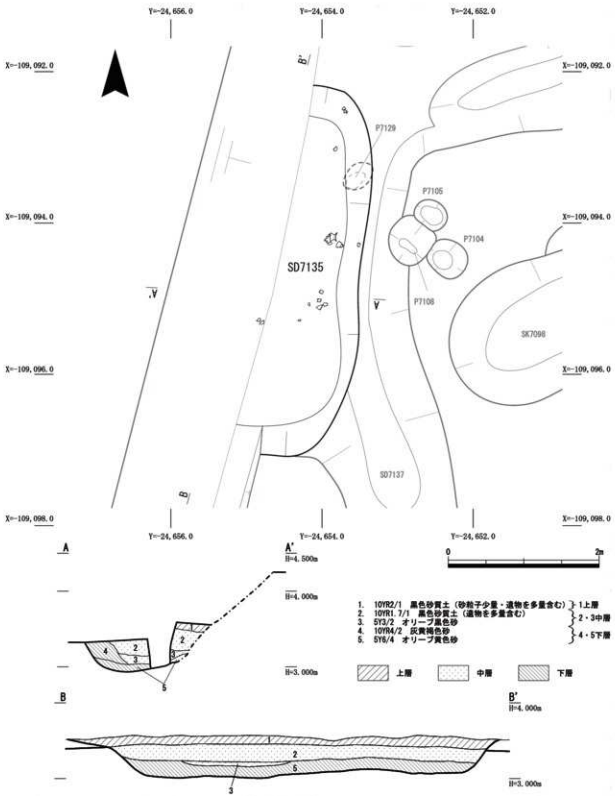


図53 SD7135平面図・断面図

SD7136（図54・写真37-119） SD7135の北側で検出した幅1.86m、深さ0.46mの溝状遺構である。西側延長部は調査区外に延びる。また、SD7137の北西隅部を削平する。SD7135同様に検出が困難であったため、上層の一部をSD7135・SD7137と共に5cm程度掘り下げて検出した。遺構の性格はSD7135と類似する埋土の堆積状況や、方形周溝墓の供献土器と考えられる小形の器台が出土しているため、SD7135と組んで方形周溝墓の周溝と考えられる。埋土は上・中・下層に分かれ、これに準じて遺物の取り上げを行った。

出土遺物は主に土器類で、弥生土器と廻間式土器に大別される。特に層位による遺物の違いはなく、弥生土器93点、廻間式土器281点が出土した。下層から廻間式土器が出土している点で、遺構の年代は古墳時代初頭以後に比定できることは間違いない。また、後述するSK7163との関連でも同じことがいえる。SK7163はSD7136に削平されており、遺構内に廻間Ⅰ式の土器がみられたことから、それ以後の周溝と考えることができる。

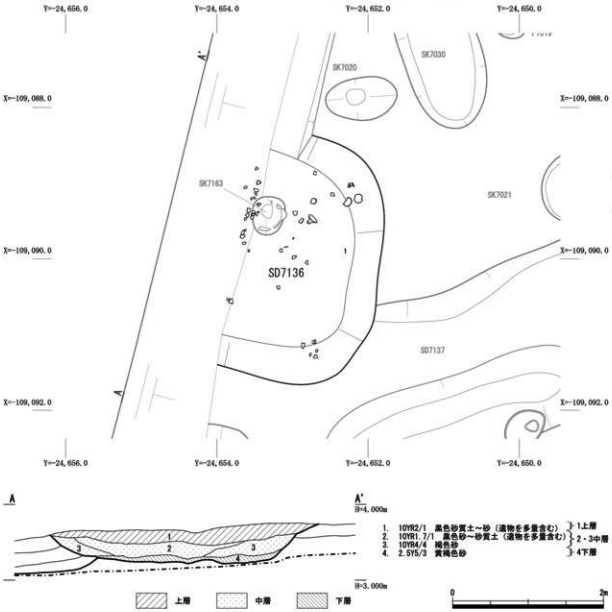


図54 SD7136平面図・断面図

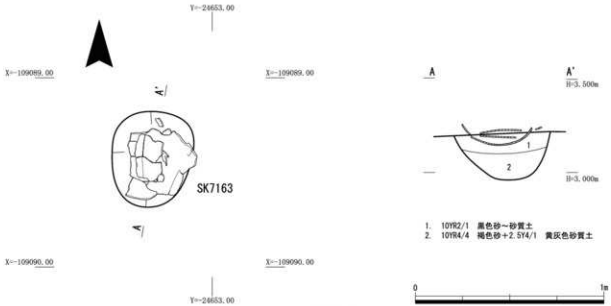


図55 SK7163 土器出土状況図

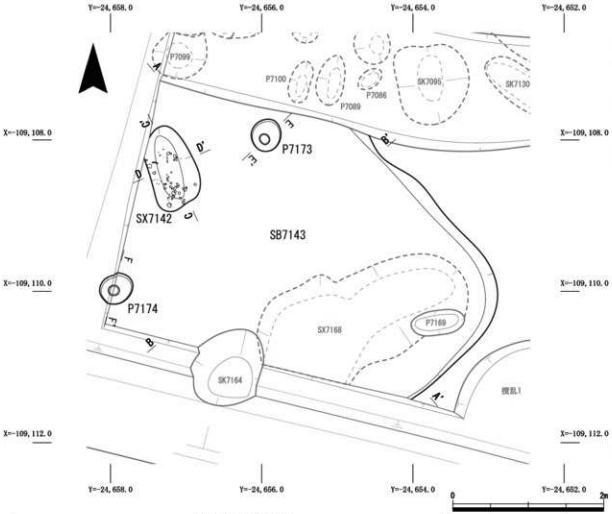
SK7163（図55・写真38-120～123） SD7136の底面で検出した長軸0.40m、短軸0.32m、深さ0.19mの土坑の遺構である。SD7136の供献土器据付け坑とも考えられるが、出土した土器は少なくとも2個体以上あるため、据付け坑とは考えにくい。出土した土器は破片総数で14点、いずれも廻間式土器とその併行期に比定される土器で、丸底壺の口縁および頸部と、直口壺口縁および体部が出土した。性格は不明ながら、SK7163がSD7136の底面で検出される状況は、SD7136を周溝とする方形周溝墓の築造年代の決め手となり、SD7136は弥生時代まで遡らないことがいえる。

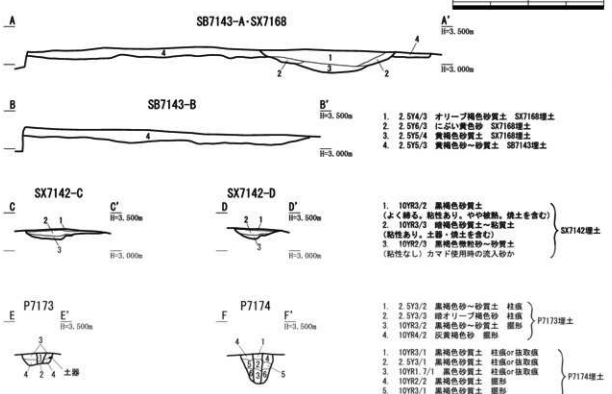
SB7143（図56・写真38-124～39-125） 調査区南西隅で検出した竪穴住居である。調査区端で検出したため、1棟すべて検出できていないが、平面形は方形と考えられ、検出できた部分で、長軸5.36m、短軸3.80m、を測る。検出面が床面であったと考えられ、断割を行った結果、5cm～10cm程度の貼床をおこなっている。また、壁溝は平面・断面ともに確認できなかった。これは、当地が砂堆上に立地しているため水捌けが良く必要なかったものと考えられる。

貼床土を除去した状況で西側の支柱穴を検出している。P7173、P7174がこれに該当する。P7173は長軸0.41m、短軸0.40m、深さ0.16m、平面円形の柱穴である。P7174は、長軸0.44m、短軸0.43、深さ0.40m、平面円形の柱穴である。南側の支柱穴はSX7168に削平されており残存していなかった。SX7168は床上面から掘削されSB7143を削平しており、支柱穴も削平しているためSB7143より後出する遺構であろう。

また、竈と考えていたSX7142を住居西側で検出している。規模は長軸1.06m、短軸0.60mを測り、平面楕円形である。竈と考えたのは、住居の壁付近に配置されることや、SX7142の検出面で焼土の小塊が多くみられたためである。しかし、竈の構築材となる粘土などは確認されてない。そこで炉跡を想定することもできるが、炉跡で一般的にみられる炭化物などは皆無であり、掘削の結果、出土したのは土器類および、焼土の小塊であった。したがって、現状は性格不明とせざるを得ない。ただし、焼土がみられる点では、竈に近い機能を有するものとして考えたい。

出土した遺物は主に土器類で、破片総数で150点出土している。大半が古式土師器で、少量の弥生土器がみられる。検出時には、床面と考えられる上面で須恵器の出土があった。これらは完形に近い小





1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 SX7168埋土
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂 SX7168埋土
3. 2.5Y5/4 黄褐色砂質土 SX7168埋土
4. 2.5Y5/3 黄褐色砂～砂質土 SB7143埋土

SX7142埋土
1. 10YR3/2 黒褐色砂質土
(よく締る。粘性あり。やや被熱。焼土を含む)
2. 10YR3/3 暗褐色砂質土～粘質土
(粘性あり。土器・焼土を含む)
3. 10YR2/3 黒褐色微粘砂～砂質土
(粘性なし) カマド使用時の流入砂か

P7173埋土
1. 2.5Y3/2 黒褐色砂～砂質土 柱痕
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂 柱痕
3. 10YR3/2 黒褐色砂～砂質土 掘形
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂 掘形

P7174埋土
1. 10YR3/1 黒褐色砂質土 柱痕or抜取痕
2. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土 柱痕or抜取痕
3. 10YR1.7/1 黒色砂質土 柱痕or抜取痕
4. 10YR2/2 黒褐色砂質土 掘形
5. 10YR3/1 黒褐色砂質土 掘形
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂～砂質土 掘形

図56 SB7143平面図・断面図

形の平瓶や甕の小片で、平瓶は7世紀後半～8世紀に比定できるものである。また、7世紀以降に比定できる製塩土器の脚部もみられた。こうした状況から、竪穴住居の年代が7世紀後半以後とも考えられるが、これらの土器が住居の床面上で原位置を保つものではないと考えられ、住居廃絶後の堆積に入った遺物と考えられる。また、調査区の南側道路では、古墳時代初頭～前期の竪穴住居が8棟検出されており、この調査区と本調査区は5ｍ未満の距離で接しているため、これらと同時期の竪穴住居と考えるべきであろう。

ⅱ　古代の遺構

古代の遺構は土坑が1基確認された。

SK7141（図57・写真40-133～134）　調査区南東隅で検出した土坑状の遺構である。調査区端に位置しており遺構の一部を検出できたに過ぎず、大部分は調査区外南東側に延長していたため、検出した範囲での最大値を提示する。遺構の規模は、長軸4.02m以上、短軸1.67m以上、深さ0.49mを測る。地震により液状化現象が顕著にみられる場所であったため、非常に検出が困難であった。また、北側で大きく撹乱を受けている。埋土は3層に分けられるが、遺物が出土したのは上の2層のみで最下層の3層から土器類は出土していない。

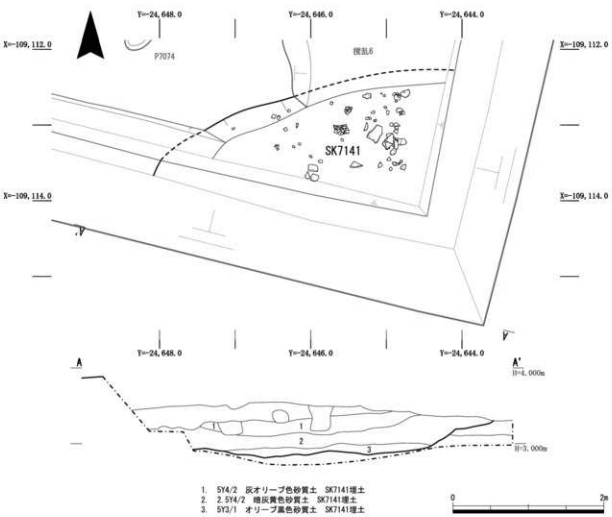


図57　SK7141土器出土状況図・断面図

出土した遺物の多くは須恵器で、坏蓋、杯身、甕、壺、瓶などの器種がみられる。いずれも8世紀後半～9世紀に比定できるものである。遺構の性格は不明だが、出土した須恵器はすべて破片であり、完形のものがないことから、土器やその他のゴミを捨てるための廃棄土坑であった可能性がある。

iii　中世の遺構

中世の遺構は、井戸1基、動物埋葬土坑2基、溝2条のほか、性格不明の土坑、ピットを多数検出している。このうち、主要な遺構と考えられる遺構について詳細を報告する。

SK7032（図58・写真41-135～136）　調査区北西部で検出した長軸0.78m、短軸0.54m、深さ0.17mの土坑である。内部に犬が埋葬されていた。犬は白骨化しており、全長約0.6m、頭蓋骨の長さ約0.15mを測

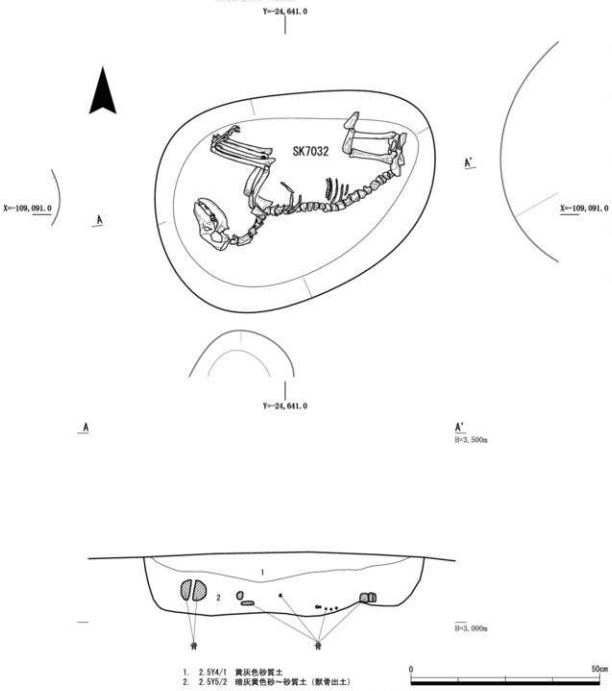


図58　SK7032獣骨出土状況図・断面図

り、小型の犬であるといえる。埋葬は西側に頭、北側に足を向けた状態で安置されており、状態からして丁寧に埋葬されたものと思われる。したがって、野犬などではなく、飼犬などのように飼いならされた犬であった蓋然性が高い。

犬骨とともに弥生土器の小片が1点出土しているが、年代の決め手にはならないと考えられる。AMSによる年代測定では、587±25という年代が測定されており、15世紀に比定できる遺構であることが判明している。

SK7161（図59・写真42-137～141） 調査区北端で検出した馬埋葬坑である。近世以降に比定できる畑を区画するSD7109掘削後に底面から検出した。検出当初は遺構の範囲が調査区北壁の外側に広がっていたため、南側の一部を掘削したところ、獣骨が良好な遺存状態で出土したため、北側に拡張をおこなった。土坑は平面不整形で、長軸2.50m、短軸2.15m、深さ0.44mを測る。また、P7175とSD7176に東側一部を削平される。

出土した馬は、頭部と右前脚および胸部と肩甲骨を欠いており、不自然ではあるが、頭部は残存していた。これについて、頭部と右脚部がSK7161より後出すると考えられるSD7109掘削時に削平されたものと考えたが、臼歯などが土坑内から散在した状態で出土しており、頭部は埋葬時から切り離されていた可能性がある。また、右前脚の先端部位も散在した状態で出土しているため、埋葬時に切り離されていた可能性がある。ただし、前脚と後脚が縛られたような状態に各脚の先端が1か所にまとまっているため、埋葬のため運ばれてきた可能性があり、土坑内に馬を据えた後に頭部や胸部、右前脚を解体するという不自然な状況にある。これがどのような理由で縛られて廃棄されたのかは不明とするが、この土坑の性格を把握する上で重要な痕跡といえる。

なお、AMS法による年代測定結果は、587±25年という年代であり、15世紀頃のものであることが判明した。これは、先述したSK7032に埋葬された犬の年代と近似した年代であり、近接する場所で動物埋葬土坑が検出されたことになる。

馬骨以外の出土遺物は弥生土器および古式土師器の小片と山茶碗や常滑焼の小片などが出土している。出土量は古式土師器が非常に多く出土しているが、常滑焼などの中世の土器類が出土している点において、年代測定の結果とも一致する。

SE7065（図59・写真43-142～145） 調査区北側中央付近で検出した長軸2.20m、短軸2.02mの平面形隅丸方形の掘形の井戸である。深さは崩落により正確に測れなかったが、2.67m以上を測った。検出面では平面形が隅丸方形の掘形であるが、検出面から約0.40m下で直径約1.70mの平面円形に変化している。

井戸枠には常滑焼大甕の底部を打ち欠いて積み上げて井戸枠としている。大甕は破片の個体数から少なくとも4段積んでいたものと考えられる。しかし、3段目の大甕は破片となっており、口縁部などは最下段の大甕の中から出土した。この状況から、下から3段目から上は、井戸枠の据替が行われた蓋然性が高い。これを示すように下から2段目より上段部分では大甕の直径幅より径が狭い抜取り痕跡を確認しており、井戸枠の据替を行われた際には大甕より径が小さいものを使用したものと考えられる。ただし、据替た井戸枠は抜き取られており出土していない。

最下段の大甕の中からは、大甕の破片が出土した。その中には大甕の底部がみられ、据え付ける際に

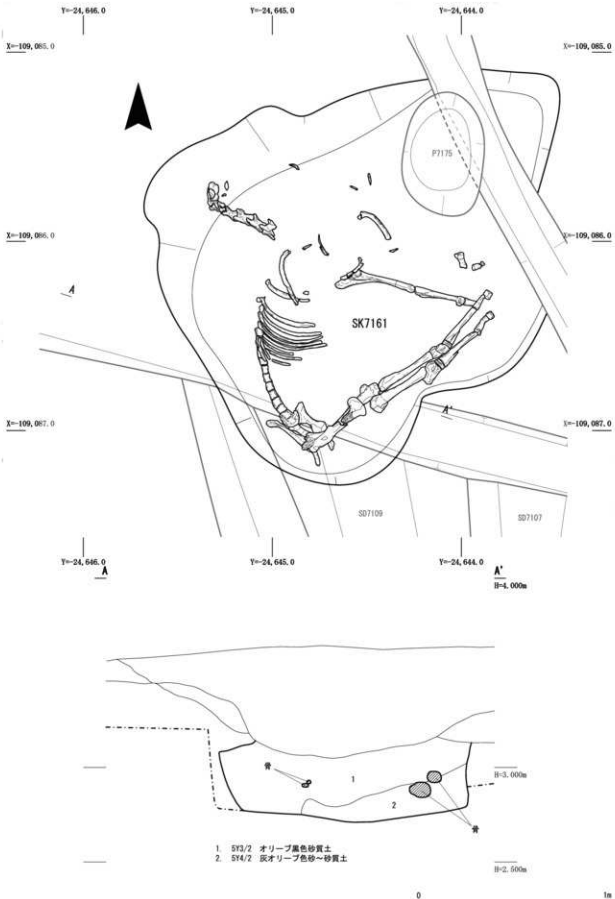


図59 SK7161獣骨出土状況図・断面図

その場で大甕の下部を打ち欠いて加工していたものと考えられる。また、その底部の中に大甕の成品としては自立できないほど焼歪みの顕著なものがあり、水甕など本来の大甕としての用途で使用できないために井戸枠に転用されたものと考えられる。また、最下段のものとその上の大甕には胴部中央部に内側から穿孔している。3段目は不明だが、この穴は水位調整などの目的であったと考えられる。

このような井戸は、畑間・東畑遺跡をはじめ、常滑市や東海市の中世の遺跡において、常滑焼の大甕を転用した類例は多くみられ、常滑焼の生産地から近いこともあり、焼歪みなどによるいわゆる不良品が井戸枠として使用されたものと考えられる。

なお、SE7065に使用された常滑焼大甕は口縁部の形状から、13世紀後半に生産されたものと考えられ、同じ頃に構築された井戸と考えることができる。

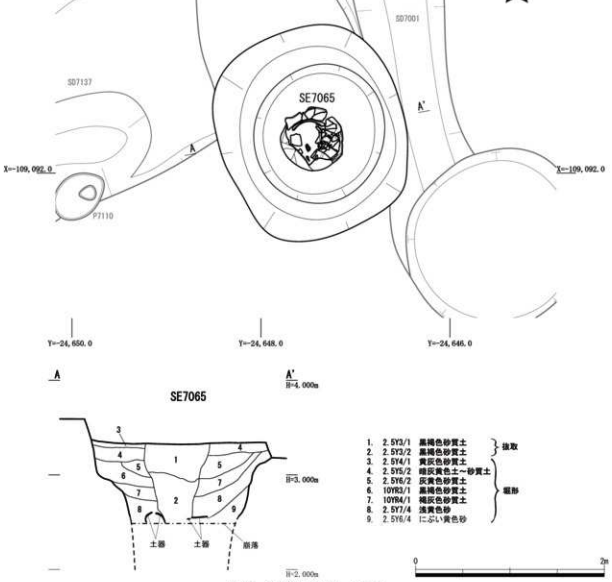


図60　SE7065平面図・断面図

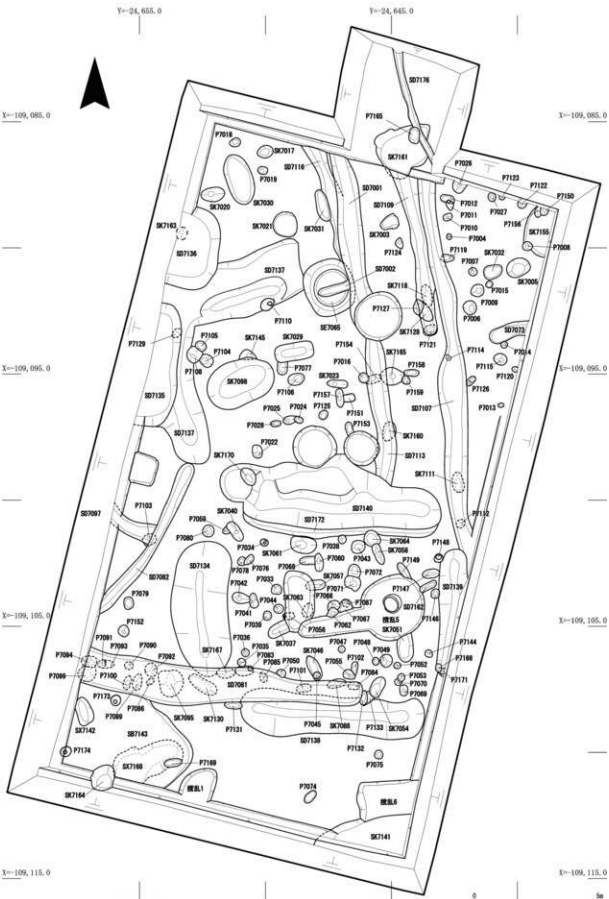


図61　7地点遺構平面図

Ⅲ　出土遺物

7地点では破片総数で9099点と非常に多くの遺物が出土している。その内容は、年代、種別ともに多彩であるが、遺構からまとまって出土した例は少ない。その中で、SZ7177・7178の各周溝や、SK7141、SE7065はまとまって出土しているため遺構別で、それ以外はまとめて掲載した。以下、遺構別順に記述する。

ⅰ　SZ7177出土遺物

SZ7177はSD7137とSD7172の2つの周溝から遺物が出土している。小片が多いため、図化できたのは、図61に掲載した5点である。いずれもSD7137から出土している。

高杯（図62-284・写真62-101）　284は高坏の脚部および坏部底部の小片である。小片である上、表面の磨滅が著しいため情報は少ないが、脚部上端に櫛描横線文がみられる。また脚部には復元直径約1.6㎝の円形の透孔が3ヶ所にある。山中式に比定できる。

小型平底鉢形土器（図62-285・写真62-102）　285は小型の鉢形の土器である。口径7.15㎝、器高7.6㎝を測る。外面は全体にハケ目調整で、一部に指圧痕が残る。内面はやや丁寧なタテナデ調整。内面底部には指頭圧痕が残る。小型壺の胴部より上を切り離したような形状で、特殊なもののように見受けられる。SZ7177の供献土器である可能性がある。

台付甕（図62-286・写真62-103）　286は台付甕である。復元口径12.4㎝を測る。非常に薄手で硬質な焼成である。内・外面ともに丁寧なヨコナデ調整で仕上げるが、ナデ調整の前にハケ目調整を入れたことが痕跡から窺える。小片であるため正確な年代はわからないが、焼成からみると、他の廻間式のものと類似するため、廻間式の時期に比定できる。

S字状口縁台付甕　（図62－287・写真62－104）　287はいわゆる「S字甕」である。復元口径37.4㎝を測る。口縁部は丁寧なヨコナデ調整。胴部は鋭いハケ目調整。小片のため情報は少ないが、廻間Ⅰ～Ⅱ式に比定できる。

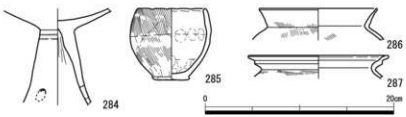


図62　SD7137出土土器

ⅱ　SZ7178出土遺物

SZ7178はSD7134、7138、7139、7140の4つの周溝を検出している。ここでは各周溝から出土した遺物を順に掲載する。

A　SD7140出土土器

SD7140から出土した土器類は概ね弥生時代中期前葉と、弥生時代後期～古墳時代初頭に大別できる。以下、器種ごとに記述する。

大型壺（図63-288～290・写真62-105～106）　288・289は条痕系の大型壺である。両者ともに口縁部に上から押引文、押圧突帯を飾る。押圧突帯の下は条痕文である。288は口縁内側に刻みを入れている。主に三河地方でみられるものと類似しており、水神平式に比定できる。

290は外反口縁の壺である。口縁端部に櫛描きの波状文を、口縁内側に扇型文を飾る。弥生時代後期、

山中式に比定できる。

厚口鉢（図63-291・写真62-107） 291は条痕文系厚口鉢である。小片のため細部の詳細年代ともに不明である。

細頸壺（図63-292・写真62-108） 292は細頸壺である。櫛描きの鋸歯文を飾る。口縁が欠損しているため年代などは不明である。

高杯（図63-293～299・写真63-109～112） 293～296は高坏の脚部である。293・294は横位直線文と斜位の刺突文が上下交互に装飾される。295は残存部が少ないが294や295と同じ型の高杯脚部である。296は小型高杯の脚部。293～296はいずれも弥生時代後期山中式に比定できる。

297～299も高杯脚部である。いずれも丁寧なヘラミガキ調整で仕上げる点で共通する。これらは古墳時代初頭廻間式に比定できる。

台付甕（図63-300～307・写真63-113～64-120） 300～303はく字口縁台付甕である。300～302はいずれも体部は粗いハケ目調整。303は頸部に横位櫛描直線文と刺突文を飾る。300・301は廻間Ⅰ式、302・303廻間Ⅱ式に比定できる。

304～307は台付甕の台部である。304は小型台付甕である。305とともに廻間Ⅰ式に比定できる。306・307は台部端部を内側に折り返しており廻間Ⅱ式以降に比定できる。

小型坏型土器（図63-308・写真64-121） 308はいわゆるミニチュア土器と呼ばれるもので、坏型土器である。口径7.2cm、器高3.65cmを測る。平底の底部で、内外面ともに丁寧にヘラミガキ調整で仕上げる。廻間式期に比定できる。

小型手捏ね土器（図63-309・写真64-122） 309は坏型の手捏ね土器である。これもいわゆるミニチュア土器とよばれるものである。口径5.3cm、器高4.4cmを測る。

小型壺（図63-310～312・写真64-123～125） 310は小型の壺である。これもいわゆるミニチュア土器。復元口径3.9cmを測る。山中式に比定できる。311・312は小型広口壺である。底部形状は欠損しており不明。両者ともに外面は全面をナデ調整した後、体部のみハケ目調整をおこなう。口縁部はやや粗いヨコナデ調整。廻間式期に比定できる。

小型台付甕（図63-313・写真64-126） 313は小型の台付甕である。復元口径10.5cmを測る。胴部はハケ目調整で仕上げ、口縁は内外面ともに丁寧なヨコナデ調整。廻間式期に比定できる。

直口壺（図63-314・写真65-127） 314はやや小振りな直口壺である。平底でやや薄手のものである。頸部より上部は意図的に打欠いて欠失している可能性がある。全体的に磨滅しているが、全面的にヘラミガキにより仕上げられている。廻間Ⅰ式に比定できる。

器種不明土器（図63-315～316・写真65-128～129） 315・316は壺型の土器口縁である。受口状の口縁部小片で、口縁外側に櫛状工具による刺突文を飾る。形状から受口状の壺口縁である可能性が高い。ただし、316は鉢または太頸壺や有段口縁壺に類似する口縁のものがみられる。いずれも尾張平野部ではなく三河地域の土器の影響が濃い。廻間式期に比定できる。

S字状口縁台付甕（図63-317～318・写真65-130～131） 317・318はいわゆる「S字甕」である。両者ともに口縁部は丁寧なヨコナデ調整。胴部は鋭いハケ目調整。小片のため情報は少ないが、廻間Ⅰ～Ⅱ式に比定できる。

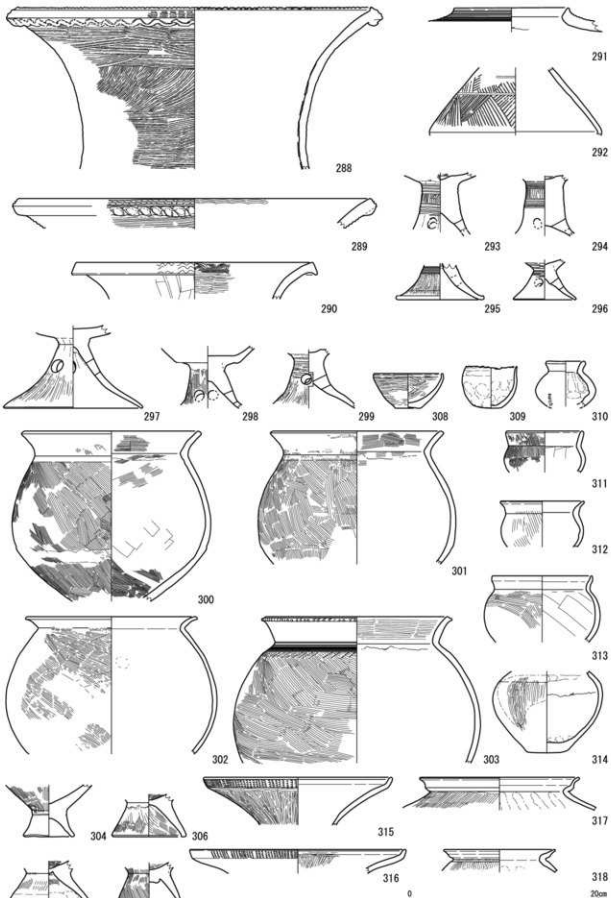


図63　SD7140出土土器

B　SD7134・7138・7139出土遺物

a　土器類

深鉢（図64-319～320・写真65-133・66-134）　319・320は条痕系鉢である。319は平底の鉢で体部に貝殻による条痕文を飾る。320は条痕系の鉢ではあるが、体部調整にハケ目を使用している。319はSD7134下層、320はSD7138中層より出土した。

長頸壺（図64-321～322・写真66-135～136）　321・322は長頸壺である。321は口縁が内反気味で受け口状を呈す。頸部直下に櫛描きの直線文と波状文を飾る。322は胴部上半部全面的に櫛描きの直線文、その下方に波状文を飾る。いずれも弥生時代中期後葉、高蔵式に比定できる。321はSD7139、322はSD7134中層より出土した。

無頸壺（図64-323・写真66-137）　323は無頸壺である。胴部の屈曲が強く、胴部上位には丸みがない。表面の磨滅が著しいため文様の有無は不明である。頸部は緩く直口気味に立ち上がる。頸部には現状で2ヶ所に焼成前穿孔がみられ、割り付けから復元すると、3ヶ所に穿孔があるものと考えられる。朝日式～貝田町式に比定できる。SD7134中層より出土した。

高杯（図64-324・写真65-132）　324は高坏の脚部である。直径1.2cm程度の透孔がみられる。外面は丁寧なタテ方向のヘラミガキで調整する。内面はヘラまたは板状工具で調整する。廻間Ⅰ式に比定できる。SD7138上層より出土した。

甑（図64-325・写真66-138）　325は甑の底部である。図面の穿孔は中心部のもので、割り付けから、外側5～6ヶ所に平面楕円形の穿孔があるものと考えられる。SD7138上層より出土した。

台付甕（図64-326・329～330・写真66-139）　326はく字口縁の台付甕である。口径がやや小振りである点に特徴がある。口縁は丁寧なヨコナデにより調整する。胴部外面はハケ目調整をしたあとで板またはヘラ状工具による粗いナデ調整で仕上げ、ハケ目は極一部のみ残存する。胴部内面も同様の工程であるが、外面に比べてハケ目が残っている。廻間Ⅰ式に比定できる。SD7134上層より出土した。なお、329は台部との接合部分の技法および形状から松河戸Ⅱ式に比定できる。

S字状口縁台付甕（図64-327～328）　327・328はいわゆるS字甕である。両者ともに小片であるため情報量は少ないが、口縁部は丁寧なヨコナデにより調整する。頸部はハケ目調整で仕上げている。SD7138上層より出土。

パレススタイル壺（図64-331・写真66-140～141）　331はパレススタイル壺である。口縁端部を厚手に作り、棒状工具による回線文と棒状浮文を飾り、この部分に赤彩がみられる。この部分は通常の単純口縁壺の端部に粘土を継ぎ足すような整形をしているが、割れ口に粘土接合の際にハケまたは、櫛状工具で刻みをいれて、粘土の接着面を大きくする技法をとっている。口縁部内面には羽状刺突文を飾る。廻間Ⅰ～Ⅱ式併行期に比定できる。SD7138上層より出土した。

有段口縁壺（図64-332・写真67-142）　332はいわゆる柳ヶ坪型壺とよばれる壺である。口縁上段部外面に羽状刺突文を飾る。段部外面は若干垂下する。口縁部の小片であることや、全体が磨滅により調整痕など不明な点が多い。廻間Ⅲ式に比定できる。

b　石製品

石皿（図64-337・写真67-146）　337は石皿である。安山岩を加工したもので、中央部に浅い窪みがあ

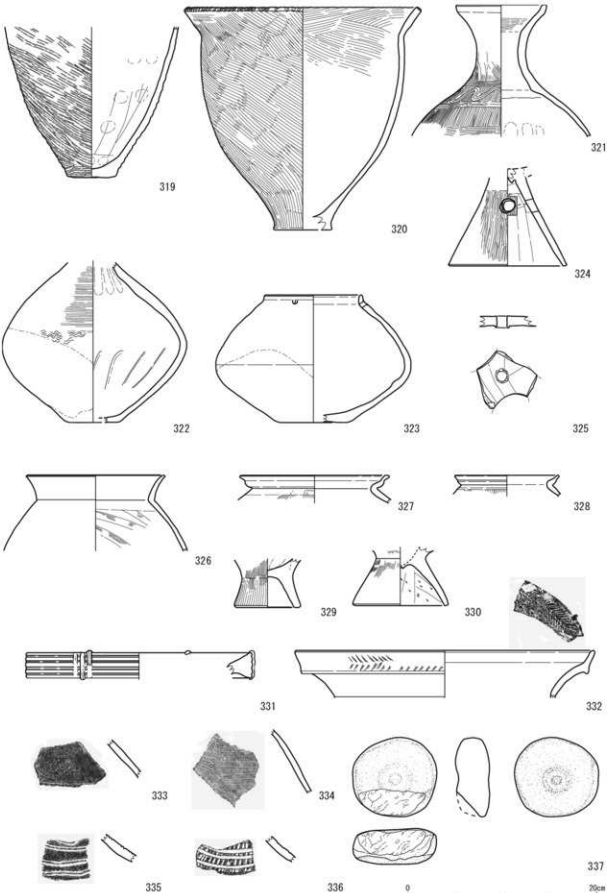


図64　SD7134・7138・7139出土遺物

り、擦痕が確認できる。また、側辺部にも擦痕が確認でき、全体形を整形している。また、下（裏面）にも僅かだが中央部に窪みがみられる。なお、全面に2次的に被熱を帯びた状況が看守できる。SD7138上層より出土した。

iii　SD7135出土土器

台付甕（図65-338～339・写真67-147～148）　338・339は台付甕である。338はやや小型なく字口縁の台付甕。胴部外面は粗いハケ目調整で仕上げる。内面は板状工具による粗いナデ調整で仕上げる。口縁部内外面ともにヨコナデ調整だが、一部にハケ目痕跡が残る。339は大型の台付甕である。

小型丸底壺（図65-340～341・写真67-149～150）　340は小型丸底壺である。口縁の内外面ともにハケ目調整のあとに丁寧なヘラミガキ調整で仕上げる。胴部外面はヘラミガキ、内面はヨコナデにより調整する。SD7135が方形周溝墓の周溝であるならば、供献土器の可能性がある。廻間Ⅲ式に比定できる。

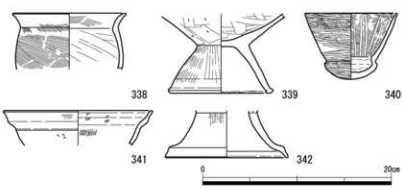


図65　SD7135出土土器

台付壺（図65-342・写真67-151）　342は台付壺の脚部である。体部を欠損するため全体の形状は不明である。端部に近い部分で段部となる。詳細な年代比定はできないが少なくとも廻間式期には属するものと考えられる。

iv　SD7136・SK7163出土土器

台付甕（図66-343～353・写真68-152～153）　343～353台付甕である。343～350はく字口縁の台付甕である。いずれも廻間Ⅰ式～Ⅱ式に比定できる。351はS字状口縁台付甕で、胴部外面に特徴的な粗いハケ目調整痕がみられる。廻間Ⅰ式に比定できる。

352・353は台付甕の脚部である。353は小型台付甕の脚部である。

高杯（図66-354～356・写真68-154～156）　354～356は高坏である。355～356に関しては脚の形状と坏部との接点の形状から高杯と判断した。354は高坏の坏部である。坏部はやや浅く、緩く内彎する形状を呈する。外面は丁寧なタテ方向のヘラミガキ、内面は丁寧なヨコ方向のヘラミガキ調整である。廻間Ⅲ式に比定できる。

器台（図66-357～358・写真68-157～158）　357～358は小型の器台である。両者ともに坏部中央に焼成前穿孔がある。357は受部が内彎する傾向にあり、358には屈曲部があり、そこから上部は外反する。両者ともに磨滅により調整痕の判別が難しいが、357の脚部はタテ方向のヘラミガキ、358も脚部はタテ方向のヘラミガキを基本とする。SD7136が方形周溝墓の周溝であるならば、両者ともに供献土器と考えられる。廻間Ⅲ式に比定できる。

直口壺（図66-359・写真68-159）　359は小型の直口壺と考えられる。残存していないが、形状から、平底の直口壺と考えられる。胴部外面は不定方向のヘラミガキで調整する。内面は弱いヨコナデ調整で、部分的に指圧痕が残る。先述した器台と組み合う可能性がある。廻間Ⅰ式に比定できる。

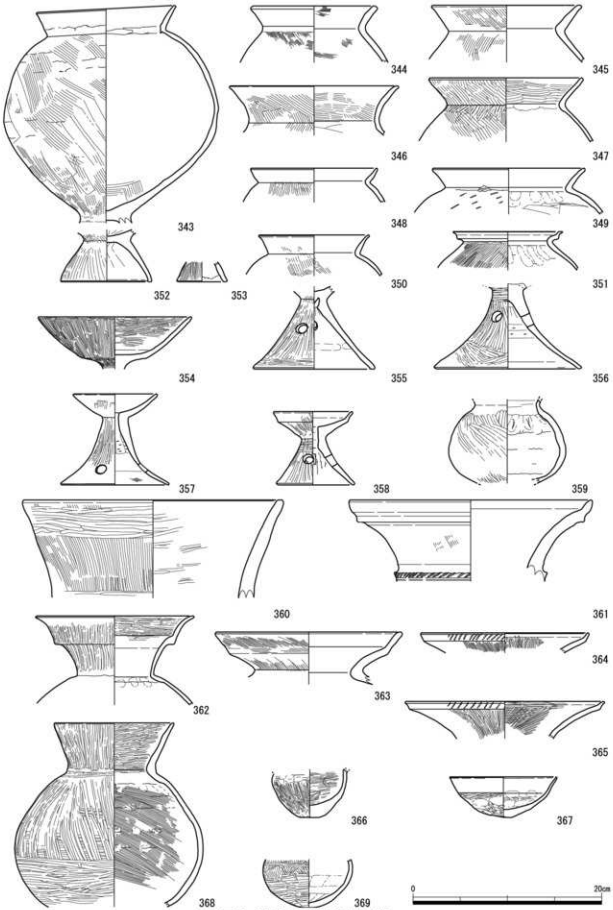


図66　SD7136・SK7163出土土器

大型壺（図66-360・写真69-160） 360は大型の直口壺の口縁と考えられる。ただし、胴部の形状は全く不明で、特殊な土器である可能性もある。外面口縁付近はヨコ方向のヘラミガキ、以下はタテ方向のヘラミガキで調整する。内面は磨滅しているが、ヨコ方向のヘラミガキ痕跡が確認できる。調整技法などから廻間式期に比定した。

有段口縁壺（図66-361～363・写真69-161～163） 361はやや大型の有段口縁広口壺である。段部は口縁に近い部分にあり口縁に向かってやや内彎する形状を呈す。頸部に突帯があり、櫛状工具による斜位の刺突文を飾る。内外面ともに丁寧なヨコナデにより調整する。廻間Ⅰ～Ⅱ式に比定できる。

362も有段口縁の壺で、いわゆる二重口縁壺とよばれるものである。口縁中央のやや上位に段部があり、段部より上部、下部ともに外反する形状である。外面は口縁部付近にヨコナデ調整がみられるが、それ以外の口縁部はタテ方向のヘラミガキにより調整する。内面はヨコ方向のヘラミガキ調整が確認できるが、段部付近はヨコナデにより仕上げている。廻間Ⅲ式に比定できる。

363も有段口縁の広口壺である。362に比べ口縁が低く、段部の屈曲が弱い。外面は磨滅しているが、ナナメ方向のハケ目調整痕が若干残る。内面はヨコナデにより調整する。他の共伴土器の年代から廻間Ⅲ式併行期である可能性があるが、形状や調整痕から松河戸式期まで下る可能性がある。

器種不明土器（図66-364～365・写真69-164～165） 364・365は壺型と考えられる土器口縁である。受口状の口縁部と考えられ、口縁外側に櫛状工具による斜位の刺突文を飾る。364は鉢または太頸壺や有段口縁壺の口縁に類似する。365は形状から受口状の壺口縁である可能性が高い。両者ともに内外面ともにヘラミガキ調整。廻間式期に比定できる。

小型壺（図66-366・写真69-166） 366は小型壺である。口縁部は欠損して残存していないが、胴部と同じくらいの長さの単純口縁の形状と考えられる。胴部外面は丁寧なタテ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラミガキで調整する。底部は平底で、ヘラミガキで調整する。廻間Ⅰ式に比定できる。

鉢（図66-367・写真69-167） 367は小型鉢である。底部はやや窪む形状で、口縁から約2.2cm下方で緩く屈曲する形状をなす。底部から屈曲部外面は不定方向のヘラミガキで調整する。これより上部はヨコナデ調整で仕上げる。内面は全体にヨコナデで調整する。廻間式期に比定できる。

v　SK7163出土土器

SK7163はSD7136の底で検出したピット状の土坑で、断面観察からSD7136が掘削された際に掘削された可能性がある遺構である。この遺構からは、2個体以上の土器が出土したが、出土状況から周溝内供献である可能性は低く、SD7136が方形周溝墓の周溝であるならば、周溝墓築造の際の祭祀に関わる遺構である可能性がある。つまり、SD7136の掘削年代を把握できる資料であり、図65に合わせて掲載した。

直口壺（図66-368～369・写真70-168） やや大型の直口壺である。底部は欠損しており形状不明である。胴部最大径は中央よりやや下方に位置する。外面口縁から胴部の上部はタテ方向のヘラミガキ調整。胴部下方はヨコ方向のヘラミガキで調整する。口縁内面はヨコ方向のヘラミガキ、胴部は斜位のハケ目調整で仕上げるが、指圧痕と粘土の継ぎ目が部分的に残る。廻間Ⅰ式に比定できる。

369は小型の直口壺である。頸部および口縁部を欠損する。胴部外面上半は不定方向のヘラミガキ、下方はヨコ方向のヘラミガキ調整で仕上げる。内面は磨滅しており調整は不明瞭だが、板状工具による調整痕が残る。廻間Ⅰ式に比定できる。

vi　SK7141出土土器類

甑（図67-370・写真70-172）　370は大型の甑である。軟質の焼成で扁平な把手を接合している。底部は中央に復元直径約5.6cmの円形の穴、その周囲、器壁側に楕円の穴を切り欠いている。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整で、部分的に粘土紐の継ぎ目と整形時の指圧痕が残る。後述する共伴土器の年代から、8世紀末～9世紀に比定する。

坏蓋（図67-371～372・写真70-169～170）　371～372は坏蓋である。371は中央部が突起するが全体的にやや扁平な宝珠形のツマミをもつ蓋である。口縁端部はく字状に折り曲げる。372はやや大型の蓋でやや小振りで立体的な宝珠形のツマミをもつ。両者ともに9世紀中葉に比定できる。

坏身（図67-373～374・写真70-174）　373～734は坏身である。無台坏ともよばれるもので、高台はない。両者ともに底部外面に明瞭な回転糸切痕を残す。底部外面以外は回転ナデにより調整する。8世紀末～9世紀中葉に比定できる。

短頸壺（図67-375・写真70-175）　375は短頸壺の胴部である。胴部下方部は回転ヘラケズリにより調整する。これより上部は回転ナデにより丁寧に調整している。胴部上部には自然釉が付着している。9世紀に比定できる。

把手付杯身（図67-376・写真70-171）　376は把手が付く大型の杯身である。あるいは盤に近い。把手から90度の口縁部に、口縁から内側にかけて明瞭な指圧痕があり、片口の注口を意とした可能性があるので指摘しておく。非常に厚手のもので、内外面ともに丁寧な回転ナデにより調整する。8世紀末～9世紀に比定できる。

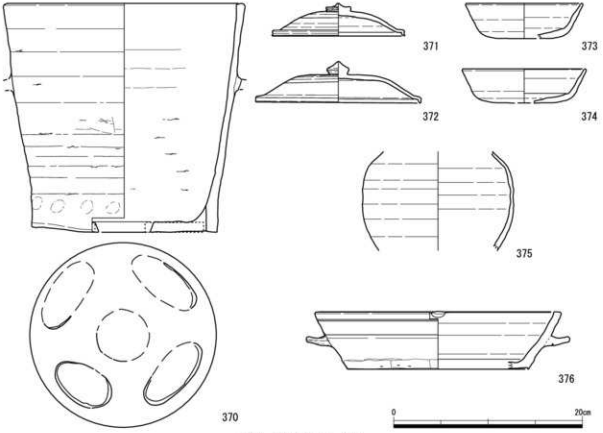


図67　SK7141出土土器

vii　SE7065出土土器類

常滑焼大甕（図68～69-377～379・写真71-176～72-182）　377～379は常滑焼の大甕である。これらは底部を打ち欠いて積み上げられるように加工して、SE7065の井戸枠として使用されていた。377は口縁部を外側に折り曲げて帯状にした形状の大甕である。井戸枠の最下部として使用されていた。底部は井戸築造時に甕の内側に捨て込まれていた。この底部は焼歪みが著しいもので、いわゆる粗悪品である。そのため井戸枠に転用されたと考えられる。胴部の中央付近に1ヶ所ではあるが、内側から焼成後に穿孔した痕跡がある。また、頸部直下に桜花文を押捺した文様帯がある。この文様帯に「×」印のヘラガキがみられる。外面は胴部から頸部にかけて、板状工具によるタテナデ、それより上部はヨコナデにより調整する。内面の調整は口縁から頸部にかけてはヨコナデにより調整する。これより下部では粘土紐の継ぎ目を消す程度の指圧痕または、弱い指ナデ調整痕が残る。13世紀後半に比定できる。

378は外側に折り曲げて上部外側に細い突帯状を造る形状の口縁部をもつ大甕である。377の上に積み上げて井戸枠として使用されていた。377同様に胴部の中央付近に内側から焼成後に穿孔した痕跡がある。また、頸部直下に菊花文と重圏文を交互に押捺した文様帯がある。この文様帯に「×」印のヘラガキがみられる。外面は胴部から頸部にかけて、板状工具によるタテナデ、それより上部はヨコナデにより調整する。内面の調整は口縁から頸部にかけてはヨコナデにより調整する。これより下部では粘土紐の継ぎ目を消す程度の指圧痕または、弱い指ナデ調整痕が残る。13世紀後半に比定できる。

379は378同様の口縁の形状の大甕である。やや軟質な焼成で赤物のような様相を呈する。378の上に積まれた状態で井戸枠として使用されていたと考えられる。調整技法は377や378とほとんど同じである

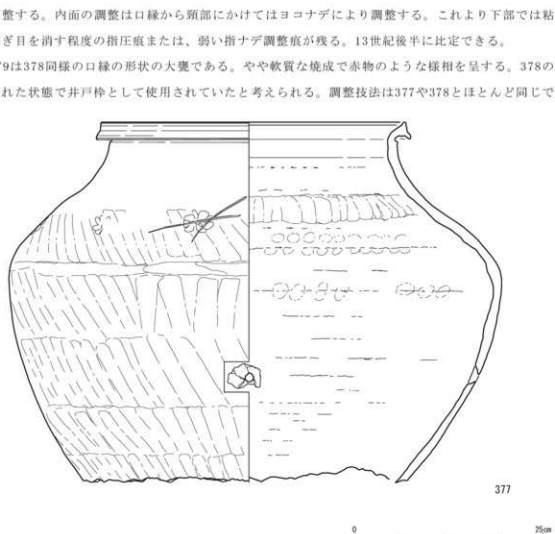


図68　SE7065出土土器①

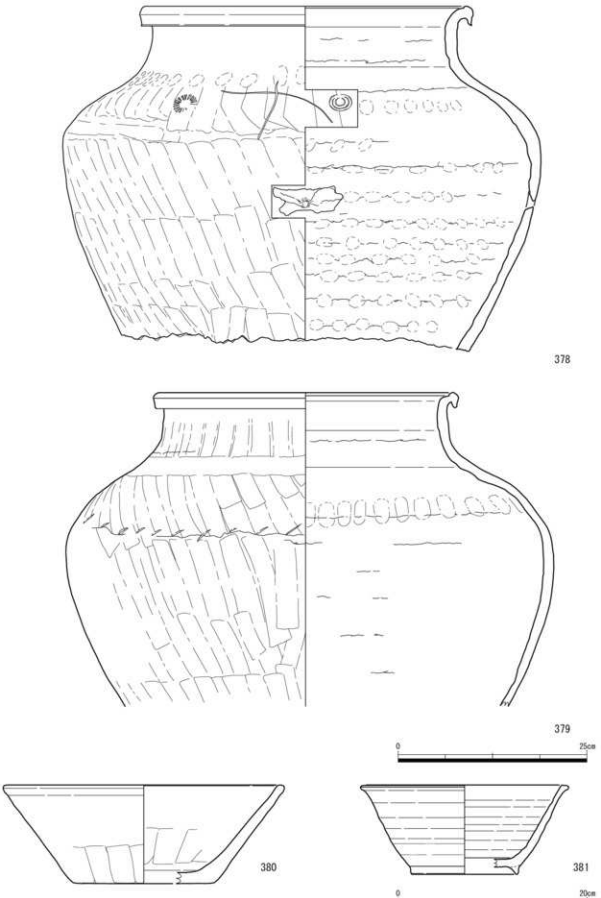


図69　SE7065出土土器②

が、押捺による文様帯はなく、胴部最大径の部分に斜位の列点文のようなヘラ状工具による文様帯がみられる。

常滑焼片口鉢（図69-380） 380は片口鉢である。注口部は欠損しており、出土していない。外面の口縁下部にヨコ方向の指ナデによる窪みが巡る特徴がある。内外面ともに板状工具による丁寧なタテナデ調整ののち、不定方向のナデ調整で仕上げる。底部外面には製作台から製品を外すためのハナレ砂が付着している。

山茶碗鉢（図69-381） 381は山茶碗の鉢である。片口鉢であった可能性もあるが、注口部は欠損している。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整。高台はやや外開きで、三角縁である。形状から藤沢編年7型式併行期に比定できる。

ⅷ　7地点出土その他の遺構・包含層出土遺物

A　古式土師器

有段口縁壺（図70-382～388・写真73-183～189） 382～388は有段口縁壺である。382は口縁部の小片資料である。口縁屈曲部外側に突帯状の文様帯をもつものである。突帯部はやや垂下し、櫛状工具による斜位の刺突文を飾る。屈曲部から上は外反し、口縁端部は直上に曲げ外面に櫛状工具による斜位の刺突文を飾る。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラミガキ調整で仕上げる。383は段部屈曲の弱い有段口縁壺の口縁部である。やや内反する口縁に垂下する突帯状の文様帯を飾る。突帯部には櫛状工具による斜位の刺突文を飾る。突帯部より上位部には櫛状工具による横位の綾杉状の刺突文を飾る。内面はタテ方向のヘラミガキ調整痕が残る。384は屈曲部をやや上位に有する有段口縁壺である。段部はやや垂下し、無文である。屈曲部より上位部は外反し、内外面に櫛状工具による横位の綾杉状の刺突文を施文する。調整は磨滅により不明である。385は口縁端部に近い部分に段部をもつ有段口縁壺である。口縁部は外反し、端部付近に段部があり外側は垂下しない。口縁端部外面には櫛状工具による横位の綾杉状の刺突文を飾る。386は、パレススタイル壺が退化した形状の口縁をもつ有段口縁である。口縁部への施文はないが、口縁外面に赤彩がみられる。387は段部がほぼ水平で垂下しないもので、段部の上部、下部ともに外反する形状であるが、口縁端部を欠く。内外面ともに不定方向のナデ調整で、一部にハケ状工具または板状工具痕が残る。388は頸部に突帯が付くものである。突帯部には櫛状工具による刺突文を施文する。口縁端部や段部が欠損しているが、有段口縁壺と考えられる。口縁部外面はタテ方向のヘラミガキ調整、内面はヨコ方向のヘラミガキ痕跡が若干残るが、摩滅によりほとんど残っていない。

これらはいずれも廻間式期に比定できるが、小片が多いため細分できない。

広口壺（図70-389・写真73-190） 389は広口壺である。小片のため情報量は少ないが、頸部の屈曲が強いが、胴部がやや長い壺が想定できる。口縁部は内外面ともに不定方向のハケ目調整をする。廻間Ⅰ式に比定できる。

小型丸底壺（図70-390・写真73-191） 390は小型丸底壺の小片である。磨滅しているため、調整の詳細は不明だが、口縁部の内外面ともにタテ方向のヘラミガキ痕跡が残る。廻間Ⅲ式に比定できる。

小型壺（図70-391・写真73-192） 391は平底の底部と考えられる小型壺である。頸部の屈曲が弱く、口縁部は直線的である。内外面ともに丁寧なヨコナデ調整。廻間式期に比定できる。

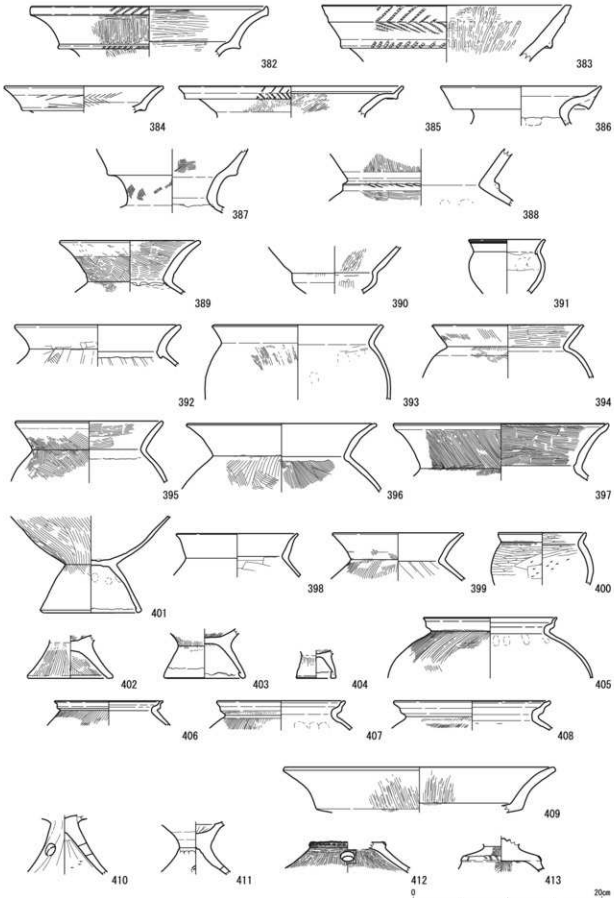


図70　7地点出土その他の遺構・包含層出土古式土師器

く字口縁台付甕（図70-392～400・写真74-193） 392～400はく字口縁台付甕の口縁および頸部周辺部の破片である。392～399は廻間式期に比定できるものである。それぞれ口径や口縁の長さや調整技法などが異なる。400は小型台付甕である。404は400と同様に小型台付甕と考えられ、同様の台部が接合するものと考えられる。

S字状口縁台付甕（図70-405～408・写真74-194） 405～408はS字状口縁台付甕である。いずれも、口縁および頸部の小片である。胴部の粗く鋭いハケ目が共通する。廻間式期に比定できる。

高杯（図70-409～410・写真74-195） 409・410は高坏である。409は大型の高坏の坏部口縁周辺の破片である。器壁は口縁部に向かい外反する。内外面ともに丁寧なタテ方向のヘラミガキにより調整する。小片であるため時期比定は難しいが、形状と調整技法から山中式末期～廻間Ⅰ式に比定する。

器種不明土器（図70-411～413・写真74-196・75-197～198） 411～413は器種不明の古式土師器である。411は、脚付きの壺などの底部および脚部と考えられる。脚部には円形の透かしがみられる。形状から、廻間式期に比定できるが、他の器種のものと、胎土や焼成が異なる。412、413は高坏の脚部、または脚付壺の脚部と考えられる。両者ともに高杯の坏部のような形状であるが円形の透かしが入る。屈曲部には突帯状の稜があり、刺突文を飾る。屈曲部より上について、412は扁平であるが、413は脚に向かい緩やかに上がる。両者とも柱状の脚と考えられる。調整技法などから廻間式期に比定できる。

B　須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器

a　須恵器

壺（図71-414・写真75-199） 414は須恵器壺口縁部である。口縁部は緩やかに外反し、端部外側に延びる形状である。内外面ともに丁寧な回転ナデにより調整する。8世紀に比定できる。

坏蓋（図71-415） 415は須恵器坏蓋である。ツマミ部は欠損しており形状は不明である。外面のツマミに近い部分では回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデ調整である。口縁端部の形状から8世紀に比定できる。

平瓶（図71-416・写真75-200） 416はやや小型な平瓶である。胴部の屈曲が強く、口縁が長い特徴をもつ。底部外面は回転ヘラケズリ調整で、それ以外は丁寧な回転ナデ調整である。形状から8世紀前葉に比定できる。

坏身（図71-417～418・写真75-201） 417～418は須恵器坏身である。両者ともに底部と器壁の屈曲部

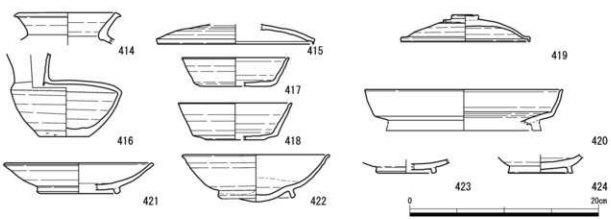


図71　7地点出土須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器

にヘラケズリによる平坦面がある点が特徴的である。9世紀に比定できる。

坏蓋（図71-419・写真75-202） 419は須恵器坏蓋である。ツマミは中窪みで中央が緩く突起する形状である。体部は丸みがあるが、口縁付近は外側に反りがある。ツマミ部周辺は回転ヘラケズリ、それ以外は丁寧な回転ナデ調整である。形状から9世紀に比定できる。

坏身（図71-420・写真75-203） 420は須恵器坏身である。高台部は欠損している。全体的に回転ナデ調整で仕上げられる。形状から9世紀に比定できる。

b　灰釉陶器

皿（図71-421・写真75-204） 421は灰釉陶器皿である。施釉はないが、灰釉陶器である。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整で仕上げる。K14窯式に比定できる。

碗（図71-422～423・写真75-205） 422は灰釉陶器碗である。釉薬は器壁全面と、内面底部を除く部分に施釉している。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整で仕上げる。底部は扁平ではなく、半球状に下方に膨らむ。K90窯式に比定できる。423も碗であるが、全体形が不明なため年代比定はできない。

c　緑釉陶器

碗（図71-424・写真75-206） 424は緑釉陶器碗である。高台部周辺の小片であるため全体形は不明である。釉薬は発色が悪く、内面は緑色に発色していない。年代不明である。

C　中世以降の土器

a　山茶碗

山茶碗（図72-425～446・写真76-207～209） 425～446は山茶碗である。器種構成は皿、碗、鉢が出土している。425～432は皿である。いずれも尾張型のもので、藤澤編年の6型式以降のものである。

433～444は碗である。433～441は尾張型、442～444は東濃型である。尾張型のものは皿同様に6型式以降のものであり、古手のものはない。東濃型のものは、藤澤編年の9型式以降のものが主体である。445～446は鉢である。片口であるかは不明。いずれも、年代比定は難しいが形状から碗型の7型式以降に比定する。

b　瀬戸美濃陶器・青磁器

折縁小皿（図72-447・写真76-210） 447は灰釉折縁小皿である。釉薬は内面全体と外面口縁部に施釉する。古瀬戸中期後葉～後期初頭に比定できる。

縁釉はさみ皿（図72-448～452） 448～452はロ縁周辺に施釉する縁釉はさみ皿である。底部には高台がなく平底で、回転糸切痕跡が残る。448～451は灰釉を施釉したもので、452は鉄釉を施釉したものである。いずれも大窯第一段階に比定できる。

折縁大皿（図72-453～455・写真76-221） 453～455は折縁大皿である。口縁端部を内側に折り返して口縁を整形する特徴がある。いずれも灰釉を施釉したものである。544は折縁深皿である可能性もある。455は、底部に高台がなく平底で、回転糸切痕跡が残り、底部に釉薬は施釉していない。いずれも古瀬戸中期～後期様式にに比定できる。

天目茶碗（図72-456） 456は天目茶碗である。口縁から胴部にかけての小片である。当調査区では天目茶碗の出土は極めて少なかった。連房式登窯期第一段階後葉に比定できる。

蓮華文装飾青磁碗（図72-457・写真76-212） 胴部に蓮華文を装飾した青磁碗である。胎土や釉薬の発

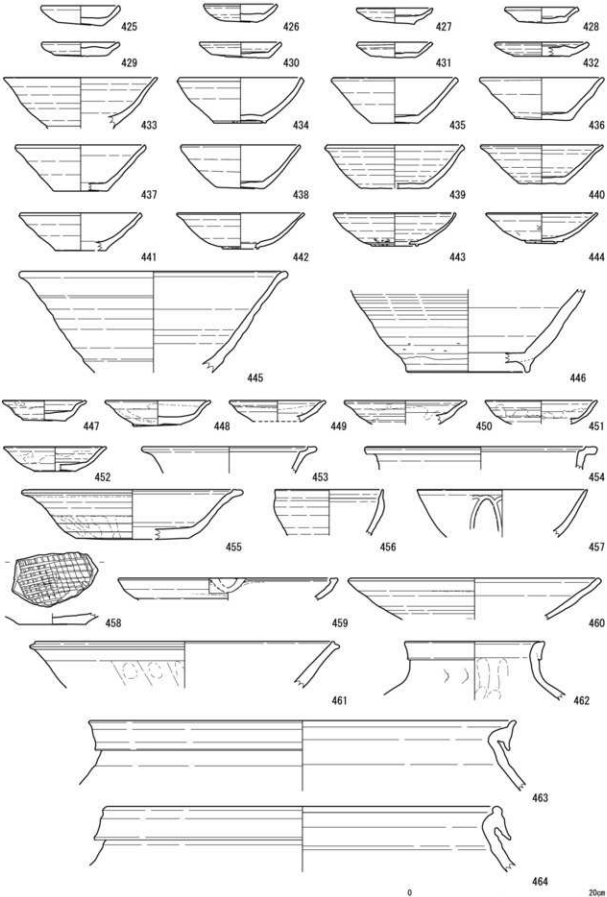


図72　7地点出土中世の土器①

色が舶薬の発色が舶来のものとは異なるように見受けられるため、国内産である可能性がある。

卸皿（図72-458～459・写真76-213） 458は卸目皿である。卸目部に灰釉が付着しているため、口縁部や胴部には灰釉が施釉されていたものと考えられる。459についても同様卸目皿の口縁部と考えられる。古瀬戸後期様式に比定。

碗形鉢（図72-460） 460は碗形鉢と考えられる小片である。破片全体に灰釉が施釉されている。形状から古瀬戸中期～後期様式に比定できる。

c　常滑焼

片口鉢（図72-461・写真77-214） 461は常滑焼片口鉢である。注口部は欠損している。口縁部は外面側端部がやや外側に開き、端面にナデ調整による窪みができる。15世紀前葉に比定できる。

広口壺（図72-462・写真77-214） 462は常滑焼玉縁壺の小片である。口縁部を外側に折り返して口縁部を整形する。15世紀後半に比定できる。

甕（図72-461・写真77-214） 453・454は常滑焼甕である。両者とも口縁を外側に折り返して端部を上下に伸ばして整形する。453は14世紀前半、454は14世紀後半に比定できる。

d　土師質土器（鍋・釜）

伊勢型鍋（図7-465～467・写真77-215） 465～467は伊勢型鍋である。これらは、口縁部を内側に折り返して仕上げる特徴がある。出土した伊勢型鍋は北村氏の分類上でA５類に比定できるもので、それ以前のものは確認していない。特徴としては器壁が極めて薄い。体部が確認できるものは頸部より下部外面にハケ目が明瞭に残ることがあげられる。いずれも13世紀末葉～14世紀中葉に比定できる。

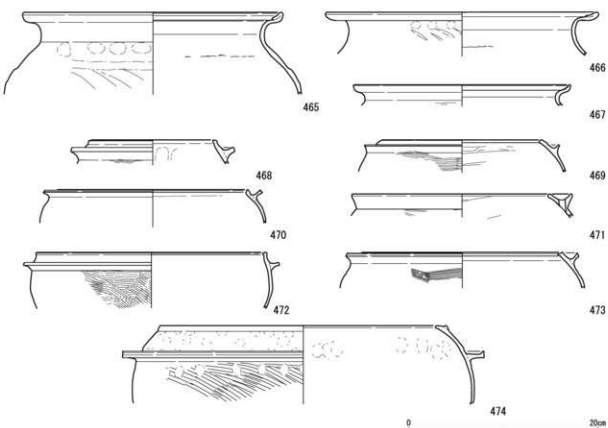


図73　7地点出土中世の土器②

羽釜（図7-468～474・写真77-216～78-217） 468～474は羽釜である。このうち、468～473は土師質内彎型羽釜で、羽釜A5類に相当する。口縁は内傾し、体部は扁球状で、鍔部は口縁の直下に接合され、口縁側に傾く。内面は丁寧なナデ、外面はハケ状工具で不定方向に調整する。いずれも14世紀～15世紀前葉に比定される。

474は南伊勢系の羽釜である。口縁部は内反し、口縁端部を内側に曲げ、上部に平坦面をつくる。この結果、口縁端部の断面形は三角形状になる。胴部は粗いハケ目調整で鍔部より上位はヨコナデにより調整する。15世紀前葉に比定できる。

D　土製品

陶丸（図74-475～488・写真78-218） 475～488は陶丸である。いずれも直径2.0～2.3cm前後で手捏ねにより作られている。須恵質の焼成で山茶碗の焼成に近い。中には自然釉がかかるものもある。当調査区から14点出土した。

土錘（図74-489～553・写真79-221） 489～553は土錘である。大きさや形状は様々なものがあり、489～491のようにやや大型のものから、全長3.2cm程度の小型のものまであるが大半が小型のものである。いずれも土師質の焼成で、焼成前穿孔しており、網の縄等による擦痕が穿孔部に残る。ただし、比重が軽いため、投網の錘としては使えない。

加工円板（図74-554～555・写真78-219～220） 554～555陶器や磁気の底部を円形に打ち欠いて作った加工円板である。554は唐草文装飾青磁碗を加工したもので、底部内面に唐草文を飾る。555は天目茶碗の底部を加工したものである。

土製紡錘車（図74-556・写真79-222） 556は土師質の紡錘車と考えられる土製品である。上面側がやや盛り上がり球状を呈する。中央部に復元直径4mm程度の穿孔がある。

不明土製品（図74-557・写真79-223） 557は不明土製品である。横断面は鏃状で、底部はやや丸みのある平底。外面に棒状工具で縦位の沈線8条を当分に配置している。山茶碗に近い焼成で、自然釉が多く付着する。仏具の一種と考えられるが詳細は不明できる。

E　石器

石鏃（図74-559・写真79-224～225） 558は下呂石製の石鏃または、石刃、または剥片である。製品として使用されたのか不明である。559は下呂石製の有茎石鏃である。片側の刃部のみに敲打痕がみられ、製作途中で欠損したものと考えられる。

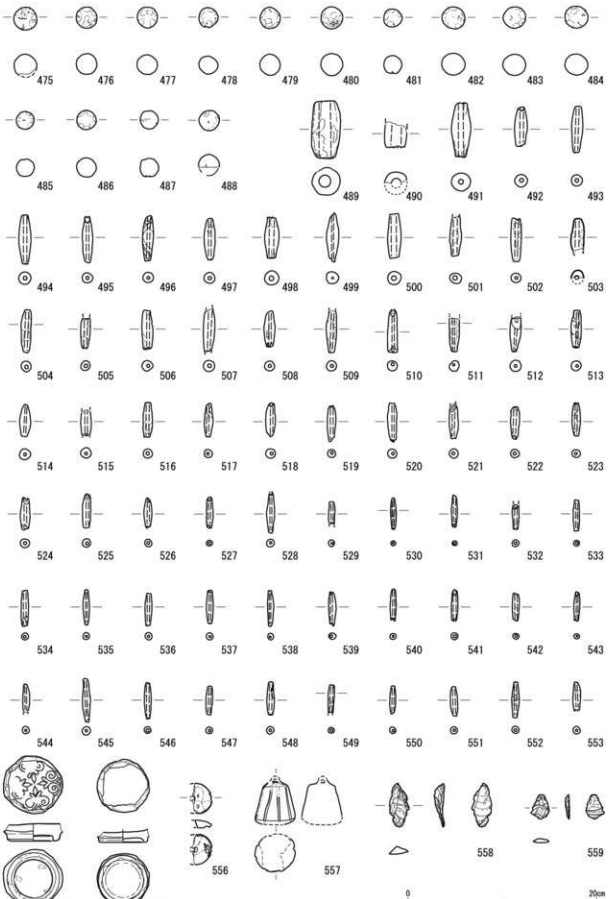


図74　7地点出土その他の遺物

第4章　自然科学分析

はじめに

本報告では、発掘調査に伴い検出された動物遺存体の同定および放射性炭素年代測定について述べる。

1.　試料

放射性炭素年代測定（AMS法）は、土坑より検出されたイヌ、ウマの骨格の一部について実施する。イヌおよびウマとも保存状態が良好であるものの、事前調査によってコラーゲンが抽出されにくいことが予想された。そこで、試料の保管場所へ当社の動物遺存体の分析実務者が赴き、年代測定用試料として、なるべく完形の骨を選ぶとともに、その記載、計測などの現地調査を行った。

年代測定の候補として取り上げた試料は、イヌのNo.9の中の肋骨片2点、胸椎3点の内2点、ウマがNo.36の右足根骨（第1+2足根骨・第3足根骨・第4足根骨・中心足根骨）とNo.14の頚椎である。このうち、年代測定試料としてコラーゲン抽出を行ったのは、イヌがNo.9の胸椎（2）、ウマがNo.36の第4足根骨（右）である（表2）。

表2　年代測定試料の一覧

種類	取上No.	部位	番号	左	右	状態等	点数	重量(g)	計測値	C14測定	備考
イヌ	9	肋骨				破片	2	1.633			
		胸椎(1)	(1)			破損	1	2.140	椎体長17.07,椎体径19.64		*
		胸椎(2)	(2)			破損	1	2.237	椎体長16.30,椎体径18.09	○	*
		胸椎(3)	(3)			破損	1	2.255	椎体長16.38,椎体径18.28		*
ウマ	36	第1+2足根骨			右	ほぼ完存	1	2.136			
		第3足根骨			右	ほぼ完存	1	7.537	最大幅47.30		
		第4足根骨			右	ほぼ完存	1	6.909		○	
		中心足根骨			右	ほぼ完存	1	10.447	最大幅51.11		
	14	頚椎				破損	1	83.822	椎体長80.81		

*：リッピングあり

骨同定は、包含層、落込み、表土、SD2070、SD4031、SD7006、SK7161下層、SX3031、SX2045、P2031、P7131、P7132、P7151、P7175などから検出された骨26試料（No.8,17,22～24,30,39,45,46,49,75,87,88,101～103,108,112,130,131,142,144,168,236,238,番号なし）である。すでにクリーニングされた状態にある。土壌試料の洗い出しは、SK2069（No.119）、SX2045（No.94）、SX2046（No.67）の3試料である。

2.　分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

骨試料は、コラーゲン抽出を行い、その処理を「CoEx」と表記する。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土等の付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水で浸し、超音波洗浄を行う。0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液の試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで、1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン酸塩除去のため、試料を透析膜に入れて1Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

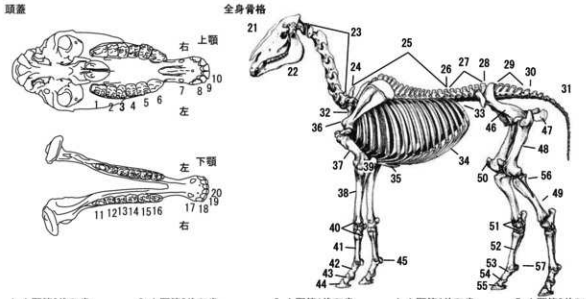


図75　ウマ骨格各部の名称

処理を終えた試料については、試料をパイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてパイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるパイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2) 骨・貝類同定

土壌試料の洗い出しは、試料の総重量（湿重）を計量した後、そこから分析する試料を取り分けて重量（湿重および乾重）を計量する。0.5mmの篩を用いて水洗選別を行い、篩上に残った残渣を集める。自然乾燥後、骨・貝類、炭化物、土器片等を抽出する。また、発掘段階で採取された骨に砂分や泥分が

付着する場合は、乾いた筆・竹串等で除去する。また、一部の試料について一般工作用接着剤を用いて接合を行う。

上記の処理によって得られた骨貝類について、試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、骨格各部位の名称については、ウマを例として図75に示す。また、貝類の生態性等については、奥谷ほか(2000)、奥谷編著(2004)を参考とする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果は、ウマが560±20 yrs BP、イヌが590 yrs±30 BPである。(表3)。暦年代値を表4に示す。2σの暦年代較正値は、ウマがcal AD 1313-1403、イヌがcal AD 1302-1412となる。

なお、暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することである。今回は、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表す。暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表3 放射性炭素年代測定結果

試料名	取上番号	部位	性状	前処理	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	測定機関番号
ウマ	No. 9	胸椎	骨	CoEx	560± 20	-18.48±0.41	460± 20	IAAA-131509
イヌ	No. 36	第4足根骨	骨	CoEx	590± 20	-22.29±0.81	540± 20	IAAA-131510

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表4 暦年較正結果

番号	補正年代 (BP)		暦年較正年代 (cal)	相対比	Code No.
ウマ	562±24	σ	cal AD 1325 - cal AD 1345 cal BP 625 - 605	0.486	IAAA-131509
			cal AD 1394 - cal AD 1413 cal BP 556 - 537	0.514	
		2σ	cal AD 1313 - cal AD 1358 cal BP 637 - 592	0.523	
			cal AD 1388 - cal BC 1422 cal BP 562 - 3371	0.477	
イヌ	587±25	σ	cal AD 1316 - cal AD 1354 cal BP 634 - 596	0.751	IAAA-131510
			cal AD 1389 - cal AD 1403 cal BP 561 - 547	0.249	
		2σ	cal AD 1302 - cal AD 1367 cal BP 648 - 583	0.712	
			cal AD 1382 - cal BC 1412 cal BP 568 - 3361	0.288	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0を使用
2)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
3)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 骨貝類

検出された種類は、腹足綱5種類(ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリ・カワアイ?)、二枚貝綱8種類(マガキ・シオフキ・マテガイ科・ヤマトシジミ?・アサリ・ハマグリ・オキシジミ・オオノガイ科)、爬虫綱1種類(イシガメ)、軟骨魚綱1種類(エイ・サメ類)、哺乳綱3種類(ヒト・ウマ・

表5　検出動物分類群の一覧

軟体動物門 Phylum Mollusca
　腹足綱 Class Gastropoda
　　前鰓亜綱 Subclass Prosobranchia
　　盤足目 Order Discopoda
　　ウミニナ科 Family Batillariidae
　　ウミニナ *Batillaria multiformis*
　　ホソウミニナ *Batillaria cumingii*
　　イボウミニナ *Batillaria zonalis*
　　フトヘナタリ科 Family Potamididae
　　ヘナタリ *Cerithidea* (*Cerithideopsilla*) *cingulata*
　　カワアイ？ *Cerithidea* (*Cerithideopsilla*) *djadjariensis*?
　二枚貝綱 Class Bivalvia
　　翼形亜綱 Subclass Pteriomophia
　　フネガイ目 Order Arcoida
　　カキ目 Order Ostreoida
　　カキ亜目 Suborder Ostreina
　　イタボガキ科 Family Ostreidae
　　マガキ *Crassostrea gigas*
　　異歯亜綱 Order Heterodonta
　　マルスダレガイ目 Order Veneroida
　　バカガイ科 Family Mactridae
　　シオフキ *Mactra veneriformis*
　　マテガイ科 Family Solemidae
　　属種不明 Gen. et. sp. indet.
　　シジミ科 Family Corbiculidae
　　ヤマトシジミ？ *Corbicula japonica*?
　　マルスダレガイ科 Family Veneridae
　　アサリ *Ruditapes philippinarum*
　　ハマグリ *Meretrix lusoria*
　　オキシジミ *Cyclina sinensis*
　　オオノガイ目 Order Myoida
　　オオノガイ亜目 Suborder Myoida
　　オオノガイ科 Family Mydae
　　属種不明 Gen. et. sp. indet.
　爬虫綱 Class Reptilia
　　カメ目 Order Testudinea
　　バタグールガメ科 Family Bataguridae
　　イシガメ *Mauremys japonica*
脊椎動物門 Phylum Vertebrata
　軟骨魚綱 Class Chondrichthyes
　　板鰓亜綱 Subclass Elasmobranchii
　　エイ・サメ類 Ord. et. fam. indet.
　哺乳綱 Class Mammalia
　　サル目(霊長目) Order Primates
　　ヒト科 Family Hominidae
　　ヒト *Homo sapiens*
　　ウマ目(奇蹄目) Order Perissodactyla
　　ウマ科 Family Equidae
　　ウマ *Equus caballus*
　　ウシ目(偶蹄目) Order Artiodactyla
　　シカ科 Family Cervidae
　　ニホンジカ？ *Cervus nippon*?

ニホンジカ?）である（表5）。

洗い出しによる結果を表6、図76に示す。3試料とも貝類が主体となり、骨はほとんど検出されない。また、試料によって種類構成が異なる。SK2069（No.119）は、ハマグリが最も多く検出され、次いでシオフキなどがみられ、二枚貝綱が主体となる。SX2045（No.94）も、ハマグリ、シオフキなどが検出されるが、SK2069（No.119）と比べて全体的な検出量が少ない。SX2046（No.67）は、他の2遺構と異なり、イボウミニナ、ウミニナが最も多く検出され、腹足綱が主体となる。

発掘段階で検出された骨貝類の同定結果を表7に示す。P2031のNo.49は、骨でなく、炭化材である。イシガメは、Ⅸ19Cの落込みで肋骨板・左下腹骨板・右剣状腹骨板（No.8）、サブトレンチ表土で左中腹骨板（No.88）が検出される。左中腹骨板は、最大幅61.56mmを測る。

エイ・サメ類は、P7132で椎骨（No.144）が検出される。椎体長17.86mm、椎体径30.27mmを測る。

ヒトは、SX2045で、前頭骨（No.130）が検出される。環状縫合が確認され、縫合状況は内側が破損し、外側は閉じてない。なお、No.130で検出された獣類の四肢骨は、ヒトの上腕骨の可能性がある。

ウマは、木遺跡で最も多く検出される。包含層から左下顎歯牙（No.17）、右上腕骨（No.22）、右第3足根骨・右第4足根骨（No.23）、SX3031で右上腕骨（No.39）と左肩甲骨（No.87）、SX2045で左脛骨（No.131）、SD4031で歯牙（No.75）、P7175で右第1+2足根骨・右第3足根骨（No.236）が検出される。この他、SX2045でウマ/ウシの腰椎（No.112）が検出される。肩甲骨（No.87）は頚部最小幅51.12mm、頚

表6　貝類洗い出し結果

採取地点					HM12-1.2 SK2069 Ⅷ E19P D2010	HM12-1.2 SX2045 Ⅷ E20t	HM12-1.2 SX2046 Ⅷ E20t D2002
番号					119	094	067
総重量（湿重）					5.02 kg	6.66 kg	7.84 kg
分析重量（湿重）					1000 g	1000 g	1000 g
分析重量（乾重）					771 g	830 g	750 g
種類		部位	左 右	部分	数量	数量	数量
腹足綱	ホソウミニナ	殻		略完			3
				破片			1
	イボウミニナ	殻		略完	4		32
				破片	9	1	82
	ウミニナ	殻		略完	8		40
				破片	1.88 g	0.33 g	6.22 g
	ヘナタリ	殻		略完			3
				破片			1
	フトヘナタリ科	殻		破片			4
	腹足綱	殻		破片	2.84 g		14.86 g
二枚貝綱	フネガイ目	殻		破片			1
	マガキ	殻	左	略完		1	5
		殻	右	略完	1		5
		殻		破片	0.24 g		9.93 g
	シオフキ	殻	左	略完	2		
		殻	左	破損		2	
		殻	左	破片	1	5	
		殻	右	略完	2		
		殻	右	破片	1	8	1
	バカガイ科	殻	左	破片			1
		殻	右	破片	3	2	
	マテガイ科	殻		破片		2	
	ヤマトシジミ？	殻	左	破片		1	
	アサリ	殻	左	破損		1	
		殻	左	破片		3	
	ハマグリ	殻	左 右	略完	1		
		殻	左	略完	2	3	
		殻	左	破片	28	5	3
		殻	右	略完	2	1	
		殻	右	破片	29	4	2
	オキシジミ	殻	左	破片	1		
	マルスダレガイ科	殻	左	破片	5		1
		殻	右	破片	3	3	
	オオノガイ科	殻	左	破片		1	1
	二枚貝綱	殻		破片	225.67 g	42.01 g	4.77 g
	二枚貝綱(被熱)	殻		破片		0.08 g	
軟体動物門	貝類	殻		破片		0.50 g	8.51 g
脊椎動物門	骨(被熱)	不明		破片			1
その他	炭化物			破片		5	
	土器			破片	1	1	3
	礫				0.60 g	9.04 g	59.64 g
	残渣				91.58 g	182.96 g	124.91 g

部厚20.24mm、関節窩長44.28mm、関節窩幅36.36mm、左脛骨（No.131）は遠位端幅61mm前後を測る。

また、P7151からニホンジカの角の可能性がある破片（No.168）、腹足綱のカワアイの可能性がある破片（No.112）がみられる。他は、大型獣類の四肢骨（No.75,102）、獣類の肋骨（No.101）、四肢骨（No. 24,45,46,103,142）、部位不明破片（No.30,108,238,番号なし）である。

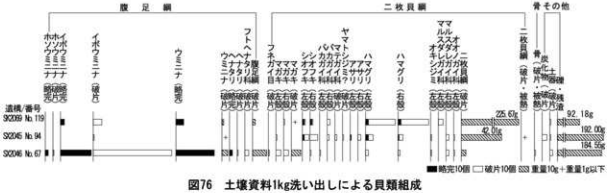


図76　土壌資料1kg洗い出しによる貝類組成

表7　骨同定結果

番号	地点			層位	種類		部位	左 右	部分・状態	数量	備考
8	HM12-4	IX19C		落込み	爬虫綱	イシガメ	肋骨板		破片	1	
							下腹骨板	左	破片	1	
							剣状腹骨板	右	破片	1	
17	HM12-1.2	VIII19r		包含層	哺乳綱	ウマ	下顎歯牙	左	破片	1	
22	HM12-7	II 92.j	D7001	包含層	哺乳綱	ウマ	上腕骨	右	破片	1＋	
23	HM12-7	II 92.j	D7002	包含層	哺乳綱	ウマ	第3足根骨	右	ほぼ完存	1	
							第4足根骨	右	ほぼ完存	1	
24	HM12-7	II 92.j	D7003	包含層	哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	1	
30	HM12-7	I D19l		包含層	哺乳綱	獣類	不明		破片	1	
39	HM12-3	VIII D16i		SX3031	哺乳綱	ウマ	上腕骨	右	近位端欠	1	B464.24
45	HM12-7	I D19l	D7004	包含層2	哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	2	
46	HM12-7	I D19l	D7005	包含層2	哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	1＋	
49	HM12-1.2	VIII D19P		P2031	哺乳綱	その他	炭化材		破片	3＋	
75	HM12-4	IXD19d		SD4031	哺乳綱	ウマ	歯牙		破片	9	
						大型獣類	四肢骨		破片	3＋	
87	HM12-3	VIII D16i		SX3031	哺乳綱	ウマ	肩甲骨	左	破損	1＋	*註1
					その他	貝殖器			破片	1	
88	HM12-4	サブトレンチ		表土	爬虫綱	イシガメ	下腹骨板	左	破損	1	最大幅61.56
101	HM12-1.2	IXE11s		SX2045	哺乳綱	獣類	肋骨		破片	2＋	
102	HM12-1.2	IXE11s	D2004	SX2045	哺乳綱	大型獣類	四肢骨		破片	2	
103	HM12-1.2	IXE11s	D2005	SX2045	哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	1	ヒト右上腕骨?
108	HM12-1.2	VIII E20t	D2007	SX2070	哺乳綱	獣類	不明		破片	2	
112	HM12-1.2	IXE11s	D2008	SX2045	鳥足綱	カワアイ?	殻		破片	1	
					哺乳綱	ウマ/ウシ	膝椎		破片	1＋	
130	HM12-1.2	VIII E20t		SX2045	哺乳綱	ヒト	前頭骨		破片	1＋	
							前頭骨	左	眼窩上縁	1	
131	HM12-1.2	IXE11s	D2012	SX2045	哺乳綱	ウマ	脛骨	左	近位端欠	1	B461±.
142	HM12-7	II 92.j		P7131	哺乳綱	獣類	四肢骨		破片	1	C#有
144	HM12-7	II 92.k		P7132	軟骨魚綱	エイ・サメ類	椎骨		破損	1	椎体長17.86,椎体径30.27
168	HM12-7	I D20k	Dot7008	P7151	哺乳綱	ニホンジカ?	角?		破片	1	
236	HM12-7	I D18l		P7175	哺乳綱	ウマ	第1・2足根骨	右	ほぼ完存	1	
							第3足根骨	右	ほぼ完存	1	
238	HM12-7	I D18l		SK7161下層	哺乳綱	獣類	不明		破片	1	
	HM12-7	I D18l	D017006	SD7006	哺乳綱	獣類	不明		破片	4＋	

*:註1：臼面最小幅51.12,臼面厚20.24,関節窩長44.28,関節窩幅36.36

4.　考察

(1) 年代

土坑内でほぼ全身の骨格が検出されたイヌとウマの骨の年代の暦年較正値は、双方とも近似する結果を示し、2σにおいて14世紀前半から15世紀前半の年代値を示す。この年代値からは、双方の骨が中世の人間活動に伴う可能性が高いことが指摘される。

(2) 動物利用

今回、洗い出しを行ったSK2069（No.119）、SX2045（No.94）、SX2046（No.67）は、骨がほとんど検出されず、貝類が主体となる。検出された種類をみると、腹足綱が干潟で潮間帯の泥底などに棲息する種類であり、二枚貝綱で主に検出されるシオフキやハマグリが潮間帯下部～水深20mの砂底に棲息する種類である。

このような産出した貝類の生態性と遺跡の立地から、上記で産出した種類は、伊勢湾沿岸部で採取されたものと思われる。イボウミニナ、ウミニナなどの腹足綱は食糧資源として利用されていたか定かで

ないが、マガキ・シオフキ・ハマグリなどの二枚貝綱は食糧資源として利用されていたとみられる。また、遺構によって産出傾向が異なり、SK2069がハマグリを主体として、潮吹き、マガキなどを伴う。SX2045は二枚貝綱を主体とするが、貝類の含有量がSK2069と比べて少なく、シオフキ・ハマグリなどが検出される。SX2046は、腹足綱を主体とする。このような組成の違いについては、人間活動を反映している可能性がある。

一方、発掘調査の段階で採取された試料の内、P2031で採取されたNo.49は、炭化材であり、骨ではなかった。この他、SX2045でカワアイの可能性がある破片（No.112）、SX3031で須恵器片（No.87）が検出されるが、それ以外は骨である。

検出される種類別にみると、Ⅸ19Cの落込み、サブトレンチ表土からイシガメが検出されている。重なる部位がみられないことから、最小個体数1体となるが、Ⅸ19Cの落込みとサブトレンチ表土で検出されたものが同一個体になるか不明である。

魚類では、P7132からエイ・サメ類が検出される。椎体長17.86mm、椎体径30.27mmを測り、大型個体である。

ヒトは、SX2045から前頭骨の破片が検出される。また、本遺構では、獣類四肢骨としたNo.103もヒトの上腕骨の可能性がある破片がみられる。前頭骨では環状縫合がみられ、外側が閉じてない状況が確認されるが、内側が破損しており癒合状態を確認できない。したがって、本人骨については、性別や年齢等の情報を得ることができない。これらSX2045で人骨が検出されるが、本遺構からはウマ左脛骨、ウマ/ウシの腰椎片、カワアイ？、種類不明の四肢骨など様々な種類の骨が検出される。このような状況を考慮すると、本遺構が墓であるとは考えにくい。

ウマは、包含層、SD4031、SX3031、SX2045、P7175で検出されており、今回最も多く検出される種類である。右上腕骨、右第3足根骨がそれぞれ2点みられることから、少なくとも2個体分は存在する。年代測定を実施する個体も含めると、本遺跡では最小個体数3個体となる。SX3031で検出される右上腕骨が遠位端幅64.24mm、SX2045で検出される左脛骨が遠位端幅約61mm前後を測る。西中川ほか（1991）を参考とすると、これらのウマは体高110～115cm前後となり、トカラウマ程度の小型馬に相当する。

この他、ニホンジカの角の可能性がある破片、獣類の肋骨片・四肢骨片・部位不明破片などがみられるが、詳細不明である。ただし、P7131で検出される獣類四肢骨片は、骨体にカットマークが存在することから、解体されたものと思われる。また、今回同定対象外であるが、年代測定を実施したイヌは、胸椎にリッピングがみられ、老齢個体であったとみられる。

引用文献

加藤　嘉太郎・山内　昭二,2003,新編　家畜比較解剖図説　上巻.養賢堂,315p.

中川　駿・本田　道輝・松元　光春，1991，古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究．平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書，99p.

奥谷　喬司・窪寺　恒己・黒住　耐二・斎藤　寛・佐々木　猛智・土田　英治・土屋　光太郎・長谷川　和範・濱谷　巌・速水　格・堀　成夫・松隈　明彦，2000，日本近海産貝類図鑑．奥谷喬司編，東海大学出版会，1173p.

奥谷　喬司編著，2004，改訂新版　世界文化生物大図鑑　貝類．株式会社世界文化社,399p.

第5章　まとめ

平成24年度は6地点で発掘調査をおこなったが、各地点で出土遺物や遺構の年代、性格が異なる。そのため、地点ごとにまとめおよび考察をおこなう。以下地点別に記述する。

第1節1・2地点

Ⅰ　検出遺構について

1・2地点は中世～近世初頭にかけての遺物が主に出土している。こうした状況は、江戸時代のある段階から土地改変が行われて耕作地として利用された状況が調査区壁面の土層観察から確認されているため、調査地の層序関係とも一致する。したがって、今回検出した遺構は江戸時代前期以前に比定できるものである。

中世～近世にかけての遺構は第2章でふれたように、主に溝、土坑、柱穴などで構成されており、当地が宅地であった蓋然性は高い。また検出した溝の振れ幅が調査区の振れ幅と概ね一致しており、現在確認できる地割が、中世まで遡る可能性が指摘できる。具体的にはSD2010やSD2011、SD2070やこれらと垂直方向の中軸をもつSD2077やSD2079などから確認できる。これらは東で南に約21°前後の振れであり、当地の地割を示すものといえる。この中で最も古い遺構である可能性があるのはSD2070で、13世紀前半までの山茶碗などの遺物が出土している。したがって、当地の地割は少なくとも13世紀前半まで遡る可能性がある。これは、太田川駅周辺の区画整理以前に残存していた畑の方位とも概ね一致しており、現代までこの地割を踏襲していたものと考えられる。

なお、当調査地点では13世紀以前の遺物の出土は極端に少なく、遺構も中世以前に比定できるものは皆無であったため、当地に居住域が展開するのは13世紀以降のことであると考えられる。

Ⅱ　出土遺物について

1・2地点では調査面積に対して多いとは言い難い遺物の出土量であった。その中で、特筆すべき遺物についてまとめておく。また、特に本年度の調査の中でこの調査地点のみで瓦が微量ながら出土しており、まとめておく必要があるためそれらについてふれておく。

i　土器類

本調査地では主に中世の土器類が出土している。これらは主に13世紀以降のものであり、その中で12～13世紀の土器類は山茶碗を主体として出土している。14～16世紀の土器は羽釜や内耳鍋などのような調理具と瀬戸美濃のいわゆる食器類が出土している。ここで見出せる特徴は、12～13世紀の土器類は山茶碗が中心であることに対し、14～16世紀のものは、調理など食に関わるものがあり、この違いは明確である。山茶碗は用途が明確でないために把握しにくい部分もあるが、一般的には集落内部から多く出土するものの、田畑など明らかに集落とはなれた場所からも出土するという特性があるため、12～13世紀の当地の特徴は掴みにくい。対して、14～16世紀はいわゆる食器が主体であり、生活に密着した雑器が出土している状況である。以上のことを勘案すると、当調査地内で検出している遺構は14世紀以降のものである蓋然性が高い。特に、調査区内で検出した柱痕がみられる柱穴は掘立柱建物の柱穴と考えられるが、こうした掘立柱建物ができる契機が14世紀頃からみられるようになったと考えられる。

ii　出土瓦の特性

1・2地点では微量ながら瓦が出土しているが、これらは大きく2つのグループに大別できる。一つは、杏葉唐草文軒平瓦と巴文軒丸瓦とこれと組み合うⅠ群。他方は今回出土した鬼瓦と組み合うと考えられるⅡ群である。前者は平安時代後期、後者は鎌倉時代後期～室町時代に比定できるものである。

Ⅰ群の瓦は畑間遺跡および東畑遺跡とその周辺部に散在して出土する傾向にある。これまでの調査では、大田町所在の常蓮寺の東域部で出土する傾向がみられるものの、それ以外の広範囲から出土しており、出土位置が特定の範囲に限定できない状況にある。

Ⅰ群の軒瓦

Ⅱ群の軒瓦

図77　畑間・東畑遺跡出土軒瓦

一方、Ⅱ群の瓦は常蓮寺の東側でのみ出土している。Ⅰ群とは異なり燻焼により全体が黒ずんだ色調のものである。2008年度調査ではこれと同様の焼成の瓦が当調査区の北東部から出土しており、連珠文軒平瓦が少量ながら出土した。この連珠文軒平瓦がⅡ群を組成する軒平瓦と考えられ、当地周辺部に瓦葺き建物を想定することができる。今のところ建物を想定するような礎石や基壇などは検出できていないが、瓦の出土範囲が限定的であるため、その想定場所は常蓮寺の北東部と考えられる。

なお、Ⅰ群の瓦は、当遺跡の南部に展開する加木屋丘陵を中心とする「加木屋周辺古窯」のうち、吉田古窯と社山古窯に同范の軒瓦がみられ、そこで生産された可能性のある瓦である。笵傷による比較からは、当遺跡に持ち込まれた瓦に関しては吉田古窯で生産されたものである。

第2節　3地点

Ⅰ　検出遺構について

3地点では調査面積に対して非常に多くの遺構を検出している。しかし、遺構数に対して遺物の出土量は極端に少なかった。これは、後世に当地に大幅な改変が行われた傍証と考えられ、検出した遺構がいずれも浅く、土坑などは底部分であったことや、調査区壁面の断面観察からも明らかである。この遺構群は調査区内から出土した遺物の年代から中世～近世初頭のものが多いと考えられる。なお、羽付釜が出土したSD3058は宅地の区画溝と考えられ、この溝の西側では柱穴を多く検出したが、東側からは検出していない。このことから、調査区の西側は宅地として利用され、東側は宅地の外郭部に相当すると考えられる。また、調査区の東側に常蓮寺が所在しており、調査地と近接するため、関連遺構の発見が期待されたが、寺院関係の遺構や遺物は皆無であった。

当調査区から出土した遺物は、破片総数で762点であり、非常に少なかった。出土遺物の時期で特に多いのは中世～近世にかけてであり、それ以前のものはほとんど出土していない。

第3節　4地点

Ⅰ　検出遺構について

4地点は主に中世の遺構を検出している。主要な遺構はSD4018およびSD4031である。両者はいずれも東西方向から南側に屈曲する溝であるが、この屈曲部の場所が異なることからそれぞれ別の遺構として掘り分けた。SD4031を掘り直したものがSD4018と考えられ、両者は同じ機能の溝であることが看取できる。SD4018からは15世紀までの遺物が出土しており、15世紀のある時期には廃絶したものと考えられる。SD4018とSD4031はそれぞれ、縄文時代晩期～室町時代中葉までの土器類が出土している。このような状況は当地に縄文時代晩期から生活痕跡があったことが考えられる。しかし、検出した遺構は出土遺物から中世以前に比定できるものがなく、生活痕跡としての遺構は確認していない。これが後世の改変による削平があったために遺構が残存していない可能性も考えられるが、むしろ第2章でもふれたように、SD4018やSD4031が掘削された場所がもともと流路や湿地のような落ち込みのある場所であって、その場所に捨てこまれた、または、流入した土器が出土したものと考えるのが自然であろう。

表8　SD4018・4031出土土器の点数および比率

		弥生土器	土師器・須恵器	灰釉陶器	中世土師器・山茶碗・古瀬戸類
SD4018	点数	185	150	4	192
	比率（%）	34.8	28.2	0.7	36.2
SD4031	点数	353	333	3	136
	比率（%）	42.7	40.4	0.4	16.5

※中世土師器としたものの中に平安時代のものを含んでいる可能性がある。

両溝から出土した土器類の傾向は表2に提示した。これをみると、弥生時代～古代のものが大多数を占め、中世のものは4割に満たない。ただし、古代の中でも平安時代、特に灰釉陶器は極端に少ない。このことから、当地の生活痕跡の変遷として弥生時代～古代にかけて近接地域に何らかの生活痕が展開するものと考えられ、平安時代中期には希薄になるものの、中世には再び近接地に遺構が展開することが想定できる。ただし、当地は砂堆の海側にあたる立地と考えられ、中世以前は住居などには不向きな立地である蓋然性が高い。今回の調査では検出していない弥生時代～古代の遺構に関しては周辺部に遺構が展開するのではなく、むしろ生業の痕跡などを想定するべきかもしれない。今後の課題である。

Ⅱ　出土遺物について

4地点では、他の地点ではみられなかった遺物が出土した。無文粗製小型平底深鉢形土器と呼ばれる弥生時代前期後葉に比定される一群である。これらについては、2001年度の畑間遺跡の調査でまとまって出土しており、製塩土器の可能性のある土器群として報告書に掲載されている（報告書2004）。これらの共通点は底部の作りが粗雑であることや底部内面の調整が粗いことと、二次的な被熱痕跡がみられること、内面に被熱による層状剥離がみられるという点である。この一群の

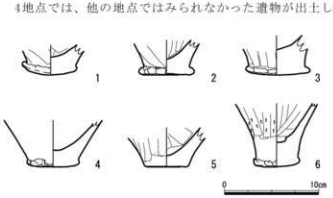


図78　4地点出土弥生時代の製塩土器

土器を製塩土器とみる向きに対して賛否両論あるが、本報告は前提として製塩土器などの土器が有する機能に関して限定した記載はしない。しかしながら、畑間遺跡から出土する無文粗製小型平底深鉢形土器と呼称されるこれらの土器は、畑間遺跡の中でも当調査地周辺、遺跡の西辺部で出土するという特性がある。特に2001年度の調査では数量的にもまとまって出土しており、この調査地は24年度調査の4地点と近接する位置関係にある。一方で、同じ年代の土器が本年度の調査では5地点、6地点、7地点から出土しているものの、これらの3つの調査地からは無文粗製小型平底深鉢形土器は出土していない。こうした出土位置が特定の範囲に集中することは、この土器が特殊な用途に使用されていたことを示唆するもであろう。また、一定量の無紋粗製小型平底深鉢形土器の出土が確認できる地域は畑間遺跡の西側であり、この地域は砂堆が伊勢湾側に落ち込む場所と推定され、そうした場所で需要のある土器であると考えられる。

また、上記以外の出土遺物では、縄文時代晩期の土器が若干数出土している。これについては一定量がまとまって出土している訳ではないため、集落の想定などは難しい。ただ、周辺部で同時期の縄文土器がまとまって出土するのは東畑遺跡の東辺部で多くみられることに対して、当地点はそこから離れた場所であり、ここから少量ながら出土することに関しては何らかの意味を伴うと考えられる。

第4節　5地点

Ⅰ　検出遺構について

5地点では主に中世の遺構を確認した。中でもSD5023・5031、SK5034が主要な遺構と考えられる。SD5023とSD5031は一連の溝と考えられ、SK5034をとり囲むような配置であった。したがって、この溝と土坑は一連の遺構と考えられる。ただし性格は不明である。SK5034については井戸であることも考えられるが、井戸枠などの構築物がなく、断面観察からも抜取りの痕跡などは確認していない。

なお、SD5023の南東側で柱穴を2ヶ所で検出している。両者は一連のものである可能性があり、掘立柱建物である可能性がある。また、掘削層位はSD5023と同じであり、同時期に並立していた可能性が指摘できる。また、これら以外の柱穴は検出していないことから調査地より西側に建物が展開していないものと考えられ、調査区の南東側に建物をともなう居住区が展開すると想定できる。

Ⅱ　出土遺物について

5地点では主に弥生時代の土器類と、中世の土器類が出土している。弥生時代の土器は調査区全体で出土した土器が破片総数で1172点であるのに対して412点出土しており、遺構が伴わないながらも比率的に多い。弥生時代の土器は小片が多いため年代比定が難しいものも多いが、大まかな内訳は貝殻山式～朝日式までの弥生時代前期～中期前半のものを主体として、弥生時代後期の山中式のものが若干数出土するという傾向がみられた。前期のものは条痕文系の鉢や壺を主体として、若干数の遠賀川系がみられる。後期のものは、小片が多いため詳細はつかめないが、量的に非常に少ない。したがって、遺構としては検出していないが、当地近辺に弥生時代前期～中期の集落ないし、生活痕跡があるものとみて間違いなかろう。

中世の土器類に関しては、山茶碗と伊勢型鍋を主体に土師皿や瀬戸美濃陶器が微量に出土した。この状況から、検出した遺構の年代は中世の土器の中でも主体的な出土をしている山茶碗や伊勢型鍋の年代

に比定できる。伊勢型鍋については、13世紀末～15世紀前葉に比定できるものが出土している。したがって、当該時期に伊勢型鍋を使用するような場が調査地周辺に存在したものと考えられ、先述した調査区南東側に展開すると考えられる居住区の存在の傍証ともいえる。一方で、煮炊具としての伊勢型鍋以外に調理に関係する土器がみられないことは特記しておく。この時期の土器としての煮炊具は、伊勢型鍋以外は尾張地域ではほとんどみられないため、この点はよいが、それ以外の調理具や食器などが共伴してもおかしくはない。しかしながら、その時期の土器および遺物が出土していない点は、周辺地域の傾向と異なり、当調査地点の特徴といえる。これがどのような性格であるのかは今後の課題とする。

第5節　7地点

Ⅰ　検出遺構

7地点では主に弥生時代～古墳時代、奈良時代末～平安時代前期、中世以降の遺構を検出している。これらについて時代別にまとめる。

i　弥生時代～古墳時代

弥生時代～古墳時代の遺構は主に方形周溝墓、土坑、竪穴住居を検出している。方形周溝墓については、SZ7177とSZ7178の他、周溝と考えられるSD7135、SD7136を検出している。

A　SZ7178の築造年代

SZ7178は墳丘が削平され、全く残っていなかった。そのためSZ7178の築造年代については、周溝からの出土遺物が判断材料となる。この方形周溝墓は、四隅陰橋型とよばれるもので、周溝の四隅に掘削が及んでおらず、四方の周溝はそれぞれ独立する。SZ7178の周溝に相当するSD7134、AD7138、SD7139、SD7140の4つの周溝のうち、SD7139については、後世の耕作によって、上層が削平されており、比較対象にならなかったが、他の3つの周溝については、既出した表1で示したように、上層からは廻間式の古式土師器の出土が多いが、中層は少なく、下層についてはどの溝からも出土していない。これは各溝の下層が堆積する間に廻間式土器が入ることはなかったととらえることができ、周溝掘削時は廻間式土器の使用以前であったと解釈することができる。このことから、SZ7178の築造時期は廻間式土器の出現以前と考えられ、その時期は少なくとも弥生時代後期まで遡ることができる。なお、SD7134、SD7138、SD7140から出土した弥生土器は、弥生時代中期前葉に比定できるものに若干のまとまりがある。しかも、それらは、各溝の中層および下層から比較的大きな破片で出土する傾向があった。むろん、方形周溝墓築造以前に中期前葉の集落などの遺構群が当調査地周辺に展開していたのであれば、周溝にその時期の土器類が入っても不思議はない。しかし、当調査地の他の遺構や包含層出土遺物をみても、弥生時代中期の遺物は若干数みられるものの、まとまりはなく、当地に弥生時代中期頃の集落が展開した状況は出土遺物からも想定できない。したがって、当調査地において、弥生時代中期の遺物はSZ7178の周溝だけにまとまりがあることは特記しておくべきであろう。

一方、7地点で検出した他の方形周溝墓に関しては、いずれも廻間式土器が周溝下層から出土しており、これらは廻間式土器出現以降に築造された方形周溝墓と考えて間違いない。このことを勘案すると、上述したSZ7178の構築年代に関しては疑問が残るが、周溝全体でみた場合の出土土器の年代から廻間式土器の出現前後の時期と捉えることができる。いずれにしても調査地周辺部で他の方形周溝墓の年

代と配置の解明は不可欠であろう。

B　SD7136・SK7163について

SD7136は調査区北西部で検出した方形周溝墓の周溝と考えられる溝である。溝内からは廻間Ⅰ式～Ⅲ式の土器類が出土している。SK7163はSD7136の溝底で検出した土坑で、直口壺が口縁側を下にした状態で出土した。遺構面からの深度を考えると、SK7163は、SD7136を掘削していなければ構築できない遺構である。したがって、SD7136が方形周溝墓の周溝であるならば、SK7163は周溝内で行われた祭祀の痕跡、または周溝内に据えた供献土器である可能性が指摘できる。同じ遺跡内での類例が見つかる可能性もあるため、特記事項として挙げておく。

C　SB7143について

SB7143は調査区南西隅で検出した竪穴住居である。竪穴掘形の西辺中央付近で竈と考えられるSX7142も併せて検出している。SX7142に関しては、被熱を受けた部分を竈痕跡と認識して貼床と分けて掘削した。内部からは、細かい焼土や土器の小片が出土したが、竈と認識できる粘土塊や構造物などは出土していない。したがって被熱痕跡はあるものの、構造物としての竈が存在したのかに関しては疑問が残る。

SB7143の築造年代については、貼床内から出土した土器類は概ね廻間式期に比定できるものであり、それ以降の年代に比定することができる。当調査地に南接する平成21年度調査の3地点では、松河戸式期に比定できる竪穴住居が検出されており、これらと関連する可能性が高い。

以上が弥生時代～古墳時代の主要な遺構である。この結果から当調査地の当該期の遺構は、調査区の南側一部を除く部分には方形周溝墓が、南側には竪穴住居があるという位置関係が明らかになった。また、今回と過去の調査結果をまとめると、SZ7178は方形周溝墓群の南限である可能性があり注目できる。平成21年度調査では、1～3地点で弥生時代中期～奈良時代前期の竪穴住居が検出されている。これら21年度の調査地は当調査地の南側と東側に近接しており、そこから住居域が検出される状況は、当調査地を中心に考えると南側と東側に住居域が展開する状況である。一方、墓域に関しては、当調査で検出したSD7135やSD7136のように調査区の西側に延長する見込みのものもあり、住居跡が想定されていない北側と西側に広がるものと考えられる。この状況から、墓域は東畑遺跡の中心部より北域から南西方面に向け展開しており、墓域の南～東側を囲むような配置で住居跡が展開することが想定される。ただし、方形周溝墓の年代と住居の年代を明らかにした上で、同時期のものを抽出した場合に、それらがどのような配置と位置関係となるのかを整理する必要がある。特に住居跡においては、継続する期間と廃絶時期、関連遺構の年代を考えた上で各時期の集落構造を把握する必要がある。そのため、東畑遺跡においては現状の情報量で各時期別の集落内の構造的考察をするのは荷が重く、時期尚早の感がある。しかしながら、住居群の変遷については、遺跡の南西側に比べ、東側に向けて年代が新しくなる傾向があり、この点は注目できる。さらに、墓域との関連では、住居群が墓域に侵入することは少なくとも奈良時代前期まではなく、住居の北側に墓域、南側に旧大田川が流れるという環境は大きく変化していない。これが東畑遺跡の集落構造の在り方を示しており、今回の7地点調査は墓域の南限と住居域の北限を検出した状況であったといえる。

先述したように東畑遺跡の弥生時代～古墳時代の集落の構造については、現状では、大まかな配置について明らかになりつつあるが、未解明な要素も多分にあり、周辺部の調査が不可欠といえる。

ⅱ　奈良時代後期～平安時代前期

奈良時代後期～平安時代前期の遺構については、調査区南東隅で検出したSK7141の1基だけである。SK7141については、破損した土器などを捨て込んだ廃棄土坑と考えられるが、周辺部の調査では、当該期の遺構は発見されていない。そのため、この遺構だけが当地にあること自体に疑問が残る。また、当調査地内で出土した遺物を見ても、SK7141と同じ年代の遺物は少ない。よって、SK7141の存在自体が変則的であるが、これについては、周辺部、特に東～北東部の調査が必要であろう。

ⅲ　中世

中世に比定できる遺構は溝、井戸、土坑、ピット、動物埋葬坑など、多くの遺構を検出している。出土した遺物の年代に注目すると、13世紀後半～15世紀前葉に比定できるものが多く、検出した遺構は当該期のものが多く含まれるものと想定できる。しかし、遺物の出土量はそれほど多くはなく、小規模な集落が展開したものと考えられる。また、15世紀前葉以降に集落は廃絶して、耕地化したものと考えられ、その後の遺構は、近・現代の井戸が数基確認できたに過ぎず、中世の後葉から近世を通じて耕作地であったことが考えられる。

以上、まとまりのない内容になったが、平成24年度調査を調査地点別でまとめた。今回の調査でも従来の調査同様に後世の耕地化などによる土地改変の結果、遺構が削平されており、遺物に関しても遺存状態の良好なものは少なかった。そのため、言及できる範囲が狭く、事実記載にとどめる内容となった。今後、過去の調査も併せて遺跡全体を把握するための資料整理が不可欠である。

最後に本報告書作成にあたって、芦田淳一、安部みき子、奥山哲也、金井慎司、鬼頭　剛、辻　康男、永井伸明、坂野俊哉、宮崎泰史、宮澤浩司、森島裕子氏には助言、協力を賜った。記して感謝の意を表す。

参考文献

愛知県史編さん委員会編　2007 『愛知県史』別編窯業2（中世・近世　瀬戸系）愛知県

赤塚次郎　1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集）（財）愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1992 「山中式土器について」『山中遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集）（財）愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1994 「付論1　松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集）（財）愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1997 「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集）（財）愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎・早野浩二　2001 「松河戸・宇田様式の再編」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号（財）愛知

県埋蔵文化財センター

赤羽一郎・中野晴久　1994　「生産地における編年について」『シンポジウム　中世常滑焼を追って』資料集　同シンポジウム実行委員会

石川松衛　1928　『横須賀町誌』愛知県史編纂会・知多郡横須賀町役場

石黒立人　2006　「伊勢湾周辺地域における弥生時代の平野地形について」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号　（財）愛知県埋蔵文化財センター

石黒立人・宮腰健司　2007　「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』 同刊行会

石田成年　1997　「摂河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』和泉書院

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』No.2掲載　貿易陶磁研究会

大橋泰二　1989　『考古学ライブラリー55　肥前磁器』ニュー・サイエンス社

岡本直久　2005　「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集（第2版）』同シンポジウム実行委員会

尾野善裕　1997　「尾張・西三河（窯跡）　猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1　7世紀の土器（近畿東部・東海編）』 古代の土器研究会

鍾方正樹　2003　『井戸の考古学』（ものが語る歴史シリーズ⑧）　同成社

金子健一　1996　「尾張・三河地方のホウロク」『鍋と甕　そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム資料集）東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

北村和宏　1996　「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮炊具の編年」『年報平成7年度』　（財）愛知県埋蔵文化財センター

北村和宏　1996　「尾張の『伊勢型鍋』『鍋と甕　そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム資料集）　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

北村和宏　1996　「尾張の羽釜」『鍋と甕　そのデザイン』（第4回東海考古学フォーラム資料集）東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

齊藤孝正　1989　「灰釉陶器生産の一様相」『美濃の古陶』 美濃古窯研究会

齊藤孝正　・後藤健一編　1995　『須恵器集成図録　第3巻　東日本編Ⅰ』 雄山閣出版

柴垣勇夫ほか　2004　『東海地方山茶碗研究の現在と課題』（中世土器・陶器編年研究会記録）「中世土器・陶器編年研究と流通様相の年代的解明」班

城ヶ谷和広　2010　「総論　編年及び編年表　土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史　資料編4　考古4　飛鳥～平安』 愛知県

城ヶ谷和広　2010　「総論　編年及び編年表　土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）『愛知県史　資料編4　考古

4　飛鳥～平安』　愛知県

杉崎章　1969　「横須賀町のあらまし」『横須賀町史』横須賀町役場

杉崎章編　1979　『法海寺遺跡』(知多市文化財報告第15集)　知多市教育委員会

立松彰　1997　『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』　東海市教育委員会

立松彰　2010　「塩生産」『愛知県史　資料編4　考古4　飛鳥～平安』愛知県

立松彰・永井伸明　2004　『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

立松彰ほか　1998　『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

立松彰ほか　1998　『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』　東海市教育委員会

永井邦仁　2000　「古代の瓦塔」『まいぶん愛知』No.61　(財)愛知県埋蔵文化財センター

永井邦仁　2006　「東海地方の古代瓦塔研究ノート」『愛知埋蔵文化財センター研究紀要』第7号

(財)愛知県埋蔵文化財センター

永井伸明・宮澤浩司　　2007　「伊勢湾を望む海辺の遺跡−東畑遺跡等発掘調査概報−」東海市文化調査委員会編『研究報告とうかい』創刊号　東海市教育委員会

永井宏幸・村木誠　2002　「尾張地域」『弥生土器の様式と編年−東海編−』　木耳社

中野晴久　2005　「常滑・渥美」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集（第2版）』　同シンポジウム実行委員会

中野晴久　1996　「常滑羽釜」『甕と鍋　そのデザイン』(第4回考古学フォーラム資料集)　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

中野晴久　2005　「常滑・渥美」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～　発表要旨集（第2版）』　同シンポジウム実行委員会

中野晴久　2006　「生産③　常滑窯」『江戸のやきもの−生産と流通−』(記念講演会・シンポジウム資料集)

瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

西本豊弘　松井章　1999　『考古学と動物学』(『考古学と自然科学』②)同成社

福岡猛志　1991　『知多の歴史』　松籟社

福岡猛志ほか　1981　『知多市史』本文編　知多市

藤澤良祐　1994　「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯　三重県埋蔵文化財センター

藤澤良祐　1994　「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号　三重県埋蔵文化財センター

藤澤良祐　2002　「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化センター研究紀要』第10輯　(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤良祐　2009 『中世瀬戸窯の研究』高志書院

前田清彦・鈴木とよ江　2002 「三河地域」『弥生土器の様式と編年-東海編-』 木耳社

松井章　2008 『動物考古学』京都大学学術出版会

宮澤浩司　2009 「伊勢湾を望む海辺の遺跡　(2) -平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査概要報告-」東海市文化財調査委員会編『研究報告とうかい』第2号　東海市教育委員会

宮澤浩司・桐山秀穂・板野俊哉ほか　2009 『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』 東海市教育委員会

森田勉　1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2掲載　貿易陶磁研究会

山本信夫　1995 「中世前期の貿易陶磁器」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社

財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1992 『清洲城下町遺跡（Ⅱ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第27集

財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1992 『名古屋三の丸遺跡（Ⅲ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第37集

財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006 『江戸時代のやきもの-生産と流通-』記念講演会・シンポジウム資料集

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1999 『研究紀要』第7輯

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2002 『研究紀要』第10輯

財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2004 『江戸時代の瀬戸・美濃窯』(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録)

瀬戸市教育委員会　1990 『尾呂-愛知県瀬戸市　定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』

瀬戸市埋蔵文化財センター　2001 『瀬戸大窯とその時代』(財団法人瀬戸埋蔵文化財センター設立10周年記念企画展図録)　(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター

瀬戸市埋蔵文化財センター　2002 『江戸時代の瀬戸窯』(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録)　(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター

東海市教育委員会　1997 『愛知県東海市　東畑遺跡等試掘調査報告』

東海市教育委員会　1999 『愛知県東海市　上浜田遺跡発掘調査報告』

東海市教育委員会　2004 『愛知県東海市　畑間遺跡発掘調査報告』

東海市教育委員会　2005 『愛知県東海市　松崎遺跡確認調査報告』

東海市教育委員会　2009 『愛知県東海市　畑間・東畑遺跡発掘調査報告』

半田市立博物館　1993 『知多の古瓦』

畑間遺跡遺物観察表（HM12-1・2）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
1	1・2	Ⅷ19e	－	SD2011	土師質土器	皿	(10.0)	(1.9)	－	やや粗い	7.5YR8/3浅黄橙色	－	指圧痕（一部強い所あり）	ナデ	非ロクロ調整，口縁部に煤付着
2	1・2	Ⅷ20o	－	SD2011	土師質土器	皿	(7.2)	1.6	－	やや粗い	7.5YR7/3にぶい橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
3	1・2	Ⅷ19s	－	SD2011	土師質土器	皿	(12.0)	1.65	(6.5)	やや粗い	10YR8/3浅黄橙色	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整
4	1・2	Ⅷ20s	－	SD2011	瀬戸美濃	皿	10.25	2.4	4.2	やや粗い	N7/0灰白色	灰釉	回転ナデ，底部に糸切痕	回転ナデ	焼成良好，内外面に灰釉付着
5	1・2	Ⅷ20s	－	SD2011	土師質土器	内耳鍋	(26.2)	(14.45)	－	～2mm長石・雲母少量含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ，ナデ後指圧痕，ケズリ，1条の沈線	ヨコナデ，ケズリ	焼成良好，内面に接合痕と工具痕あり，外面に煤付着あり，内面回転台を使用
6	1・2	Ⅷ19r	－	SD2011	土師質土器	羽釜	(20.2)	(5.5)	－	やや粗い，小粒の長石含む	7.5YR5/2灰褐色	－	ヨコナデ，ハケ目＋ヨコナデ，ナデ	ヨコナデ	焼成良好，鍔径(24.8)cm，鍔厚0.5cm，内外面に煤付着，鍔部分に接合粘土
7	1・2	Ⅷ19r	－	SD2011	土師質土器	羽釜	38.3	(27.2)	－	長石少量含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ，ナデ，指圧痕・不定方向のナデ，不定方向のケズリ，指圧痕	ナデ	焼成良好，内面に工具痕あり外面に煤付着あり
8	1・2	Ⅷ19q	－	SD2070	山茶碗	小皿	8.1	2.3	4.5	長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，底部に糸切痕	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整，薄く自然釉あり
9	1・2	Ⅷ19q	－	SD2070	山茶碗	小皿	(8.6)	2.1	4.5	～3mm長石・石英含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整
10	1・2	Ⅷ19r	－	SD2070	山茶碗	小皿	8.15	2.2	4.75	細かい長石少量含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転糸切ナデ，糸切痕	回転糸切ナデ	焼成良好，ロクロ調整，口縁端部薄く自然釉あり
11	1・2	Ⅷ19r	－	SD2070	山茶碗	小皿	7.85	2.1	4.55	長石少量含む	5Y8/1灰白色	－	回転糸切ナデ，底部に糸切痕	回転糸切ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内外面に自然釉あり
12	1・2	Ⅷ19r	－	SD2070	山茶碗	碗	(16.1)	5.1	7.4	～3mm長石少量含む	5Y8/1灰白色	－	回転糸切ナデ，貼付高台	回転糸切ナデ	焼成良好，ロクロ調整，釉薬痕極少量あり自然釉あり
13	1・2	Ⅷ19r	－	SD2070	山茶碗	碗	16.5	5.35	(7.45)	細かい長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転糸切ナデ，貼付高台，底部に糸切痕	回転糸切ナデ	焼成良好，ロクロ調整
14	1・2	Ⅷ19q	－	SD2070	山茶碗	碗	16.55	(5.3)	(8.0)	～4mm長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転糸切ナデ，貼付高台，底部に糸切痕	回転糸切ナデ，ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内外面に自然釉あり，釉薬痕あり
15	1・2	Ⅷ19r	－	SD2070	山茶碗	碗	15.6	5.5	7.05	長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転糸切ナデ，貼付高台，底部に糸切痕，ナデ	回転糸切ナデ，ナデ	焼成良好，ロクロ調整，釉薬痕あり，内外面に自然釉あり
16	1・2	Ⅷ19q	－	SD2070	山茶碗	碗	16.15	4.9	7.5	石英・長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転糸切ナデ，貼付高台，底部糸切痕ナデ	ナデ，回転糸切ナデ	焼成良好，ロクロ調整，釉薬痕少量あり
17	1・2	Ⅷ19r	－	SD2070	山茶碗	碗	(16.1)	4.95	7.4	～2mm長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転糸切ナデ，貼付高台，糸切痕	回転糸切ナデ	焼成良好，ロクロ調整，釉薬痕あり，内外面に自然釉あり
18	1・2	Ⅷ19q	－	SD2070	山茶碗	碗	16.5	5.5	7.5	密，1～3mm長石含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	回転糸切ナデ，貼付高台，底部にナデ	回転糸切ナデ	焼成良好，ロクロ調整，高台に釉薬圧痕あり
19	1・2	Ⅷ19r	－	SD2070 SD2006	瓦	軒平瓦	－	－	－	細かい長石少量含む	N7/0灰白色	－	布目痕，ケズリ	ケズリ，ヨコナデ	瓦当全体に自然釉あり
20	1・2	Ⅷ19s	－	SD2070 SD2009	瓦	軒平瓦	－	－	－	細かい長石少量含む	N7/0灰白色	－	ケズリ，布目痕	ケズリ，ヨコナデ，縦ナデ	

畑間遺跡遺物観察表（HM12-1・2）

掲図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
21	1・2	IXE11	－	SX2045	土師質土器	皿	(12.4)	1.8	(8.4)	やや粗い	10YR8/2灰白色	－	回転糸ナデ、底部に糸切痕	回転糸ナデ	焼成良好、ロクロ調整
22	1・2	VIIIE20	－	SX2045	土師質土器	皿	(12.0)	2.1	(5.9)	やや粗い	7.5YR8/3浅黄橙色	－	回転ナデ、ナデ、底部に糸切痕	ナデ、回転ナデ	焼成良好、ロクロ調整
23	1・2	IXE11	－	SX2045	土師質土器	皿	(14.0)	2.2	(9.8)	やや粗い	7.5YR8/4浅黄橙色	－	ヨコナデ、回転糸ナデ、ナデ、底部に糸切痕	ナデ、ヨコナデ	焼成良好、ロクロ調整
24	1・2	IXE11	中層	SX2045	土師質土器	皿	(13.6)	(2.1)	－	やや粗い	5YR7/3にぶい橙色	－	回転糸ナデ(粗目)、底部に糸切痕	回転糸ナデ(粗目)	ロクロ調整
25	1・2	IXE11	中層	SX2045	山茶碗	碗	(16.0)	4.9	(6.4)	長石含む	5YZ/1灰白色	－	回転糸ナデ、貼付高台、底部に糸切痕	回転糸ナデ	焼成良好、ロクロ調整、内外面に自然釉あり、高台に籾殻痕あり
26	1・2	VIIIE20	上層	SX2045	山茶碗	碗	(14.1)	5.6	6.0	3mm長石含む	5YZ/1灰白色	－	回転糸ナデ、貼付高台、底部にナデ	回転糸ナデ、ナデ、指頭圧痕	焼成良好、ロクロ調整、高台に籾殻痕あり内外面に自然釉あり
27	1・2	VIIIE11	中層	SX2045	山茶碗	碗	(14.7)	5.75	6.5	細かい長石含む	5YR/1灰白色	－	回転糸ナデ、指ナデ、底部に回転糸切痕	回転糸ナデ、回転糸ナデ	焼成良好、ロクロ調整、高台剥離、内面に自然釉あり
28	1・2	IXE11	－	SX2045	灰釉陶器	壺	－	(6.25)	9.9	密	2.5Y8/1灰白色	灰釉	回転ナデ、ナデ	ナデ、回転ナデ	焼成良好、外面に灰釉付着、底部に薄く灰釉付着
29	1・2	VIIIE20	－	SX2084	灰釉陶器	短頸壺	(14.0)	(4.4)	－	密	2.5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好、ロクロ調整、外面に灰釉あり、外面波状文、「十」字線刻複数あり
30	1・2	VIIIE20	－	SX2045	瀬戸美濃	小皿	(10.5)	2.6	(4.1)	やや粗い	2.5Y8/2灰白色	灰釉	回転ナデ、底部に糸切痕	回転ナデ	焼成良好、内外面に灰釉付着
31	1・2	VIIIE20	－	SX2045	瀬戸美濃	折縁深皿	(23.1)	(5.0)	－	やや粗い	2.5Y8/3浅黄色	長石釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好、内外面に長石釉付着
32	1・2	VIIIE20	－	SX2045	瀬戸美濃	大皿	(34.6)	(5.9)	－	長石含む	2.5Y8/2灰白色	鉄釉	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	焼成良好、内面に櫛目あり、内外面に鉄釉付着。
33	1・2	VIIIE20	中層	SX2045	土師質土器	羽釜	(21.8)	(3.5)	－	やや粗い	7.5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	焼成良好、鍔径(24.8)cm 鍔厚0.4cm 鍔部分に接合粘土、外面に煤付着
34	1・2	IXE11	中層	SD2045	土師質土器	羽釜	(20.5)	(3.95)	－	密	10YR7/2にぶい黄橙色	－	ヨコナデ、ハケ目＋ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好、鍔径(24.3)cm 鍔厚0.45cm 外面に焼成後1孔穿存、外面上部に薄く煤付着
35	1・2	VIIIE20	中層	SX2045	土師質土器	羽釜	(24.2)	(3.65)	－	やや粗い	7.5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ナデ	焼成良好、鍔径(27.0)cm 鍔厚0.4cm 鍔部分に接合粘土、外面に焼成後1孔穿存の所あり、外面上部に煤濃く残る
36	1・2	VIIIE20	－	SX2045	土師質土器	羽釜	(41.4)	(8.7)	－	～1mm長石少量含む	10YR8/4浅黄橙色	－	ヨコナデ、ナデ、縦方向ナデ	ヨコナデ、板ナデ、縦方向ナデ	焼成良好、鍔径(46.4)cm 鍔厚0.8cm 鍔部分に接合粘土、外面に指圧痕あり
37	1・2	VIIIE20	中層	SX2045	土師質土器	羽釜	(41.0)	(6.8)	－	～1mm長石・雲母含む	7.5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、鍔の下面の板ナデ、胴下部、縦方向ナデ	ヨコナデ、横方向板ナデ	焼成良好、鍔径(45.6)cm 鍔厚0.6cm 鍔部分に接合粘土
38	1・2	VIIIE20	－	SX2045	土師質土器	内耳鍋	(27.1)	(15.0)	－	長石・雲母含む	7.5YR5/4にぶい褐色	－	ヨコナデ、指圧痕＋ナデ、底部に指圧痕、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	焼成良好、外面全体に煤付着、外面上部に沈線、内面に接合痕と工具痕あり
39	1・2	VIIIE20	－	SX2045	土師質土器	内耳鍋	(19.2)	(12.4)	－	密、雲母多量・長石少量含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	ナデ、ハケ目、ケズリ	指圧痕、ナデ	焼成良好、外面煤付着部分あり、口縁部分に貼付あり
40	1・2	IXE11	－	SX2045	常滑	耳付鍋	(15.3)	(10.0)	－	長石・チャート含む	2.5YR5/8明赤褐色	－	ナデ、ヨコナデ、工具痕	ナデ、ヨコナデ、指ナデ	焼成良好、外面に鳥足状のヘラガキあり

畑間遺跡遺物観察表（HM12-1・2）

掲図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
41	1・2	IXE11	－	SX2045	常滑	甕	－	(8.1)	(20.4)	細かい・長石・クサリ礫多量含む	2.5Y6/6橙色	－	回転ナデ，ナデ，脚部指圧痕，板ナデ	指圧痕，指ナデ，足部指圧痕	焼成良好，型押し→置文，竹管紋，脚部は貼付
42	1・2	IXE11	中層	SX2045	瀬戸美濃	小壺	－	(4.8)	2.5	やや粗い	10YR8/1灰白色	灰釉	ナデ，底部に糸切痕	ナデ	焼成良好，外面に灰釉付着，
43	1・2	IXE11	中層	SX2045	土製品	瓦塔	(8.2)	(6.2)	1.9	細かい長石多量含む	外面:7.5YR5/1褐灰色 内面:2.5Y5/1黄灰色 断面:5Y6/1灰色	－	ヘラケズリ(不定方向)，磨滅	－	瓦部手成竹状工具で型作り，隅棟部に強いナデ
44	1・2	VIIIE19p	包含層	－	土師質土器	小皿	(7.8)	(1.3)	－	やや粗い	7.5YR7/6橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
45	1・2	VIIIE19r	包含層	－	土師質土器	小皿	(7.4)	1.1	－	やや粗い	10YR8/3浅黄橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
46	1・2	－	重機排削	－	土師質土器	皿	(11.2)	(1.1)	－	やや粗い	7.5YR8/4浅黄橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
47	1・2	－	重機排削	－	土師質土器	小皿	(6.8)	1.4	－	やや粗い	10YR7/3にぶい黄橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
48	1・2	VIIIE19p	包含層	－	土師質土器	皿	(9.3)	1.7	(3.2)	やや粗い	7.5YR8/3浅黄橙色	－	ナデ，指圧痕	ナデ	焼成良好，非ロクロ調整
49	1・2	VIIIE20s	包含層	－	土師質土器	皿	(12.2)	2.2	6.6	やや粗い	10YR8/4浅黄橙色	－	回転指ナデ，底部に糸切痕	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整
50	1・2	VIIIE20s	包含層	－	土師質土器	皿	(11.9)	2.3	5.7	やや粗い	7.5YR7/2明褐灰色	－	回転指ナデ，底部に糸切痕	摩耗につき不明	焼成良好，ロクロ調整
51	1・2	IXE11	中層	SX2045	土師質土器	皿	(12.6)	2.4	－	やや粗い	10YR7/2にぶい黄橙色	－	回転指ナデ，	回転指ナデ	ロクロ調整
52	1・2	VIIIE19r	－	SD2051	土師質土器	皿	(9.0)	1.8	(6.0)	やや粗い	7.5YR8/4浅黄橙色	－	ナデ	ナデ	焼成良好，ロクロ調整
53	1・2	VIIIE20s	包含層	－	土師質土器	小皿(灯明皿)	8.2	1.75	4.65	やや粗い	7.5YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ，ナデ，底部に糸切痕	ヨコナデ	焼成良好，ロクロ調整
54	1・2	VIIIE19q	包含層	－	山茶碗	小碗	(9.8)	3.1	(4.8)	砂粒含む	10YR7/1灰白色	－	強い回転指ナデ，貼付高台，底部にナデとヨコナデ	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内外面に自然釉あり，高台に籾殻痕あり
55	1・2	VIIIE19r	包含層	－	山茶碗	小皿	7.3	2.1	4.4	長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内面に薄く自然釉あり
56	1・2	－	重機排削	－	山茶碗	小皿	8.2	1.9	5.1	長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，ナデ	ナデ，回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整
57	1・2	IXE11	包含層	－	山茶碗	小皿	(7.8)	1.2	(5.2)	密	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	ナデ，回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内面に自然釉あり
58	1・2	VIIIE19r	包含層	－	山茶碗	小皿	(8.0)	2.0	4.1	砂粒含む	10YR7/1灰白色	－	回転指ナデ，底部に回転糸切痕	ナデ，回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整
59	1・2	VIIIE19q	－	SK2074	山茶碗	碗	15.1	5.5	6.1	～3mm長石含む	10YR7/1灰白色	－	回転指ナデ，貼付高台	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整，高台に籾殻痕あり
60	1・2	VIIIE19s	－	北排水溝	山茶碗	碗	(14.2)	5.3	5.3	～4mm長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転指ナデ，貼付高台，底部に糸切痕	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整，高台に籾殻痕あり，内面に自然釉あり

畑間遺跡遺物観察表（HM12-1・2）

掲図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
61	1・2	Ⅷ19r	包含層	－	山茶碗	碗	(13.0)	4.8	(6.0)	長石少量含む	5Y8/1灰白色	－	強い指ナデ，底部にナデ	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内外面に自然釉あり，ナデ後高台貼付(剥離)
62	1・2	Ⅷ19s	－	断割畦	山茶碗	碗	16.0	4.3	7.0	密，長石少量含む	5Y7/1灰白色	－	回転指ナデ，貼付高台，底部に糸切り痕	回転指ナデ，ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内外面に自然釉あり
63	1・2	Ⅷ20t	－	SD2010	山茶碗	碗	(12.1)	3.85	(3.3)	密	2.5Y8/2灰白色	－	回転指ナデ，貼付高台，底部に糸切痕	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内外面に輪状痕あり
64	1・2	Ⅷ19s	包含層	－	山茶碗	鉢	(24.0)	(6.4)	－	密，～1mm長石・クサリ礫・石英多量含む	2.5Y7/2灰黄色	－	回転指ナデ	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整
65	1・2	Ⅷ19r	包含層	－	山茶碗	鉢	－	(3.9)	(13.0)	密，～2mm長石・クサリ礫少量含む	10YR7/1灰白色	－	回転ナデ，貼付高台，底部ナデ	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整
66	1・2	Ⅷ19s	包含層		瀬戸美濃	皿	(12.2)	2.6	(5.9)	密	2.5Y8/2灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好，内外面に灰釉付着，内面にトチン付着部分あり
67	1・2	Ⅷ19p	包含層	－	瀬戸美濃	皿	(19.9)	(3.3)	－	密	2.5Y8/2灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好，内外面に灰釉付着，口縁部分に折り返し
68	1・2	Ⅷ19p	包含層	－	瀬戸美濃	丸碗	(10.2)	(5.9)	－	やや粗い	10YR8/1灰白色	鉄釉	鉄釉，ナデ	鉄釉	焼成良好，外面下部に露胎あり
69	1・2	Ⅷ19r	－	SX2073	土師質土器	羽釜	(39.2)	(11.6)	－	密，～2mm長石少量・クサリ礫多量含む	7.5YR7/4にぶい橙色	－	指圧痕→ナデ，鍔部分に接合痕	ナデ	焼成良好，鍔部分より下部煤多い
70	1・2	－	－	重機掘削	土師質土器	羽釜	(23.0)	(5.3)	－	密	2.5Y8/2灰白色	－	指圧痕，指ナデ，ハケ目(部分的に指圧痕あり)	ナデ，ツマミアゲ	焼成良好，鍔部分に接合粘土あり
71	1・2	Ⅷ19r	包含層		土師質土器	内耳鍋	29.0	(12.8)	－	密，～4mm長石・クサリ礫多量含む	2.5YR6/4にぶい橙色	－	回転ナデ後指ナデ，ヘラケズリ，沈線	指圧痕，回転指ナデ，ナデ	焼成良好，全体に煤多い
72	1・2	Ⅷ19r	包含層	－	土師質土器	内耳鍋	(28.0)	(7.45)	－	密，細かい長石少量含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ，ナデ，沈線，指圧痕	ヨコナデ	焼成良好，外面に煤付着
73	1・2	Ⅷ19p	包含層	－	常滑	壺	(19.5)	(4.6)	－	～2mm長石・金雲母少量含む	2.5YR5/8明赤褐色	－	回転ナデ，ヨコナデ後斜方向ナデ	回転ナデ，強いナデ	焼成良好，赤物
74	1・2	Ⅷ19p	包含層	－	常滑	壺	(19.3)	(8.95)	－	長石含む	2.5YR5/8明赤褐色	－	ナデ，回転ナデ	ナデ，回転ナデ	焼成良好，赤物
75	1・2	－	重機掘削	－	瓦	軒平瓦	－	－	－	細かい長石少量含む	5Y7/1灰白色	－	ケズリ	ケズリ，ヨコナデ	全体自然釉
76	1・2	Ⅷ19r	包含層	－	土製品	土錘	2.3	(5.9)	2.5	やや粗い	10YR8/2灰白色	－	指圧痕	－	焼成良好
77	1・2	－	包含層上層	－	土製品	土錘	1.6	4.8	1.85	やや粗い	2.5Y8/1灰白色	－	摩滅により不明	－	焼成良好
78	1・2	－	重機掘削	－	土製品	土錘	3.8	3.8	3.4	やや粗い	2.5Y8/3淡黄色	－	指圧痕，摩耗	－	焼成良好，手づくね，一部欠けあり
79	1・2	Ⅷ20s	－	SK2043	土製品	陶丸	2.25	2.2	2.1	やや粗い	10YR6/1褐灰色	－	指圧痕	－	焼成良好，一部欠けあり
80	1・2	－	"包含層上層"	－	土製品	陶丸	2.15	2.0	2.1	やや粗い	2.5Y8/1灰白色	－	指圧痕	－	焼成良好

畑間遺跡遺物観察表（HM12-1・2）

掲図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
81	1・2	VIIIE20t	－	SD2010	土製品	陶丸	2.05	2.0	2.15	やや粗い	N7/0灰白色	－	指圧痕→ミガキ	－	焼成良好
82	1・2	VIIIE20t	包含層	－	石製品	砥石	1.8	7.1	1.2	－	2.5YR7/2灰黄色	－	擦痕	－	
83	1・2	IXE1t	中層	SX2045	石製品	砥石	(5.1)	(4.85)	3.45	－	2.5Y8/1灰白色	－	使用痕	－	焼成良好
84	1・2	VIIIE19q	包含層	－	金属製品	銅銭	2.4	2.4	0.15	－	－	－	－	－	景德元

畑間遺跡遺物観察表（HM12-3）

掲図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
85	3	VIID16i	－	SX3031	山茶碗	小皿	7.9	1.7	5.3	砂粒含む	10YR7/1灰白色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	回転ナデ，指ナデ	ロクロ調整
86	3	VIID16i	－	SX3031	土師器	小皿	(6.5)	1.3	(4.6)	砂粒含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
87	3	VIID16i	－	SX3031	土師器	小皿	(7.4)	1.35	(3.4)	砂粒含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
88	3	VIID16j	－	SX3031	土師器	小皿	7.2	1.3	4.3	密	10YR7/4にぶい黄橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
89	3	VIID16i	－	SX3031	土師器	小皿	(8.0)	1.55	(3.4)	密	10YR7/2にぶい黄橙色	－	指圧痕	ナデ	非ロクロ調整
90	3	VIID16i	－	SX3031	土師器	皿	(12.0)	2.05	(7.3)	密	10YR7/4にぶい黄橙色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	回転ナデ	ロクロ調整
91	3	VIID16i	－	SX3031	石製品	石臼	(18.9)	(26.2)	(6.8)	－	－	－	－	－	石材：花崗石
92	3	VIID16i	－	SX3031	石製品	石斧	4.2	11.6	2.55	－	10Y6/1灰色	－	－	－	
93	3	VIID16i	－	SX3031	金属製品	キセル	1.0	6.6	－	－	2.5YR4/6赤褐色	－	－	－	吸い口径0.4cm
94	3	VIID17i	南東部包含層	－	山茶碗	小碗	(8.8)	2.95	4.55	～1mm長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転指ナデ，底部にナデ	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整，高台に粘設痕あり
95	3	－	表採	－	山茶碗	小皿	7.3	2.1	3.25	粗い，～2mm長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転指ナデ，底部にナデ	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整
96	3	VIID16i	－	P3046	山茶碗	小皿	(7.4)	2.0	4.6	砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	指圧痕，回転ナデ	ロクロ調整
97	3	VIID16h	西部包含層	－	山茶碗	小皿	(8.0)	1.8	(5.3)	長石含む	10YR7/1灰白色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整
98	3	VIID16h	西部包含層	－	山茶碗	小皿	(8.3)	1.75	(5.3)	～2mm長石含む	2.5YR5/6明赤褐色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	回転指ナデ，ナデ	焼成良好，ロクロ調整
99	3	VIID16i	－	SK3015	山茶碗	小皿	(8.9)	2.0	(5.6)	砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	ナデ，回転ナデ	ロクロ調整
100	3	VIID17i	包含層	－	山茶碗	小皿	8.4	1.75	5.4	長石多量含む	2.5Y6/1黄灰色	－	回転ナデ，底部に回転糸切り後一部ナデ	指圧痕，回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内面に厚い降灰
101	3	VIID17i	－	SK3071	山茶碗	小皿	7.5	1.8	4.1	長石含む	2.5Y5/1黄灰色	－	回転ナデ，底部に糸切り後板状圧痕	指圧痕，回転ナデ	ロクロ調整
102	3	－	包含層	－	山茶碗	小皿	(7.8)	1.65	4.6	緻密	5YR6/6橙色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整
103	3	－	包含層	－	山茶碗	小皿	6.2	1.5	3.2	緻密	5YR6/8橙色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整
104	3	－	包含層	－	山茶碗	小皿	(5.8)	1.25	(3.7)	緻密	7.5YR6/6橙色	－	回転ナデ，底部に回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整

畑間遺跡遺物観察表（HM12-3）

掲図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
105	3	－	包含層	－	山茶碗	碗	(14.2)	5.4	(5.9)	密、～2mm長石・クサリ礫多く含む	10YR7/1灰白色	－	回転指ナデ、ナデ、貼付高台	回転ナデ	焼成良好、ロクロ調整、高台に籾殻痕あり
106	3	VmD17j	－	東排水溝	山茶碗	碗	－	(4.0)	7.0	～3mm長石含む	2.5Y8/1灰白色	－	回転指ナデ、底部に糸切痕と板ナデ、貼付高台	回転指ナデ、ナデ	焼成良好、ロクロ調整、高台に籾殻痕あり
107	3	VmD16h	西部包含層	－	山茶碗	碗	(11.8)	(4.0)	－	～3mm長石含む	2.5Y8/1灰白色	－	回転指ナデ	回転指ナデ、指ナデ	焼成良好、ロクロ調整
108	3	VmD16h	西部包含層	－	山茶碗	碗	－	(3.25)	6.5	密、～2mm長石・クサリ礫多く含む	7.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ、貼付高台	回転ナデ、ナデ	焼成良好、ロクロ調整、高台に籾殻痕あり、内面自然釉
109	3	－	重機撹乱	－	土師器	小皿	(7.0)	1.4	(2.3)	やや粗い	10YR8/3浅黄橙色	－	ナデ、指圧痕	ナデ	焼成良好、非ロクロ調整
110	3	－	包含層	－	土師器	皿(灯明皿)	(7.8)	1.5	5.0	緻密	10YR7/4にぶい黄橙色	－	回転ナデ、ナデ、底部に回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好、ロクロ調整、口縁部に煤付着
111	3	－	重機撹乱	－	土師器	小皿	(8.7)	1.8	4.25	密	5YR6/8橙色	－	回転ナデ、底部に回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好、焼成前径4mm1孔あり、ロクロ調整
112	3	VmD16h	－	SK3036	土師器	皿	(12.0)	2.1	(8.2)	砂粒含む	10YR8/1灰白色	－	剥離のため不明、指圧痕	剥離のため不明	焼成やや甘い、ロクロ調整か
113	3	VmD16h	－	SK3039	土師器	皿	(13.4)	2.7	6.4	密	10YR7/4にぶい黄橙色	－	回転ナデ、底部に回転糸切痕	回転ナデ	ロクロ調整
114	3	VmD17j	－	SD3058	土師器	羽付釜	14.0	(17.1)	－	密、金雲母多い、クサリ礫あり、細かい・長石含む	10YR7/2にぶい黄橙色	－	ナデ、板ナデ、指圧痕、指ナデ、ヘラケズり、ケズり	回転ナデ	焼成良好、鍔部分貼り付け、下部に粗ナデによる圧縮あり
115	3	VmD16i	－	P3022	瀬戸美濃	折縁深皿	(25.3)	(4.75)	－	砂粒含む	釉薬：10Y6/2オリーブ灰色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好、内外面に灰釉あり
116	3	－	重機撹乱	－	瀬戸美濃	菊皿	(12.9)	2.5	7.2	密	2.5Y8/2灰白色	長石釉	長石釉	長石釉	内面に布目痕残る
117	3	VmD17j	－	東排水溝	瀬戸美濃	緑釉皿	(12.0)	(2.4)	－	密、クサリ礫微量含む	5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ、鍔貼り	灰釉あり
118	3	VmD17j	南東部包含層	－	瀬戸美濃	志野丸皿	(10.2)	1.9	(5.8)	長石含む	2.5Y8/2灰白色	長石釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好、長石釉あり
119	3	VmD16j	－	SK3016	瀬戸美濃	水滴	(1.9)	3.2	3.0	密	2.5Y8/2灰白色釉薬：7.5Y7/2灰白色	灰釉	底部に回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好、外面に灰釉あり
120	3	VmD16j	－	SK3004	青磁	碗	－	(1.75)	(4.3)	緻密	2.5Y7/1灰白色釉薬：5GY6/1オリーブ灰色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	ロクロ調整
121	3	VmD16j	－	SK3029	常滑	甕	(37.8)	(23.1)	－	砂粒含む	5YR5/4にぶい赤褐色	－	ナデ	ナデ、指圧痕	焼成良好　1400～1450年
122	3	－	包含層	－	常滑	壺	(12.4)	(6.55)	－	やや粗い、細かい・長石多量含む	2.5YR4/4にぶい赤褐色	－	回転指ナデ	回転指ナデ、ナデ	焼成良好、内外面に灰かぶりあり
123	3	－	包含層	－	常滑	片口鉢	(32.9)	(8.0)	－	やや粗い、長石含む	2.5YR6/6橙色	－	回転ナデ、指圧痕、2条の沈線	回転ナデ	焼成良好
124	3	－	重機撹乱	－	－	陶丸	2.05	2.13	2.1	密	10YR8/1灰白色	－	指圧痕	－	焼成良好

畑間遺跡遺物観察表（HM12-3）

掲図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
125	3	Ⅷ D17i	－	SK3070	－	陶丸	2.3	2.3	2.1	密	5YR6/6橙色	－	指圧痕	－	被熱痕あり
126	3	Ⅷ D16h	－	SK3037	#VALUE!	陶丸	2.0	2.2	1.8	密	10YR8/2灰白色	－	指圧痕	－	
127	3	Ⅷ D16i	－	SK3016	－	陶丸	2.0	2.1	1.9	密	2.5Y6/2灰黄色	－	指圧痕	－	
128	3	－	包含層	－	－	土錘	(3.5)	5.0	－	砂粒含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	ナデ	－	焼成良好
129	3	－	遺構面	－	－	銅銭	2.4	2.4	－	－	－	－	－	－	「天聖元寶」

畑間遺跡遺物観察表（HM12-4）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
130	4	IXD19d	－	SD4018	土師器	小皿	－	(1.4)	(6.2)	やや粗い	7.5YR8/4浅黄橙色	－	ナデ，回転糸切痕	指ナデ	焼成良好，非ロクロ調整
131	4	IXD20c	－	SD4018	土師器	中皿	(13.0)	2.45	(5.6)	やや粗い	10YR8/4浅黄橙色	－	回転指ナデ，回転糸切痕	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整
132	4	IXD19e	－	SD4018	土師器	中皿	(12.6)	(2.1)	(7.6)	やや粗い	10YR8/4浅黄橙色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整
133	4	IXD19d	－	SD4018	山茶碗	小皿	(6.9)	2.0	(4.1)	密	2.5Y8/1白色	－	回転ナデ，ナデ	回転ナデ，指頭痕	ロクロ調整
134	4	IXD19d	－	SD4018	山茶碗	小皿	7.8	2.1	3.8	砂粒含む	10YR7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切り後ナデ	回転ナデ，指ナデ	ロクロ調整，口縁部降灰
135	4	IXD19e	－	SD4018	山茶碗	碗	(16.7)	5.75	8.4	長石・砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕，貼付高台	回転ナデ	ロクロ調整，高台に籾殻痕，内面降灰
136	4	IXD19d	－	SD4018	山茶碗	碗	15.8	5.05	6.5	長石多量含む	10YR6/1褐灰色	－	回転ナデ，貼付高台，回転糸切後ナデ	回転ナデ	ロクロ調整，高台に籾殻痕
137	4	IXD19d	－	SD4018	山茶碗	碗	(14.6)	5.0	7.4	砂粒少量含む	2.5Y6/1黄灰色	－	回転ナデ，ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，指頭痕	ロクロ調整，高台に籾殻痕，内面降灰
138	4	IXD19e	－	SD4018	山茶碗	碗	(16.1)	5.25	7.7	緻密	2.5Y6/1黄灰色	－	回転ナデ，回転糸切痕，貼付高台	回転ナデ	ロクロ調整，外面底部に墨書，高台に籾殻痕
139	4	IXD19d	－	SD4018	山茶碗	碗	(15.1)	4.8	7.2	長石・砂粒多量含む	2.5Y5/3黄褐色	－	回転ナデ，貼付高台，ナデ	回転ナデ，ナデ	ロクロ調整，高台に籾殻痕，内面降灰
140	4	IXD19e	－	SD4018	山茶碗	碗	(16.6)	5.45	9.0	長石・砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕，貼付高台	回転ナデ	ロクロ調整，高台に籾殻痕，内外面一部降灰
141	4	IXD19d	－	SD4018	山茶碗	碗	14.5	5.2	6.7	砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，貼付高台，回転糸切後ナデ	回転ナデ，指ナデ	ロクロ調整，歪み大，高台に籾殻痕
142	4	IXD20d	－	SD4018	山茶碗	碗	(13.8)	(4.3)	－	長石・砂粒含む	2.5Y7/2灰黄色	－	回転ナデ	回転ナデ	ロクロ調整，内面一部降灰
143	4	IXD19e	－	SD4018	山茶碗	碗	－	(3.8)	7.3	緻密	2.5Y6/2灰黄色	－	回転ナデ，貼付高台，回転糸切後ナデ	回転ナデ	ロクロ調整，外面底部に墨痕，高台に籾殻痕
144	4	IXD19d	－	SD4018	山茶碗	碗	(14.0)	5.1	7.4	長石・砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切り後ナデ	回転ナデ	ロクロ調整，内面煤付着
145	4	IXD19d	－	SD4018	山茶碗	碗	(13.4)	(2.2)	－	緻密	2.5Y7/2灰黄色	－	回転ナデ	回転ナデ	ロクロ調整，東濃型
146	4	IXD20d	－	SD4018	山茶碗	碗	－	(1.85)	(4.2)	密	2.5Y7/2灰黄色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ	ロクロ調整，東濃型
147	4	IXD19d	－	SD4018	須恵器	坏身	－	(3.0)	－	やや密	10YR6/1褐灰色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好，外面底部墨書
148	4	IXD17d	－	SD4018	須恵器	坏蓋	－	(1.4)	－	密，細かい長石少量含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	ナデ，工具ナデ，板ナデ	ナデ	焼成良好
149	4	IXD19e	－	SD4018	土師質土器	羽釜	(20.0)	(4.1)	－	～1mm長石極少量含む	10YR8/1灰白色	－	ヨコナデ，ハケ目	ナデ，ヨコナデ	焼成良好，鍔径(25.7)cm

畑間遺跡遺物観察表（HM12-4）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
150	4	IXD19d	－	SD4018	瀬戸美濃	小天目茶碗	8.3	3.6	3.3	緻密	2.5Y7/1灰白色	鉄釉	回転ヘラケズリ,鉄釉	鉄釉	削り出し輪高台
151	4	IXD19e	－	SD4031	山茶碗	小碗	(9.0)	3.0	5.0	砂粒含む	10YR6/2灰黄褐色	－	回転ナデ,貼付高台,回転糸切り後ナデ	回転ナデ	ロクロ調整,高台に籾殻痕
152	4	IXD19c	－	SD4031	山茶碗	小碗	(8.1)	2.7	4.1	砂粒含む	2.5Y6/2灰黄色	－	回転ナデ,貼付高台	回転ナデ,ナデ	ロクロ調整,高台に籾殻痕,内面降灰
153	4	IXD20c	－	SD4031	山茶碗	小皿	7.2	1.8	3.6	長石・砂粒含む	10YR6/3にぶい黄橙色	－	回転ナデ,回転糸切り後ナデ	回転ナデ	ロクロ調整,口縁部降灰
154	4	IXD19d	－	SD4031	山茶碗	碗	15.4	5.4	7.6	長石・砂粒含む	2.5Y6/2灰黄色	－	回転ナデ,回転糸切痕,貼付高台	回転ナデ,指ナデ	ロクロ調整,高台に籾殻痕,外面底部に墨痕
155	4	IXD20d	－	SD4031	山茶碗	碗	16.0	5.0	7.8	砂粒含む	7.5YR6/1褐灰色	－	回転ナデ,貼付高台,回転糸切後ナデ	回転ナデ	ロクロ調整,高台に籾殻痕,内外面一部降灰
156	4	IXD19d	－	SD4031	山茶碗	碗	(14.6)	6.05	5.6	長石・砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ,板状圧痕,貼付高台	回転ナデ,指ナデ	ロクロ調整,高台に籾殻痕,外面底部に墨痕
157	4	IXD20b	－	SD4031	山茶碗	碗	14.1	5.0	6.7	長石・砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ,回転糸切り後ナデ	回転ナデ,指ナデ	ロクロ調整,歪み大,高台剥離
158	4	IXD20b	－	SD4031	山茶碗	碗	(13.8)	5.2	6.4	長石・砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ,糸切り後板状圧痕,貼付高台	回転ナデ,指頭痕	ロクロ調整,高台に籾殻痕,内面降灰
159	4	IXD20e	上層	SD4031	須恵器	坏身	(12.3)	(3.9)	－	密	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ,ナデ	回転ナデ	焼成良好。
160	4	IXD20d	－	SD4031	須恵器	坏蓋	(13.4)	2.6	－	砂粒含む	N5/灰色	－	回転ナデ	回転ナデ	外面に降灰のため不明な部分あり
161	4	IXD19e	－	SD4031	須恵器	杯身	(13.7)	3.5	(10.8)	砂粒含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ,回転ヘラ削り,貼付高台	回転ナデ	
162	4	IXD19b	－	SD4031	須恵器	坏蓋	(16.6)	(2.45)	－	密,細かい長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ,回転ケズリ	回転ナデ	焼成良好
163	4	IXD20d	－	SD4031	須恵器	杯身	－	(2.4)	3.0	砂粒含む	2.5Y6/2灰黄色	－	ナデ,回転ヘラ削り	回転ナデ	底部外面に「×」ヘラ描き
164	4	IXD20b	－	SD4031	須恵器	杯身	(12.0)	3.65	(6.8)	密	10YR6/3にぶい黄橙色	－	回転ナデ,回転ヘラ削り	回転ナデ	
165	4	IXD20d	上層	SD4031	土師器	壷	(15.2)	(11.35)	－	～2mm長石含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	ヨコナデ,ハケ目後ヘラミガキ	ヘラミガキ,シボリ目	焼成良好
166	4	IXD20d	－	SD4031	土師器	壺	(12.25)	(8.1)	－	密,クサリ礫・～2mm長石多く含む	5YR7/6橙色	－	ナデ,ハケ目後ヘラミガキ	ヨコナデ,ヘラミガキ,ナデ,ヘラナデ	焼成良好
167	4	IXD20d	－	SD4031	土師器	小壺	－	(10.75)	(4.1)	密,クサリ礫・石英・長石・雲母少量含む	5YR6/6橙色	－	ヘラミガキ,ハケ目,ヘラケズリ	ヘラミガキ,ナデ,工具痕	焼成良好
168	4	IXD20d	－	SD4031	土師器	台付甕	14.15	(20.0)	－	密,クサリ礫・長石少量含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	ヨコナデ,ハケ目	ヨコナデ,ナデ,指圧痕	内面指圧痕多い,焼成良好
169	4	IXD20d	－	SD4031	土師器	鉢	(28.5)	(9.65)	－	～2mm長石・金雲母含む	10YR7/2にぶい黄橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好

畑間遺跡遺物観察表（HM12-4）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
170	4	IXD20d	－	SD4031	土師器	高杯	－	(5.75)	－	密，クサリ礫少量含む	5YR6/6橙色	－	接合痕，ハケ目	ナデ	焼成良好，焼成前2孔穿存
171	4	IXD20d	－	SD4031	土師器	高杯	－	(7.85)	(13.3)	密，クサリ礫多い	10YR8/3浅黄橙色	－	ヘラミガキ，ナデ	ヨコナデ，ハケ目	焼成良好，焼成前3孔穿存
172	4	IXD20d	上層	SD4031	土師器	小甕	(9.5)	(8.65)	－	密，長石・金雲母多い	7.5YR4/2灰褐色	－	ヨコナデ，ヨコ方向ミガキ，タテ方向ミガキ（摩滅），クスリ	ナデ，ヨコナデ	焼成良好
173	4	IXD19b	－	SD4031	土師器	高杯	－	－	－	やや密	10YR7/2にぶい黄橙色	－	ヘラミガキ	ナデ	焼成良好，外面4本単位の櫛描直線文4単位，焼成前2孔穿存，斜位の刺突文
174	4	IXD20c	－	SD4031	縄文土器	壺	(15.3)	(2.4)	－	やや粗い，～4mm長石・石英含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好，内面にハケ目残る，外面に斜位の刺突文
175	4	IXD20c	－	SD4031	弥生土器	壺	(17.8)	(2.95)	－	やや粗い，～1mm長石・金雲母少量含む	7.5YR7/6橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好，外面に斜位の刺突文
176	4	IXD20d	－	SD4031	土師器	壺	－	(2.8)	－	密，クサリ礫・長石多い	7.5YR6/4にぶい褐色	－	ナデ	ナデ	焼成良好，口縁部に連続刺突文
177	4	IXD20b	－	SD4031	縄文土器	壺	－	(3.05)	－	～2mm長石含む	外面10YR8/4浅黄橙色内面7.5YR8/6浅黄橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好，口縁部に連続刺突文
178	4	IXD20d	－	SD4031	弥生土器	壺	－	(3.4)	－	密，クサリ礫・長石多い	7.5YR7/4にぶい橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好，外面貝殻条痕文
179	4	IXD19b	－	SD4031	土師器	壺	－	(4.2)	－	粗い，細かい・長石クサリ礫多く含む	10YR6/4にぶい黄橙色	－	指圧痕，ナデ	ヨコナデ	焼成良好，外面刺突文
180	4	－	検出	－	土師器	小皿	(9.2)	1.6	(4.0)	やや粗い	10YR8/3浅黄橙色	－	指圧痕	ナデ	焼成良好，非ロクロ調整
181	4	－	検出	－	土師器	小皿	(10.8)	2.1	－	やや粗い	10YR8/3浅黄橙色	－	ナデ，指圧痕	ナデ	焼成良好，非ロクロ調整
182	4	－	検出	－	土師器	小皿	(8.9)	(1.5)	－	やや粗い	10YR8/4浅黄橙色	－	指圧痕	ナデ	焼成良好，非ロクロ調整
183	4	IXD20d	－	オチコミ	土師器	小皿	(9.2)	1.65	(4.8)	やや粗い	10YR8/4浅黄橙色	－	指圧痕	ナデ	焼成良好，非ロクロ調整
184	4	IXD19d	－	オチコミ	土師器	小皿	－	(1.2)	(6.6)	やや粗い	10YR8/4浅黄橙色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転指ナデ	焼成良好，ロクロ調整
185	4	－	検出	－	瀬戸美濃	小皿	(11.8)	(1.8)	－	密，細かい長石・クサリ礫少量含む	10YR7/2にぶい黄橙色	緑釉	回転ナデ	ナデ，回転ナデ	焼成良好
186	4	IXD20d	－	オチコミ	瀬戸美濃	小皿	(10.1)	(2.6)	－	密	10YR8/4浅黄橙色	緑釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
187	4	－	検出	－	常滑焼	広口壺	(23.2)	(4.3)	－	やや粗い，～2mm長石・石英含む	7.5YR7/3にぶい橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好
188	4	IXD19d	－	オチコミ	常滑焼	片口鉢	(22.5)	(6.05)	－	細かい長石含む	2.5YR4/3にぶい赤褐色	－	ヨコナデ，ナデ	自然釉，ナデ残る	焼成良好
189	4	IVD19c	－	オチコミ	土師質土器	羽釜	(25.3)	(3.0)	－	～4mm長石含む	7.5YR7/3にぶい橙色	－	ヨコナデ，ハケ目	ナデ，ヨコナデ，指圧痕	焼成良好，鍔径(26.8)cm1孔穿存，外面煤残る

畑間遺跡遺物観察表（HM12-4）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
190	4	IXD20d	－	オチコミ	土師質土器	羽釜	(18.8)	(1.75)	－	密	2.5YR7/3浅黄色	－	ツマミアゲ，指圧痕，指ナデ，ナデ	ナデ	焼成良好
191	4	－	検出	－	土師質土器	羽釜	(21.4)	(2.9)	－	細かい長石少量含む	10YR6/2灰黄褐色	－	ヨコナデ，ハケ目	ハケ目，ヨコナデ	焼成良好，把手径(21.8)mm
192	4	－	検出	－	灰釉陶器	碗	－	(4.1)	(8.1)	密	10YR6/1褐灰色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好，高台高0.9cm
193	4	－	表採	－	須恵器	蓋	(13.2)	(3.15)	－	密	2.5Y6/1黄灰色	－	回転ナデ，回転ケズリ	回転ナデ	焼成良好
194	4	－	検出	－	土師器	壺	(13.2)	(5.3)	－	やや粗い，～2mm長石・石英含む	7.5YR7/6橙色	－	ハケ目後ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好，外面に工具痕残る
195	4	IXD20b	－	SD4034	土師器	台付甕	－	(6.35)	8.8	やや粗い，～2mm長石含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	ハケ目，ナデ	ハケ目	焼成良好
196	4	IXD20d	－	オチコミ	土師器	壺	－	(4.8)	(2.2)	密，クサリ礫・金雲母少量含む	5YR6/4にぶい橙色	－	ヘラミガキ，ナデ	ヘラミガキ	焼成良好
197	4	XD1d	－	SK4032	土師器	器台	－	(8.5)	(12.0)	やや密，～2mm長石・石英含む	外面5YR6/6橙色内面7.5YR8/4浅黄橙色	－	ヘラミガキ	ヨコナデ，ナデ，ヘラミガキ，指痕	焼成良好
198	4	－	検出	－	土師器	鉢	－	(1.75)	－	～2mmの長石含む	2.5YR8/4淡黄色	－	ヨコナデ，ハケ目	ヨコナデ	焼成良好，外面刺突文
199	4	－	検出	－	弥生土器	甕	(17.8)	(3.7)	－	粗い，～2mm長石含む	10YR8/6黄橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ，ナデ	焼成良好，器薄く残る，外面斜位刺突文
200	4	－	検出	－	弥生土器	壺	－	(3.3)	－	細かい長石含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ（摩滅により不明瞭）	ヨコナデ	焼成良好，外面刺突文
201	4	IXD20d	－	オチコミ	弥生土器	壺	－	(2.8)	－	～3mm長石含む	7.5YR8/3浅黄橙色	－	凹線2条	ヨコナデ	焼成良好，外面押引文，押圧突帯
202	4	－	検出	－	弥生土器	甕	－	(5.35)	－	～2mm長石含む	10YR7/2にぶい黄橙色	－	ナデ，3条の沈線	ナデ	焼成良好，外面刺突文
203	4	IXD20i	－	SD4035	縄文土器	鉢	(5.0)	(5.8)	0.8	粗い，細かい長石・石英・金雲母含む	7.5YR4/1褐灰色	－	条痕	摩滅により不明	焼成良好
204	4	－	検出	－	縄文土器	壺	－	(3.4)	－	細かい長石・金雲母含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ	ハケ目	焼成良好，外面刺突文
205	4	IXD19d	－	オチコミ	縄文土器	壺	－	(2.1)	－	細かい長石含む	7.5YR8/6浅黄橙色	－	ナデ	ヨコナデ	焼成良好，外面刺突文
206	4	IXD20c	－	オチコミ	縄文土器	壺	－	(6.2)	－	粗い	10YR7/3にぶい黄橙色	－	ヨコナデ	板ナデ	焼成良好，外面刺突文
207	4	－	検出	－	縄文土器	壺	－	(2.85)	－	細かい長石含む（金雲母少量）	10YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好，外面刺突文
208	4	表土	－	サブトレンチ	須恵器	円盤	－	(1.1)	(9.9)	～3mm長石多い	5Y6/1灰色	－	回転ナデ，端打痕	ケズリ，回転ナデ	焼成良好，坏身底部転用
209	4	表土	－	サブトレンチ	土製品	土錘	1.2	4.05	1.2	緻密	5YR6/6橙色	－	手づくね→ナデ	－	焼成良好

畑間遺跡遺物観察表（HM12-4）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
210	4	IXD19d	－	オチコミ	土製品	土錘	1.0	3.2	0.9	密	7.5YR8/3浅黄橙色	－	手づくね→ナデ	－	焼成良好
211	4	－	検出	－	土製品	土錘	1.2	4.2	1.1	密	2.5YR5/4にぶい赤褐色	－	手づくね→ナデ	－	焼成良好
212	4	－	検出	－	土製品	土錘	1.55	3.85	1.55	密	10YR8/3浅黄橙色	－	手づくね→ナデ	－	焼成良好
213	4	－	検出	－	土製品	土錘	1.6	4.2	1.5	密	2.5Y5/4にぶい赤褐色	－	手づくね→ナデ	－	焼成良好
214	4	XD1e	－	SK4020	土製品	陶丸	1.95	2.15	2.0	緻密	2.5Y7/1灰白色	－	手づくね→ナデ	－	焼成良好，所々に自然釉がかかる
215	4	－	検出	－	土製品	陶丸	1.95	1.9	1.9	密	10YR8/2灰白色	－	ナデ	－	焼成良好
216	4	IXD20e	－	SK4015	土製品	陶丸	2.4	(2.4)	(2.3)	密	5Y7/1灰白色	－	指圧痕	－	焼成良好，自然釉の光沢残る
217	4	IXD20e	－	SK4015	土製品	陶丸	2.2	2.3	2.15	密	2.5Y8/2灰白色	－	ナデ	－	焼成良好，手づくね調整，一部に自然釉がかかる，山茶碗と類似した焼成
218	4	－	検出	－	石製品	石臼	2.3	(1.85)	0.35	－	5Y4/1灰色	－	－	－	石材：下呂石
219	4	IXD19d	－	SD4018	石製品	石臼	1.15	2.0	0.4	－	N3/0暗灰色	－	－	－	石材：下呂石
220	4	IXD19c	－	オチコミ	金属製品	銅銭	2.4	2.4	－	－	－	－	－	－	「天聖元寶」
221	4	－	－	東壁	金属製品	銅銭	2.3	2.3	－	－	－	－	－	－	「熙寧元寶」

畑間遺跡遺物観察表（HM12-5）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
222	5	－	包含層	－	土師器	中皿	(11.0)	1.65	－	密	7.5YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好,ロクロ調整
223	5	I D5a	－	SD5023	山茶碗	小皿	7.8	2.6	4.4	長石含む	10YR6/4にぶい黄橙色	－	回転ナデ,ナデ	回転ナデ,指圧痕	焼成良好,ロクロ調整
224	5	I C5t	－	SK5027	山茶碗	小皿	8.4	2.25	6.0	長石含む	2.5Y8/1灰白色	－	回転ナデ,回転糸切痕	回転ナデ,指圧痕	焼成良好,ロクロ調整,内面降灰あり
225	5	I C4t	中層	SK5034	山茶碗	小皿	7.8	1.95	4.8	砂粒含む	2.5Y7/2灰黄色	－	回転ナデ,回転糸切痕	回転ナデ,指ナデ	焼成良好,ロクロ調整
226	5	I C5t	－	SK5027	山茶碗	小皿	(8.0)	1.65	(4.7)	長石含む	10YR7/1灰白色	－	回転ナデ,回転糸切痕	回転ナデ,ナデ	焼成良好,ロクロ調整,口縁部自然釉付着
227	5	－	－	北壁	山茶碗	小皿	(8.2)	1.55	5.6	～2mm長石含む	2.5Y7/2灰黄色	－	回転ナデ,回転糸切痕	ナデ,回転ナデ	焼成良好,ロクロ調整
228	5	－	表土	－	山茶碗	小皿	9.0	1.45	6.6	長石含む	2.5Y8/1灰白色	－	ナデ,回転糸切痕	ナデ,強い指ナデ	焼成良好,内外面口縁部自然釉付着
229	5	I D4a	検出	－	山茶碗	小皿	(8.0)	1.4	(6.0)	長石含む	10YR7/1灰白色	－	回転ナデ,回転糸切痕	ナデ,回転ナデ	焼成良好,ロクロ調整
230	5	I C4t	中層	SK5034	山茶碗	小皿	7.95	1.3	5.7	長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ,回転糸切痕	回転ナデ,指圧痕	焼成良好,ロクロ調整,外面降灰あり
231	5	－	表土	－	山茶碗	小皿	(7.4)	1.5	(5.6)	～2mm長石含む	2.5Y8/1灰白色	－	回転ナデ,回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好,ロクロ調整,内外面に縁部自然釉付着
232	5	－	－	東排水溝	山茶碗	小皿	(7.6)	1.5	4.35	細かい長石含む	10YR8/4浅黄橙色	－	ヨコナデ,工具によるナデ	ヨコナデ,指ナデ	焼成良好
233	5	I C4t	中層	SK5034	山茶碗	小皿	7.7	1.4	4.1	長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ,回転糸切痕	回転ナデ,指圧	焼成良好,ロクロ調整
234	5	I D4a	包含層	－	山茶碗	碗	(14.2)	(4.55)	－	～2mmクサリ礫・長石含む	10YR8/1灰白色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好,ロクロ調整,内面自然釉付着
235	5	I C5t	－	SK5027	山茶碗	碗	(13.8)	4.6	(6.6)	長石含む	2.5Y7/2灰黄色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好,ロクロ調整
236	5	I D5a	包含層	－	山茶碗	碗	(12.0)	5.2	(5.7)	長石含む	10YR8/1灰白色	－	回転ナデ,貼付高台	回転ナデ	焼成良好,ロクロ調整,高台初段底あり,内外面ほぼ全に自然釉付着
237	5	I C5n	－	SK5020	山茶碗	碗	(13.8)	(5.4)	－	石英多量含む	2.5Y8/1灰白色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好,ロクロ調整
238	5	I D5a	包含層	－	土師器	伊勢型鍋	(26.4)	(8.8)	－	やや粗い,長石・金雲母含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ,指圧痕,ハケ目	指ナデ,指圧痕	焼成良好,口縁折り曲げる,外面煤付着
239	5	I D6a	包含層(東側落込み)	－	土師器	伊勢型鍋	(21.2)	(9.9)	－	やや粗いクサリ礫・金雲母・長石含む	10YR7/2にぶい黄橙色	－	ヨコナデ,ナデ,ハケ目,ケズリ	ヨコナデ,指圧痕	焼成良好,口縁折り曲げる
240	5	I C5t	－	SK5027	土師器	伊勢型鍋	(24.6)	(8.2)	－	砂粒・雲母含む	10YR7/2にぶい黄橙色	－	ナデ,ハケ目	ナデ,指圧痕	焼成良好
241	5	I C5t	－	SK5027	土師器	伊勢型鍋	(27.6)	(6.25)	－	砂粒含む	10YR6/2灰黄褐色	－	ナデ,ハケ目	ナデ,指圧痕	焼成良好
242	5	I D5a	包含層	－	土師器	伊勢型鍋	(27.2)	(8.1)	－	砂粒含む	10YR4/2灰黄褐色	－	ナデ,ハケ目	ナデ,指圧痕	焼成良好

畑間遺跡遺物観察表（HM12-5）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
243	5	I C5t	包含層(東側落込み)	－	土師器	伊勢型鍋	(26.5)	(5.3)	－	やや粗い、クサリ礫・金雲母・長石含む	10YR6/2灰黄褐色	－	ナデ、指圧痕、ヘケ目	ナデ	焼成良好、口縁折り曲げる
244	5	I D6n	包含層(東側落込み)	－	土師器	伊勢型鍋	(27.4)	(2.35)	－	やや粗い、長石・金雲母含む	7.5YR7/3にぶい橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好、口縁折り曲げる、外面煤付着
245	5	I D6n	包含層(東側落込み)	－	土師器	伊勢型鍋	(27.6)	(3.4)	－	やや粗い、クサリ礫多量含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好、口縁折り曲げる
246	5	I D6n	包含層(東側落込み)	－	土師器	伊勢型鍋	(20.1)	(2.45)	－	やや粗い、長石・金雲母含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好、口縁折り曲げる
247	5	I C6t	包含層	－	瀬戸美濃	折縁小皿	(8.9)	1.8	(4.2)	緻密	10YR6/4にぶい黄橙色釉調 5Y6/3オリーブ黄色	灰釉	回転ナデ、回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好、内面、外面口縁部灰釉
248	5	I C5t	包含層(東側落込み)	－	弥生土器	甕	(22.6)	(10.1)	－	砂粒・雲母含む	10YR4/2灰黄褐色	－	3条の沈線、板状工具によるナデ	ヘラミガキ・ナデ	焼成良好、口縁部刻み目
249	5	I D4n	中層	SK5034	弥生土器	壺	(23.4)	(3.05)	－	長石含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	指頭圧痕、条痕	ナデ	焼成良好、口縁部連続押圧突帯
250	5	－	－	北排水溝	弥生土器	鉢	－	(4.3)	(5.7)	長石含む	7.5YR6/3にぶい褐色	－	条痕	ナデ	焼成良好
251	5	I D4n	中層	SK5034	弥生土器	深鉢	－	(9.4)	－	砂粒含む	2.5YR6/3にぶい黄色	－	条痕	ナデ	焼成良好
252	5	－	－	東排水溝	弥生土器	鉢	－	(5.2)	－	砂粒含む	10YR6/4にぶい黄橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好、外面押引文
253	5	I D5n	包含層	－	弥生土器	鉢	－	(2.7)	－	やや粗い、～1mm長石・石英含む	10YR8/2灰白色	－	条痕	ヨコナデ	焼成良好、外面押引文
254	5	I C6t	包含層	－	弥生土器	鉢	－	(2.1)	－	やや粗い、～2mm長石・石英含む	7.5YR8/4浅黄橙色	－	条痕	ヨコナデ	焼成良好、外面刺突文
255	5	－	包含層	－	弥生土器	鉢	－	(3.0)	－	やや粗い、クサリ礫多い・長石少量含む	10YR8/2灰白色	－	条痕	ヨコナデ	焼成良好、外面押引文
256	5	I C3t	包含層	－	弥生土器	壺	－	(5.2)	－	～1mm長石少量含む	5YR6/6橙色	－	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	焼成良好、外面2本単位の櫛描直線文4単位・2本単位の櫛描波状文2単位
257	5	－	表土	－	弥生土器	壺	(16.4)	(2.9)	－	やや粗い、～1mm長石含む	10YR8/4浅黄橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好、外面連続押圧文
258	5	－	－	東排水溝	弥生土器	壺	(15.3)	(9.15)	－	砂粒含む	5YR6/6橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好、外面押圧文
259	5	I C3t	包含層	－	弥生土器	壺	－	(4.0)	－	砂粒含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	指頭圧痕、条痕	ナデ	焼成良好、外面竹管文、連続押圧突帯、押引文
260	5	I C6t	－	SK5028	弥生土器	壺	(11.9)	(3.8)	－	砂粒含む	5YR5/4にぶい赤褐色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好、外面列点文、櫛描波状文、口縁端部押圧文
261	5	－	－	東排水溝	弥生土器	鉢	(12.0)	(2.5)	－	砂粒含む	7.5YR7/4にぶい橙色	－	ナデ、条痕	ナデ	焼成良好
262	5	I D6n	包含層(東側落込み)	－	弥生土器	壺	－	(2.65)	－	～1mm長石・石英含む	外面 7.5YR8/3浅黄橙色内面 7.5YR7/4にぶい橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好、外面押引文
263	5	I D6n	包含層(東側落込み)	－	弥生土器	壺か	－	(3.2)	－	やや粗い、～2mm長石含む	5YR7/6橙色	－	条痕	ヨコナデ（スス消し）	焼成良好

畑間遺跡遺物観察表（HM12-5）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
264	5	Ⅰ D6a	－	検出	弥生土器	壺ヵ	－	(3.3)	－	長石含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好
265	5	－	－	東排水溝	弥生土器	壺ヵ	－	(3.2)	－	やや粗い、～1mm長石含む	10YR8/3浅黄橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好
266	5	－	表土	－	弥生土器	壺ヵ	－	(3.7)	－	小粒長石含む	外面 10YR8/4浅黄橙色 内面 5YR7/6橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好
267	5	Ⅰ D4a	包含層	－	弥生土器	壺ヵ	－	(6.6)	－	～3mm長石含む	外面 7.5YR8/3浅黄橙色 内面 5YR7/6橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好
268	5	－	表土	－	弥生土器	壺ヵ	－	(4.1)	－	小粒長石・石英含む	外面 7.5YR8/2灰白色 内面 10YR8/2灰白色	－	条痕	ナデ	焼成良好
269	5	－	包含層	－	縄文土器	壺	－	(5.2)	－	～2mm長石含む	外面 10YR8/3浅黄橙色 内面 5YR7/4にぶい橙色	－	条痕	ナデ	焼成良好、外面波状文
270	5	Ⅰ D5a	包含層(東側落込み)	－	縄文土器	鉢	－	(4.3)	－	やや粗い、細かい長石含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	ヘラミガキ	ヨコナデ	焼成良好、口縁端部外面刻み目
271	5	Ⅰ D5a	包含層(東側落込み)	－	縄文土器	鉢	－	(3.5)	－	～1mm長石・石英・クサリ礫含む	10YR8/4浅黄橙色	－	摩滅により不明	摩滅により不明	焼成良好、波状口縁、外面波状文、竹管文
272	5	Ⅰ D5a	包含層	－	縄文土器	鉢	－	(4.25)	－	やや粗い	10YR8/3浅黄橙色	－	縄目	ヨコミガキ	焼成良好、波状口縁、口縁端部刻み目
273	5	Ⅰ D5a	包含層	－	土製品	土錘	0.9	3.5	0.9	密	10YR3/1黒褐色	－	ナデ、指圧痕	－	焼成良好
274	5	－	－	東排水溝	土製品	土錘	1.05	4.1	1.05	密・長石含む	7.5YR7/3にぶい橙色	－	ナデ、指圧痕	－	焼成良好
275	5	Ⅰ D6a	包含層	－	土製品	土錘	3.4	6.7	3.45	やや粗い、砂粒含む	10YR5/3にぶい黄橙色	－	ナデ、指圧痕	－	焼成良好
276	5	Ⅰ C5t	－	SD5023	土製品	陶丸	2.25	2.35	2.1	砂粒含む	2.5YR4/1灰白色	－	指圧痕	－	焼成良好
277	5	Ⅰ D6a	包含層(東側落込み)	－	石製品	底石	3.5	7.8	1.6	－	7.5YR6/1褐灰色	－	－	－	
278	5	－	包含層	－	石製品	石錘	0.8	4.1	0.75	－	7.5Y5/1灰色	－	－	－	石材：下呂石
279	5	Ⅰ C3t	－	SD5031	石製品	打製石鏃	4.35	13.9	1.4	－	－	－	－	－	
280	5	Ⅰ C5t	包含層直下	－	金属製品	銅銭	2.3	2.3	－	－	－	－	－	－	「明道元寶」
281	5	Ⅰ C5t	包含層(東側落込み)	－	金属製品	銅銭	2.25	2.25	－	－	－	－	－	－	「元符通寶」
282	5	Ⅰ C5s	－	SD5023	金属製品	銅銭	2.4	2.4	－	－	－	－	－	－	「熙寧元寶」
283	5	Ⅰ D5a	包含層(東側落込み)	－	金属製品	銅銭	2.3	2.3	－	－	－	－	－		

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
284	7	Ⅰ D19j	上層	SD7137	土師器	高坏	-	(10.2)	-	～3mm長石・石英・角閃石含む	10YR8/4浅黄橙色	-	摩滅により不明	シボリ目	焼成良好，焼成前穿孔3ヶ所残存
285	7	Ⅰ D19j	上層	SD7137	土師器	鉢形土器	7.15	7.6	3.9	～2mm長石含む	10YR8/4浅黄橙色	-	ハケ目	ナデ，指圧痕	焼成良好
286	7	Ⅰ D20j	上層	SD7137	土師器	台付甕	(12.4)	(3.4)	-	～2mm長石・石英・金雲母含む	5YR7/6橙色	-	ヨコナデ，ハケ目後ナデ	ヨコナデ，ハケ目	焼成良好
287	7	Ⅰ D19j	上層	SD7137	土師器	台付甕	(14.6)	(2.45)	-	～1mm長石・石英・金雲母含む	10YR8/4浅黄橙色	-	ヨコナデ，ハケ目	ヨコナデ，ナデ	焼成良好
288	7	Ⅰ D20k	上層・中層	SD7140	弥生土器	広口壺	(37.4)	(17.2)	-	細かい長石・石英・角閃石・金雲母含む	10YR8/2灰白色	-	条痕	ミガキ	焼成良好，口縁端面押引文，押圧突帯，口縁内側に刻み目
289	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	弥生土器	広口壺	(37.1)	(3.1)	-	～3mm長石・石英・角閃石・金雲母含む	7.5YR7/4にぶい橙色	-	条痕	連弧文	焼成良好，口縁端面押引文，押圧突帯
290	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	弥生土器	広口壺	(25.0)	(3.9)	-	～2mm長石・角閃石・金雲母含む	2.5YR6/8橙色	-	ヨコナデ，ナデ	ハケ目，ヘラミガキ	焼成良好，口縁端面櫛描波状文，口縁内面屈折文
291	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	厚口鉢	(11.8)	(3.7)	-	～1mm長石・赤褐色酸化粒・金雲母含む	7.5YR7/2明褐灰色	-	ナデ	ナデ	焼成良好，外面直線文
292	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	弥生土器	細頸壺	-	(7.2)	(18.2)	～1mm長石・石英・角閃石・金雲母含む	10YR7/3にぶい黄橙色	-	ナデ	ナデ	焼成良好，外面縦面文
293	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	弥生土器	高坏	-	(6.3)	-	～2mm長石含む	7.5YR8/4浅黄橙色	-	ナデ	ナデ，ハケ目	焼成良好，外面4本単位の櫛描直線文，2単位，刺突文，焼成前穿孔2ヶ所残存
294	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	弥生土器	高坏	-	(6.4)	-	～1mm長石・石英・角閃石含む	7.5YR8/3浅黄橙色	-	ナデ	ナデ，指圧痕	焼成良好，外面4本単位の櫛描直線文，2単位，刺突文，焼成前穿孔2ヶ所残存
295	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	弥生土器	高坏	-	(3.9)	(8.7)	～2mm長石・石英・金雲母含む	10YR8/3浅黄橙色	-	ヘラミガキ	ナデ	焼成良好，外面4本単位の櫛描直線文1単位残る
296	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	弥生土器	高坏	-	(4.3)	(6.4)	～2mm長石・石英・金雲母含む	2.5YR5/6明赤褐色	-	ヘラミガキ	ナデ	焼成良好，焼成前穿孔3ヶ所残存
297	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	高坏	-	(8.75)	(14.4)	～1mm長石・角閃石含む	10YR8/3浅黄橙色	-	ヘラミガキ	ナデ	焼成良好，焼成前穿孔3ヶ所残存
298	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	高坏	-	(6.6)	-	～2mm長石・石英・角閃石含む	7.5YR8/6浅黄橙色	-	ナデ，ヨコナデ，ハケ目	ナデ，ミガキ	焼成良好，焼成前穿孔4ヶ所残存
299	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	高坏	-	(6.2)	-	細かい長石・石英・金雲母含む	2.5YR6/8橙色	-	ヘラミガキ	ナデ	焼成良好，焼成前穿孔3ヶ所残存
300	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	土師器	台付甕	(18.3)	(18.0)	-	細かい長石・角閃石・金雲母含む	5YR7/4にぶい橙色	-	ヨコナデ，ハケ目	板ナデ，ハケ目	焼成良好
301	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	土師器	台付甕	(17.7)	(14.05)	-	～2mm長石・石英含む	10YR8/3浅黄橙色	-	ヨコナデ後ハケ目	ハケ目	焼成良好
302	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	台付甕	(17.6)	(14.6)	-	～5mm長石・石英多量含む	10YR7/2にぶい黄橙色	-	ナデ，ハケ目	ヨコナデ，ナデ	焼成良好
303	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	土師器	台付甕	(19.1)	(15.5)	-	～5mm長石・石英・角閃石・金雲母含む	7.5YR7/3にぶい橙色	-	ヨコナデ，ハケ目	ハケ目，ナデ	焼成良好，外面櫛描直線文，刺突文，口縁端部竹管文

東須遺跡遺物観察表（H H12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
304	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	台付甕	－	(5.5)	(4.9)	細かい長石・石英・角閃石・金雲母含む	5YR6/4淡橙色	－	ヨコナデ，ハケ目	ナデ，ヨコナデ	焼成良好
305	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	土師器	台付甕	－	(4.75)	(8.55)	～1mm長石・角閃石含む	7.5YR7/4にぶい橙色	－	ヨコナデ，ハケ目	ハケ目，指圧痕	焼成良好
306	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	土師器	台付甕	－	(4.5)	(7.55)	～2mm長石・石英含む	7.5YR7/6橙色	－	ハケ目	ハケ目	焼成良好
307	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	土師器	台付甕	－	(4.5)	6.6	～3mm長石・石英含む	2.5YR7/6橙色	－	ハケ目	ケズリ，ナデ	焼成良好
308	7	Ⅰ D20k	中層	SD7140	土師器	坪型土器	7.2	3.65	2.7	～3mm長石含む	7.5YR8/6浅黄橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好
309	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	坪型土器	5.3	4.4	3.0	～3mm長石含む	5YR6/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	指圧痕，指ナデ	焼成良好
310	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	弥生土器	小型壺	(3.9)	(4.8)	－	～1mm長石・角閃石・金雲母含む	7.5YR7/3にぶい橙色	－	ナデ	指ナデ，指圧痕	焼成良好，外面刻み目
311	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	広口小型壺	(8.0)	(4.4)	－	細かい長石・角閃石含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，ハケ目	ヨコナデ，ナデ	焼成良好
312	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	広口小型壺	(8.7)	(4.9)	－	～1mm長石・石英含む	5YR7/8橙色	－	ヨコナデ，ハケ目	ヨコナデ，ナデ	焼成良好
313	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	土師器	小型台付甕	(10.5)	(7.05)	－	～5mm長石・石英・角閃石含む	5YR7/4にぶい橙色	－	ヨコナデ，ハケ目，ナデ	ヨコナデ，ナデ	焼成良好
314	7	Ⅱ D11	上層	SD7140	土師器	直口壺	－	(8.65)	4.2	～2mm長石・角閃石・石英含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	ヘラミガキ	ナデ，指圧痕	焼成良好
315	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	壺	(19.8)	(5.05)	－	～1mm長石・石英・角閃石含む	5YR7/6橙色	－	ヘラミガキ	ナデ	焼成良好，外面櫛描刺突文
316	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	壺	(22.7)	(2.55)	－	～1mm長石・石英・角閃石含む	5YR7/6橙色	－	ヨコナデ	ヘラミガキ	焼成良好，外面刺突文
317	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	台付甕	(16.7)	(3.45)	－	～2mm長石・角閃石含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，ハケ目	ヨコナデ，指ナデ	焼成良好
318	7	Ⅰ D20k	上層	SD7140	土師器	台付甕	(11.6)	(2.5)	－	～1mm長石含む	5YR6/6橙色	－	ナデ，ハケ目	ナデ，指圧痕	焼成良好
319	7	Ⅱ D1j	下層	SD7134	弥生土器	甕	－	(15.9)	(5.1)	～3mm長石・石英・角閃石・赤褐色酸化粒・金雲母含む	10YR8/3浅黄橙色	－	貝殻条痕，ナデ	ナデ，指圧痕	焼成良好
320	7	Ⅱ D2k	中層	SD7138	土師器	甕	(24.0)	23.55	(5.8)	細かい長石・石英・角閃石含む	10YR8/2灰白色	－	ハケ目	ハケ目後不定方向ナデ	焼成良好，口縁端部刻み目
321	7	Ⅱ D11	－	SD7139	弥生土器	長頸壺	(8.8)	(14.0)	－	細かい長石・石英・角閃石含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ナデ，ハケ目，沈線	ナデ，ヨコナデ後ハケ目，指圧痕	焼成良好，外面波状文
322	7	Ⅱ D1j	中層	SD7134	弥生土器	長頸壺	－	(16.9)	5.6	～3mm長石・石英含む	5YR7/6橙色～7.5YR8/4浅黄橙色	－	ハケ目	指ナデ	焼成良好，外面櫛描直線文
323	7	Ⅱ D1j	中層	SD7134	土師器	無頸壺	(10.0)	13.5	(7.0)	～2mm長石・角閃石含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，剥ハケ	ヨコナデ	焼成良好，焼成前穿孔2ヶ所残存

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
324	7	Ⅱ D2k	上層	SD7138	土師器	高坏	-	(10.35)	(11.8)	～2mm長石・石英含む	5YR6/6橙色	-	ヨコナデ,ヘラミガキ	ナデ	焼成良好,焼成前穿孔1ヵ所現存
325	7	Ⅱ D2k	上層	SD7138	土師器	瓶	-	-	-	密	10YR8/1灰白色	-	ナデ	ナデ	焼成良好
326	7	Ⅱ D1j	上層	SD7134	弥生土器	台付甕	(14.4)	(8.05)	-	～2mm長石・石英・角閃石含む	10YR6/8赤橙色	-	ヨコナデ,ナデ	ヨコナデ,ハケ目	焼成良好
327	7	Ⅱ D2k	上層	SD7138	土師器	台付甕	(15.0)	(3.0)	-	細かい長石・角閃石・金雲母含む	7.5YR7/3にぶい橙色	-	ヨコナデ,ハケ目	ヨコナデ	焼成良好
328	7	Ⅱ D2j	上層	SD7138	土師器	台付甕	(10.8)	(2.25)	-	～1mm長石・石英・金雲母含む	5YR6/6橙色	-	ヨコナデ,ハケ目	ヨコナデ,ナデ	焼成良好
329	7	Ⅱ D2k	上層	SD7138	土師器	台付甕	-	(5.15)	6.6	～2mm長石・石英・角閃石含む	5YR7/8橙色	-	ハケ目	指ナデ,ヨコナデ	焼成良好
330	7	Ⅱ D2k	上層	SD7138	土師器	台付甕	-	(6.15)	(9.4)	～2mm長石・石英・角閃石含む	7.5YR7/3にぶい橙色	-	ハケ目	ケズリ,ナデ	焼成良好
331	7	Ⅱ D3k	上層	SD7138	弥生土器	パレス壺	(23.6)	(2.7)	-	～2mm長石・石英含む	7.5YR7/6橙色	-	口縁部に4条の沈線	ナデ	焼成良好,外面棒状浮文 内面羽状刺突文,口縁部に赤色顔料少し残る
332	7	Ⅱ D3k	上層	SD7138	土師器	有段口縁壺	(31.4)	(5.0)	-	～2mm長石・石英・赤色酸化鉄含む	7.5YR8/6浅黄橙色	-	ナデ	摩滅により不明	焼成良好,外面櫛描刺突文(羽状刺突文)
333	7	Ⅱ D1j	上層	SD7134	土師器	壺	(25.5)	(4.0)	-	～3mm長石・石英含む	2.5Y5/2暗灰黄色	-	ナデ	ナデ	焼成良好,外面波状文
334	7	Ⅱ D2l	上層	SD7138	土師器	壺	-	(6.7)	-	～3mm長石・石英含む	10YR8/4浅黄橙色	-	ハケ目	磨滅には不明	焼成良好,外面櫛刺刺突文
335	7	Ⅱ D2k	上層	SD7138	土師器	壺	-	(3.0)	-	細かい長石・石英クサリ礫含む	10YR8/2灰白色	-	ナデ後条痕	ナデ	焼成良好
336	7	Ⅱ D2k	上層	SD7138	土師器	壺	-	(2.7)	-	～1mm長石・石英含む	10YR3/8浅黄橙色	-	ナデ	ナデ,指圧痕	焼成良好,外面半截竹管による施文
337	7	Ⅱ D2k	上層	SD7138	-	石皿	8.9	8.4	3.6	-	10YR5/2灰黄褐色	-	-	-	石材:安山岩 全面被熱
338	7	Ⅰ D20j	-	SD7135	土師器	台付甕	(11.8)	(5.9)	-	～1mm長石・石英・角閃石含む	7.5YR8/6浅黄橙色	-	ヨコナデ,ハケ目	ハケ目,ナデ	焼成良好
339	7	Ⅰ D19j	上層	SD7135	土師器	台付甕	-	(8.4)	10.55	～3mm長石・石英・角閃石含む	5YR7/6橙色	-	ナデ,ヨコナデ,ハケ目	板ナデ,不定方向ナデ	焼成良好
340	7	Ⅰ D19j	上層	SD7135	土師器	小型丸底壺	9.15	7.0	1.0	細かい長石・石英・赤褐色酸化鉄含む	5YR6/6橙色	-	ハケ目後ヘラミガキ,ナデ後ヘラミガキ	ハケ目後ヘラミガキ,指ナデ	焼成良好
341	7	Ⅰ D20j	-	SD7135	土師器	小型鉢	(15.6)	(3.7)	-	細かい長石含む	5YR7/8橙色	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好
342	7	Ⅰ D20j	-	SD7135	土師器	台付壺	(12.7)	(5.0)	-	～2mm長石・角閃石含む	7.5YR8/4浅黄橙色	-	ヘラミガキ	摩滅により不明	焼成良好
343	7	Ⅰ D18j	-	SD7136	土師器	台付甕	(14.5)	(23.0)	-	細かい長石・石英含む	7.5YR7/6橙色	-	ヨコナデ,ハケ目,ナデ	ヨコナデ,不定方向ナデ,ハケ目	焼成良好,外面下部に煤付着

東畑遺跡遺物観察表（H-H12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
344	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	台付甕	(12.7)	(5.9)	－	～3mm長石・石英・角閃石含む	7.5YR7/3にぶい橙色	－	ヨコナデ、ハケ目後ナデ	ヨコナデ、ナデ。ハケ目	焼成良好
345	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	弥生上器	台付甕	(15.4)	(6.0)	－	～2mm長石・石英・角閃石含む	5YR6/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	焼成良好
346	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	台付甕	(17.5)	(5.2)	－	～2mm長石・石英・角閃石含む	7.5YR8/6浅黄橙色	－	ハケ目	ナデ、ハケ目	焼成良好
347	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	弥生上器	台付甕	(16.0)	(7.1)	－	～3mm長石・石英・角閃石含む	2.5YR6/8橙色	－	ヘラミガキ後ハケ目	ナデ、ハケ目	焼成良好
348	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	台付甕	(13.2)	(3.6)	－	細かい長石・石英・金雲母少量含む	外面 10YR7/3にぶい黄橙色 内面 5YR7/4にぶい橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	焼成良好
349	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	台付甕	(15.9)	(5.0)	－	～1mm長石・石英含む	7.5YR7/3にぶい橙色	－	ヨコナデ。ハケ目	ヨコナデ、ナデ。ハケ目、指圧痕	焼成良好
350	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	台付甕	(11.5)	(4.5)	－	～1mm長石・石英・角閃石含む	5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ。ハケ目	焼成良好
351	7	Ⅰ D18	上層	SD7136	土師器	台付甕	(11.5)	(4.1)	－	～1mm長石・石英・角閃石含む	7.5YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、指圧痕	焼成良好
352	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	台付甕	－	(5.55)	(9.5)	～2mm長石・石英・角閃石含む	5YR7/8橙色	－	ハケ目	ナデ、板ナデ	焼成良好
353	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	小型台付甕	－	(2.1)	(4.6)	細かい長石・石英含む	7.5YR8/2灰白色	－	ハケ目	ナデ	焼成良好
354	7	Ⅱ D19	上層	SD7136	土師器	高坏	16.2	(5.5)	－	～3mm長石含む	外面 5YR6/8橙色 内面 5YR6/6橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好
355	7	Ⅰ D18	下層	SD7136	土師器	高坏	－	(8.7)	12.65	～2mm長石・角閃石含む	5YR8/4淡橙色	－	ヘラミガキ	ヨコナデ	焼成良好、焼成前穿孔3ヶ所残存
356	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	高坏	－	(8.55)	(15.0)	～2mm長石・石英・極少量金雲母含む	5YR7/8橙色	－	ヘラミガキ	ヨコナデ	焼成良好、焼成前穿孔3ヶ所残存
357	7	Ⅰ D18	－	SD7136	土師器	小型器台	8.7	9.6	(11.2)	～2mm長石・角閃石・石英含む	7.5YR7/4にぶい橙色	－	ヘラミガキ。ナデ。ハケ目	ヨコナデ。ハケ目	焼成良好、焼成前穿孔3ヶ所残存
358	7	Ⅰ D18	下層	SD7136	土師器	小型器台	(8.2)	7.8	(7.9)	細かい長石・赤褐色酸化粒含む	7.5YR7/6橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好、焼成前穿孔3ヶ所残存
359	7	Ⅰ D18	下層	SD7136	土師器	直口壺	－	(8.9)	－	細かい長石・石英含む	外面 5YR7/6橙色 内面 2.5YR6/8橙色	－	ヘラミガキ	ヨコナデ、指ナデ	焼成良好
360	7	Ⅰ D19	－	SD7136	土師器	直口壺	(27.3)	(10.3)	－	細かい長石・赤褐色酸化粒含む	5YR6/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目後ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好
361	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	有段口縁壺	－	(8.6)	－	細かい長石・石英・角閃石・ナヅリ礫含む	7.5YR7/4にぶい橙色	－	ハケ目後ヨコナデ。	不定方向ナデ	焼成良好、外面列点文
362	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	有段口縁壺	16.35	(9.4)	－	角閃石・赤褐色酸化粒・金雲母含む	10YR8/2灰白色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好
363	7	Ⅰ D19	上層	SD7136	土師器	有段口縁壺	(19.4)	(5.55)	－	細かい長石・石英・角閃石含む	5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ	焼成良好

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
364	7	Ⅰ D19j	上層	SD7136	土師器	受口状口縁壺	(17.6)	(2.1)	－	～1mm長石・石英含む、～7mm角閃石・金雲母含む	5YR7/8橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好，口縁外面刺突文
365	7	Ⅰ D19j	上層	SD7136	土師器	受口状口縁壺	(20.9)	(4.0)	－	～1mm長石・石英含む、角閃石・金雲母含む	5YR7/6橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好，口縁外面刺突文
366	7	Ⅰ D18j	下層	SD7136	土師器	小型壺	－	(5.1)	(1.7)	～1mm長石・石英極少量含む	外面 5YR6/6橙色 内面 10YR7/4にぶい黄橙色	－	ヘラミガキ，指圧痕	指ナデ，ヘラミガキ，ナデ	焼成良好
367	7	Ⅰ D18j	下層	SD7136	土師器	小型鉢	11.2	4.3	1.8	細かい長石・石英少量含む	5YR7/6橙色	－	ヘラミガキ，指圧痕，ヨコナデ	ヘラミガキ，指圧痕，ヨコナデ	焼成良好
368	7	Ⅰ D18j	－	SK7163	土師器	直口壺	12.5	(19.5)	－	細かい長石極少量含む	7.5YR8/4浅黄橙色	－	縦ヘラミガキ，横ヘラミガキ	ナナメハケ目，ヘラミガキ	焼成良好，外面下部に煤付着
369	7	Ⅰ D18j	－	SK7163	土師器	小型直口壺	－	(5.1)	1.0	密	7.5YR8/6浅黄橙色	－	ヘラミガキ	ナデ	焼成良好，外面煤付着
370	7	Ⅱ D3k	－	SK7141	土師器	甑	(24.8)	24.2	19.5	やや粗い，細かい長石少量含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好
371	7	Ⅱ D3k	－	SK7141	須恵器	坏蓋	(13.95)	3.4	－	～1mm長石含む	2.5Y6/1黄灰色	－	回転ナデ，回転ケズリ	回転ナデ	焼成良好，つまみ径2.6cm つまみ高0.8cm
372	7	Ⅱ D3k	－	SK7141	須恵器	坏蓋	17.3	4.4	－	密	10YR6/1褐灰色	－	回転ナデ，回転ケズリ	回転ナデ	焼成良好，内外面に灰かぶりあり，つまみ径2.3cm つまみ高1.3cm
373	7	Ⅱ D3k	－	SK7141	須恵器	坏身	(12.2)	(3.75)	－	～1mm長石少量含む	7.5YR6/2灰褐色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好
374	7	Ⅱ D3k	－	SK7141	須恵器	坏身	(12.9)	3.6	(8.2)	細かい長石少量含む	10YR7/2にぶい黄橙色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成やや軟質
375	7	Ⅱ D3k	－	SK7141	須恵器	短頸壺	－	(10.5)	－	密	5YR4/3にぶい赤褐色	鉄釉	回転ナデ，回転ケズリ，鉄釉	回転ナデ	焼成良好
376	7	Ⅱ D3k	－	SK7141	須恵器	把手付坏身	(24.7)	(6.1)	－	密，細かい長石極少量含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	回転ナデ，ヘラケズリ	回転指ナデ	焼成良好，口縁の一部に指圧痕あり
377	7	Ⅰ D19k	－	SE7065	常滑	甕	(40.0)	(47.7)	－	～5mm長石少量含む	2.5Y7/1灰白色	－	板ナデ	指ナデ，指圧痕	焼成良好，体部最大径63.2cm，外面櫛花文，ヘラ描き「×」，他成後穿孔1箇所
378	7	Ⅰ D19k	－	SE7065	常滑	甕	42.3	(45.6)	－	～3mm長石含む	2.5YR4/4にぶい赤褐色	－	ヨコナデ，板ナデ	ヨコナデ，指ナデ，指圧痕	焼成良好，体部最大径63.0cm，外面菊花文，東面文，ヘラ描き「×」，他成後穿孔1箇所
379	7	Ⅰ D19k	－	SE7065	常滑	甕	39.0	(41.6)	－	～2mm長石含む	2.5YR7/8橙色～7.5YR8/6浅黄橙色	－	板ナデ，ヨコナデ	ヨコナデ，ナデ	焼成良好，体部最大径64.5cm，胴位のヘラ描き列点文
380	7	Ⅰ D19k	－	SE7065	常滑	片口鉢	(28.9)	10.45	(15.0)	～3mm長石・石英含む	2.5YR4/4にぶい赤褐色	－	ヨコナデ，瓦ナデ，板ナデ	ヨコナデ，ナデ，板ナデ	焼成良好
381	7	Ⅰ D19k	－	SE7065	山茶碗	鉢	(20.5)	9.4	(11.1)	～2mm長石・角閃石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，ケズリ，貼付高台	回転ナデ	焼成良好，ロクロ調整，内面灰かぶり
382	7	Ⅰ D20j	包含層	－	土師器	有段口縁壺	(24.8)	(5.3)	－	～1mm長石・石英・金雲母含む	10YR8/4浅黄橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好，外面櫛描刺突文
383	7	Ⅱ D2k	包含層	－	土師器	有段口縁壺	(26.3)	(6.1)	－	～2mm長石含む	5YR7/8橙色	－	ナデ，ヨコナデ	ヘラミガキ	焼成良好，外面櫛描刺突文

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
384	7	Ⅰ D18l	包含層	－	弥生土器	有段口縁壺	(16.6)	(2.85)	－	～2mm長石・石英・赤色酸化粒含む	5YR7/8橙色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好、外面櫛描刺突文
385	7	－	遺構断割	－	土師器	有段口縁壺	(23.5)	(3.35)	－	～1mm長石含む・クサリ礫多量含む	7.5YR6/6橙色	－	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	焼成良好、外面櫛描刺突文
386	7	Ⅱ D1k	包含層3	－	土師器	有段口縁壺	(16.7)	(4.2)	－	密、長石・クサリ礫少量含む	10YR8/4浅黄橙色	－	ヨコナデ、ナデ、指圧痕	ナデ	焼成良好、外面赤色顔料付着
387	7	Ⅰ D20l	包含層	－	土師器	有段口縁壺	－	(6.3)	－	細かい長石多量含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	焼成良好
388	7	Ⅰ D20j	包含層	－	土師器	有段口縁壺	－	(6.0)	－	細かい長石・石英含む	7.5YR7/6にぶい橙色	－	ヘラミガキ、ヨコナデ、指圧痕、ハケ目。	ナデ、指圧痕	焼成良好、外面櫛描刺突文
389	7	Ⅰ D20l	包含層2	－	土師器	広口壺	(14.4)	(5.7)	－	やや粗い、細かい長石・雲色紀・赤色粒含む	7.5YR7/4にぶい橙色	－	ヨコナデ、ハケ目。ナデ	ナデ、ハケ目	焼成良好
390	7	Ⅰ D20k	包含層	－	土師器	小型丸底壺	－	(5.1)	－	やや粗い、～1mm長石少量・クサリ礫・金雲母含む	外面 7.5YR7/4にぶい橙色 内面 5YR6/6橙色	－	ナデ	ヨコナデ、ヘラミガキ	焼成良好
391	7	－	拡張区表土	－	土師器	小型壺	(7.8)	(5.75)	－	密、～1mm長石含む	2.5YR4/6にぶい橙色	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、指圧痕	焼成良好
392	7	－	遺構断割	－	土師器	台付甕	(17.2)	(4.4)	－	～1mm長石・石英・金雲母含む	2.5YR6/6橙色	－	ヨコナデ、ナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	焼成良好
393	7	Ⅱ D2l	－	カマドT142	土師器	台付甕	(17.6)	(7.9)	－	やや粗い、～1mm長石・クサリ礫多量含む	2.5YR4/6にぶい橙色	－	ナデ、ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ、指圧痕	焼成良好
394	7	－	遺構断割	－	土師器	台付甕	(15.7)	(5.65)	－	～4mm長石・石英・角閃石・金雲母含む	外面 2.5Y3/1黒褐色 内面 7.5YR7/4にぶい橙色	－	ハケ目	ヨコナデ、ハケ目	焼成良好
395	7	Ⅱ D2j	包含層	－	土師器	台付甕	(15.3)	(6.5)	－	～1mm長石・石英含む	5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ハケ目、ナデ	焼成良好、外面煤付着
396	7	Ⅰ D19l	包含層	－	土師器	台付甕	(19.6)	(7.3)	－	～1mm長石・石英含む	5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目後板ナデ	ヨコナデ、ハケ目	焼成良好
397	7	Ⅰ D19l	包含層	－	土師器	台付甕	(22.6)	(6.0)	－	～1mm長石・角閃石含む	5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ハケ目	焼成良好
398	7	－	遺構断割	－	土師器	台付甕	(12.7)	(4.6)	－	～2mm長石・石英含む	5YR6/3にぶい橙色	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	焼成良好
399	7	Ⅱ D2l	包含層	－	土師器	台付甕	(13.6)	(5.1)	－	～2mm長石・石英含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	焼成良好
400	7	Ⅱ D1j	包含層	－	土師器	小型台付甕	(9.2)	(5.55)	－	～1mm長石・石英・角閃石含む	5YR6/6橙色	－	ヘラミガキ、ハケ目	ヘラミガキ、ナデ	焼成良好
401	7	Ⅰ D18l	下層	SK7161	土師器	台付甕	－	(10.15)	(10.0)	細かい長石・石英・金雲母含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ハケ目	ナデ、指圧痕	焼成良好
402	7	Ⅰ D20k	包含層	－	土師器	台付甕	－	(4.5)	(8.8)	やや粗い、細かい長石・クサリ礫多量含む	7.5YR7/6橙色	－	ヨコナデ、ナデ、ハケ目	ケズリ、ハケ目	焼成良好、内面煤付着
403	7	Ⅱ D2j	包含層	－	土師器	台付甕	－	(5.25)	(8.0)	～1mm長石・石英含む	10YR7/4にぶい黄橙色	－	ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ	焼成良好、底部折り曲げ

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

掲載番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
404	7	－	攪乱層	－	土師器	小型台付甕	－	(3.0)	(4.0)	密、細かい長石・クサリ礫含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ、ナデ、ハケ目	ナデ	焼成良好
405	7	Ⅰ D18j	下層	SK7161	土師器	台付甕	(14.0)	(6.4)	－	細かい長石・石英・金雲母含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、指圧痕	焼成良好
406	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	土師器	台付甕	－	(2.6)	(11.4)	～1mm長石・石英含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	焼成良好
407	7	－	攪乱層	－	土師器	台付甕	(13.3)	(3.1)	－	密、細かい長石・石英・多量・雲母少量含む	5YR7/6明褐灰色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、指圧痕	焼成良好
408	7	Ⅱ D2i	包含層	－	土師器	台付甕	(16.2)	(3.1)	－	密、細かい長石・クサリ礫多量・雲母少量含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	ヨコナデ、ハケ目	ヨコナデ、ナデ	焼成良好
409	7	Ⅱ D2k	包含層	－	土師器	高坏	(28.4)	(4.8)	－	～3mm長石・石英・角閃石含む	10YR8/4浅黄橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好
410	7	Ⅱ D1l	包含層	－	土師器	高坏	－	(6.3)	－	～2mm長石・石英含む	2.5YR7/8橙色	－	ナデ	ナデ	焼成良好、焼成前穿孔3ヶ所残存
411	7	Ⅰ D19l	包含層	－	土師器	脚付壺ヵ	－	(5.6)	－	～3mm長石・角閃石・金雲母含む	10YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	焼成良好、焼成前穿孔1ヶ所残存
412	7	－	－	西徐水溝	土師器	高坏ヵ	－	(3.3)	－	～1mm長石・石英含む	2.5YR7/8橙色	－	ヘラミガキ、ナデ、	ヘラミガキ	焼成良好、焼成前穿孔1ヶ所残存外面刺突文
413	7	Ⅰ D20j	－	SK7098	土師器	高坏ヵ	－	(3.2)	－	～2mm長石・角閃石含む	5YR7/8橙色	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成良好、焼成前穿孔1ヶ所残存、外面刺突刻み目
414	7	－	攪乱層	－	須恵器	壺	(10.1)	(3.3)	－	密	N8/0灰白色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好、内外面灰かぶり
415	7	Ⅱ D2i	－	SB7143	須恵器	坏蓋	(16.4)	(2.1)	－	細かい長石含む	7.5YR7/2明褐灰色	－	回転ケズリ、回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
416	7	Ⅱ D2i	包含層	－	須恵器	平瓶	－	(8.8)	－	密	5Y5/1灰色	－	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	焼成良好、外面灰かぶり
417	7	Ⅱ D3k	包含層	－	須恵器	坏身	(11.1)	(3.05)	－	密	10YR8/4浅黄橙色	－	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ	焼成良好
418	7	Ⅰ D20j	－	SD7135	須恵器	坏身	(12.0)	(3.9)	－	密	7.5YR5/1灰色	－	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	焼成良好
419	7	－	攪乱層	－	須恵器	坏蓋	(14.0)	(2.9)	－	密、細かい長石少量含む	2.5Y5/1黄灰色	－	回転ナデ、回転ヨコナデ、回転ケズリ	回転ナデ	焼成良好、灰かぶり
420	7	－	攪乱層	－	須恵器	坏身	(21.0)	(3.8)	－	密	10YR5/1褐灰色	－	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
421	7	Ⅱ D3i	包含層	－	灰釉陶器	皿	(15.4)	3.25	(8.8)	精良	10YR8/1灰白色	灰釉	回転ナデ、貼付高台	回転ナデ	焼成良好
422	7	Ⅱ D2j	－	SK7095	灰釉陶器	椀	(15.2)	5.0	7.3	～1mm長石含む	2.5YR/1灰白色	灰釉	回転ナデ、回転糸切痕	回転ナデ、ナデ	焼成良好、内面重ね焼き痕あり
423	7	Ⅰ D20l	包含層	－	灰釉陶器	椀	－	(1.4)	(6.0)	密	2.5Y7/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
424	7	Ⅰ D20k	包含層	－	緑釉陶器	椀	－	(2.0)	(6.6)	密	7.5YR/1灰白色	緑釉	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	焼成良好，釉薬発色悪い
425	7	Ⅰ D18l	包含層2	－	山茶椀	小皿	8.1	2.1	4.75	～2mm長石含む	10YR7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
426	7	Ⅰ D20l	包含層	－	山茶椀	小皿	7.6	1.9	3.8	～3mm長石・角閃石含む	10YR8/1灰白色	－	回転ナデ，ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
427	7	Ⅰ D20k	包含層3	－	山茶椀	小皿	7.9	1.7	4.5	～3mm長石・角閃石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好，内面灰かぶり
428	7	Ⅱ D1k	包含層3	－	山茶椀	小皿	7.55	1.7	4.8	やや粗い	10YR8/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
429	7	Ⅱ D11	包含層	－	山茶椀	小皿	8.0	1.5	5.6	細かい長石含む	10YR7/1灰白色	灰釉	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好，内外面灰かぶり
430	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	山茶椀	小皿	(8.5)	1.65	(6.0)	～5mm長石・石英含む	2.5YR/2灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
431	7	Ⅰ D17l	－	SD7176	山茶椀	小皿	7.7	1.65	4.8	粗い，～4mm長石含む・黒色粒多量含む	10YR7/1灰白色	－	ヨコナデ，回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
432	7	Ⅰ D20k	－	SD7113	山茶椀	小皿	9.6	1.5	6.0	やや粗い，細かい長石含む	5Y7/1灰白色	－	ヨコナデ，回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
433	7	－	重機掘削	－	山茶椀	椀	(16.0)	(5.4)	－	～4mm黒色粒少量含む	2.5Y7/1灰白色	－	ヨコナデ，回転ナデ．	回転ナデ	焼成良好，内面灰かぶり
434	7	Ⅱ D2)	包含層	－	山茶椀	椀	(12.8)	4.8	5.7	～2mm長石・石英含む	10YR8/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
435	7	Ⅰ D20l	－	SD7107	山茶椀	椀	(12.9)	4.8	(5.0)	～3mm長石・石英含む	10YR8/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
436	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	山茶椀	椀	12.8	4.55	6.0	～3mm長石含む	2.5Y6/1黄灰色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好，内面灰かぶり
437	7	Ⅰ D20l	包含層2	－	山茶椀	椀	(13.5)	4.9	(5.9)	～2mm長石・石英含む	2.5Y7/1灰白色	灰白色	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
438	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	山茶椀	椀	12.4	4.6	4.8	～3mm長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好，内外面灰かぶり
439	7	Ⅱ D2)	－	SK7167	山茶椀	椀	(14.2)	4.6	(7.1)	粗い，4mm長石・黒色粒多く含む	10YR7/1灰白色	－	ヨコナデ，回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ，ナデ	焼成良好
440	7	Ⅰ D20l	包含層	－	山茶椀	椀	(12.8)	4.15	(5.0)	粗い，～2mm長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	ヨコナデ，回転ナデ，回転糸切痕，板ナデ	回転ナデ，ナデ	焼成良好
441	7	Ⅰ D20k	包含層3	－	山茶椀	椀	(12.6)	4.0	(5.3)	～5mm長石・角閃石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ，回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好
442	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	山茶椀	椀	(13.2)	3.85	(3.4)	精良	10YR8/1灰白色	－	回転ナデ，ナデ，貼付高台	回転ナデ	焼成良好，釉薬痕あり
443	7	Ⅰ D19k	包含層	－	山茶椀	椀	(12.8)	3.5	(4.4)	密，細かい長石含む	5YR7/4にぶい橙色	－	ヨコナデ，回転ナデ，ナデ，貼付高台	回転ナデ，ナデ	焼成良好，釉薬痕あり

東畑遺跡遺物観察表（H-H12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
444	7	Ⅰ D20k	包含層3	－	山茶碗	碗	(11.4)	3.25	3.1	～1mm長石含む	2.5Y7/1灰白色	－	回転ナデ、回転糸切痕、貼付高台	回転ナデ	焼成良好、糊状痕あり
445	7	Ⅰ D18k		SD7001	山茶碗	鉢	(27.7)	(10.75)	－	～5mm長石・角閃石含む	2.5Y6/1黄灰色	－	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ	焼成良好、口縁端部灰かぶり
446	7	Ⅱ D21	包含層	－	山茶碗	鉢	－	(8.8)	(12.4)	～3mm長石含む	10YR7/1灰白色	－	回転ナデ、ケズリ、貼付高台	回転ナデ	焼成良好
447	7	Ⅰ D20k	包含層3	－	瀬戸美濃	折縁小皿	8.6	2.15	4.6	～1mm長石極少量含む	2.5YR6/6橙色	灰釉	回転ナデ、回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好、内面全体～外面口縁部に施釉
448	7	Ⅰ D18k	包含層	－	瀬戸美濃	緑釉はさみ皿	(10.9)	(2.7)	－	密	2.5Y8/1灰白色	灰釉	回転ナデ、回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好
449	7	－	重機撤削	－	瀬戸美濃	緑釉はさみ皿	(9.9)	(2.2)	－	密	10YR8/1灰白色	灰釉	回転ナデ、回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好
450	7	－	重機撤削	－	瀬戸美濃	緑釉はさみ皿	(12.7)	(2.5)	－	密	10YR8/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
451	7	Ⅰ D19l	包含層2	－	瀬戸美濃	緑釉はさみ皿	(11.7)	(2.45)	－	密	2.5Y8/1灰白色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
452	7	－	－	東排水溝	瀬戸美濃	緑釉はさみ皿	(10.5)	2.6	(4.3)	密、～2mm長石極少量含む	10YR8/2灰白色	鉄釉	回転ナデ、回転糸切痕	回転ナデ	焼成良好
453	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	瀬戸美濃	折縁大皿	(18.2)	(2.8)	－	密	7.5YR8/1灰白色	長石釉	施釉により不明	施釉により不明	焼成良好
454	7	－	重機撤削	－	瀬戸美濃	折縁大皿	(23.9)	(2.4)	－	密	10YR8/1灰白色	緑釉	回転ナデ。	回転ナデ。	焼成良好
455	7	Ⅰ D19l	包含層	－	瀬戸美濃	折縁大皿	(22.9)	(5.25)	(12.0)	細かい長石少量含む	7.5YR8/1灰白色	緑釉	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ。	焼成良好
456	7	－	－	東排水溝	瀬戸美濃	天目茶碗	(11.3)	(4.85)	－	密	5YR2/1黒褐色	鉄釉	回転ナデ。	回転ナデ。	焼成良好
457	7	Ⅱ D2k	包含層	－	青磁	碗	(17.9)	(5.05)	－	精良	5Y6/2灰オリーブ色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	外面蓮華文
458	7	Ⅰ D19l	包含層	－	瀬戸美濃	卸皿	－	(0.9)	(7.0)	～2mm長石含む	7.5YR8/3浅黄橙色	灰釉	ナデ、回転糸切痕	条痕後ナデ	焼成良好
459	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	瀬戸美濃	皿	(22.9)	(2.35)	－	密	7.5YR7/4にぶい橙色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
460	7	Ⅰ D18k	包含層	－	瀬戸美濃	碗形鉢	(26.1)	(4.4)	－	密	10YR8/3浅黄橙色	灰釉	回転ナデ	回転ナデ	焼成良好
461	7	Ⅰ D20l	包含層2	－	常滑	鉢	(31.3)	(4.95)	－	～2mm長石含む	7.5YR4/4褐色	－	ヨコナデ、縦方向ナデ	ヨコナデ、ナデ	焼成良好、内面灰かぶり
462	7	Ⅰ D19l	包含層2	－	常滑	壺	(14.6)	(6.2)	－	～1mm長石・角閃石含む	7.5YR4/3褐色	－	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ。指圧痕	焼成良好、外面灰かぶり
463	7	Ⅰ D18l	包含層2	－	常滑	甕	(44.8)	(7.5)	－	～3mm長石含む	2.5Y4/3にぶい赤褐色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好、外面灰かぶり

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
464	7	－	拡張区表土	－	常滑	甕	(41.0)	(6.9)	－	細かい長石・貝殻含む	7.5YR3/3暗赤褐色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好，内面灰ふぶり
465	7	Ⅰ D19j	包含層	－	土師器	伊勢型鍋	(27.1)	(8.65)	－	～2mm長石・石英含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，ナデ，指圧痕	ヨコナデ，ナデ	焼成良好，外面煤付着，内面淡く煤付着
466	7	－	重機撤削	－	土師器	伊勢型鍋	(28.4)	(4.6)	－	～1mm長石・石英・金雲母含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，指圧痕。工具痕	ヨコナデ，ナデ	焼成良好，外面淡く煤付着
467	7	－	拡張区表土	－	土師器	伊勢型鍋	(23.0)	(2.25)	－	密	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，指圧痕。ハケ目	ヨコナデ，ナデ	焼成良好，内外面淡く煤付着
468	7	－	拡張区表土	－	土師質土器	羽釜	(12.9)	(2.6)	－	やや粗い	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，ハケ目	ヨコナデ，ナデ	焼成良好
469	7	－	重機撤削	－	土師質土器	羽釜	(17.2)	(3.5)	－	密	7.5YR8/3浅黄橙色	－	ヨコナデ，ハケ目	ナデ	焼成良好，外面煤付着，内面淡く煤付着
470	7	－	重機撤削	－	土師質土器	羽釜	(20.0)	(3.55)	－	密	7.5YR8/1灰白色	－	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成良好，内面淡く煤付着
471	7	Ⅰ D20j	包含層	－	土師質土器	羽釜	(18.3)	(2.5)	－	～1mm角閃石少量含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，ハケ目	ナデ	焼成良好，焼成前穿孔1ヶ所残存
472	7	Ⅰ D20k	包含層	－	土師質土器	羽釜	(24.3)	(6.1)	－	～1mm長石・石英含む	5YR7/6橙色	－	ヨコナデ，ハケ目	ナデ	焼成良好，外面淡く煤付着
473	7	Ⅱ D11	包含層	－	土師質土器	羽釜	(21.4)	(3.85)	－	密，～0.5mm長石含む	10YR8/2灰白色	－	ヨコナデ，ハケ目	ナデ	焼成良好
474	7	－	拡張区表土	－	土師質土器	羽釜	(28.2)	(8.3)	－	細かい長石・クサリ礫多量含む	10YR8/1灰白色	－	ヨコナデ，ナデ，指圧痕，ハケ目	ヨコナデ，ナデ，指圧痕	焼成良好
475	7	－	重機撤削	－	－	陶丸	2.4	2.4	(2.05)	密	2.5YR4/2灰赤色	－	指圧痕	－	焼成良好
476	7	－	重機撤削	－	－	陶丸	2.15	2.3	2.15	密	2.5YR8/1灰白色	－	指圧痕	－	焼成良好
477	7	－	重機撤削	－	－	陶丸	2.15	2.2	2.05	密	7.5YR5/2灰褐色	－	指圧痕	－	焼成良好
478	7	－	－	東排水溝	－	陶丸	2.0	2.1	1.9	密	2.5YR6/6橙色	－	指圧痕	－	焼成良好
479	7	Ⅱ D2l	－	P7053	－	陶丸	2.15	2.3	2.2	密	5YR5/3にぶい赤褐色	－	指圧痕	－	焼成良好
480	7	Ⅰ D20k	包含層	－	－	陶丸	2.3	2.3	2.3	密，～2mm長石少量含む	10YR8/1灰白色	－	指圧痕	－	焼成良好
481	7	Ⅰ D18l	包含層	－	－	陶丸	1.9	1.9	1.9	密	2.5YR4/1赤灰色	－	指圧痕，ナデ	－	焼成良好
482	7	Ⅰ D18l	包含層2	－	－	陶丸	2.4	2.3	2.3	密	2.5YR4/1赤灰色	－	指圧痕	－	焼成良好
483	7	Ⅰ D18l	包含層2	－	－	陶丸	2.4	2.25	2.2	密	10YR6/2灰黄褐色	－	指圧痕	－	焼成良好

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
484	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	－	陶丸	2.4	2.3	2.2	密	2.5Y8/1灰白色	－	指圧痕	－	焼成良好，一部灰かぶり
485	7	Ⅱ D1k	包含層3	－	－	陶丸	1.9	1.9	1.9	～1mm長石・石英含む	2.5Y3/1黒褐色	－	指圧痕	－	焼成良好
486	7	Ⅰ D19l	包含層2	－	－	陶丸	2.1	2.05	2.0	密	2.5YR7/6橙色	－	指圧痕	－	焼成良好，一部灰かぶり
487	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	－	陶丸	1.9	1.9	1.9	密	2.5YR6/2灰黄色	－	ナデ	－	焼成良好
488	7	Ⅰ D18l	包含層	－	－	陶丸	2.2	2.15	(1.35)	密	7.5R4/3にぶい赤褐色	－	ナデ	－	焼成良好
489	7	Ⅰ D18l	包含層2	－	－	土錘	3.0	6.1	2.9	～1mm長石・石英含む	10YR4/1褐灰色	－	指ナデ	－	焼成良好
490	7	Ⅰ D19k	包含層	－	－	土錘	(2.35)	(2.75)	(1.15)	～1mm長石・石英・金雲母含む	7.5YR7/4にぶい橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
491	7	Ⅰ D20l	包含層2	－	－	土錘	2.05	5.75	1.95	細かい長石・金雲母含む	7.5YR6/2灰褐色	－	指ナデ	－	焼成良好
492	7	－	重機撹削	－	－	土錘	1.4	(4.15)	1.3	密，細かい長石・黒色粒含む	7.5YR7/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
493	7	Ⅰ D19l	包含層2	－	－	土錘	1.2	4.9	1.2	密	5YR7/8橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
494	7	Ⅰ D18l	包含層	－	－	土錘	1.3	5.2	1.3	細かい長石・石英含む	2.5YR5/4にぶい赤褐色	－	指ナデ	－	焼成良好
495	7	－	重機撹削	－	－	土錘	1.15	(4.9)	1.05	密，黒色粒少量含む	2.5YR7/4淡赤橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
496	7	Ⅰ D19k	包含層3	－	－	土錘	1.15	4.8	1.1	細かい長石少量含む	2.5YR6/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
497	7	Ⅰ D18l	包含層2	－	－	土錘	1.15	4.4	1.15	やや密	2.5YR7/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
498	7	Ⅰ D20l	包含層2	－	－	土錘	1.5	4.3	1.5	やや密	2.5YR7/4淡赤橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
499	7	－	重機撹削	－	－	土錘	1.3	(5.2)	1.3	密，細かい長石含む	2.5YR6/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
500	7	Ⅱ D1k	包含層	－	－	土錘	1.4	4.7	1.4	細かい長石・石英含む	5YR7/6橙色	－	ナデ	－	焼成良好
501	7	Ⅰ D20l	包含層	－	－	土錘	1.25	(4.25)	1.1	密，石英少量含む	2.5YR6/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
502	7	－	拡張区表土	－	－	土錘	1.1	4.6	1.0	～1mm長石少量含む	5YR7/6橙色	－	指ナデ，指圧痕	－	焼成良好
503	7	Ⅰ D18l	包含層2	－	－	土錘	1.35	(3.45)	(0.8)	やや密	5YR7/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
504	7	I D19l	包含層2	－	－	土師	1.1	4.55	1.1	密	2.5YR6/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
505	7	I D19l	包含層	－	－	土師	1.0	(3.2)	1.05	～1mm長石含む	5YR7/8橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
506	7	－	造機撹乱	－	－	土師	1.2	4.2	1.15	密，細かい長石・金雲母・黒色粒少量含む	2.5YR6/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
507	7	I D20l	包含層	－	－	土師	1.2	(4.65)	1.2	密，金雲母含む	2.5YR6/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
508	7	－	造機撹乱	－	－	土師	1.1	(3.8)	1.05	密，細かい黒色粒多量含む・2mm長石含む	2.5Y8/3淡黄色	－	指ナデ	－	焼成良好
509	7	I D19k	包含層3	－	－	土師	1.1	(4.4)	1.1	密，細かい長石極少量含む	5YR7/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
510	7	－	造機撹乱	－	－	土師	1.05	(4.5)	1.05	密，～1mm長石含む	7.5YR6/3にぶい褐色	－	指ナデ	－	焼成良好
511	7	I D18k	－	SD7001	－	土師	1.1	(3.55)	1.1	密	2.5YR7/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
512	7	I D20j	包含層	－	－	土師	1.2	(3.7)	1.2	細かい長石少量含む	2.5YR5/6明赤褐色	－	指ナデ	－	焼成良好
513	7	I D18l	包含層2	－	－	土師	1.05	4.0	1.05	やや密	7.5Y4/1灰色	－	指ナデ	－	焼成良好
514	7	I D19k	包含層	－	－	土師	1.2	3.4	1.15	密	2.5YR7/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
515	7	I D19l	包含層2	－	－	土師	1.1	(2.75)	1.1	～1mm長石含む	2.5YR6/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
516	7	I D19k	包含層	－	－	土師	1.0	3.7	0.95	密	7.5YR7/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
517	7	I D20l	包含層2	－	－	土師	0.9	3.55	0.9	やや密	2.5YR6/3にぶい橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
518	7	－	造機撹乱	－	－	土師	1.05	(3.6)	1.0	密，細かい雲母・黒色粒少量含む	10YR6/6赤橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
519	7	－	造機撹乱	－	－	土師	0.9	(3.8)	0.9	密，黒色粒少量含む	2.5YR7/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
520	7	－	造機撹乱	－	－	土師	0.95	(4.15)	0.95	密，細かい長石・雲母・黒色粒少量含む	10YR7/3にぶい黄橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
521	7	I D20l	包含層	－	－	土師	1.0	(3.75)	1.0	角閃石含む	5YR7/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
522	7	I D20l	包含層	－	－	土師	0.95	3.45	0.9	密	5YR7/6橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好
523	7	I D18l	包含層2	－	－	土師	0.9	3.55	0.8	やや密	5YR6/3にぶい橙色	－	指圧痕，指ナデ	－	焼成良好

東畑遺跡遺物観察表（H-H12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径(幅)	器高(長さ)	底径(厚さ)				外面	内面	
524	7	－	重機断削	－	－	上師	1.0	(3.4)	0.9	密,黒色粒少量含む	10YR7/6明黄褐色	－	指ナデ	－	焼成良好
525	7	－	重機断削	－	－	上師	0.85	(3.6)	0.9	密	2.5YR6/4にぶい橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
526	7	－	重機断削	－	－	上師	0.9	(3.2)	0.85	密,細かい長石・黒色粒含む	2.5YR7/4浅赤橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
527	7	－	重機断削	－	－	上師	0.7	(3.2)	0.6	やや粗い,細かい長石多量含む・雲母含む	10YR6/4にぶい黄橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
528	7	Ⅰ D20k	包含層	－	－	上師	0.85	(4.25)	0.8	密	2.5YR6/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
529	7	Ⅰ D19k	包含層	－	－	上師	0.65	(2.4)	0.7	～1mm長石含む	2.5YR7/8橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
530	7	Ⅲ D1j	上層	SD7134	－	上師	0.6	3.3	0.55	密	7.5YR6/4にぶい橙色	－	指圧痕,指ナデ	－	焼成良好
531	7	－	重機断削	－	－	上師	0.55	(3.4)	0.5	密,細かい長石・雲母・黒色粒含む	10YR7/2にぶい黄橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
532	7	Ⅰ D20l	包含層	－	－	上師	0.75	(2.65)	0.75	密	5YR7/6橙色	－	指圧痕,指ナデ	－	焼成良好
533	7	－	重機断削	－	－	上師	0.7	(3.3)	0.6	密,細かい長石・黒色粒・雲母含む	2.5YR7/6橙色	－	指圧痕,指ナデ	－	焼成良好
534	7	Ⅰ D20k	包含層3	－	－	上師	0.8	3.8	0.75	密	2.5YR6/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
535	7	Ⅰ D18l	包含層	－	－	上師	0.7	3.75	0.75	やや密	10YR8/4浅黄橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
536	7	Ⅰ D20k	包含層3	－	－	上師	0.75	3.45	0.8	細かい長石含む	7.5YR8/8黄橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
537	7	Ⅰ D18k	包含層	－	－	上師	0.75	3.5	0.75	細かい石英含む	2.5YR6/8橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
538	7	Ⅲ D3k	－	撹乱6	－	上師	0.65	3.8	0.7	細かい長石含む	5YR4/2灰褐色	－	指ナデ	－	焼成良好
539	7	－	重機断削	－	－	上師	0.8	(3.6)	0.7	密	7.5YR8/4浅黄橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
540	7	－	重機断削	－	－	上師	0.65	(3.4)	0.5	密	2.5Y5/1黄灰色	－	指ナデ	－	焼成良好
541	7	－	重機断削	－	－	上師	0.7	(3.3)	0.7	密,細かい長石・黒色粒含む・雲母少量含む	5YR6/4にぶい橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
542	7	－	重機断削	－	－	上師	0.7	(2.9)	0.6	密,細かい長石含む	2.5YR6/4にぶい橙色	－	指圧痕,指ナデ	－	焼成良好
543	7	－	重機断削	－	－	上師	0.65	(3.1)	0.6	密	10R4/1暗赤灰色	－	指圧痕,指ナデ	－	焼成良好

東畑遺跡遺物観察表（HH12-7）

挿図番号	地点	グリッド	出土地点		種別	器種	法量(cm)			胎土	色調	釉薬	調整・技法等		備考
			層位	遺構			口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚さ）				外面	内面	
544	7	Ⅱ D2j	包含層	－	－	土師	0.75	(3.0)	0.75	金雲母少量含む	2.5YR6/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
545	7	Ⅱ D2j	包含層	－	－	土師	0.85	4.6	0.9	細かい長石含む	5YR6/4にぶい橙色	－	指圧痕, 指ナデ	－	焼成良好
546	7	Ⅰ D19l	包含層	－	－	土師	0.75	3.8	0.7	石英少量含む	7.5YR5/2灰褐色	－	指ナデ	－	焼成良好
547	7	Ⅰ D20k	包含層3	－	－	土師	0.75	3.05	0.7	金雲母極少量含む	2.5YR5/4にぶい赤褐色	－	指ナデ	－	焼成良好
548	7	Ⅱ D1k	包含層	－	－	土師	0.8	3.55	0.8	石英極少量含む	10YR4/1褐灰色	－	指圧痕, 指ナデ	－	焼成良好
549	7	Ⅱ D1k	包含層	－	－	土師	0.65	2.95	0.6	密	10YR4/1褐灰色	－	指圧痕, 指ナデ	－	焼成良好
550	7	Ⅰ D19k	包含層	－	－	土師	0.65	3.0	0.7	細かい石英含む	2.5YR6/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
551	7	Ⅱ D2j	包含層	－	－	土師	0.75	3.1	0.75	密	5YR7/6橙色	－	指ナデ	－	焼成良好
552	7	Ⅱ D2j	包含層	－	－	土師	0.8	3.8	0.75	密	5YR7/6橙色	－	指圧痕, 指ナデ	－	焼成良好
553	7	Ⅱ D2j	包含層	－	－	土師	0.8	3.0	0.8	密	2.5YR5/6明赤褐色	－	指圧痕, 指ナデ	－	焼成良好
554	7	Ⅰ D18k	－	SK7021	青磁	加工円板		(1.85)	(5.5)	精良	2.5Y7/2灰黄色	灰黄色	回転ナデ, 削り出し高台	施釉	焼成良好, 底部内面に唐草文青磁碗底部を転用
555	7	Ⅰ D19k	－	SK7029	瀬戸美濃	加工円板		(1.4)	5.2	やや良	外面 10YR2/3黒褐色 内面 5GY8/1灰白色	黒褐色 灰白色	施釉	施釉	焼成良好, 天目茶碗底部を転用
556	7	Ⅱ D3i	－	SD7143	土製品	鈴錘車	(2.05)	2.2	0.8	～1mm長石・石英含む	10YR8/4浅黄橙色	－	指圧痕	指圧痕	焼成良好, 中央部に約4mm穿孔あり
557	7	－	拡張区表土	－	土製品	不明	4.3	(4.7)	4.0	やや粗い, 長石含む	10YR8/1灰白色	自然釉	ナデ, 縦方向8条の沈線	－	焼成良好, 外面に縦位沈線8条を当分配置。
558	7	－	重機撹乱	－	石製品	剥片	2.0	4.55	0.85	－	5Y5/1灰色	－	－	－	石材：下呂石　石鏃または石刀の未製品か
559	7	－	重機撹乱	－	石製品	石鏃	2.1	2.6	0.4	－	5Y5/1灰色	－	－	－	石材：下呂石　有茎石鏃未製品

付論1
―東海市、東畑遺跡周辺の表層地形解析―

鬼頭　剛

はじめに

東畑遺跡の調査地点がどのような地形環境に立地するのか。1/2500の等高線図の作成と地形解析を行ない、調査地点の立地環境について検討した。

分析方法

調査地点を含めた広域的な周辺地形を解析するため、1/2500スケールで等高線図を作成した。等高線図の作成にあたり愛知県東海市役所発行の「都市計画図（1/2500）」にプロットされた標高値を基にした。なお、都市計画図は現況版に比べて人工的な土地の改変面積の少ない1969年（昭和44年）版を用いた。現況版との違いは、国道247号西知多産業道路にある横須賀ICが工事途中であることや、現在の加家ICから荒尾町を通り大池の北側を通る道路ができていないこと、横須賀町から中央町を経て諏訪神社の北を通る国道155号線がないことが挙げられる。また、東海市役所がなく（なお、目印となるので現在の位置を解析図には入れてある）、市役所の西を南北に通る道路もない。ちなみに現在の東海市役所庁舎は1979年（昭和54年）に中央町に開庁している。なお解析にあたって、河川堤防や高速道路、工場や学校、あるいは東海市の伊勢湾側にひろがる海岸の埋め立て地のような、人工的に建設・造成されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。

分析結果

遺跡周辺の等高線図

東西約1.6km、南北約1.7kmの範囲全体では標高0mから標高40mまでの等高線が描かれ、解析範囲全体では北および南で相対的に高く、西に向かい低くなる傾向がある（図1）。解析範囲の現在の状況は、西には南北方向に名古屋鉄道常滑・河和線が通り、太田川駅より南において常滑線と河和線とに分かれる。図の北には南東から北西方向に大田川が流れている。大田川は曽根付近で東から流下してくる渡内川と合流し、大田川となって西で伊勢湾に注ぐ。解析範囲の南では高横須賀町の用水が東から西へ流れ、南から北へ向かって流れてくる公家川と合流し、横須賀町の横須賀入江から伊勢湾に注いでいる。

解析図全体について、図の北東、東海市役所のある中央町や富貴ノ台付近で標高10～30m、図の南ないし南東の坂下や大田町でも標高10～40mと相対的に標高が高い。いっぽう、相対的に低いところとしては図の西において、北から順に後浜新田、川南新田、汐田、川田、鳥帽子にかけて標高0mの等高線が認められる。また、等高線としては描いていないものの後浜新田、川南新田周辺には標高−0.2mや−0.3mなどの標高０mよりも明らかに低い標高値がみられることをつけ加えておく。以上のように、図の北東や南東には標高10～40mの相対的に高い丘陵地があり、それらの丘陵地に囲まれて標高10mよりも低い場所がみられ、一部の地域ではさらに標高5mよりも低い場所もみられる。標高5mよりも低い地域は等高線間隔を1m（一部ではさらに0.2m）ごとに等高線を描いた。本論では主に標高5m以下に認められる地1～7地点は調査地点を示す形の起伏についての特徴を、周りよりも相対的に標高の高い尾根地形と

図1　東畑遺跡周辺の表層地形と等高線図　　1～7地点は調査地点を示す

低い谷地形とに分けて述べる。

尾根地形を北から南へ順に、さらに詳しい地形要素を列記する。

1．図の北、弥勒寺のある標高10～20mで東西約210m、南北約290mの小丘状の地形が東海市役所の西に隣接してみられるが、そこから南方向には標高3.0～5.0mで、東西の最大距離約670m、南北の最大距離約890mの南に凸の舌状地形がみられる。これは解析範囲内においてもっとも大きな尾根地形である。この地形は北の畑間から南の東畑にかけてが標高5mよりも高い地形の尾根線となっており、それを境にして西ないし東へ次第に標高を減じる。

2．1の舌状地形と平行してその西には、大宮神社から南西方向の名鉄太田川駅にかけて標高1.0～2.0m

で南北約790m、東西約75mの、名鉄太田川駅付近を南端とする南に凸の舌状地形がある。

3．2の舌状地形のさらに西側に平行して平行に北の下浜田から南の大田町にかけて標高1.0～2.0mで南北約780m、東西約135mの、大田町付近を南端とし南に凸の舌状地形がある。

4．図の南西、烏帽子には標高0～3.0mで、確認されるだけで東西約230m以上、南北約195m以上の北に凸の尾根地形がある。

5．図の南西、北屋敷には標高2.0mよりも高く、確認できる範囲で東西約270m以上、南北約330m以上の北に凸の尾根地形がある。以上のように、解析範囲の標高5m以下には5つの相対的に標高の高い場所が認められた。

つぎに、等高線から読み取れる谷地形について北から南へ順に述べる。

1．図の北東、東海市役所のある中央町や富貴ノ台付近を境にして北方向へ、南東から北西に傾斜する標高2.0～10mで東西約90m、南北約360mの谷地形がある。

2．1と同様に東海市役所のある中央町や富貴ノ台付近を境にするが、今度は北から南東方向に傾斜し、富貴ノ台から中央町、曽根に至る標高2.2～5.0mで東西約580m、南北約950mの、南に開いた谷地形がみられる。

3．図の北西、下浜田から大田町にかけて認められる舌状地形の東にみられる標高0～2.0mで東西約100m、南北約660mの緩傾斜の凹地がある。

4．図の北西に3と同じように、大宮神社から名鉄太田川駅にかけてみられた尾根地形の東で、後田から蟹田にかけてみられる標高0～2.0mで東西約75m、南北約720mの緩傾斜の凹地がみられる。

5．図の中央、弥勒寺から南にひろがった標高3.0～5.0mの尾根地形の南西にみられる、常蓮寺から西へ、前田を通り蟹田、汐田に至る標高0～5.0mで東西約530m、南北約250mの南西方向に開いた谷地形がある。

6．図の中央、大田町から高横須賀町に至る標高2.0～2.6mで東西約630m、南北約260mの西に開いた谷地形が認められる。

7．図の南西端で、公家川が北へ流下する方向に沿う標高0～2.0mで東西360m以上、南北660m以上の北に開いた谷地形がある。

以上の7つの谷地形が認められた。まとめると、解析範囲の標高5m以下には周りよりも標高の高い5つの尾根地形と、標高の低い7つの谷地形が認められることになる。

現在の大田川の流路について

表層地形解析によって北東や南東にみられた標高10～40mの相対的に標高の高いところは、地質学的には新第三系、中新統～鮮新統の常滑層群布土累層からなる丘陵地となっている（牧野内,1988）。いっぽう、標高10mよりも低いところには完新統堆積物が分布する。特に標高5m以下には5つの尾根地形と7つの谷地形がみられ、完新統の分布域にも軽微な起伏があることがわかった。解析図を概観しまず目につくのが大田川の現在の流路と等高線との関係である。大田川は解析範囲内を、東の曽根付近から北西方向へ畑間、後田、下浜田を通り、途中で屈曲することなくまっすぐに流下している（図1）。流路は各等高線に対して直交していることがわかる。ふつう、河川流路のある場所は谷地形の中となり、等高線を描

いた場合、等高線のひとつひとつは相対的に標高の高い方へ凸の形をした曲線となる。また、流路を挟んだ両側あるいは、その片側には等高線が流路に対して平行に並んだり、流路方向に平行な長軸をもつ閉曲線からなる等高線が描かれ、いわゆる堤防状に描画されるときもある。ところが、現在の大田川にはどちらの特徴もみられず、等高線とはまったく整合性をもたずに流下していることがわかる。このように、等高線とまったく調和しない河川流路が認められる原因のひとつとして、「瀬替え」といった人工的な流路の改変が推定される。この大田川の流路の改変について、歴史的には尾張藩2代藩主徳川光友が1666年（寛文6年）に現在の高横須賀町に「横須賀御殿」を造営した際に合わせて、人工的に現在の流路の位置に改修されたものと伝えられる（石川，1977：立松編，1997：有馬，2012：筧，2012：坂野，2013など）。また改修の事実を示す史料もあり、筧（2012）が紹介をしているのだが、18世紀以降に描かれたとされる「知多郡大里村絵図」という旧大里村の古絵図には、弥勒寺の南を北西方向にまっすぐに流下する大田川が描かれている（図2）。自分の勉強不足を露呈させ恥ずかしい限りだが、筆者は大田川の改修の歴史を知らなかった。ところが、期せずして改修後の大田川の流路と流路周辺の等高線との対応関係が捉えられることとなり、周りの地形に対して現在の大田川の流路がどのように開削しているのか具体的に指摘することができた。

かつての大田川の流路はどこか

現在の大田川の流路と地形との対応を捉えることができ、人工的に改修されたとされる大田川流路の様子がわかった。では、改修される前の大田川はどこにあったのだろうか。ここでは表層地形解析から推定されるかつての大田川の流路について考察する。

解析範囲の標高5m以下には尾根地形と谷地形が認められた。特に図の中央、弥勒寺から南方向には標高3.0〜5.0mで、東西の最大距離約670m、南北約890mの南に凸の舌状地形がみられた。注目するのはこの舌状地形の南端である。この地形の南には、大田町から高横須賀町に至る標高2.0〜2.6mで東西約630m、南北約260mの西に開いた谷地形が認められた。この谷の北東には標高値2.6mの等高線が北東-南西方向に平行し、この谷地形の北東への延長は細長い溝のようになっていることがわかる。それよりもさらに北東側では、東海市役所のある中央町から南東方向に傾斜し、曽根に至る南に開いた谷地形と合流する。現在の大田川は、伊勢湾に注ぐ河口から南東へ約6.5km（東畑遺跡の調査地点からは南東方向へ約4.8km）隔たった東海市加木屋町の加木屋大池を源流とし北流する。その後流路はちょうど調査地点の南東約1.1kmの富貴ノ台において西方向へ蛇行し渡内川と合流する。その合流地点にあたっているのが曽根付近である。曽根に認められる等高線の標高値は2.2〜2.6mで、河川流路により運ばれてくる水はこの標高値よりも低い数値の場所へしか流れることはできず、曽根より北では標高値が次第に大きくなるために流路は北方向へ流れることはできない。いっぽう、標高値2.2〜2.6mと同じ値の等高線は大田町から高横須賀町にみられた谷地形に認められ、曽根にある流路は大田町から高横須賀町にみられた谷地形へと流れ下るしかない。高横須賀町からさらに西への流路について、高横須賀町の北にある的場付近は標高3.0〜4.0mの舌状地形の先端部であり、高横須賀町の南西の北屋敷も標高2mの閉曲線で囲まれた尾根地形をなしており、高横須賀町から西へ流れ下るためにはこれらの相対的に高い場所の間にみられる凹地を通るしかない。それは、現在も高横須賀町から西へ流れている用水の方向と同じであ

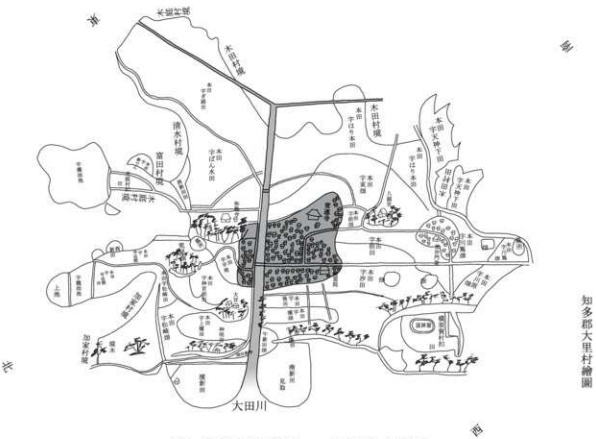


図2　知多群大里村絵図　　覧（2012）より引用

る。それよりもさらに西には標高０mの等高線が北西方向に開いた谷地形となっているので、現在の川田方向へ流下していたものと思われる。まとめれば、かつての大田川の流路は曽根から別所を通り、大田町、高横須賀町から川田方向へ流れ伊勢湾に注いでいたものと推定できる。大田川のかつての流路に関して坂野（2013）は、本論と同じように曽根付近を通り東から西へ流下し、東畑や的場のある尾根地形の南端を大きく迂回し、横須賀の集落の北端を河口として伊勢湾に注いでいたと述べた。なお、それが史実に基づくものなのか、それとも坂野による推定から導かれたものなのかが文章から読み取れず正否を判断することができない。いずれにせよ、現在の大田川の流路が地表に認められる地形の起伏とは何ら関係のないところを流れていることを指摘でき、周囲の尾根地形や谷地形といった地形の起伏状況から判断して、かつての大田川は曽根から西方向へ大田町、高横須賀町から川田方向へ流れ、伊勢湾に注いでいたものと考えられる。

東畑遺跡の立地環境

知多半島西岸の海岸沿いには地質学的には新第三系中新統～鮮新統あるいは第四系更新統の堆積物からなる丘陵地を浸食・開析し、開析された谷を埋めた完新統が分布する。それらのうち知多半島の西岸や南西岸にみられるものは、半島の南端より北へ向かって順に1．南知多町の豊浜、2．南知多町の山海、3．南知多町内海、4．美浜町上野間から野間にかけて、5．知多市の新舞子から常滑市の榎戸、古場にかけて、6．名古屋市緑区大高から東海市名和町、同町大田町、同町横須賀町、知多市新舞子にかけての6つの地域がある。これらの完新統の分布域のうち東畑遺跡は、6番目の名古屋市緑区大高から東海市大田

町・横須賀町、知多市新舞子までにみられるもっとも完新統の分布面積が広い場所にあたる。東海市名和周辺は砂堆や砂州がみられる場所としても知られ、海岸線に並行する複数の砂堆列の存在が指摘されている。東海市大田町、横須賀町にみられる砂堆地形について横須賀町史編集委員会編（1969）や石川（1971）は3つの砂堆列に区分し、干拓地を別にした現在の海岸線にあるものを第三砂堆、大字大田や高横須賀にあるものを第二砂堆、第一砂堆はもっとも陸側にあり海蝕崖に近いものを指した。いっぽう、宮澤（2012）や有馬（2012）、坂野（2013）は一番陸寄りでもっとも砂堆面積の大きいものを第1砂堆、大宮神社から太田川駅にかけて細長くのびるものを第2砂堆、現在の海岸線にあり、その北端が丘陸に接するものを第3砂堆と呼んだ。これらの区分のうち、現在の海岸線にある第3砂堆は横須賀町史編集委員会編（1969）などと宮澤（2012）などによる区分とは一致する。ところが、第1砂堆と第2砂堆には相違がみられ、横須賀町史編集委員会編（1969）などが第2砂堆としたものは宮澤（2012）などの第1砂堆にあたる。また、横須賀町史編集委員会編（1969）などによれば第一砂堆はすべて畑地となり、最も小さいものと記述されており、柳が坪、野崎付近の砂堆地形のことを指すようにも考えられるが、提示された地形区分図には凡例が示されていないため詳細がわからない。加えて、横須賀町史編集委員会編（1969）などが行なった地形区分が何を基に判断したのか、その方法についての記載がないため検証することができない。

本論では混乱を避けるために宮澤（2012）、有馬（2012）、坂野（2013）の砂堆区分の名称を踏襲することとする。さて、宮澤（2012）などの区分と筆者の表層地形解析から読み取れる地形との対応関係をみれば、弥勒寺のある閉曲線からなる小丘状の地形を北端として、その南方向に標高3.0～5.0mで東西の最大距離約670m、南北約890mの南に凸の舌状地形がみられた。これは宮澤（2012）などの述べた第1砂堆にあたる。その舌状地形に平行して西には、大宮神社から南西方向に向けて標高1.0～2.0mで南北約790m、東西約75mの、名鉄太田川駅付近を南端とする舌状地形があった。これはちょうど第2砂堆に対応する。また、そこからさらに西側にも、舌状地形に平行に北の下浜田から南の大田町にかけて標高1.0～2.0mで南北約780m、東西約135mの、大田町付近を南端とし南に凸の舌状地形があり、それは宮澤（2012）などの述べた第3砂堆に対応する。このように、本論の表層地形解析から得られる尾根地形と谷地形との地形配列は、宮澤（2012）などが述べた第1から第3までの砂堆地形と非常によい対応関係があり、宮澤（2012）などの地形区分を追認する形となった。これらの尾根地形のうち、東畑遺跡は図1をみても明らかなように第1砂堆の上に立地している。

東畑遺跡の調査は7地点で実施されている。次に各地点がどのような場所に立地しているのか検討を加えたい。東畑遺跡は第1砂堆の上にあり、表層地形解析から砂堆は弥勒寺より南の標高3.0～5.0mで東西の最大距離約670m、南北約890mの南に凸の舌状地形を形成した。この舌状地形をさらに詳細にみると、舌状地形の中央付近、常蓮寺から西へ、前田を通り蟹田、汐田に至る標高0～5.0mで東西約530m、南北約250mの南西方向に開いた谷地形が認められた。東畑遺跡の調査地点1地点と2地点は、この谷の中にあたる。3地点は谷地形の北側縁辺に、4地点は南側縁辺にあたっている。地点5～7地点は標高3.0～5.0mの舌状地形の南端にあり、中でも6地点がもっとも標高が高く、次いで5地点が、7地点はかつての大田川の流路が推定された谷地形との境界付近にあることがわかる。この標高0～5.0mで南西方向に開いた谷地形について、同様の地形的な特徴を坂野（2013）も指摘しており、第1砂堆の中央の一部が斜めに狭小になっていることから、第1砂堆全体の形状を「佐渡島のようである」と表現した。また、狭小に

なった成因を、第1砂堆が形成される過程において旧河道が一時的に流路を変え、狭小部分を貫通した痕跡であると捉えた（坂野，2013）。この推定について、筆者が行なった表層地形解析の結果でも、常蓮寺のある地点付近が谷地形の谷頭にあたっており、尾根線となる標高5m等高線の東西幅がこの付近でもっとも狭小になっている。さらに標高5mの等高線よりも東をみると、標高2.8～5mまでには東へ開いた軽微な谷地形と判読できる等高線もみられる。表層地形解析の結果を基にすれば、推定されるかつての大田川の水位が約2～3m上昇すれば標高3.0～5.0mの舌状地形の上を水が流れることとなる。また、曽根において渡内川が東から合流したり、東海市役所のある中央町から南東方向に傾斜し曽根に至る標高2.2～5.0mの南に開いた谷地形を流れる水流があった場合にも、増水時には曽根から西ないし南西方向に流れたことと思われ、筆者は坂野（2013）の推定に同意する。このことについて、実際に平成20年度の畑間遺跡の発掘調査では標高3m以下の地山直上を東から西へ向かって流れた自然流路の存在が認められたようで（坂野，2013）、第1砂堆の上にはそれまで指摘されなかった軽微な浸食地形が認められることが明らかになった。また、この浸食地形の中に今回の調査地点である1・2地点があり、この浸食地形を挟んで北側に3地点、南側に4地点があった。対して、5～7地点は弥勒寺から南に広がった標高3.0～5.0mの舌状地形の、標高の相対的に高い尾根線の上にあることがわかる。標高が高いために離水して乾燥していたかと言えばそのようでもなく、7地点では遺跡の基盤層である砂層や考古遺構を埋める砂層に、地震などのくり返した応力を受けた際に堆積物につくられる特徴的な縞模様である皿状構造が認められた（図3）。皿状構造が形成されるためには砂層中の砂粒子間のすき間（地質学や土木工学的には

図3　東畑遺跡の砂層にみられる地震による皿状構造

間隙という）が水で満たされて飽和状態になければならない。したがって、7地点周辺はかつて地下水位の高い場所であったことがわかり、調査でも井戸遺構が検出されていることや、表層地形解析においてかつての大田川の流路が7地点の南側に推定されることとも調和的である。

謝辞

本論を作成するにあたり、東海市教育委員会社会教育課の永井伸明氏と宮澤浩司氏、株式会社島田組の筧　和也氏にお世話になった。平洲記念館・郷土資料館の立松　彰館長には考古遺跡に関する文献資料を紹介・借用させていただくとともに，東海市の考古遺跡についてご教示いただいた．愛知県埋蔵文化財センターの永井宏幸氏には東海市の最近の考古遺跡に関わる文献を紹介いただいた。図面の作成では前田弘子氏、鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

有馬啓介，2012，遺跡の位置と環境，有馬啓介編　畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告，愛知県東海市教育委員会，12-17.

坂野俊哉，2013，まとめ　-大田地区における遺跡の消長について-，坂野俊哉・宮澤浩司編　畑間・東畑・龍雲院遺跡遺跡発掘調査報告，愛知県東海市教育委員会，117-125.

石川玉紀，1971，柳が坪遺跡の位置と付近の地形・地質，愛知県東海市柳が坪遺跡，東海市教育委員会，1-3.

石川玉紀，1977，位置と地形・地質，杉崎　章編　愛知県東海市　松崎貝塚発掘調査報告，愛知県東海市教育委員会，1-3.

筧　和也，2012，まとめ，筧　和也編　平成22年度　畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告，愛知県東海市教育委員会，82-89.

牧野内　猛，1988，常滑層群，日本の地質5　中部地方II，共立出版，134-136.

宮澤浩司，2012，遺跡の位置と環境，筧　和也編　平成22年度　畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告，愛知県東海市教育委員会，2-4.

立松　彰編，1997，愛知県東海市　東畑遺跡等試掘調査報告，愛知県東海市教育委員会，36p.

横須賀町史編集委員会編，1969，横須賀町史，横須賀町役場，1001P.

付論2
-畑間・東畑遺跡出土軒平瓦の意義-

筧　和也

はじめに

今回の調査では、1・2地点から少量ながら瓦が出土している。その中で巴文軒丸瓦と杏葉唐草文軒平瓦の組み合わせに注目してみた。これらは製作技法から11世紀後半～12世紀に製作された蓋然性が高いものである。この瓦を製作した瓦窯は発掘調査や踏査などによる採集品により、軒丸瓦は愛知県大府市所在の吉田古窯、東海市所在の社山古窯、軒平瓦は社山古窯と、東海市所在の論田古窯の2つの窯で焼かれていたことが判明している。

社山古窯と論田古窯は、現在の東海市加木屋町周辺に所在する。また、少し広範囲に目を向けると加木屋地区から直線距離にして2.5kmの範囲に3つの瓦窯が所在する。東海市所在の権現山古窯と寺ノ前古窯および、愛知県大府市所在の吉田1・2号窯である。このように、加木屋地区周辺には瓦を製作した窯跡群が5ヶ所も存在している。本稿ではこの古窯跡群を「加木屋周辺古窯」と仮称する。

これらの窯は論田古窯を除くと発掘調査がおこなわれており、いずれも瓦のみではなく山茶碗も製作した瓦陶兼業窯であることが知られる。また、周知されている内容であるが、これらの窯場から出土する瓦と同范のものが鳥羽離宮で出土しており（吉田古窯・社山古窯）、鳥羽離宮造営時に瓦の供給元となった窯跡であることが知られる（柴垣1982）。畑間・東畑遺跡から出土する軒瓦に関しては、巴文軒丸瓦は鳥羽離宮でも同范品が出土するが、杏葉唐草文軒平瓦については鳥羽離宮からの出土例がない。したがって、現状で発掘調査により供給先と考えられる遺跡は畑間・東畑遺跡のみである。

第1章　各古窯の出土瓦

第1節　瓦窯の概要

本章では、各古窯の概略を記述するとともに、出土瓦についてまとめておく。

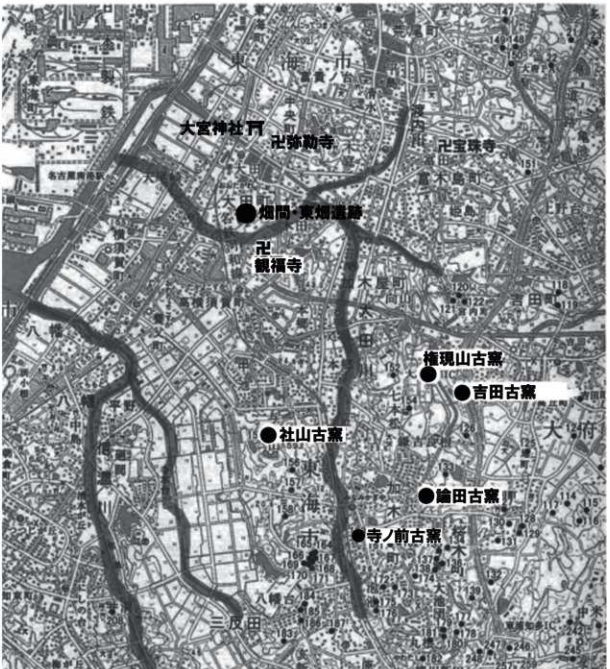
Ⅰ．社山古窯

東海市加木屋町社山所在の瓦陶兼業窯である。1954～1955年に横須賀町史編纂委員会により発掘されている。窯そのものは発見されていないものの、灰原や前庭部が検出されており、3基の窯跡の存在が推定されている。

出土した遺物は、山茶碗および瓦である。軒瓦は、右巻三巴文軒丸瓦1種、左巻三巴文軒丸瓦1種、複弁八弁蓮華文軒丸瓦2種の計4種が出土している。軒平瓦は、均整唐草文軒平瓦2種、均整宝相華唐草文軒平瓦3種、杏葉唐草文軒平瓦1種の計6種が出土している。

Ⅱ．論田古窯

東海市加木屋町論田に所在したと推定される窯跡である。現在は宅地となっており、窯跡が存在した様子を伺うことはできない。また、発掘調査がおこなわれていないため窯の詳細は不明である。遺物は採集品によるが、社山古窯と同范の均整唐草文軒平瓦と杏葉唐草文軒平瓦の2種が確認されている。



※『畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』付載２に加筆

図1　畑間・東畑遺跡および加木屋周辺古窯位置図（1：35,000）

Ⅲ．権現山古窯

東海市加木屋町東峰松に所在する瓦陶兼業窯である。1963年に白菊古文化研究所により発掘調査がおこなわれており、詳細は報告書でまとめられている。窯体は焚口から煙道まで残存しており、全長10.2m、最大幅2.9mを測る。出土遺物は、山茶碗と瓦類である。

Ⅳ．吉田1・2号窯

大府市吉田町所在の瓦陶兼業窯である。窯体が露出していたこともあり、古くからその存在は知られていたが、付近に知多半島道路の建設が予定され、消滅の危険があり、1968年に楠崎彰一を指導者として教育委員会が調査を実施、1号窯が調査され、翌1969年に2号窯の調査が行われた。

※拓本は『愛知県史』別編窯業2・『知多の古瓦より抜粋）　※10は伝観福寺出土瓦

図2　社山古窯出土軒瓦

出土遺物は山茶碗と瓦である。軒瓦は右巻三巴文軒丸瓦1種、左巻三巴文軒丸瓦1種、均整唐草文軒平瓦2種が出土している。

V．寺ノ前古窯

東海市加木屋町寺ノ前に所在した瓦陶兼業窯である。瓦について、軒瓦は確認されていないが玉縁丸瓦と平瓦が出土している。平瓦については特徴的で端部幅が同じで、広・狭端の区別がつかない平面長方形の一枚作り平瓦である。これは吉田古窯や社山古窯出土の平瓦と類似する。ほかに、山茶碗も出土している。

第2節　加木屋周辺古窯の変遷

次に同笵瓦が出土する古窯の前後関係についてふれておく。まず、基本的情報としておさえておきたい事実として軒瓦が出土している4つの窯のうち、社山古窯にのみ他の3つの窯跡で出土するすべての軒瓦の同笵が確認できる。このことから、以下の内容が想定できる。

① 社山古窯から各窯場に笵が移動した。

② 各窯場から社山古窯に笵が移動した。なお、この場合新たに窯場として笵が集められた結果、社山古窯が成立するか、すでに操業していた社山古窯で後に一括して生産を行った。

そこで、社山古窯と他の3古窯の軒瓦の笵傷確認をおこなった。その結果、吉田古窯、権現山古窯のものに比べ、笵傷が進行している、または笵が傷んで顕著となる木目が目立つのは、社山古窯のものであった。吉田古窯と社山古窯のものを比較すると巴文軒丸瓦については吉田古窯のものにはみられない笵傷が社山古窯のものでは確認できることや、吉田古窯出土のものにみられる笵傷が社山古窯のものはさらに肥大しているなど、社山古窯のものが後出することは間違いないことがわかった。また、権現山古窯の蓮華文軒丸瓦と社山古窯のものを比較しても同様のことがいえる。吉田古窯出土の均整唐草文軒平瓦2種については、社山古窯の同笵品と比較すると顕著な笵傷こそないものの、2種ともに笵の劣化による木目が、社山古窯のものに顕著になっており、社山古窯の製品が後出すると考えられる。

論田古窯と社山古窯の比較は論田古窯で採集されている杏葉唐草文軒平瓦と均整唐草文軒平瓦が対象となるが、杏葉唐草文軒平瓦の場合、社山古窯の製品にみられる瓦当中央下部の外縁と内区の境に笵傷がみられるが、論田古窯のものは小片であり、この部位が残存していないため比較できなかった。均整唐草文軒平瓦の場合は吉田古窯同様の理由から社山古窯の製品が後出する要素が多いが、吉田古窯と比較した場合はほとんど差異がなかった。また、比較資料が極端に少ないため、論田古窯については不明な点が多い。

以上の検証から、論田古窯については判断材料が乏しいが、他については社山古窯が後出しており、最終的に社山古窯に瓦笵が集められて生産された可能性が極めて高いことがいえる。ところで、吉田古窯・権現山古窯についてはそれぞれ特定の瓦を生産しており、のちに社山古窯に生産の場が移ることが判明したが、移動先の社山古窯は吉田古窯や権現山古窯と並行して操業していたのか否か。そこで図1を参照して、これらの軒瓦から吉田・権現山・論田古窯に同笵例がある1～6および10の軒瓦を除くと7～9が残る。これらはいずれも均整宝相華唐草文軒平瓦であり、周辺の古窯跡群では同笵例はみられない。よって、これら3種の軒平瓦を吉田古窯などの他の瓦窯と並行して生産していた可能性がある。

第3節　加木屋周辺古窯の供給先

1．鳥羽離宮

鳥羽離宮は、平安京の南約3kmに位置する。11世紀、藤原季綱が鳥羽の別邸を白河上皇に献上し、大規模な拡張工事を行ったことに始まる。また、邸内に自らの墓所として三重の塔を中心とした安楽寿院を造営した。12世紀の鳥羽上皇の代には泉殿をはじめとして増設が繰り返され、安楽寿院に本御塔と新御塔の2つの塔を造営し、本御塔を自らの墓所と定め、新御塔は美福門院の墓所を予定していたが、近衛天皇が葬られた。このように、鳥羽離宮は、白河上皇に始まり、鳥羽上皇、後白河上皇まで続く院政の中枢を担った場所である。

先述したように、加木屋周辺古窯は古くから鳥羽離宮への瓦の供給元であることは知られている。具体的な同笵例は吉田古窯の巴文軒丸瓦2種と均整唐草文軒平瓦1種。また、論田古窯や社山古窯の吉田古窯と同笵品がそれに該当する。また、尾張地域では名古屋市に所在する東山61号窯や八事裏山古窯から

も瓦が供給されている。

鳥羽離宮から出土する瓦は、山城・播磨・讃岐・尾張・大和などで生産されたものがある。詳細については鳥羽土塁が造営した金剛心院跡周辺の出土例が報告されている（鈴柄2007）。これによると、軒丸瓦が1425点、軒平瓦977　点である。生産地の比率は軒丸瓦が播磨58％・山城17％・讃岐5％・大和1％、軒平瓦が播磨73％・山城8％・讃岐5％。丸・平瓦については、播磨産と讃岐産に二分され山城や大和で生産されたものはみられない。したがって、丸・平瓦については古代から続く瓦生産地である播磨と讃岐が中心的な位置を占めており、尾張のものはほとんどない。

一方、金剛心院以外の地点、特に東殿周辺部では尾張産の瓦が目立つ。特に東殿域は安楽寿院のあった場所であり、これら尾張産の瓦はこの安楽寿院に使用された瓦である可能性が非常に高い。

Ⅱ．熱田神宮

熱田神宮は、名古屋市南部、熱田台地の南端に鎮座する。古くは伊勢湾に突出した岬上に位置していた。三種の神器の1つ草薙剣（天叢雲剣）を祀る神社で、景行天皇の時代、日本武尊が東国平定の帰路に尾張へ滞在した際に、尾張国造乎止与命の娘宮簀媛命と結婚し、草薙剣を妃の手許へ留め置いた。日本武尊が伊勢国能褒野で薨去すると、宮簀媛命は熱田に社地を定め、剣を奉斎鎮守したのが始まりと言われる。そのため、三種の神器のうち草薙剣は熱田に置かれ、伊勢神宮に次いで権威ある神社として栄えることとなった。

熱田神宮からは古瓦が採集されることが知られている。これらの古瓦は現在、熱田神宮宝物館や名古屋市博物館が収蔵しているが、これらの瓦はかつて熱田神宮内に所在していた熱田神宮寺所用の瓦であると考えられている。熱田神宮寺がいつ頃創建されたものかは不明だが、熱田神宮文書にみえる「太政官符尾張国司」に

「応置、神宮寺別当御船宿禰木津山を補任、経論一万五千九百巻の写経、仏菩薩四天王像1028体の造立、神体5軀造立及び神宮寺一区造建、如法院一処、塔3基、別院3処の造建を命ず。　承和14年」

とあり、ここに「神宮寺」の文言があることから、承和14年（847）には存在していた可能性が指摘できる。また、「延喜式」巻3に金剛般若経転読、「本朝文粋」寛弘元年（1004）には大般若経供養の記事があることから少なくとも鎌倉時代以前には熱田神宮寺が存在していたことが窺える。

熱田神宮から採集された古瓦の中で、注目できる瓦が2種存在する。1つは複弁蓮華文軒丸瓦である。これは、社山古窯や権現山古窯で生産された瓦と同笵である。他方は杏葉唐草文軒平瓦である。この軒平瓦に関しては同笵例を確認できなかったが、社山古窯や論田古窯で生産している軒平瓦の中に同笵ではないものの杏葉唐草文軒平瓦がみられる。また、寛政8年（1796）に著された『古瓦譜』には熱田神宮から採集したものとして社山古窯や論田古窯から出土する杏葉唐草文軒平瓦に酷似した拓本が掲載されている。この杏葉唐草文軒平瓦は生産地である社山・論田古窯と供給先と考えられる畑間・東畑遺跡を除くと熱田神宮以外では類例のない文様の軒平瓦であることに注目できる。

熱田神宮が現在所有する杏葉唐草文軒平瓦は直線顎に近い曲線顎の軒平瓦で、製作技法の観点では社山古窯や論田古窯の杏葉唐草文軒平瓦より古手のものである。したがって、杏葉唐草文軒平瓦の起源を考えた場合、熱田神宮から採取されたものが最も古手のものと考えられ、熱田神宮寺の造営の際に考案された文様である可能性があり興味深い。

Ⅲ．畑間・東畑遺跡

畑間・東畑遺跡は愛知県東海市大田町に所在する縄文時代晩期～近世にかけての複合遺跡である。この遺跡からは少量ながら瓦が出土している。瓦の出土範囲は遺跡の広範囲に広がっており、特定しにくいものの、遺跡の中心部にある常蓮寺の北東部から比較的多く出土する傾向にある。

遺跡内から出土する加木屋周辺古窯と同笵の軒瓦は吉田古窯や社山古窯と同笵の巴文軒丸瓦2種と、論田古窯や社山古窯と同笵の杏葉唐草文軒平瓦が出土している。これらは、出土量が多くないため、畑間・東畑遺跡内に寺院が存在したとはみなせないが、出土する軒瓦の種類が限定されており、小仏堂などの瓦葺建物が遺跡内に存在した可能性が指摘できる。なお、笵傷の検証から、軒丸瓦に関しては吉田古窯の製品が畑間・東畑遺跡に供給されているものと考えられ、社山古窯から出土する巴文軒丸瓦より笵傷が少ない。

Ⅳ．観福寺

愛知県東海市大田町に所在する天台宗の寺院である。大宝2年（702）に行基によって開山されたと伝えられるが、創建については定かではない。現存する本堂内宮殿は　宝治2年（1248年）造営の厨子で、少なくとも13世紀には寺院として存在したものと考えられる。その後衰退して宝徳2年（1450）慶山によって復興されたとされる。また、江戸時代には尾張徳川家の帰依を得て中興された。

加木屋周辺古窯との同笵瓦については、論田古窯や社山古窯と同笵の杏葉唐草文軒平瓦が採集されている。ただし、採集されているものの数量は少なく、直接この寺院に供給されたものかは情報量が少なく詳細は不明である。

以上が、加木屋周辺古窯からの瓦の供給先として考えられる寺院や遺跡である。観福寺については不確定要素が強いが、熱田神宮や畑間・東畑遺跡などの在地への供給と、鳥羽離宮などの遠隔地への供給をおこなった古窯跡群であることがわかる。

第2章　熱田神宮と加木屋周辺古窯の関係

本章では熱田神宮と加木屋周辺地域の関係性について記述する。それは、先にもふれたが、権現山古窯と熱田神宮に同笵例がみられることや、杏葉唐草文軒平瓦は熱田神宮と畑間・東畑遺跡、論田古窯、社山古窯でしかみられない文様のものである点で、両者には特に深い繋がりがあるものと考えられるからである。

第1節　知多郡の熱田神宮領

加木屋周辺地域は知多郡に属する。正平9年（1354）の『熱田社領注進目録』をみると、知多郡の熱田社領は、御幣田郷、乙河御薗、英比郷、生道郷、大郷郷、木田郷の6ヶ所に確認できる。このうち、乙河御薗の乙川は現在の愛知県半田市に残る地名である。英比郷は、「あぐい」と読み、現在の知多郡阿久比町に比定できる。生道郷については知多郡東浦町の「生路」に比定できる（竹内ほか1989）。御幣田郷については、比定できる地名が残っていないため、その詳細を把握することができない。

御幣田郷については、『吾妻鏡』の建久2年（1191）8月7日条に

「幕下の御外甥僧任憲、熱田社領内の御幣田を相伝するの処、勝實と号すの僧の為これを妨げらる。

勝實すでに奏聞を経るの間、任憲解状を整えまた奏達せんと欲す。仍って幕下の御挙状を望み申す。幕下頗る御猶予の気有り。故祐範（任憲父）の功に報ぜんが為、縦え他の計略を廻らす。この執奏に於いては難題と。而るにこれ先人亡骨の在所なり。相構えてこれを達せんと欲するに、他事曾て拠所無きの由重ねて言上するの間、今日慇懃の御書を彼の解状に相副え、高三位に付けらるる。僧任憲の解状（具事等を副ゆ）謹んでこれを進上す。此の如き事、執り申すべからざるの由存じ候て、大略慎みを成して申し上げず候。而るに少事には候へども、論人勝實掠め申し候の間、当時一方の申状に依って仰せ下され候か。勝實道理を帯し候わば、何ぞ上西門院の御時裁許を蒙り候わざるか。更にこの條子細を申し披き難きの由、任憲歎き申し候に依って、恐れながら言上し候所なり。この旨を以て洩れ御披露せしめ給うべく候。恐惶謹言。

八月七日　　頼朝

進上

私に申し候

件の祐範と申し候は、頼朝母堂の舎弟にて候き。而るに舎弟たりながら、取り別け糸惜しみ候し故、その恩を思い知り候て、頼朝母堂逝去の時は、七々の仏事、祐範沙汰し候て、澄憲法印導師として勤修して候き。また平治の乱の後、頼朝配流せられ候し時も、祐範人を付け候て配所の国まで送り付け候て、その後彼の恩問を忘れず候き。然れば頼朝母堂の為には菩提を訪い候き。頼朝の為には忠を施して入滅し候いをはんぬ。而るに今任憲この由を歎き申し候。いかにも憐愍候て、執奏すべからざるの由深く存じ候に、任憲自余の事をば思わず、この事を歎き思い候の由強いて申し候の間、且つは祐範の旧好に報ぜんが為、且つは任憲の愁歎を散ぜんが為、此の如くわりなく言上し候なり。然りと雖もその理無く候はんをば、枉げて仰せ下さるべきの儀、爭か存念候か。但し祐範年来知行の由、勝實前にも沙汰を致すと雖も、御裁許を蒙らざるの処、今更改め申す由申し候へば、言上し候なり。勝實誠にその理候はば、故女院の御時、何ぞ件の所を給いて知行せず候か。然れば祐範多年領掌の由緒に依って、任憲相伝すべきの由仰せ下され候わば、頼朝の身に取り候て然るべき事に候なむ。祐範の恩に報ぜんが為、此の如く申し上げ候の條、何事もわりなく言上すべからざるの由、執り思い候つる意趣すでに相違し候。この旨を以て申し入らしめ給うべく候。恐々謹言。」

とある。これは、御幣田郷をめぐって、源頼朝の「母堂舎弟」祐範の子任憲と僧勝実との間で領有を争っており、頼朝は祐範の恩に報いるため任憲の領掌を認める書状を添えて朝廷との間に介入したという内容である。これにより建久2年以前のある時期まで、御幣田郷は熱田神宮領であることが知られると同時に、その領主が熱田大宮司家であったことがわかる。

大郷郷に関しては、「大郷」＝「おおざと」と読むことができ、後の大里村＝現在の東海市大田町のことと考えられ、この地に畑間・東畑遺跡は所在する。

木田郷については、大田町の南東側に現在の地名が残っており、この地に比定することができる。

先述したように畑間・東畑遺跡から出土する瓦が熱田神宮と同笵瓦を生産した窯場と同笵である観点は、畑間・東畑遺跡が熱田神宮と荘園とその領主という関係があったためと考えることができよう。また、加木屋周辺古窯から鳥羽離宮への瓦の供給にしても、その背景に熱田大宮司家が大きく関与しているものと思われる。そこで、その背景となる熱田大宮司家についてふれておく。

第2節　熱田大宮司家

先述した『吾妻鏡』建久2年8月7日条にみえる御幣田郷の所在地は特定できないが、この中にある「母堂舎弟祐範」は藤原祐範であり、大宮司藤原季範の子である。熱田神宮の大宮司職は古くは代々尾張国造の子孫である尾張氏が務めていたが、永久2年（1114）に尾張員職の外孫で藤原南家の藤原季範にその職が譲られた。以降は子孫の藤原氏とその縁者が大宮司、尾張氏は権宮司を務めた。

藤原氏の中で最初の大宮司職に就いた藤原季範という人物は、「額田冠者」とよばれ、三河地方を支配していたことが知られる。また、季範の父季兼は「参河四朗大夫」と呼ばれ、二人は三河地方、特に額田地域に拠点を置いていたことが知られる。また、季兼は目代として尾張に赴任している。おそらく、この一族が尾張に進出し、季範が熱田神宮の大宮司となる背景には、季兼が尾張目代として赴任したことが契機と考えられ、その頃に尾張氏と接近したものと考えられる。

藤原季兼は、藤原南家の家学の祖として名高い実範を父にもち、異母兄弟に季綱、成季がある。この中で季綱は季兼の兄にあたるが、白河上皇の「院の近臣」として仕えており、鳥羽離宮は、季綱の別宅を白河上皇に献上したものが契機となり造営されている。したがって、この一族と鳥羽離宮とは縁深い関係にあり、こうした関係が尾張地域から瓦が供給される背景となったことが考えられる。

また、同じように熱田大宮司家を介在として尾張地域の窯場と遠隔地の同笵例がみられる可能性がある事例がある。名古屋市千種区所在の東山61号窯と名古屋市天白区所在の八事裏山古窯である。東山61号窯からは鳥羽離宮と同笵の巴文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦が出土している。八事裏山古窯からも鳥羽離宮と同笵の偏行唐草文軒平瓦が出土している。また、八事裏山古窯からは、鎌倉地域と同笵瓦が出土している。具体的には源頼朝発願により創建した神奈川県鎌倉市所在の永福寺のほか、鶴岡二十五坊、千葉地東遺跡、伊勢原市のコクゾウ塚、横須賀市満願寺である（柴垣1982）。これらの同笵関係は以前から同笵関係が知られており、注目されている。その中で注目できるのは山崎信二氏が『中世瓦の研究』

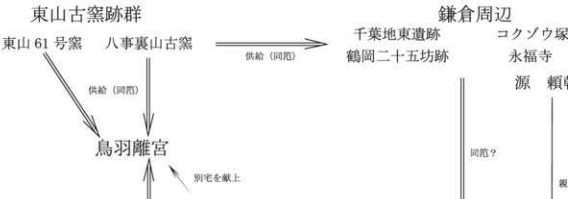


図3　瓦窯・寺院・勢力相関図

の中で熱田神宮と源頼朝の関係に注目し、「熱田神宮を介しての鎌倉への瓦の調達方法とみる可能性が充分にあると思う。」としている（山崎2000）。

頼朝と熱田神宮の関係は頼朝の母由良御前が大宮司藤原季範の娘という点で見出せる。また、保元元年（1156）の保元の乱や平治元年の平治の乱においては、『保元物語』や『平治物語』には大宮司家から義朝軍へ派兵した様子が窺える。さらに先述した御幣田郷の権限をめぐっての争いの中で『吾妻鏡』には憲任の父藤原祐範に対して「彼の恩問を忘れず候き。」としている。祐範は季範の子であり、大宮司職には就いてないものの、父と同じように源氏に協調し、頼朝はその恩恵にあったことを述べている。こうした状況は、源義朝と由良御前の縁組により成立した婚姻関係が背後にあるものと考え、そこには大宮司家と源氏の密接な関係を想像するには充分な根拠がある。

大宮司家と源氏のこの関係は、源義朝が尾張に勢力を伸張させようとしたことや、大宮司家が源氏を頼ろうとしたことなどの両者の利害が一致したためとされる（藤本2003）。確かに三河・尾張に拠点を置く大宮司家が都での立身や安泰を測るため様々な後ろ盾を必要としたことは事実のようで、季範は、自分の子女を上西門院、待賢文院などの女房とするなど中央との関係成立に積極的に取り組んだ様子が窺える。

由良御前と源頼朝の父義朝との縁組もこうした状況の中で成立したものと考えられ、後に瓦が尾張から鎌倉地域へ供給されている背後には山崎氏が説くように、頼朝一族と熱田大宮司家との縁組に起因しているものと考えることができる。

このように、尾張から鎌倉地域へ瓦を供給した背景が、源氏と熱田大宮司家の繋がりにより成立したものであるならば、同じように加木屋周辺古窯と鳥羽離宮の瓦の同笵関係も「院の近臣」としての熱田神宮大宮司家とその関連一族の繋がりにより成立しているものと考えられる。既述した内容になるが、鳥羽離宮は藤原季綱の別宅を白河上皇に献上し、それが後に鳥羽離宮として改築されたものである。季綱と熱田大宮司家の関係は、藤原季範の父季兼と季綱が兄弟の関係にあり、季綱が院の近臣であることから鳥羽離宮の造営に際して、弟季兼が管轄する尾張への瓦の発注があっても不思議はない。また、時代背景としてそれまで続いた摂関政治から院政への転換期でもあり、摂関家以外の氏族が台頭するため、鳥羽離宮の造営にも熱田大宮司家が積極的に協調したのであろう。したがって、加木屋周辺古窯、特に社山古窯や吉田古窯は熱田大宮司家を介して鳥羽離宮の瓦を生産した窯場の一つとしての位置付けができるのではなかろうか。

ただし、山崎氏が、八事裏山古窯と熱田神宮の関係について、「八事裏山窯の所在地点が熱田神宮領であったとする史料は存在しないが、この点も含めて検討する必要があるだろう。」（山崎2000）としており、加木屋周辺古窯に関しても同じことがいえる。加木屋地区が大郷郷や木田郷に近接する事実はあるが、加木屋地区が熱田神宮領であったことは立証できない。この点については検討を要するものとして今後の課題としたい。

第3節　畑間・東畑遺跡の位置付け

次に、本題となる畑間・東畑遺跡から出土する瓦に関してふれておく。畑間・東畑遺跡と加木屋地区の関係は、その立地が近接しているという接点がある。そして先述したように、畑間・東畑遺跡の所在

する大田町は、古くは大里村と呼ばれており、『熱田社領注進目録』にみえる「大郷郷」に該当するものと考えられる。したがって、畑間・東畑遺跡は少なくとも『熱田社領注進目録』を製作した時期には熱田神宮領内であったことが考えられる。そこで、熱田神宮と関連のある遺物として考えられるのは、熱田神宮で採集された軒平瓦と同文の杏葉唐草文軒平瓦である。杏葉唐草文軒平瓦については、この文様の軒平瓦が出土するのは生産地である論田古窯、社山古窯と熱田神宮、畑間・東畑遺跡だけである。また、先述したように、権現山古窯や社山古窯で生産された蓮華文軒丸瓦は熱田神宮で採集されたものと同笵であり、加木屋周辺古窯と熱田神宮はこの点において関連するものと考えられる。その加木屋周辺古窯から瓦を供給されている可能性のある畑間・東畑遺跡も熱田神宮と関わりのある立地であることが考えられ、そこにこの瓦の出土する意義を見出すことができる。

畑間・東畑遺跡と熱田神宮の関わりは、『熱田社領注進目録』にみえる「大郷郷」がのちの大里村であることが想定されることの他に、現在の大田町北西部に鎮座する大宮神社も、その関わりの名残と捉えることができる。大宮神社について、『張州雑志』には、「楠ノ古樹有、熱田楠ニ御前同樹ト云々」とあり、熱田神宮との関わりを示唆しており、熱田神宮の分霊神としてかつては大宮明神と称していたようである。『東海市史』によると、「大宮神社は、大郷（大里）が熱田神宮の荘園となるに伴い、荘園鎮守神として、熱田から勧請されたものと推定できる。」としており、熱田社領としてのこの地域と大宮神社の関わりを指摘している。このように、大田町周辺と熱田神宮の関わりは深かったものと推察でき、その地に関連のある瓦が出土する遺跡が所在することは、この地域が熱田社領の中でも重要な地域であったことが考えられる。いいかえれば、熱田神宮を統括し、その社領を統べる当時の熱田大宮司家にとって重要な地域であったとみなすことができよう。

ところで、畑間・東畑遺跡から出土する瓦がどのように使用されたのかが不明な点は問題である。そもそも、畑間・東畑の両遺跡において瓦葺き建物が想定される遺構の検出は今のところない。今後検出される可能性は残るが、現時点では見つかっていないという事実と、遺跡のほぼ全域において中世以降に大規模な改変が行われていることなどから、遺構そのものはすでに削平されている可能性があるなど、遺構検出による瓦葺き建物の存在証明は今後も困難であることは間違いない。また、遺跡の広範囲から瓦が散在的に出土する状況から、瓦葺き建物などの位置特定が困難な状況にある。ただ、平成24年度調査の中で1・2地点とした調査区で検出したSD2070から瓦が出土しているが、13世紀前半までに比定される土器類と共に出土しており、周辺部に瓦葺き建物が存在したのであれば、13世紀前半までには廃絶または葺き替えが行われたことが推定できる。

この調査で出土した瓦は杏葉唐草文軒平瓦とこれと組むことが考えられるⅠ群と、同じ調査区で出土した鬼瓦やⅠ群とは異なり燻焼成の丸・平瓦と平成20年度調査で出土している連珠文軒平瓦などを含むⅡ群に大別できる。Ⅱ群の瓦は鎌倉時代後期以降に比定できることから、Ⅰ群の瓦の葺き替えであった可能性がある。瓦の葺き替えが遺物から想定できるのであれば、同時にそれは瓦葺き建物の存在を想定できることになる。

Ⅱ群の瓦は平成24年度調査の1・2地点と平成20年度調査の3・4地点で多く出土しており、両調査区は近い位置関係にあり、出土地がまとまる傾向がある。ただし、Ⅰ群の瓦が遺跡の広範囲から出土している状況は確かだが、数量的に多い傾向にあるのは、Ⅱ群の出土する地域とほとんど重なる。となると

Ⅰ群・Ⅱ群の瓦は同じ建物の葺替えであった可能性があり、その場所はⅡ群の瓦が出土する遺跡の北東部付近に存在した蓋然性は高いといえる。

このように畑間・東畑遺跡から出土する瓦は瓦葺き建物に使用された可能性が指摘できる。そして、その瓦の中でⅠ群の瓦は熱田神宮と深い関わりのあるもので、当遺跡にそのようなものが存在することは、熱田神宮の社領の中でも極めて重要な地域であったと捉えることができ、遺跡の北西部に鎮座する大宮神社と考え合わせると非常に興味深い。

おわりに

本稿では、畑間・東畑遺跡から出土する瓦についてその所以と歴史的背景について若干の考察をおこなった。その中で、瓦の生産地である加木屋周辺古窯とその供給先の共通点を浮き彫りにし、そこに熱田神宮や大宮司家との関わりの中で成立している可能性を指摘した。畑間・東畑遺跡の所在する東海市大田町は、古くは「大郷郷」とよばれ、後の「大里村」であることはすでに指摘されているが、その「大郷郷」が熱田神宮の社領であることから関連が指摘でき、瓦の生産地である加木屋周辺古窯に関しても、鳥羽離宮に瓦を供給する背景として熱田大宮司家の介在を想定した。こうした中で、畑間・東畑遺跡は生産地である加木屋周辺古窯が近接するという理由以外に熱田社領として重要な地域である可能性を考えた。それは、他の熱田社領から同笵または関連のある瓦が出土していないことからみても指摘できる。このような背景には先述した『吾妻鏡』の建久2年（1191）8月7日条にみられるような所領争いを回避する目的もあったであろうし、畑間・東畑遺跡の北側丘陵には弥勒寺が所在しており、弥勒寺のような大寺院から社領を存続するために領内で生活する人々の信仰の対象となる存在が必要不可欠であったためなど、様々な理由が考えられる。

以上、まとまりのない内容となったが、畑間・東畑遺跡から出土する瓦の歴史的意義について多少なり考察をおこなうことができたように思う。

最後に、本稿作成にあたって、芦田淳一氏、永井伸明氏、宮澤浩司氏、森島裕子氏、奥山哲也氏には遺物実見の協力、助言などを賜った。記して感謝の意を表す。

参考文献

愛知県史編纂委員会編　2007 『愛知県史』別編窯業2（中世・近世　瀬戸系）　愛知県

石川松衛　1928 『横須賀町誌』愛知県史編纂会・知多郡横須賀町役場

河野房男　1976 「白河院近臣の一考察」『平安王朝』（論集日本歴史3）　有精堂

三渡俊一郎　1985 「八事裏山1号窯址群出土軒平瓦と同笵の瓦生産地について」『古代人』45

五味文彦　1993 院政と天皇『岩波講座　日本通史』第7巻　岩波書店

柴垣勇夫　1982 「尾張における平安末期の瓦生産-その分布と史的背景-」『愛知県陶磁資料館研究紀要1』　愛知県陶磁資料館

柴垣勇夫　1969 『吉田一号窯発掘調査報告書』大府町教育委員会

柴垣勇夫　1975 『吉田二号窯発掘調査報告書』大府町教育委員会

杉崎　章・広瀬栄一　1965 『権現山古窯址』白菊古文化学報第二集　白菊古文化研究所

立松彰ほか　1998　『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

立松彰・永井伸明　2004　『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

東海市教育委員会　1983　「寺ノ前古窯出土遺物報告」『法秀古窯発掘調査報告書』　東海市教育委員会

長宗繁一・鈴木久男　1994　「鳥羽殿」『平安京提要』　角川書店

名古屋考古学会八事裏山1号窯調査団　1981　「八事1号窯発掘調査報告」『古代人』38

名古屋考古学会八事裏山1号窯調査団　1983　「八事1号窯第二次発掘調査報告」『古代人』41

名古屋考古学会八事裏山1号窯調査団　1984　「八事1号窯第三次発掘調査報告」『古代人』43

名古屋考古学会八事裏山1号窯調査団　1986　「八事1号窯第四、五発掘調査報告」『古代人』47

名古屋考古学会八事裏山1号窯調査団　1987　「八事1号窯第六次発掘調査報告」『古代人』48

半田市立博物館　1994　『知多の古瓦』半田市立博物館

福岡猛志　1991　『知多の歴史』　松籟社

永井伸明・宮澤浩司　2007　「伊勢湾を望む海辺の遺跡-東畑遺跡等発掘調査概報-」東海市文化調査委員会編『研究報告とうかい』創刊号　東海市教育委員会

藤本元啓　2003　『中世熱田社の構造と展開』続群書類従完成会、

宮澤浩司　2009　「伊勢湾を望む海辺の遺跡　(2) -平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査概要報告-」東海市文化財調査」委員会編『研究報告とうかい』第2号　東海市教育委員会

宮沢浩司・桐山秀穂ほか　2009　『愛知県東海市　畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

山崎信二　2000　「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所学報　第59冊

写　　真

写真１　畑間遺跡（1･2地点）

１　1・2地点遺構検出状況（東より）

２　1・2地点遺構検出状況（北東より）

写真２　畑間遺跡（1・2地点）

3　SD2011 掘削状況（北より）

4　SD2011 土器出土状況①（東より）

5　SD2011 土器出土状況②（東より）

6　SD2011 土器出土状況③（西より）

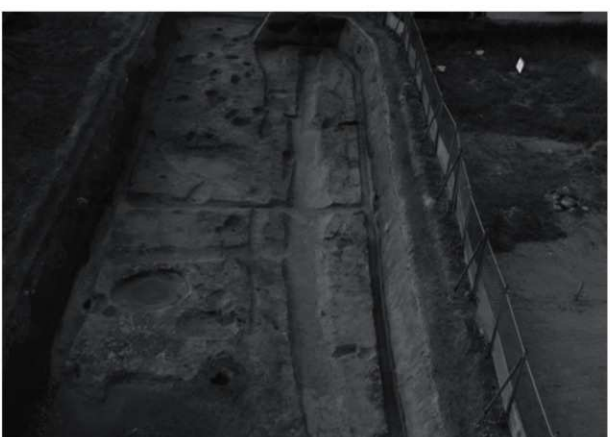
7　SD2011 土器出土状況④（東より）

8　SD2070 軒平瓦出土状況（南より）

9　SD2070 断面（東より）

10　SD2070 遺物出土状況①（東より）

11　SD2070 遺物出土状況②（東より）



12　SD2070 完掘状況（東より）

写真４　畑間遺跡（１・２地点）

13　SD2077 断面（南より）

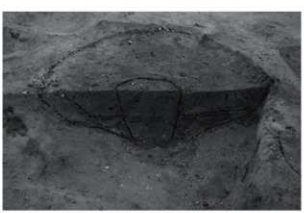
14　SD2077 完掘状況（南より）

15　P2005 柱根出土状況（南より）

16　P2021 出土状況（東より）

17　P2039 半截状況（北より）

18　P2041 半截状況（北より）



19　P2052 半截状況（西より）

20　P2053 半截状況（西より）

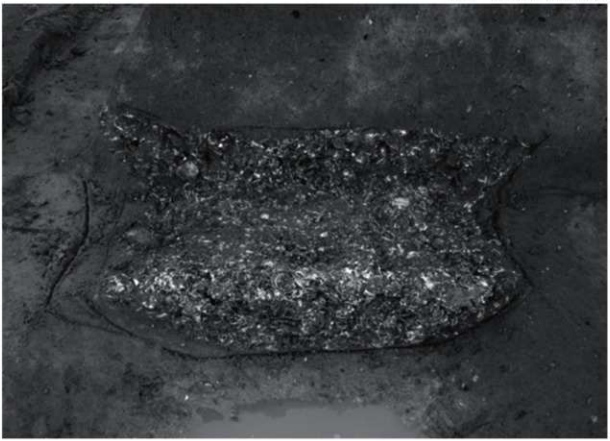
21.　P2066 柱根出土状況（西より）

22　P2067 柱根出土状況（北より）

写真６　畑間遺跡（１・２地点）

23　P2082 半截状況（東より）

24　P2082 柱根出土状況（南より）



25　SK2069 断面（東より）

26　SX2045 上層遺物出土状況（南より）

写真８　畑間遺跡（1・2地点）

27　SX2045 下層遺物出土状況（南より）

28　SX2045 断面（北より）

29　SX2045 上層風炉出土状況（西より）

30　SX2045 中層瓦塔出土状況（南東より）

31　SX2045 獣骨出土状況（北より）

32　１・２地点遺構完掘状況（北東より）

33　調査区と常蓮地（東より）

写真 10　畑間遺跡（3 地点）

34　3 地点遺構検出状況（北西より）

35　調査区南西部遺構検出状況（北より）

36　SD3058 完掘状況（南より）

37　SD3058 断面（北より）

38　SD3058 土器出土状況（北東より）

39　SK3029 検出状況（東より）

40　SK3029 半截状況（東より）

写真 12　畑間遺跡（3 地点）

41　P3035 半截状況（南西より）

42　P3038 半截状況（東より）

43　P3048 半截状況（南より）

44　P3053 半截状況（南西より）

45　P3054 半截状況（南より）

46　P3068 半截状況（南より）

47　SX3031 石臼出土状況（南より）

48　SX3031 獣骨出土状況（東より）

49　SX3031 完掘状況（南より）

50　3 地点遺構完掘状況（東より）

写真 14　畑間遺跡（4 地点）

51　4 区上層調査区全景（南東より）

52　SD4018 掘削状況（東より）

53　SD4018 断面（東より）

54　SD4031 掘削状況（東より）

写真 16　畑間遺跡（4 地点）

55　SD4031 断面（東より）

56　SK4005 半截状況（東より）

57　SK4004 半截状況（北より）

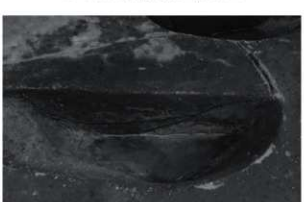
58　SK4016 半截状況（北より）

59　SK4015 半截状況（北より）

60　4 地点土坑完掘状況（東より）

61　SK4001 半截状況（西より）

62　SK4002 半截状況（北より）



63　SK4003 半截状況（北より）

64　SK4021 半截状況（北より）

写真 18　畑間遺跡（4 地点）

65　4 地点遺構完掘状況（東より）

66　4 地点東側サブトレンチ遺構検出状況（東より）

67　SD4034 完掘状況（南より）

68　SD4035 完掘状況（北東より）

写真 20　畑間遺跡（5 地点）

69　5 地点遺構検出状況（西より）

70　SD5023 掘削状況（南西より）

71　SD5031 北東部完掘（西より）

72　SD5031 北東部（北より）

写真 22　畑間遺跡（5 地点）

73　SD5023 断面 A（南より）

74　SD5023 断面 B（北東より）

75　SD5023 断面 C（南より）

76　SD5031 断面（北西より）

77　SD5033 検出状況（北より）

78　SD5033 完掘状況（北より）

79　SD5033 断面（北東より）

80　SK5027 半截状況（東より）

81　P5004 半截状況（北東より）

82　P5014 半截状況（西より）

写真 24　畑間遺跡（5 地点）

83　SK5034 検出状況（南西より）

84　SK5034 南北断面（東より）

85　SK5034 南北断面（西より）

86　SK5034 東西断面（北より）

87　SK5034 東西断面（南より）

88　SK5034 完掘状況（北東より）

89　5 地点遺構完掘状況（東より）

写真 26　東畑遺跡（6地点）

90　6地点遺構検出状況（南西より）

91　6地点遺構完掘全景（南西より）

92　7 地点遺構検出状況（北東より）

93　7 地点遺構検出状況（南西より）

写真 28　東畑遺跡（7 地点）

94　SZ7178 検出状況（北東より）

95　SD7140 上層遺物出土状況（東より）

96　SD7140 中層遺物出土状況（東より）

97　SD7140 断面（東南より）

写真 30　東畑遺跡（7 地点）

98　SD7134 上層遺物出土状況（南より）

99　SD7134 中層遺物出土状況（南より）

100　SD7134 下層遺物出土状況（南より）

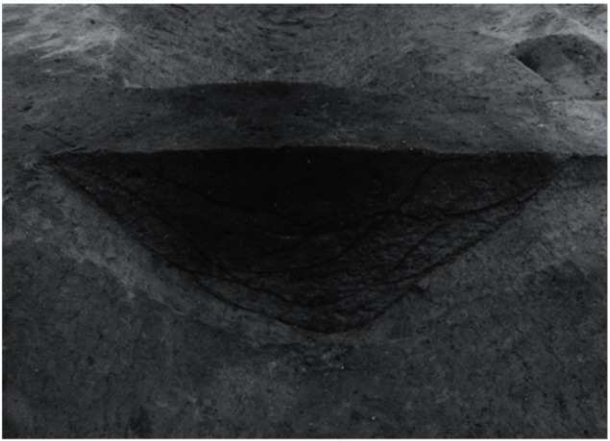
101　SD7134 下層出土遺物詳細（南より）

102　SD7134 断面（南より）

103　SD7138 上層遺物出土状況（東より）

104　SD7138 中層遺物出土状況（東より）

写真 32　東畑遺跡（7 地点）



105　SD7138 断面（南より）

106　SD7138 完掘状況（東より）

107　SD7139 上層遺物出土状況（北より）

108　SD7139 完掘状況（北より）

写真 34　東畑遺跡（7 地点）

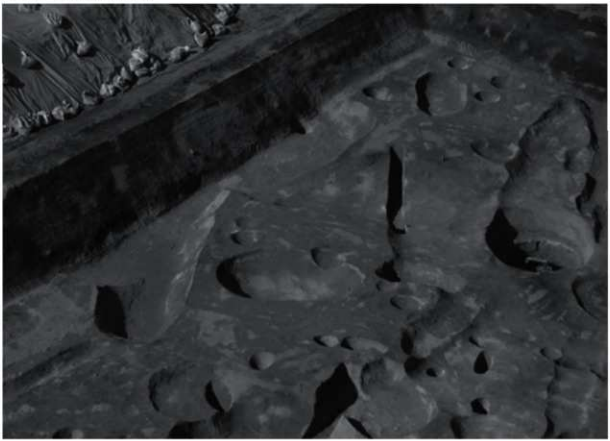
109　SZ7178 完掘状況（南より）

110　SD7137 検出状況（南より）

111　SD7137 遺物出土状況（東より）

112　SD7137 中層遺物出土状況（南より）

写真 36　東畑遺跡（7 地点）



113　SZ7177 完掘状況（北東より）

114　SD7135・7136・7137 検出状況（西より）

115　SD7135 中層遺物出土状況（南より）

116　SD7135 中層遺物詳細（東より）

117　SD7135 下層遺物出土状況（南東より）

118　SD7134 完掘（南より）

119　SD7136 遺物出土状況（南東より）

写真 38　東畑遺跡（7 地点）

120　SK7163 検出状況（南東より）

121　SK7163 上層土器出土状況（東より）

122　SK7163 中層土器出土状況（南より）

123　SK7163 下層土器出土状況　（南より）

124　SB7143 貼床掘削状況（北東より）

125　SB7143 遺物出土状況（北より）

126　SX7168 半截状況（東より）

127　SX7142 検出状況（南東より）

128　SX7142 掘削状況（南より）

129　SB7143 貼床断面（東より）

130　P7173 半截状況（西より）

131　P7174 半截状況（西より）

132　SB7143 完掘状況（北東より）

133　SK7141 検出状況（北西より）

134　SK7141 土器出土状況（北より）

135　SX7032 半截状況（南より）

136　SK7032 犬骨出土状況（南より）

写真 42　東畑遺跡（7 地点）

137　SX7161 検出状況（北東より）

138　SX7161 土層断面（南より）

139　SX7161 出土馬骨頭部詳細（南より）

140　SX7161 馬骨出土状況（北東より）

141　SX7161 馬骨出土状況（南より）

142　SE7065 半截状況（南より）

143　SE7065 大甕出土状況（南より）

144　SE7065 掘削状況（南より）

145　SE7065 最下段大甕出土状況　（南西より）

146　7 地点遺構完掘状況（南より）

写真 44　畑間遺跡（1・2 地点）

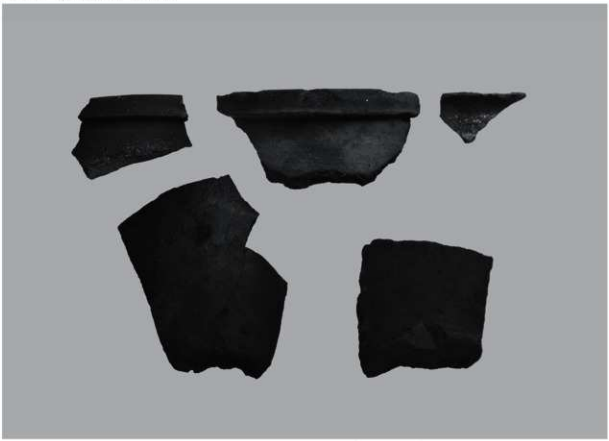
1　SD2070 出土山茶碗

2　1・2 地点出土山茶碗

3　1・2地点出土山皿

4　1・2地点出土瀬戸美濃陶器類

写真46　畑間遺跡（1・2地点）



5　1・2地点出土常滑焼大甕・広口壺

6　1・2地点出土風炉脚部

7　1・2地点出土風炉口縁部

8　1・2地点出土常滑焼くど（赤物）

9　1・2地点出土常滑焼くど（赤物）

10　1・2地点出土常滑焼耳付鍋

11　1・2地点出土常滑焼片口鉢

12　1・2地点出土内耳鍋

13　1・2地点出土内耳鍋

14　1・2地点出土内耳鍋

15　1・2地点出土内耳鍋（三河産カ）

16　1・2地点出土羽付鍋

17　1・2地点出土羽付鍋

写真 48　畑間遺跡（1・2 地点）

18　1・2 地点出土羽付鍋

19　1・2 地点出土羽釜

20　1・2 地点出土短頸壺（灰釉陶器）

21　1・2 地点出土小壺

22　1・2 地点出土仏供

23　1・2 地点出土杏葉唐草文軒平瓦（Ⅰ群）

24　1・2 地点出土杏葉唐草文軒平瓦（Ⅰ群）

25　1・2 地点出土道具瓦（Ⅰ群）

26　1・2 地点出土軒丸瓦接合部（Ⅰ群）

27　1・2 地点出土鬼瓦（Ⅱ群）

28　1・2 地点出土平瓦（Ⅱ群）

29　1・2 地点出土玉縁式丸瓦（Ⅱ群）

30　1・2 地点出土玉縁式丸瓦（Ⅱ群）

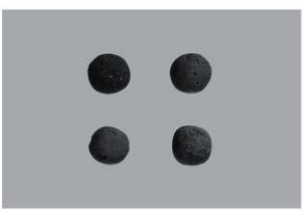
写真 50　畑間遺跡（1・2 地点）

31　1・2 地点出土瓦塔

32　1・2 地点出土土錘

33　1・2 地点出土土錘

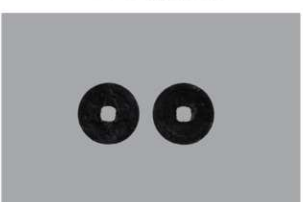
34　1・2 地点出土土錘



35　1・2 地点出土陶丸

36　1・2 地点出土砥石

37　1・2 地点出土砥石



38　1・2 地点出土景德元寶

39　3 地点出土ロクロ調整土師皿

40　3 地点出土非ロクロ調整土師皿

41　3 地点出土山茶碗

42　3 地点出土小型山皿

43　3 地点出土山皿

写真 52　畑間遺跡（3 地点）

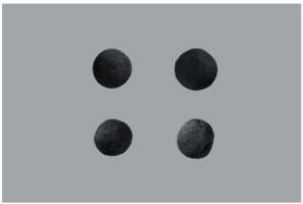
44　3 地点出土有孔土師皿

45　3 地点出土羽付釜

46　3 地点出土菊皿

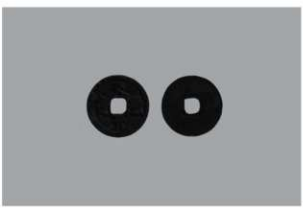
47　3 地点出土水滴

48　3 地点出土常滑焼



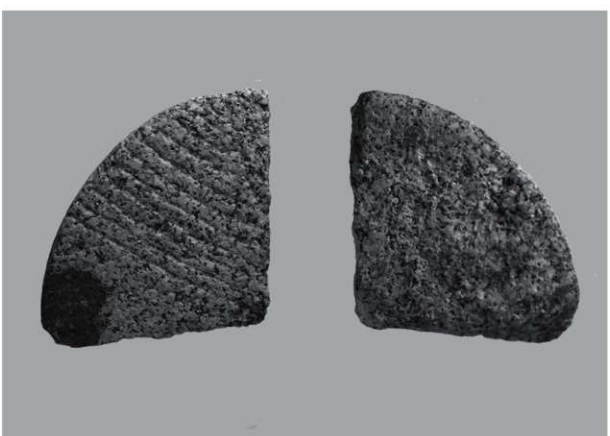
49　3 地点出土陶丸

50　3 地点出土打製石斧



51　3 地点出土天聖元寶

52　3 地点出土煙管



53　3 地点出土石臼

写真 54　畑間遺跡（4 地点）

54　SD4018 出土山茶碗

55　4 地点出土山皿

56　4 地点出土常滑焼

57　4 地点出土羽釜

58　4 地点出土瓦質火鉢

59　SD4018 出土小天目茶碗

60　4 地点出土須恵器坏蓋

61　4 地点出土須恵器坏蓋

62　4 地点出土須恵器坏身

63　4 地点出土須恵器坏身

写真 56　畑間遺跡（4 地点）

64　SD4031 出土土師器台付甕

65　4 地点出土土師器台付甕台部

66　SD4031 出土土師器長頸壺

67　4 地点出土土師器長頸壺

68　SD4031 出土土師器直口壺

69　4 地点出土土師器直口壺

70　SD4031 出土土師器小型長頸壺

71　4 地点出土土師器台脚部

72　SD4031 出土土師器高坏脚部

73　SD4031 出土土師器高坏脚部

74　SD4031 出土小型尖底壺型土器

75　4 地点出土弥生土器（甕口縁）

76　4 地点出土弥生土器（高坏脚部）

77　4 地点出土条痕文系壺（口縁部）

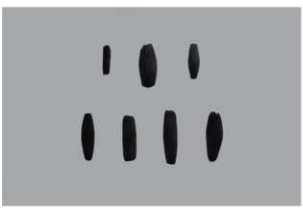
78　4 地点出土遠賀川系深鉢

79　4 地点出土縄文土器

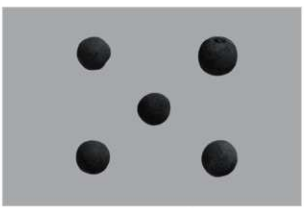
写真 58　畑間遺跡（4 地点）

80　4 地点出土無紋粗製小型平底深鉢形土器

81　4 地点出土加工円板



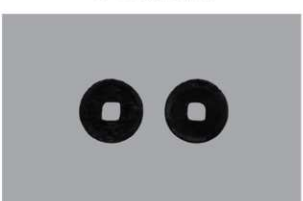
82　4 地点出土土錘



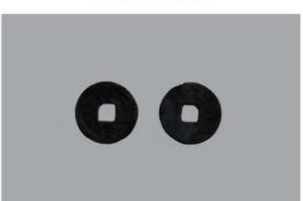
83　4 地点出土陶丸

84　4 地点出土石鏃

85　4 地点出土石鏃



86　4 地点出土天聖元寶



87　4 地点出土熙寧元寶

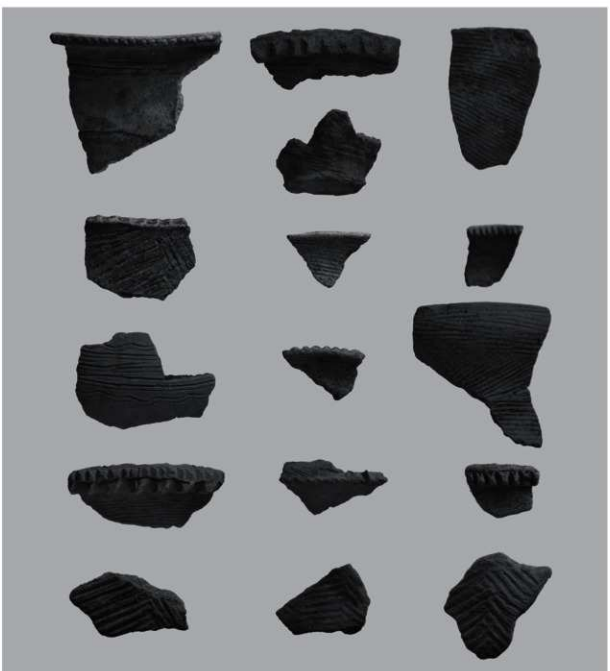
88　5 地点出土山皿

89　5 地点出土伊勢型鍋

写真 60　畑間遺跡（5 地点）

90　5 地点出土伊勢型鍋口縁部

91　5 地点出土山茶碗



92　5 地点出土弥生土器

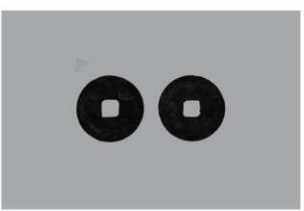
93　5 地点出土縄文土器

94　5 地点出土大型土錘

95　5 地点出土砥石

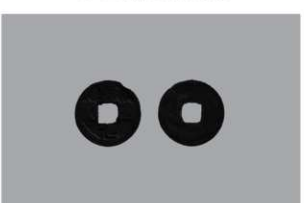
96　5 地点出土石錐

97　5 地点出土石槍



98　5 地点出土明道元寶

99　5 地点出土元符通寶



100　5 地点出土熙寧元寶

写真 62　東畑遺跡（7 地点）

101　SD7137 出土土師器高坏

102　SD7137 出土土師器小型鉢

103　SD7137 出土土師器く字口縁台付甕

104　SD7137 出土土師器 S 字状口縁台付甕

105　SD7140 出土弥生土器広口壺

106　SD7140 出土弥生土器広口壺

107　SD7140 出土弥生土器厚口鉢

108　SD7140 出土弥生土器細頸壺

109　SD7140 出土弥生土器高坏脚部

110　SD7140 出土弥生土器高坏脚部

111　SD7140 出土土師器高坏脚部

112　SD7140 出土土師器高坏脚部

113　SD7140 出土土師器く字口縁台付甕

114　SD7140 出土土師器く字口縁台付甕

115　SD7140 出土土師器く字口縁台付甕

116　SD7140 出土土師器く字口縁台付甕

写真 64　東畑遺跡（7 地点）

117　SD7140 出土土師器台付甕

118　SD7140 出土土師器台付甕

119　SD7140 出土土師器台付甕

120　SD7140 出土土師器台付甕

121　SD7140 出土土師器小型坏型土器

122　SD7140 出土小型手捏ね土器

123　SD7140 出土土師器小型壺

124　SD7140 出土土師器小型壺

125　SD7140 出土土師器小型広口壺

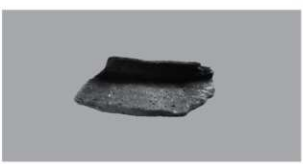
126　SD7140 出土土師器小型台付甕

127　SD7140 出土土師器直口壺

128　SD7140 出土器種不明土器口縁部

129　SD7140 出土器種不明土器口縁部

130　SD7140 出土 S 字状口縁台付甕



131　SD7140 出土 S 字状口縁台付甕

132　SD7138 上層出土土師器高坏脚部

133　SD7138 中層出土深鉢

写真 66　東畑遺跡（7 地点）

134　SD7138 出土弥生土器深鉢

135　SD7139 出土弥生土器長頸壺

136　SD7134 出土弥生土器長頸壺

137　SD7134 出土弥生土器無頸壺

138　SD7138 出土甑底部

139　SD7134 出土土師器く字口縁台付甕

140　SD7138 出土パレススタイル壺口縁

141　同左：口縁内面

142　SD7138 出土有段口縁壺

143　SD7138 出土弥生土器

144　SD7138 出土弥生土器

145　SD7138 出土弥生土器

146　SD7138 出土石皿

147　SD7135 小型台付甕

148　SD7135 出土土師器台付甕台部

149　SD7135 出土土師器小型丸底壺

150　SD7135 出土土師器小型丸底壺

151　SD7135 出土土師器台付壺台部

写真 68　東畑遺跡（7 地点）

152　SD7136 出土土師器く字口縁台付甕

153　SD7136 出土土師器台付甕口縁部

154　SD7136 出土土師器高坏坏部

155　SD7136 出土土師器高坏脚部

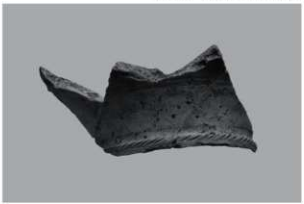
156　SD7136 出土土師器高坏脚部

157　SD7136 出土土師器小型器台

158　SD7136 出土土師器小型器台

159　SD7136 出土土師器直口壺

160　SD7136 出土土師器大型壺



161　SD7136 出土有段口縁壺

162　SD7136 出土有段口縁壺

163　SD7136 出土有段口縁壺

164　SD7136 出土器種不明土器口縁部

165　SD7136 出土器種不明土器口縁部

166　SD7136 出土土師器小型壺

167　SD7136 出土土師器鉢

写真 70　東畑遺跡（7 地点）

168　SK7163 出土土師器直口壺

169　SK7141 須恵器坏蓋

170　SK7141 出土須恵器坏蓋

171　SK7141 出土須恵器把手付坏身

172　SK7141 出土甑

173　同左：底部

174　SK7141 出土須恵器坏身

175　SK7141 出土須恵器小型壺

176　SE7065 出土常滑焼大甕（井戸枠）①

177　SE7065 出土常滑焼大甕（井戸枠）②

178　SE7065 出土常滑焼大甕（井戸枠）③

179　大甕細部：押捺文①（菊花文）

180　大甕細部：押捺文②（重圏文）

181　大甕細部：　押捺文③（桜花文）

182　大甕細部：ヘラ記号（「×」）

183　7 地点出土有段口縁壺

184　7 地点出土有段口縁壺

185　SD7138 出土弥生土器

186　7 地点出土有段口縁壺

187　7 地点出土有段口縁壺

188　7 地点出土有段口縁壺

189　7 地点出土有段口縁壺

190　7 地点出土土師器広口壺

191　7 地点出土土師器小型丸底壺

192　7 地点出土土師器小型壺

写真 74　東畑遺跡（7 地点）

193　7 地点出土土師器く字口縁台付甕

194　7 地点出土土師器 S 字状口縁台付甕

195　7 地点出土土師器高坏脚部

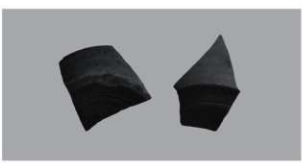
196　7 地点出土土師器台付壺台部

197　7 地点出土土師器装飾高坏脚部

198　7 地点出土土師器装飾高坏脚部

199　7 地点出土須恵器壺口縁部

200　7 地点出土須恵器平瓶



201　7 地点出土須恵器坏身

202　7 地点出土須恵器坏蓋

203　7 地点出土須恵器坏身

204　7 地点出土灰釉陶器皿

205　7 地点出土灰釉陶器碗

206　7 地点出土緑釉陶器

写真 76　東畑遺跡（7 地点）

207　7 地点出土山茶碗

208　7 地点出土山茶碗鉢

209　7 地点出土山茶碗鉢

210　7 地点出土灰釉折縁小皿

211　7 地点出土灰釉折縁大皿

212　7 地点出土蓮華文装飾青磁碗

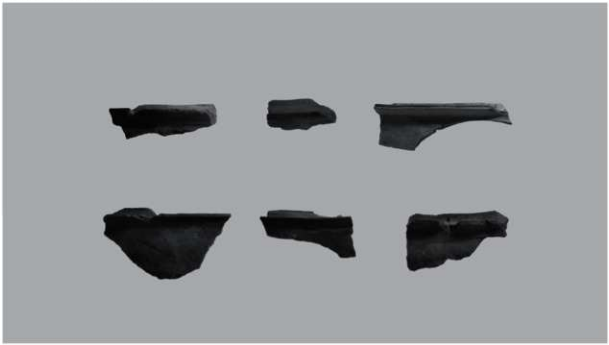
213　7 地点出土灰釉卸目皿

214　7 地点出土常滑焼

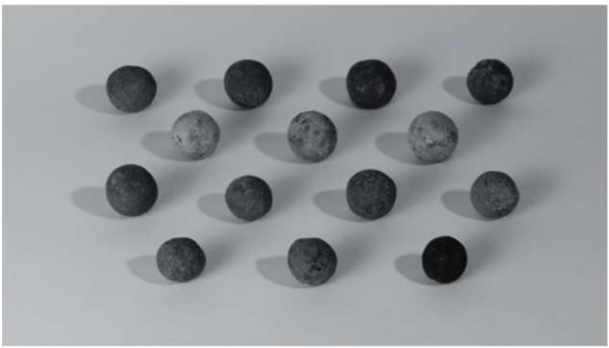
215　7 地点出土伊勢型鍋

216　7 地点出土南伊勢系羽釜

写真 78　東畑遺跡（7 地点）



217　7 地点出土羽釜



218　7 地点出土陶丸

219　7 地点出土加工円板

220　7 地点出土加工円板

221　7 地点出土土錘

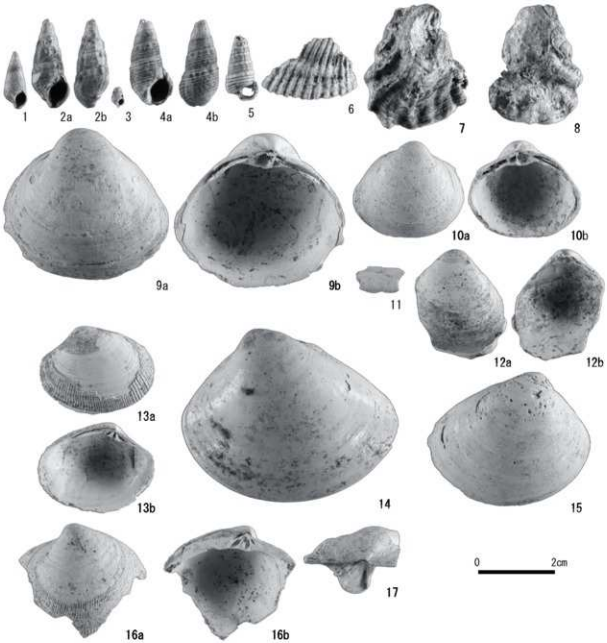
222　7 地点出土紡錘車

223　7 地点出土不明土製品

224　7 地点出土石鏃

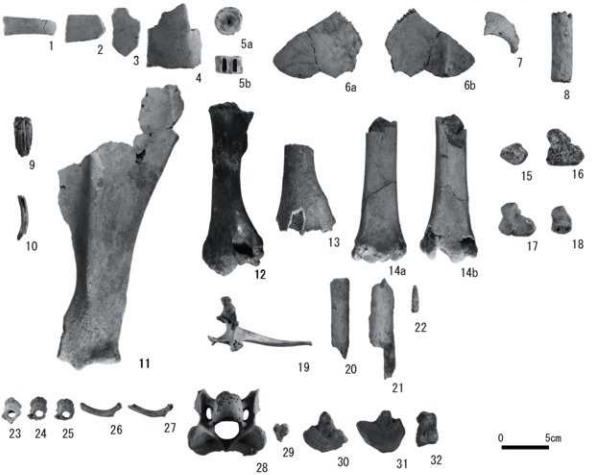
225　7 地点出土石鏃

写真 80　畑間遺跡出土貝殻（1・2 地点）



1. ウミニナ(SX2046；No. 067)
2. ホソウミニナ(SX2046；No. 067)
3. イボウミニナ(SX2046；No. 067)
4. ヘナタリ(SX2046；No. 067)
5. カワアイ?(SX2045；No. 112)
6. フネガイ目(SX2046；No. 067)
7. マガキ左殻(SX2046；No. 067)
8. マガキ右殻(SX2046；No. 067)
9. シオフキ左殻(SK2069；No. 119)
10. シオフキ右殻(SK2069；No. 119)
11. マテガイ科(SX2045；No. 094)
12. ヤマトシジミ?(SX2045；No. 094)
13. アサリ左殻(SX2045；No. 094)
14. ハマグリ左殻(SK2069；No. 119)
15. ハマグリ右殻(SK2069；No. 119)
16. オキシジミ(SK2069；No. 119)
17. オオノガイ科(SX2045；No. 094)

写真 81　畑間・東畑遺跡出土骨



1. イシガメ肋骨板(落込み；No. 008)
2. イシガメ左下腹骨板(落込み；No. 008)
3. イシガメ右剣状腹骨板(落込み；No. 008)
4. イシガメ左中腹骨板(表土；No. 088)
5. エイ・サメ類椎骨(P7132；No. 144)
6. ヒト前頭骨左眼窩上縁(SX2045；No. 130)
7. ヒト前頭骨左眼窩上縁(SX2045；No. 130)
8. 大型獣類四肢骨(ヒト右上腕骨?)(SX2045；No. 103)
9. ウマ左下顎歯牙(包含層；No. 017)
10. ウマ歯牙(SD4031；No. 075)
11. ウマ左肩甲骨(SX3031；No. 087)
12. ウマ右上腕骨(SX3031；No. 039)
13. ウマ右上腕骨(包含層；No. 022)
14. ウマ左脛骨(SX2045；No. 131)
15. ウマ右第1+2足根骨(P7175；No. 236)
16. ウマ右第3足根骨(P7175；No. 236)
17. ウマ右第3足根骨(包含層；No. 023)
18. ウマ右第4足根骨(包含層；No. 023)
19. ウマ/ウシ腰椎(SX2045；No. 112)
20. 大型獣類四肢骨(P7131；No. 142)
21. 大型獣類四肢骨(SX2045；No. 102)
22. ニホンジカ?角?(P7151；No. 168)
23. イヌ胸椎(No. 9)
24. イヌ胸椎(No. 9)
25. イヌ胸椎(No. 9)
26. イヌ肋骨(No. 9)
27. イヌ肋骨(No. 9)
28. ウマ頸椎(No. 14)
29. ウマ右第1+2足根骨(No. 36)
30. ウマ右第3足根骨(No. 36)
31. ウマ右中心足根骨(No. 36)
32. ウマ右第4足根骨(No. 36)

報告書抄録

ふりがな	はたま・ひがしはたいせきはっくつちょうさほうこく
書　名	平成24年度　畑間・東畑遺跡発掘調査報告
副 書 名	
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宮澤浩司・筧　和也・鬼頭　剛・金井慎司
編集機関	株式会社島田組中部営業所
所 在 地	〒454－0804　愛知県名古屋市中川区月島町6-1
発行機関	愛知県東海市教育委員会
所 在 地	〒476－8601　愛知県東海市中央町1丁目1番地
発行年月日	2014年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
畑間(ハタマ)・東畑(ヒガシハタ)遺跡(イセキ)	愛知県東海市(アイチケントウカイシ)	23222	43050	350106	1365347	20120528～20130311	1900㎡	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑間遺跡	集落	中世～近世	住居址・土坑・溝	弥生土器・土師器・山茶碗・常滑・瀬戸美濃・瓦	集落跡
東畑遺跡	集落・墓域	弥生時代～古墳時代・中世	方形周溝墓・竪穴住居跡・井戸・土坑	弥生土器・土師器・須恵器・山茶碗・瀬戸美濃	方形周溝墓・動物埋葬土坑

愛知県東海市
平成24年度
畑間・東畑遺跡発掘調査報告

平成26年3月 1 日印刷
平成26年3月30日発行

編　集　株式会社島田組中部営業所
〒454－0804　愛知県名古屋市中川区月島町6-1
TEL　072-949-2410
発　行　愛知県東海市教育委員会
〒476-8601　愛知県東海市中央町1丁目1番
TEL 052-603-2211

印刷・製本　三星商事印刷株式会社